

平成6年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1996年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



室町小路に面した建物群（平安京左京八条三坊2）

序

京都市内の地中には、歴史を証明する豊富な埋蔵文化財があります。当研究所は、この埋蔵文化財の調査・研究を鋭意進め、調査研究の成果をあげるよう努力してまいりました。本年も市民の方々の協力を得て、多くの埋蔵文化財の調査を実施することができました。

本書は、平成6年度に実施しました発掘調査20件、試掘・立会調査10件の調査の概要を報告しております。例年通り、平安宮跡、平安京跡の調査が中心ですが、平安宮跡では造営当初の内裏内郭回廊を検出し、修築の経過を明らかにしております。左京域では八条三坊の発掘調査で鎌倉時代の多数の仏具や鏡の鋳型が出土し、八条院町の工房の実態を知り得る成果をあげております。左大臣源融の邸宅である河原院の庭園の一部も、左京六条四坊の発掘調査で明らかにしました。また、試掘・立会調査では、平安京の中心的建物である平安宮大極殿の基壇の一部を検出しております。その他にも、中臣遺跡や長岡京跡、小倉町別当町遺跡などの発掘調査で、竪穴住居が多数発見され、小倉町別当町遺跡では、無文銀銭が出土するなど、数多くの成果をあげることができました。

これらの調査成果は、専門的ではありますが、本書で市民の方々や研究者に公表し、歴史都市京都を理解する一助にしたいと考えております。また、京都の歴史に直接つながる貴重な史料として、普及・啓発活動にも利用したいと思っております。

おわりにあたって、埋蔵文化財調査を依頼された市民の方々、京都市をはじめ関係諸機関の方々に日頃の御協力にお礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも当研究所の日頃の活動をご理解いただけますようお願い申し上げます。

平成8年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成6年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため昨年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表3・4に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系VIによった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500、1/10,000）、市街図（縮尺：1/25,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例にしたがった。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点および調査対象地である。
- 8 図版1・2の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱは試掘・立会調査を表す。表3・4の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 平成6年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、平成6年4月から12月実施分は『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度に、平成7年1月から3月実施分は『京都市内遺跡発掘調査概報』平成7年度に報告している。また、平安宮跡の調査は、『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊に報告している。
- 10 本年度の調査ならびに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。
- 11 写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は村井伸也・幸明綾子が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、編集と調整は資料課が行った。

目次

第1章 発掘調査

I 平成6年度の発掘調査概要 …… 1

II 平安宮・京跡

- 1 平安宮内裏内郭回廊跡 …… 3
- 2 平安宮武徳殿跡隣接地 …… 4
- 3 平安宮中務省跡1 …… 5
- 4 平安宮中務省跡2 …… 6
- 5 平安京左京三条一坊 …… 8
- 6 平安京左京六条四坊・
河原院跡 …… 10
- 7 平安京左京七条二坊・
本圀寺跡 …… 16
- 8 平安京左京八条三坊1 …… 19
- 9 平安京左京八条三坊2 …… 27
- 10 平安京右京三条一坊 …… 41
- 11 平安京右京六条一坊 …… 43
- 12 平安京右京九条二坊 …… 49

III 白河街区跡

- 13 白河街区跡 …… 53

IV 中臣遺跡

- 14 中臣遺跡73次調査 …… 57

V 長岡京跡

- 15 長岡京左京一条三坊・
東土川遺跡 …… 64
- 16 長岡京左京六条三坊・
水垂遺跡 …… 68

VI その他の遺跡

- 17 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 …… 72
- 18 北野遺跡 …… 74

- 19 小倉町別当町遺跡 …… 77

- 20 安祥寺下寺跡 …… 82

第2章 試掘・立会調査

I 平成6年度の試掘・

- 立会調査概要 …… 87

II 平安宮・京跡

- 1 平安宮朝堂院跡 …… 88
- 2 平安宮朝堂院跡～内蔵寮跡 …… 89
- 3 平安宮内蔵寮跡～中和院跡 …… 90
- 4 平安京左京八条二・三坊 …… 91
- 5 平安京右京三条一坊1 …… 92
- 6 平安京右京三条一坊2 …… 95
- 7 平安京右京四条四坊 …… 97

III その他の遺跡

- 8 北白川廃寺 …… 98
- 9 小倉町別当町遺跡 …… 101
- 10 遍照寺跡 …… 104

第3章 資料整理

- 1 遺跡測量 …… 105
- 2 コンピュータ …… 105
- 3 復原 …… 108
- 4 復原彩色 …… 111

第4章 普及啓発事業等報告

- 1 普及啓発および
技術者養成事業 …… 113
- 2 京都市考古資料館状況 …… 116
- 3 役職員名簿 …… 120

図 版 目 次

図版 1	調査位置図 1	平安京・白河街区・洛北地区調査位置図
図版 2	調査位置図 2	1 嵯峨・桂地区調査位置図 2 山科・醍醐地区調査位置図 3 長岡京地区調査位置図
図版 3	平安宮内裏内郭回廊跡	1 修築後の回廊 2 築造時の回廊
図版 4	平安宮武徳殿跡隣接地	1 飛鳥時代全景 2 S K 2 断面
図版 5	平安宮中務省跡 1・2	1 平安宮中務省跡 1 全景 2 平安宮中務省跡 2 全景
図版 6	平安京左京三条一坊	1 室町時代から江戸時代前期全景 2 平安時代全景
図版 7	平安京左京六条四坊・河原院跡	1 全景 2 六条坊門小路
図版 8	平安京左京六条四坊・河原院跡	1 S X 132 2 土壇 248 3 土壇 266
図版 9	平安京左京七条二坊・本圀寺跡	1 室町時代全景 2 井戸 231 3 土壇 216
図版 10	平安京左京八条三坊 1	1 第 2 面全景 2 第 3 面全景
図版 11	平安京左京八条三坊 1	1 石敷遺構 1170 2 井戸 566 3 井戸 1025
図版 12	平安京左京八条三坊 1	1 鏡鑄型 2 仏像鑄型 3 錢鑄型
図版 13	平安京左京八条三坊 2	1 2 次調査区全景 2 2 次調査区方形竪穴遺構
図版 14	平安京左京八条三坊 2	1 3 次調査区全景 2 3 次調査区 S X 351 3 5 次調査区 S X 300

図版 15	平安京左京八条三坊 2	1	5次調査区全景
		2	5次調査区 S X 794
		3	5次調査区 S E 2114
図版 16	平安京左京八条三坊 2	1	7次調査区全景
		2	7次調査区通路状遺構
		3	7次調査区室町小路西側溝
図版 17	平安京左京八条三坊 2	1	6次調査区西半全景
		2	8次調査区 S K 214
		3	8次調査区全景
図版 18	平安京左京八条三坊 2	1	4次調査区全景
		2	4次調査区 S D 150
		3	4次調査区 S E 12
図版 19	平安京左京八条三坊 2		2次調査区 S K 332・7次調査区 S E 762・S K 450 出土鏡鑄型
図版 20	平安京左京八条三坊 2	1	7次調査区 S K 744 出土仏具鑄型
		2	7次調査区 S E 650 出土蓮弁鑄型
図版 21	平安京左京八条三坊 2	1	8次調査区 S K 202・S D 230 出土仏具鑄型
		2	5次調査区 S X 794 出土銅磬鑄型
図版 22	平安京右京三条一坊	1	A区東西トレンチ全景
		2	A区南北トレンチ全景
		3	B区全景
		4	B区 P 2
図版 23	平安京右京六条一坊	1	9-1区全景
		2	9-2区全景
		3	9-3区全景
図版 24	平安京右京六条一坊	1	9-4区全景
		2	9-4区 S G 93
図版 25	平安京右京六条一坊	1	10-1区全景
		2	10-1区楊梅小路北側溝
		3	10-2区全景
図版 26	平安京右京九条二坊	1	1 トレンチ全景
		2	2・3 トレンチ全景
図版 27	白河街区跡	1	全景
		2	S B 2 断面
		3	S X 4

図版 28	中臣遺跡 73 次調査	1	2 区全景
		2	3 区全景
図版 29	中臣遺跡 73 次調査	1	3 区縄文時代晩期土壇群全景
		2	縄文時代晩期土器棺墓 S X 99
		3	縄文時代晩期土器棺墓 S X 917
図版 30	中臣遺跡 73 次調査	1	飛鳥時代竪穴住居 5
		2	飛鳥時代建物 1
図版 31	長岡京左京一条三坊・東土川遺跡	1	3 次調査区全景
		2	4 次調査区全景
図版 32	長岡京左京一条三坊・東土川遺跡	3 次調査	出土土器
図版 33	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1	C 1 区古墳時代全景
		2	C 1 区平安時代全景
図版 34	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1	C 2 区鎌倉・室町時代池状遺構
		2	東側木樋
		3	西側木樋
図版 35	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1	H 区全景
		2	補足 1 トレンチ全景
		3	補足 2 トレンチ全景
図版 36	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1	第 1 面全景
		2	第 2 面全景
図版 37	北野遺跡	1	全景
		2	S D 5
図版 38	小倉町別当町遺跡	1	全景
		2	2 号住居
図版 39	小倉町別当町遺跡		出土土器
図版 40	安祥寺下寺跡	1	2 区全景
		2	5 区西側全景
図版 41	安祥寺下寺跡	1	5 区飛鳥時代竪穴住居
		2	2 区甕棺墓
		3	3 区溝 3 - 22
図版 42	平安宮朝堂院跡～内蔵寮跡	1	1 トレンチ大極殿南限基壇
		2	7 トレンチ大極殿院北回廊基壇
図版 43	平安京右京三条一坊 1	1	2 区全景
		2	3 区全景
		3	4 区全景

図版 43 平安京右京三条一坊 1

図版 44 北白川麿寺

図版 45 小倉町別当町遺跡

図版 46 遍照寺跡

4 5区全景

1 No. 54 地点全景

2 No. 54 地点断面

3 No. 49・54・57 地点出土縄文土器

1 拡張区全景

2 NS1 トレンチ石列

3 EW3 トレンチ全景

1 調査風景

2 1区旧路面堆積状況

目 次

図 1 平安宮内裏内郭回廊跡

2 平安宮武徳殿跡隣接地

3 平安宮中務省跡 1

4 平安宮中務省跡 2

5 //

6 平安京左京三条一坊

7 //

8 平安京左京六条四坊・河原院跡

9 //

10 //

11 //

12 平安京左京七条二坊・本圀寺跡

13 //

14 //

15 平安京左京八条三坊 1

16 //

17 //

18 //

19 //

20 //

21 //

22 平安京左京八条三坊 2

23 //

調査位置図 3

調査位置図 4

調査位置図 5

調査位置図 6

遺構実測図 7

調査位置図 8

遺構平面図 9

調査位置図 10

遺構平面図 1 11

遺構平面図 2 13

出土土器実測図 14

調査位置図 16

江戸・室町時代遺構平面図 17

平安・鎌倉時代遺構平面図 18

調査位置図 19

第 2 面遺構平面図 20

第 3 面遺構平面図 21

出土土器実測図 22

土壙 1462 出土銭鑄型実測図 1 24

土壙 1462 出土銭鑄型実測図 2 25

土壙 1204 26

調査位置図 27

5・7 次調査区遺構平面図 28

図 24	平安京左京八条三坊 2	2・3・6・8次調査区遺構平面図 ……………	29
25	〃	S X 794・S K 214 実測図 ……………	30
26	〃	4次調査区遺構平面図 ……………	30
27	〃	六町・十一町遺構変遷図 ……………	31
28	〃	S K 202・214 出土土器実測図 ……………	32
29	〃	S K 350 出土土器実測図 ……………	33
30	〃	六町・十一町地点別出土軒瓦拓影 1 ……………	34
31	〃	六町・十一町地点別出土軒瓦拓影 2 ……………	35
32	〃	六町・十一町出土鑄型実測図 ……………	36
33	〃	4次調査区出土土器実測図 ……………	37
34	〃	十四町出土軒瓦拓影 ……………	38
35	〃	4次調査区出土木製品実測図 ……………	39
36	平安京右京三条一坊	調査位置図 ……………	41
37	〃	A区遺構実測図 ……………	41
38	〃	B区遺構平面図 ……………	42
39	〃	S D 92・93 ……………	42
40	平安京右京六条一坊	調査位置図 ……………	43
41	〃	六町地区(9-1・2・4区)遺構配置模式図 ……	44
42	〃	十四町地区(10-1区)遺構平面図 ……………	45
43	〃	S E 1066 ……………	45
44	〃	出土土器実測図 ……………	47
45	〃	S B 1001・1002 ……………	48
46	平安京右京九条二坊	調査位置図 ……………	49
47	〃	遺構実測図 ……………	50
48	〃	橋護岸実測図 ……………	51
49	〃	出土軒瓦実測図 ……………	52
50	白河街区跡	調査位置図 ……………	53
51	〃	S B 2 断面図 ……………	53
52	〃	遺構平面図 ……………	54
53	〃	出土土器実測図 ……………	55
54	〃	S B 2 第3面 ……………	56
55	中臣遺跡 73次調査	調査位置図 ……………	57
56	〃	縄文時代遺構平面図 ……………	58
57	〃	古墳時代後期から飛鳥時代遺構平面図 ……	59
58	〃	平安時代以降遺構平面図 ……………	60

図 59	中臣遺跡 73 次調査	S X 917 出土縄文土器実測図 ……………	61
60	〃	飛鳥時代土器実測図 ……………	62
61	〃	S K 6 ……………	63
62	長岡京左京一条三坊・東土川遺跡	調査位置図 ……………	64
63	〃	3 次調査区遺構平面図 ……………	64
64	〃	3 次調査区北壁断面図 ……………	65
65	〃	S X 5 ……………	65
66	〃	S X 5 出土須恵器甕 ……………	65
67	〃	3 次調査出土土器実測図 ……………	66
68	〃	4 次調査区遺構平面図 ……………	67
69	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	調査位置図 ……………	68
70	〃	C 区遺構平面図 ……………	69
71	〃	H 区遺構平面図 ……………	70
72	〃	補足調査区遺構平面図 ……………	70
73	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	調査位置図 ……………	72
74	〃	遺構実測図 ……………	73
75	北野遺跡	調査位置図 ……………	74
76	〃	遺構平面図 ……………	75
77	〃	調査区南半全景 ……………	76
78	小倉町別当町遺跡	調査位置図 ……………	77
79	〃	第 2 - 2 面遺構平面図 ……………	78
80	〃	出土土器実測図 ……………	79
81	〃	土壙 22 出土無文銀錢 ……………	80
82	〃	土壙 22 出土無文銀錢実測図 ……………	80
83	〃	整地層出土唐三彩皿 ……………	80
84	〃	整地層出土瓦塔 ……………	80
85	〃	3 号住居 ……………	81
86	安祥寺下寺跡	調査位置図 ……………	82
87	〃	遺構配置図 ……………	83
88	〃	出土土器実測図 ……………	85
89	平安宮朝堂院跡	調査位置図 ……………	88
90	〃	夜間調査風景 ……………	88
91	〃	大極殿基壇 ……………	88
92	平安宮朝堂院跡～内蔵寮跡	調査位置図 ……………	89
93	平安宮内蔵寮跡～中和院跡	調査位置図 ……………	90

図 94	平安京左京八条二・三坊	調査位置図	91
95	平安京右京三条一坊 1	調査位置図	92
96	〃	1～3区遺構平面図	92
97	〃	4・5区遺構平面図	93
98	〃	S D 30・30 B	94
99	平安京右京三条一坊 2	調査位置図	95
100	〃	遺構平面図	95
101	〃	1区全景	96
102	平安京右京四条四坊	調査位置図	97
103	北白川廃寺	調査位置図	98
104	〃	縄文土器実測図	99
105	小倉町別当町遺跡	調査位置図	101
106	〃	遺構実測図	102
107	〃	出土土器実測図	103
108	〃	出土軒瓦拓影	103
109	遍照寺跡	調査位置図	104
110	コンピュータ	システム構成図	107
111	復原	型枠として帯状粘土を置く	108
112	〃	シリコン樹脂を塗布	108
113	〃	ガラスクロスで貼り込む	108
114	〃	部分的に発泡ウレタン樹脂を注入	109
115	〃	分割部分の調整	109
116	〃	木組みを型枠内に入れる	109
117	〃	全体的に発泡ウレタン樹脂を注入	109
118	〃	型を起こす	110
119	〃	F R P樹脂 1層目を塗布	110
120	〃	樹脂 2・3層目はガラス繊維を貼り込む	110
121	〃	雌型を外す	110
122	〃	でき上がったF R P樹脂型	110
123	復原彩色	樹脂の表面を調整	112
124	〃	写真を参考に基本色の色出し	112
125	〃	地色の塗り分け	112
126	〃	川原石の細部の描写	112
127	〃	模型(小)の側面	112
128	〃	速報展	112

表 目 次

表 1	平成 6 年度の遺物復原彩色件数一覧表（復原彩色）	111
2	平成 6 年度月別入館者一覧表（京都市考古資料館状況）	119
3	発掘調査一覧表	122
4	試掘・立会調査一覧表	124
5	その他契約一覧表	126

第1章 発掘調査

I 平成6年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査の委託契約件数は27件で、昨年度の発掘調査の委託契約件数36件より9件減少している。内訳は、平安宮跡4件、平安京跡10件（左京域5件、右京域5件）、白河街区3件、中臣遺跡1件、長岡京跡3件、その他の遺跡6件である。

平安京右京八条二坊（七条小学校）、安祥寺下寺跡の各1件については、すでに『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』で報告している。また、平安京左京八条二坊、京都大学構内遺跡、白河街区跡2件は、年度がまたがる継続調査であり、次年度の調査概要で報告する。

したがって、本概要で報告する発掘調査の件数は、本年度契約分21件、および昨年度契約分1件（平安京左京八条三坊2）の計22件である。ただし、平安京右京六条一坊、長岡京左京一条三坊・東土川遺跡の各2件の発掘調査については、関連の調査であるため、2件を1項として扱う。今回報告する発掘調査の項目数は20項目である。

平安宮跡 国庫補助に伴う平安宮跡の発掘調査を3件実施している。内裏内郭回廊跡（1）では、平安宮造営当初の内裏内郭西面回廊の内側部分を検出し、回廊基壇と雨落溝を確認した。また、それらを覆う整地層を検出しており、回廊の修築、焼亡の経過も明らかにすることができた。武徳殿跡隣接地（2）では、飛鳥時代の土壇・建物を検出しており、土師器・須恵器などが出土した。これらの遺構、遺物は、造営前の宮内の様子を知る貴重ながかりとなっている。中務省跡1（3）では、部分的ではあるが、西面築地の基底部分と外溝を検出している。

原因者負担の調査である中務省跡2（4）の発掘調査では、東限を示す築地およびそれに伴う溝を検出している。中務省跡は、小規模な発掘調査の積み重ねによって成果をあげてきたが、今回もその例となった。

平安京跡 本年度の平安京左京域の発掘調査で特徴的なことは、京都駅改築に伴う発掘調査の件数が多かったことである。この地は平安京左京八条三坊にあたり、鎌倉時代の八条院町でもある。左京八条三坊1（8）では、平安時代後期から室町時代の遺構を検出し、町屋の変遷を知る資料を得た。土壇内から銭の鋳型が出土している。左京八条三坊2（9）の発掘調査は、7箇所調査した結果をまとめている。室町小路の両側に展開する平安時代末から室町時代の建物や多数の井戸、土壇を検出している。特に、鏡、仏具を中心とした鋳型片が多数出土したことは、近辺の調査である左京八条三坊1の調査で出土した銭の鋳型とともに注目に値する。それらは八条院町に活発に銅細工が行われた工房があったことを証明しており、左京八条三坊1・2の発掘調査によって、八条院町での銅製品の生産活動の実態が明らかになったといえる。

左京三条一坊（5）では、朱雀大路の東側溝を検出しており、左京六条四坊（6）では、左大臣源融の河原院の庭園の一部と考えられる池状遺構を検出している。左京七条二坊（7）では、

室町時代の寺院である本圀寺の東限を示す堀を検出した。

右京域では、右京三条一坊（10）で、10世紀中葉の遺物が出土した池状遺構、2時期に分かれる建物、姉小路の両側溝、路面などを検出している。右京六条一坊（11）では、平安時代の旧河川の流路、井戸、溝、土壌などを検出している。この発掘調査は継続調査であり、右京六条一坊の全容が将来明らかになる可能性がある。右京九条二坊（12）では、平安時代前期の西鞞負小路と九条坊門小路の交差点部分を確認することができた。また、採取した粘土のプラントオパールを分析して、高密度のイネ科のプラントオパールを検出した。これは、水田耕作が行われていた可能性を示しており、注目される分析の成果であった。

白河街区跡 白河街区跡（13）で、黒色砂泥層と川原石を交互に積み上げた大規模な建物地業を検出した。尊勝寺伽藍の中軸線上で検出しており、地業規模からすると、かなり大規模な寺院跡と考えられる。下層から方形周溝墓の一部も検出され、周溝の底から庄内期の土器が出土した。

中臣遺跡 中臣遺跡73次調査（14）では、縄文時代晩期の土器棺墓、掘立柱建物、立柱、土壌などを検出した。畿内では縄文時代晩期の掘立柱建物や立柱の検出例は少ないが、中臣遺跡で確認することができた。また、他にも古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居15棟を検出している。出土遺物や掘立柱建物との関係からすると中臣遺跡の竪穴住居は、7世紀第3四半期に終焉を迎えるようである。この竪穴住居は中臣氏との関連で注目される。

長岡京跡 長岡京左京一条三坊・東土川遺跡（15）では、明確な長岡京に関する遺構は検出することはできなかった。古墳時代の河川の流路を検出するに留まり、流路内から多量の古墳時代の遺物が出土した。長岡京六条三坊・水垂遺跡（16）は、平成2年度から継続して実施している大規模調査である。本年度も南北方向の古墳時代の川や竪穴住居などを検出している。鎌倉・室町時代の遺構では、木樋を伴う木杭や石で護岸した池状遺構も検出した。木樋は丸木船が転用されており、海水域にしか住まないフナクイ虫による腐食が認められた。

その他の遺跡 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園（17）では、舞台造りの一部と考えられる柱穴列を検出している。北野遺跡（18）では、飛鳥時代から奈良時代にかけての溝・柵・土壌などを検出した。平安時代初期の建物も検出しており、桓武天皇が建立した常住寺の一角である可能性がある。小倉町別当町遺跡（19）では、飛鳥時代の竪穴住居を多数検出している。この調査で注目されることは「高志口」と記された無文銀銭が出土したことである。安祥寺下寺跡（20）では、縄文時代晩期の甕棺墓、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物、井戸などを検出している。今回、各時代にまたがる複合遺跡であることが判明した。昨年度の発掘調査では、鏡片が出土した平安時代の木炭木槨墓も検出しており、安祥寺下寺跡は、複合遺跡であると同時に山科盆地における主要遺跡として位置づけることができる。

以上、発掘調査の概要報告の成果をまとめたが、京都市内の発掘調査は、市街地内の調査とあって調査面積も限られていることが多く、種々の制約も多い。しかし、個々の発掘成果の積み重ねによって、遺跡の全貌に近づくことは可能である。この視野に立って調査を実施していることを最後に付け加えておきたい。

（永田信一）

II 平安宮・京跡

1 平安宮内裏内郭回廊跡 (図版1・3)

経過 今回の調査は民家の建て替えに伴って実施した。調査地は内裏を囲んでいた内郭回廊の西側部分にあたり、近隣の既往の調査成果から回廊の基壇内側部分が良好な状態で遺っていることが期待できた。

遺構 2時期の回廊基壇と雨落溝、それらを覆う整地層を検出した。築造時の基壇は、調査区の西端に地覆石が南北方向に並んで遺っていた。二上山産の凝灰岩の切り石を用いており、羽目石や東石を組み合わせるための欠き込みや

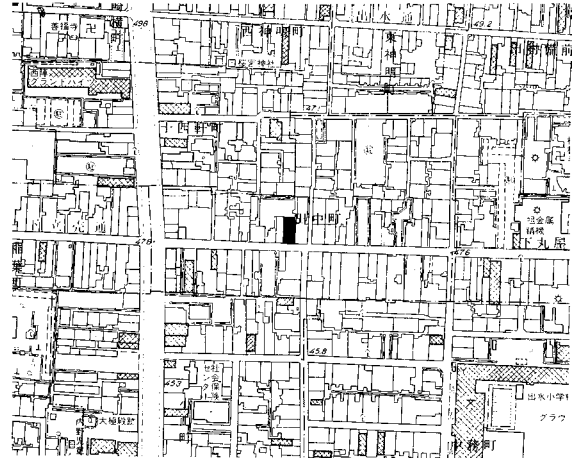


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

柄穴が加工してあった。地覆石東側の雨落溝は、地覆石と対面して角柱状や板状の川原石を並べて肩を造り、その間に平たい川原石を並べている。南向きに排水していた。修築時の回廊基壇は高さ約 20 cm の土盛状を呈する。築造時の基壇の上部を削り、雨落溝を埋めて造られていた。基壇の東側には石列が 2 列並ぶ。西側の石列は築造時の雨落溝の東端を再利用したものだが、東側の石列には築造時の基壇の部材を転用していたので、新たに追加されたと推定している。石列のすぐ東側で素掘りの南北方向の雨落溝を確認した。修築時の基壇の東側には厚さ約 30 cm の焼土層、それらの上には平安時代末期の遺物を含む黒褐色砂泥層が堆積していた。

遺物 出土遺物には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・凝灰岩・焼けた壁土などがある。築造時の基壇下層から出土した土師器は、8世紀末から9世紀初頭の特徴を示していることから基壇の築造は平安宮造営当初にさかのぼることが判明した。修築時の基壇の盛土からは9世紀後半、修築後の雨落溝埋土からは10世紀前半の土器が出土しており、それぞれの年代を決定することができた。焼土層は土器・瓦類とともに多量の炭・焼土粒・焼土塊・焼けた壁土などを含んでいる。壁土には表面に白土を塗った破片が多数あった。出土遺物の年代から天徳四年(960)の火災の後片付けの整地層と考えられる。

小結 今回の調査成果は、平安宮造営当初にさかのぼると考えられる内裏内郭西面回廊の内側部分を良好な状態で検出できたこと、その部分の8世紀末から10世紀中頃にかけての修築・焼亡の変遷を明らかにできたことがあげられる。しかし回廊の中心部分にはいまだ調査が及んでおらず、また平安時代中期以降の動向も詳らかではない。これらの課題については今後の調査の進展を待ちたい。なお、検出した遺構は地権者の協力により、現地の地中に保存することができた。

(山本雅和)

2 平安宮武徳殿跡隣接地（図版1・4）

経過 上京区下長者町通七本松西入鳳瑞町252、253、253-1番地に所在する宗教法人浄篤院敷地内で、住宅が建設されることになった。当該地は、平安宮武徳殿隣接地、右近衛府と右兵衛府間の通路に比定される。平成6年（1994）3月16日に京都市埋蔵文化財調査センターの試掘が実施され、平安時代以前の遺構が検出された。このため、本格的な発掘調査の必要が生じた。調査は平成6年（1994）5月9日～5月31日の期間に実施した。調査面積は東西12m、南北9mの約108㎡と、拡張区を含めて110㎡を測った。

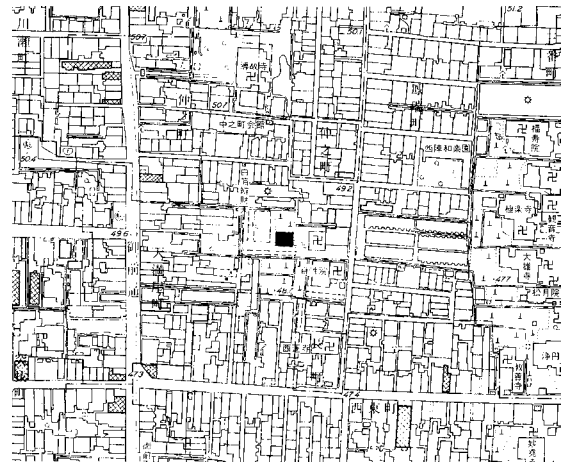


図2 調査位置図（1：5,000）

遺構 検出した遺構は、飛鳥時代の土壌、建物2棟、柵1列、室町時代中期・後期の遺物包含層、桃山時代の遺物包含層、土壌、江戸時代の柱穴、土壌がある。

飛鳥時代の土壌SK2は、東西2.5m、南北3.0m、深さ0.5mを測る。平面形は三角形を呈する。土器類、焼土、炭、黄色粘土塊などが出土した。建物SB15・16はいずれも桁行1間以上、梁間2間を測る。北西方向に傾きを持つ東西棟である。SB15は桁行、梁間ともに1.7mを測る。SB16は桁行1.5m、梁間2.1mを測る。柵SA24は北西にやや傾いた東西方向の2間分を検出した。柱間寸法は1.7～1.8mを測る。

室町時代中期・後期、桃山時代の遺物包含層は耕作土の堆積したもので、桃山時代と江戸時代の土壌SK1・11・14・28は土取穴とみられる。

遺物 縄文時代の遺物は、石器剥片が出土した。飛鳥時代の遺物は、土師器、須恵器、金属塊などがある。平安時代前期・中期の遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦がある。室町時代中期・後期、桃山時代の遺物は、土師器、陶器、瓦器、瓦などがある。江戸時代の遺物は、土師器、染付磁器、瓦がある。

小結 平安宮域では、内裏、朝堂院、中央官衙地区を中心として、弥生時代後期、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代におよぶ遺構・遺物の検出報告が相次いでいる。

一方、平安宮西辺地区でも、造酒司、内匠寮、豊楽院、左馬寮、右近衛府などで報告例がある。しかし、集落の中心地区の確認までにはいたっていない。今回の調査では、建物、土壌、柵などの遺構を検出し、西辺地区にある集落遺跡の一端を発見した。遺跡の範囲は、調査地東方の「宴の松原」と称された宮内空闲地を一部含み、右京一条二坊東半へ広がる可能性がある。

（平田 泰）

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 1995年報告

3 平安宮中務省跡1 (図版1・5-1)

経過 調査地点は中務省西面築地に該当し、敷地の東寄りに推定築地心が位置する。北接する地点の調査では、北面築地と西面築地およびそれに伴う溝、甃を用いた暗渠などが良好に遺存していた。このうち、西面築地とその外溝の延長が当調査区にあたる。これらの検出が期待されたため、当地の民家の建て替えに伴い発掘調査を実施する運びとなった。

遺構 調査区の大部分は、江戸時代後半から近代にかけてのいわゆる聚楽土を採取する際に掘られた土取穴で占められていた。この土取穴により破壊されつつも、北半部の島状に残った部分で西面築地の基底部および外溝を南北約2.5mにわたって検出した。溝は検出面からの深さ約50cm、幅は西肩口が土取穴により削平され不明である。埋土からは平安時代初頭の瓦や土器類、凝灰岩片が出土した。築地基底部には黒褐色粘質土層が15～20cm積まれていた。東半部では黒褐色粘質土層の上層に黄褐色泥砂層、暗褐色微砂層がそれぞれ5～20cmほど水平に堆積していたが、これらも築地に伴う堆積と考える。

また調査区のほぼ中央で幅約70cm、深さ約30cmの東西方向の溝を検出した。須恵器の小片が出土したのみで時期の確定はできず、築地との関係は不明だが平安時代の溝と考える。

遺物 出土遺物のほとんどが瓦類で、平安時代の遺物がその多くを占める。土取穴からは江戸時代の瓦、陶磁器類などとともに、平安時代の瓦類が多く出土した。築地外溝からは瓦類のほか凝灰岩片も多く出土した。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器などの土器類は小片が多く、量的にも少ない。土取穴から出土した瓦の中には、平城宮式複弁蓮華文軒丸瓦、難波宮式三重圈文軒丸瓦、長岡宮式均整唐草文軒平瓦といった搬入瓦もある。また、緑釉瓦が比較的多いのが特徴だが、これは中務省の西隣に位置する大極殿に関係するものであろう。

小結 本調査では江戸時代以降の土取穴によって平安時代の大半の遺構は破壊され、中務省西面築地を調査区全面にわたって検出することはできなかった。しかし、部分的ではあるが築地基底部の堆積層と外溝を確認できた。

(近藤知子)

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 1995年報告



図3 調査位置図 (1:5,000)

4 平安宮中務省跡 2 (図版1・5-2)

経過 調査地点は中務省北東部の東限築地跡に該当する。当地におけるマンション建設に伴い京都市埋蔵文化財センターが試掘調査を行った結果、中務省に関係すると考えられる南北溝を検出し、発掘調査をする運びとなった。

調査区の南半部は、江戸後半以降の土取穴や性格不明の大型土壌により、平安時代の遺構は残存していなかった。北半部では築地に伴う内溝、外溝および築地基底部の堆積などを検出した。

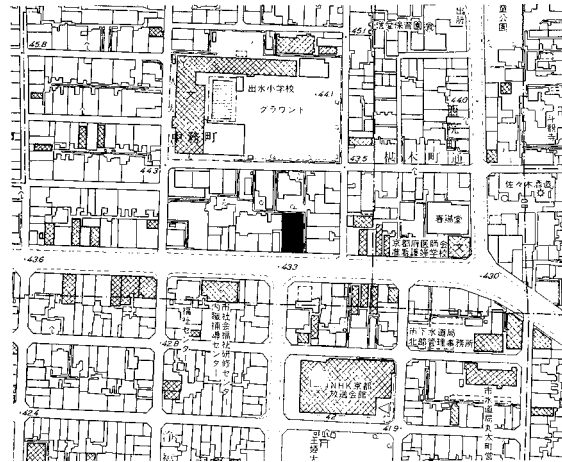


図4 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構 調査区南半部は、いわゆる聚楽土を採取するための土取穴が、3～4単位認められる。これらの土壌群からは、瓦をはじめ平安時代の遺物も多数出土した。

北半部では、平安時代の中務省東限築地とそれに伴う内・外溝を南北約7mにわたって検出した。ただし築地に相当する部分の大部分は近・現代の攪乱により破壊され、基底部の堆積を確認するにとどまった。築地の東側は道路にあたるが、路面は削平されて残っていなかった。

内溝の規模幅は検出面で幅約120cm、深さ約25cmであった。最下層には溝の機能中に堆積したと考えられる暗褐色粘質土層があるが、上層は黒褐色砂泥を主体とする均質な埋土で人意的に埋められたものと推定できる。埋土からは9世紀初頭の遺物が出土しており、成立後まもなく埋没したことがわかる。

これに対して外溝は、9世紀と10世紀の新旧2時期を検出した。9世紀代の溝は検出面で幅約110cm、深さ約15cmで、東肩にそって約30cmの幅でさらに10cmほど落込む。西肩口では約30cm間隔で護岸の杭跡を検出した。埋土は褐色砂礫層で、出土遺物から9世紀前半に埋没したと考えられる。10世紀代の溝は旧溝の外側、東肩口をわずかに切る位置で検出した。検出面での規模は幅約100cm、深さ約20cmで、護岸の痕跡はない。なお内外溝間の幅は、約360cm(約12尺)である。

このほか、本来内溝側の犬走に相当する位置で9世紀代の土壌(土壌22)を検出した。出土遺物から内溝よりやや新しく、内溝埋没後の時期に属する土壌である。土器や瓦が一括投棄されていた。柱穴の中にも平安時代に属すると考えられるものがあるが、出土遺物に乏しく時期の確定は不可能で、また建物の復原にもいたらない。

遺物 遺物は整理箱に51箱出土した。江戸時代と平安時代のものに大別できるが、以下平安時代の遺物について概略を述べる。

平安時代の遺物では瓦類が最も多く、これらは江戸時代の遺構からも多く出土する。大部分は丸瓦、平瓦で、軒丸瓦、軒平瓦、緑釉瓦、甑も少量出土するが磨滅した小片が多い。長岡宮式蓮

華文軒丸瓦片が1点ある。

土器類には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器があり、これらは10世紀と9世紀代のものに大別できる。いずれも小片で器形を確定できるようなものは少ないが、皿・杯・碗といった小型供膳形態が大半を占め、貯蔵具や煮炊具は少ない。10世紀代の土器は外溝から出土したもので、土師器のほか須恵器も少量出土した。10世紀中頃のものを中心である。9世紀代の土器類は内溝、外溝、土壇などから出土した。土師器、須恵器がほとんどで黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器も少量ある。時期的には内溝出土のものが9世紀初頭と最も古く、旧外溝、土壇22出土のものも9世紀前半代に属する。

小結 今回の調査では、中務省東限築地およびそれに伴う溝などの遺構を検出した。中

務省の東限は壬生大路西築地心の延長線上と推定されてきたが、当調査で検出した築地はほぼこの位置にあり、このことを確認できた。また検出した内外溝間の幅は、360cmでおおよそ12尺となる。西限築地の調査結果から築地幅を7尺とすると、犬走幅はそれぞれ2.5尺という数値が得られる。溝幅は、100～120cmとこれまでの調査で検出した内外溝と比較するとやや狭い。上層が削平されていることを考慮して、実際の溝幅を復原しても140～150cmとなろう。また内溝は9世紀初頭には埋没してしまうが、外溝は埋没後も再掘され10世紀まで存続していた。同様の状況が中務省西面築地でも確認されており、また北面築地内溝も9世紀初頭には埋没し、再度開削されることはなかったようである。このことから、中務省北半部においては四至の築地に伴う内溝は造営直後に埋められ、築地のすぐ際までが敷地として確保されたと推定できる。実際に、今回の調査でも本来築地と内溝間の犬走到に相当する部分で、9世紀代の土器を廃棄した遺構を検出している。その結果排水はもっぱら外溝に依存していたようで、築地側の肩口に杭による護岸が施されているのも水量を考慮してのことかもしれない。

(近藤知子)

『平安宮Ⅰ』1995年報告

註 鈴木久男・南 孝雄「平安宮中務省(3)」『平安京跡発掘調査概報』平成3年度
京都市文化観光局 1992

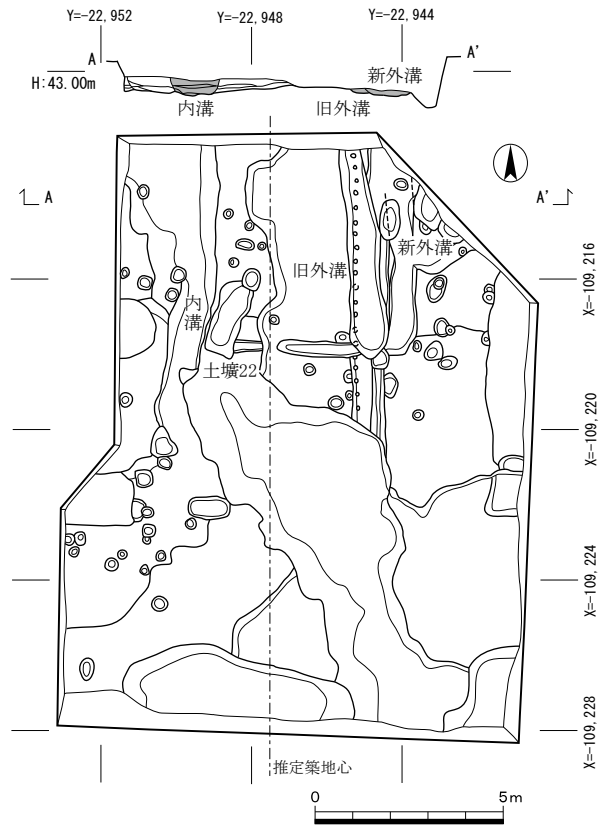


図5 遺構実測図(1:200)

5 平安京左京三条一坊 (図版1・6)

経過 調査地は、中京区西ノ京北聖町62、京都市立中京中学校内の北西部に位置する。ここに体育館が改築されることになり、事前調査を行った。調査地の東側は平安京左京三条一坊一町、西側は朱雀大路に推定される。同校は以前に2回にわたって調査が実施されている。昭和56年(1981)にプール建設に伴う調査^{註1}で、朱雀大路東側溝と西町奉行所の遺構を検出しており、今回の調査地はその北側にあたる。

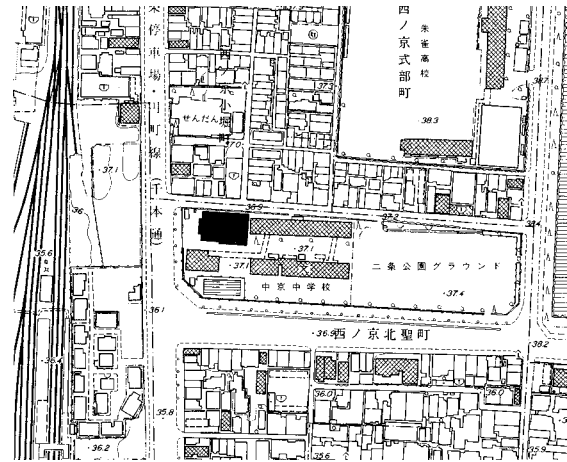


図6 調査位置図 (1:5,000)

調査区は東西23m×南北6mを設定した。

調査の結果、平安時代後期の朱雀大路東側溝、中世の掘立柱建物、江戸時代の西町奉行所関連の遺構を検出した。

遺構 調査区の基本層序は、現地表から近・現代の盛土層が0.6～1.0m、江戸時代の旧耕作土Ⅰが0.4m、整地層が0.05m、旧耕作土Ⅱが0.2m、地山が1.1～1.3mの明黄褐色泥砂・砂礫層である。地山面は北東から南西方向へ低く、比高差が0.5m前後ある。

江戸時代の遺構 整地層(第1面)で、小溝を多数検出した。いずれも耕作に伴う溝である。

旧耕作土Ⅱ(第2面)で、南北溝2条、東西溝1条、土壇、井戸を検出した。溝33は幅1.4m、深さ0.7mの規模で、溝内には多量の瓦が含まれていた。溝47は溝33の7m西側にあり、幅1.7m、深さ0.7mを測る。溝42は調査区西側で検出した。規模は幅1.4m、深さ0.5mを測る。溝47と直交し、西壁へ延びている。土壇43は南東角で検出した。規模は東西3.4m、南北0.6m以上、深さ0.3mを測り、方形を呈している。土壇内には拳大の石が多量に詰まっており、建物の基礎部の可能性がある。井戸8は径1.2～1.8m、深さ2.0m以上の楕円形を呈している。

地山(第3面)で、江戸時代前半の溝5条と土壇4基を検出した。溝はいずれもほかの溝と異なり、傾きが南東から北西方向である。土壇は堆積状況から土取りのための採掘土壇と思われる。

室町時代の遺構 調査区東半で柱穴を30基検出した。規模は径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mで、根石を持つものも数基ある。各柱間は約2.0mと1m前後である。検出した柱穴から建物1、建物2、柵3の復原を試みたが建物は調査区の南側へ延びると考えられるため全体像は不明である。

鎌倉時代の遺構 落込91・98、杭3基を調査区西半で検出した。2基の落込は、ともに砂とシルト層が互層に堆積し、埋土から軒丸・軒平瓦を含む瓦類が多量に出土した。

平安時代後期の遺構 溝92、落込93・103、柱穴を検出した。溝92は朱雀大路東側溝の推定位置で検出した。西肩部は削平を受けているが最大幅1.7m、深さ0.6mである。落込103は、落込98の北肩部確認のために行った北壁部拡張で検出した。東西溝で、幅約0.5m、深さ0.25

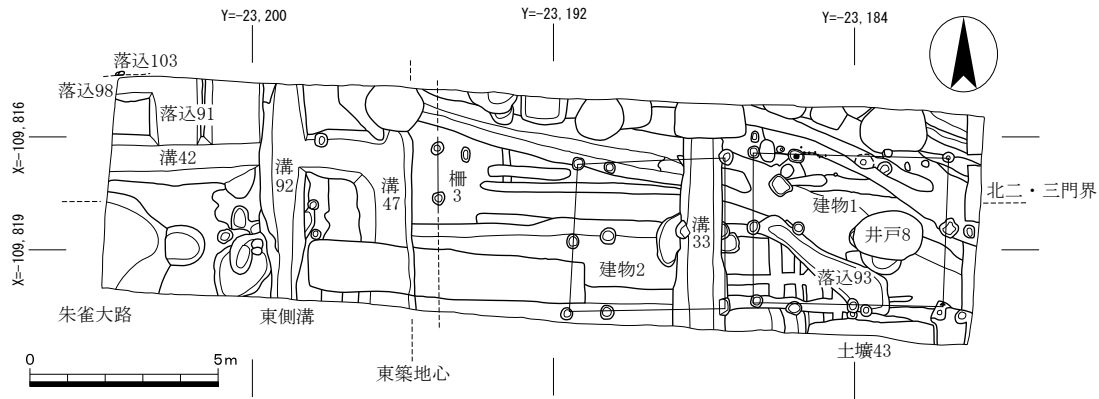


図7 遺構平面図(1:200)

mで溝内に凝灰岩が一部残存していたが詳細は不明である。

遺物 出土した遺物は整理箱にして69箱である。その内容は瓦類が圧倒的に多く土器類は少量である。瓦類で平安時代後期の軒瓦が主に出土したのは落込91・93・98からである。土器類は朱雀大路東側溝から平安時代後期の土師器が少量と、志野・瀬戸・織部・唐津など桃山時代から江戸時代の遺物が第2・3面の土壌、井戸から若干出土した。

小結 今回の調査も、前回の南側調査で検出した朱雀大路東側溝、中世の建物遺構、江戸時代の西町奉行所関連の遺構を検出することができた。朱雀大路東側溝の検出位置は、同一町内での調査の2例でも『延喜式』の「京呈」に記載されているより東寄りに位置しており同じ傾向を示すが、ほかの検出例からは異なっている。築地、路面については痕跡はなく後世に削平を受けたとみられる。室町時代の建物についても、前調査でも同様の建物が検出されており、関連するものと思われる。寛文八年(1668)開設の西町奉行所跡の関連遺構と考えられる南北溝2条と東西溝1条がある。西側の溝42と47は直角に折れている。その位置も平安時代の条坊制を踏襲された位置(北二・三門境)付近にあると考えられることから、奉行所の西限で西側への出入口の可能性はある。東寄りの溝33は宅地内の区画に関わる遺構と考えられる。

(小松武彦)

註1 丸川義広「左京三条一坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983

註2 小森俊寛・上村憲章・長戸満男・原山充志「平安京左京三条一〜四坊」

『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994

註3 平尾政幸「平安京左京六条一坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995

6 平安京左京六条四坊・河原院跡 (図版1・7・8)

経過 この調査は、関西電力変電所建設工事に先立って実施したものである。調査地は、平安京左京六条四坊十一町に想定され、東は富小路、西は万里小路、北は六条坊門小路、南は楊梅小路に囲まれた十一町の北東隅に位置する。調査地周辺は、平安時代の文献史料から、六条四坊四町には時康親王（光孝天皇）の御所釣殿院、同四・五町には『拾芥抄』東京図によると六条院、『延喜式』付図によると六条院融公など天皇・皇親家・有力貴族層の御所・邸宅が建ち

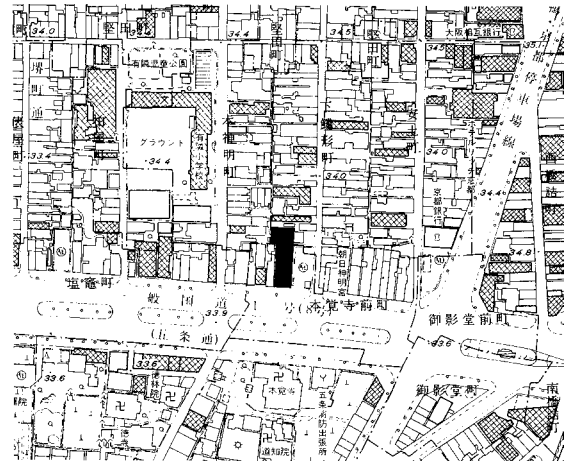


図8 調査位置図 (1 : 5,000)

並んでいた一帯にあたる。当地周辺も平安時代前期から中期にかけて左大臣源融（嵯峨天皇第8皇子）の河原院に相当する。河原院は、『拾芥抄』中には「六条坊門南、万里小路東八町」と記載されるが、同東京図や『延喜式』付図には、十三町だけの範囲となり、文献史料に齟齬がみられる。現在河原院の範囲は、北が六条坊門小路、南が六条大路、東が東京極大路、西が万里小路に囲まれた4町と考えられている。その後当地一帯では、安元三年（1177）四月二八日に起こった安元の大火の火元であったことが『百練抄』にみえ、具体的な火元はこの町か周辺の舞人（または病人）の仮屋であったといわれる。このことから当地でもこの火災に会った可能性が充分考えられる。室町時代以降の状況については、資料が少なくはっきりしていないが当地と富小路を挟んだ向い側には「朝日神明宮」がある。社伝によると元龜三年（1572）に丹波国穴太村から現在地に遷座したといわれ、当時の境内域は六条坊門小路を南限とし、北を松原、東を河原、西を万里小路にまでおよぶ広大な範囲を占め、「幸神の森」と呼ばれる木々が生い茂った森があったといわれる。当地もこの一郭にあたり、それに関連する遺跡が予想される。江戸時代の様子については『京羽二重』（貞享二年刊）に、白山通（現麩屋町通）の「五条上」の職商人として「扇ほね」を掲げており、このような町屋が存在したことがうかがえる。当該地には、これらに関連する遺構群の存在が予想された。

まず調査に先立ち遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施したところ、敷地南端で池状の堆積層が確認されたことから、当地に河原院に関連する何らかの遺構が明らかとなった。

調査は、工事範囲を対象としたが既存基礎などを考慮して敷地西半に調査区を設定した。まず現近代の整地土層を機械力で排土し、以下調査を実施した。その結果平安時代から江戸時代にいたる各時期毎の宅地利用の実体が明らかとなった。

遺構 基本層序は、現地表から約15～40 cmまでが近現代の盛土層で、次いで幕末の火災に伴う焼土の整地層が20～30 cm、この下は江戸後期の整地層、洪水層、江戸前期から中期の整地層、洪水層が各々5～25 cm程度認められる。次いで江戸時代初期の整地層が厚さ20 cm、桃山時代の

整地層が厚さ5～15 cm、室町時代の整地層が厚さ15 cm認められる。これより以下は調査地の北半と南半で異なる。前者は平安時代から室町時代までの路面整地層が厚さ50 cmの範囲で7層認められた。後者は平安時代末から室町時代の整地層が厚さ50 cmあり、それ以下は池と考えられる大規模な落込の、平安時代堆積層が厚さ1.3 mある。その下は両者とも平安時代以前の流路による堆積層となる。

検出した遺構群は総数414基を数え、平安時代以前の流路を含めると江戸時代まで5時期に大別される。これらは各時代継続しているのではなく、室町時代後期から桃山時代前期の間は顕著なものがなく、空白となっている。そして遺構のあり方にも5時期ごとに様相が異なっている。

平安時代以前のものは、調査区南半平安時代の遺構群が成立している砂礫層を掘り下げた結果、古墳時代と考えられる土器の破片が出土し、この層序のあり方から流路による堆積層と考えられる。調査範囲内ではその北肩部を確認したに過ぎず、規模・方向については不明である。

平安時代前期から後期のものは、六条坊門小路と宅地内で園池に関連するものがある。小路には前期から後期の路面整地層4層、前期の南側溝406、中期末から後期の北側溝350と北築地内

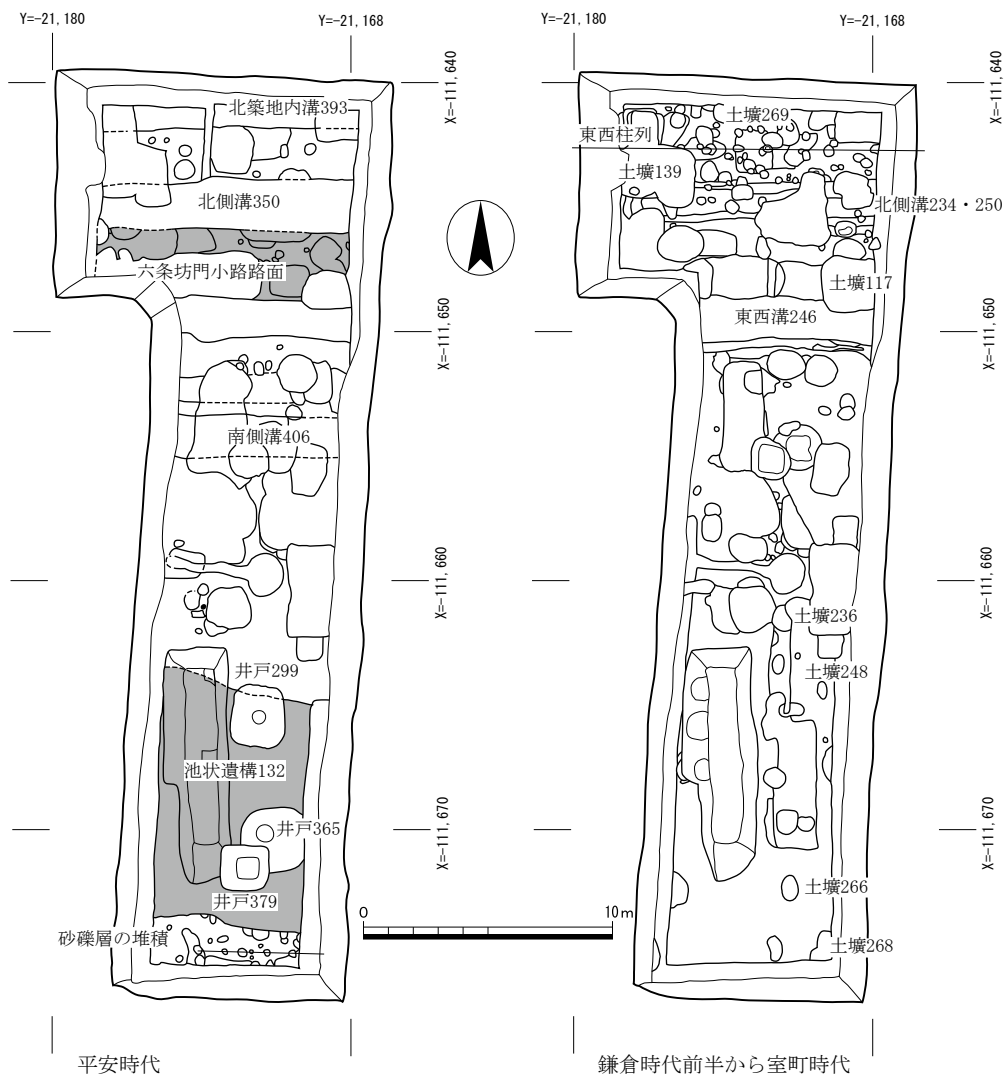


図9 遺構平面図 1 (1:300)

溝 393 を確認した。路面整地 2 層中から 9 世紀後半の土師器杯・皿・高杯、緑釉陶器が炭化物とともに完形に近い状態でまとまって出土したことから、何らかの祭祀を行った痕跡と推測される。北側溝はほぼ同じ位置で 4 条重複していたが中期末より古い時期のものは確認しなかった。南側溝はわずかに痕跡がみられ、その中から 9 世紀前半の遺物が出土し、この時期にはすでに小路として機能していたことが判明した。このことから六条坊門小路は平安時代初期の段階にはすでに造営され路面として機能し、前期末の段階で何らかの祭祀を伴う整地があり、以後後期まで溝・路面とも存続していたことが判明した。園池に関連する池状遺構 132 は、小路南側溝 406 から 9 m 南に離れた十一町の北東隅近くに位置する。その規模は東西 8 m 以上、南北 10 m 以上、深さ 1.3 m である。遺構の底はほぼ平坦で、薄く粘土が貼られた上に拳大の川原石を敷き詰めている。川原石の密度は、底から汀に行くにしたがい密集する。底に堆積した泥土の中には中期後半の遺物とともに松・桃の種子、葉・枝などの植物遺体が多く含まれる。泥土の厚さは 20 cm ほどあり、その後池状遺構の南部が鴨川の氾濫と考えられる砂礫層で埋まり、遺構の南北幅が 10 m ほどに縮小される。さらにその後泥土の堆積が 40 cm ほどみられ、その上面まで再び鴨川の氾濫と考えられる砂礫層により覆われ、遺構は埋められて廃絶する。この池状遺構の北肩を形成する粗砂と砂礫の互層は、出土遺物では前期から中期初めの堆積層であることが判明し、その時期の流路が存在していたことがうかがえる。

平安時代末から鎌倉時代初めのものは、まず六条坊門小路に関連する路面の整地が確認され、北側溝は鎌倉時代前期のものと重複していた。2 時期にわたる改修が認められる。南側溝は現代攪乱を受け不明である。北側の築地想定部分にはその痕跡はなくその位置に東西方向の柱列が認められる。宅地内の状況は、北端で掘形の一边が 2.0 ～ 2.5 m の隅丸方形の井戸 365・379 が 2 基重複し、方形縦板組みの井戸枠がわずかに残存していた。その内井戸 379 の井戸枠内底には曲物を一段掘り窪めて据えている。

鎌倉時代前半から室町時代のものは、六条坊門小路に関連する北側溝 234・250 が鎌倉時代前半まで確認できたが、それ以降には溝は認められなかった。前半の溝 250 は、幅 1.2 m、深さ 0.45 m の断面逆台形を呈する素掘溝である。南側溝については前代同様現代攪乱を受け確認できなかった。路面は溝が廃絶した後も室町時代の路面の整地層が確認できることから、この時期まで確実に道路として機能していたことが判明した。また北築地に相当する部分には、東西柱列が認められ、宅地境界を示す施設と考えられる。宅地内の北辺では、井戸、集石、土器溜、柱列、方形土壇、土壇などが北一門と二門の境界付近で集中してみられる。池が廃絶して後、このような遺構群が分布するのは、邸宅の一部が都市化していったことを示すものと考えられる。

桃山時代から江戸時代代ものは、小路に関連した遺構は存在せず、町屋に関連する遺構群が、調査区全域で認められた。それらは調査区北側の東西溝 16・79 により二分される。溝は石組みで護岸、一部杭と板で補強され、18 世紀前半と 19 世紀に造り替えが認められる。さらにその下に素掘溝があり、出土遺物から 17 世紀初めまでさかのぼることが判明した。明治の地籍図にも同位置に溝が描かれており、河原町に通じる排水路であったことがわかる。このことから溝

は、麩屋町と六条坊門に各々面した町屋の背割溝として機能したと考えられる。麩屋町に面した町屋では宅地奥に、集石、板組土壇、方形土壇があり、集石21・22・24・59は、東西に4基一列に並んで確認した。背割溝に接した土壇114・117からは、江戸時代前期の玩具などの土製品がまとまって出土した。六条坊門小路に面した宅地の奥には、石組井戸5・18・41が3基並んであり、道寄りには木枠組みの井戸109・110が2基南北に並び、場所によって井戸枠の施設が異なっている。ただこれらはすべて並存するのではなく、時期によって造り替えられ、1基ずつ配置されたとみられる。町屋規模については調査範囲が狭く、確定するにはいたらなかった。

遺物 出土した遺物は、整理箱で125箱を数え、弥生時代から江戸時代の長期にわたるものを含む。内訳は、江戸時代のものが過半数を占め、次いで南北朝時代から室町時代が2割前後、平安時代末から鎌倉時代初めが1割強、平安時代中期が5%程、平安時代前期が2～3箱で、弥生・古墳時代のものは数片に過ぎない。そして器種別にみると、土器・陶磁器・土製品が圧倒的多数を占め、瓦類は少なく、銅製品・鉄製品・木製品に限ってはごくわずかに過ぎない。

弥生・古墳時代の遺物は、平安時代の遺構のベースとなっている流路の砂礫層や砂層から出土し、弥生時代後期や古墳時代後期のものが多い。破片はやや大きく、磨滅を受けている。

平安時代前期のものは、六条坊門小路南側溝から出土した9世紀前半の少量の土師器、須恵器と、路面で検出した祭祀に関連すると思われる土器溜があり、重要な一括資料といえる。その内訳は土師器杯A・杯B・皿A・高杯、黒色土器A類杯A・鉢、黒色土器B類風字硯、東海産緑釉陶器碗・皿、須恵器鉢・甕、越州窯青磁碗、瓦類などがある。その中でも土師器杯A・皿Aが圧倒的多数を占め、灯明具として使用されたものも目立つ。瓦類の中には長岡奥海印寺瓦窯の複弁四葉蓮華文軒丸瓦が含まれる。平安時代中期の遺物として、池状遺構S X 132の第8層から出土したもの(1～6)がある。内訳は土師器の食膳具が大部分を占め、とりわけ皿類が目立つ。土師器の手法は口縁部上端のみヨコナデするe手法のもののみで、その形態はいわゆる「手の字口縁」を呈するもの(1～4、6)が大部分であるが、わずかに口縁上端をヨコナデし、端部は外側に外反するもの(5)も含まれる。この土器の胎土は、前者と異なり砂粒を多く含む荒いもので、他地域からの搬入品と考えられる。

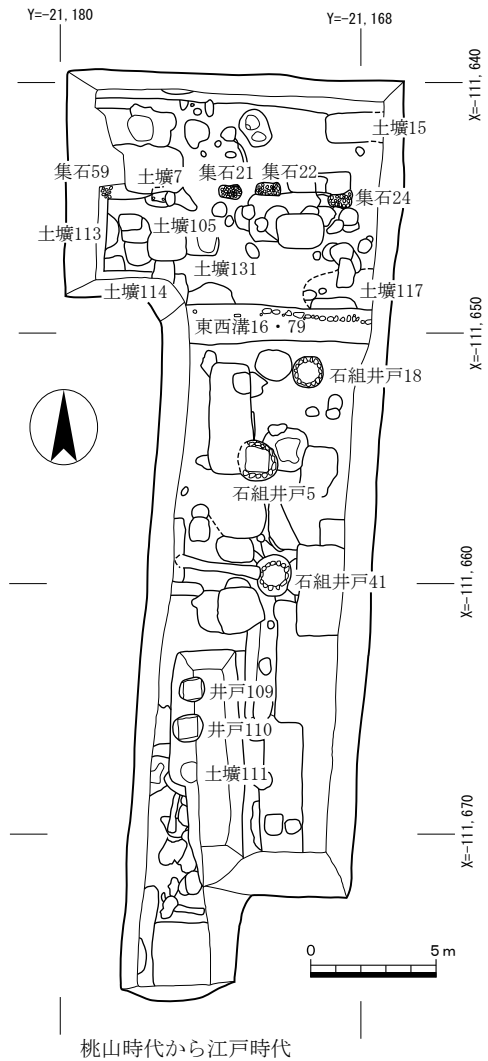


図10 遺構平面図2 (1:300)

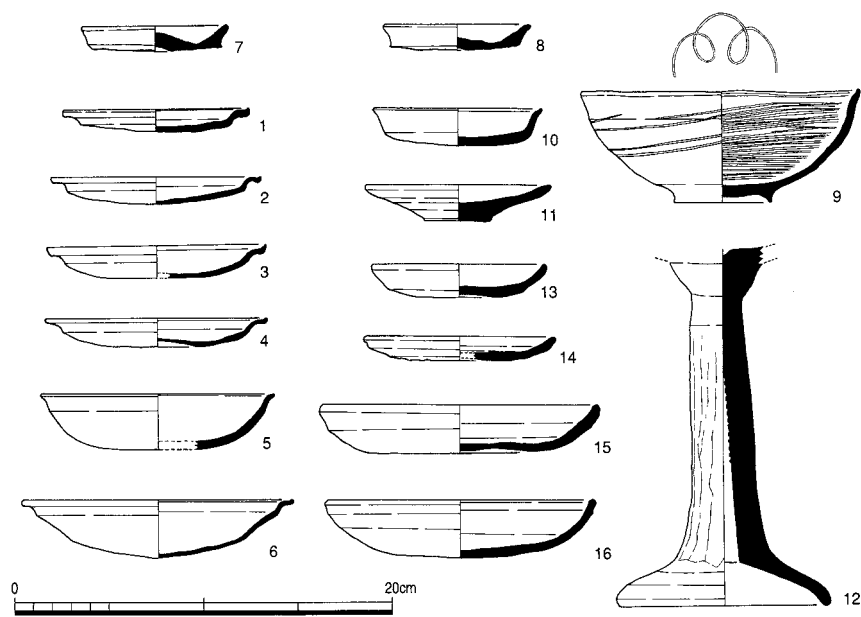


図11 出土土器実測図（池状遺構 132 第8層:1～6 井戸 365:7～8 土壙 248:9～16）(1:4)

平安時代末から室町時代にかけては遺構群の増加に伴い遺物量も増加する傾向にある。十一町の北一・二門境界付近には土器溜が3箇所あり、土師器皿がまとまって出土する。またその北には方形土壙 248 があり、そのなかから白色陶器皿 (11)・高杯 (12) 2 個体、瓦器椀 (9) と皿 (10) が各々 1 個体ずつ、土師器皿 (13・15・16) 3 個体がほぼ完形で、底に重なって出土した。このほかには土師器皿、ロクロ成形土師器壺、瓦器捏鉢、神出・魚住産須恵器捏鉢、白磁直口椀、黄釉陶器壺の破片類も含まれる。また鎌倉時代前期の遺物のうち、井戸 365 から搬入品と考えられるロクロ成形でヘラ切りの土師器皿 (7・8) が出土する。

桃山時代から江戸時代のものは、調査区全域から出土し、内訳は江戸時代以降が大部分で桃山時代は1割にも満たない。このうち背割溝に沿って確認された土壙 113・114・117・131 のいずれからも江戸時代前期の遺物がまとまって出土する。特に土壙 113 からはミニチュア把手付き片口の施釉製品が、土壙 117 と 131 から土鈴が多量に出土している。さらに周辺から小刀の竹製鞘が出土し、その表面に「つち吉」と刻字されている。このような土製品がまとまって出土した例は、京都市内でも数少なく、刻字銘からこのような土製品を扱ったことが予想される。

小結 今回の調査結果により、左京六条四坊十一町の北辺部の宅地の変遷状況を平安時代から江戸時代まで4時期に大別される遺構群からたどることができた。その中で最も古い時期のものは、9世紀初めの六条坊門小路の南側溝が確認されたことから、この時期には条坊制による宅地区画が存在していたことが判明した。ただ十一町の北辺には顕著な遺構はなく、かわって鴨川に関連した流路の一部と考えられる砂礫層の流入が認められる。それが9世紀末に至って路面が整地され、その際に路面上での祭祀の痕跡を確認した。その中には複弁四葉蓮華文軒丸瓦や瓦類が共伴し、瓦葺の施設が存在していた可能性がある。一方宅地内は顕著な遺構がみられないが、流路の砂礫層を覆う整地層内にも平安前期の軒瓦の出土がみられ、瓦葺の施設の存在が予想される。河原院の創建について、文献史料からいつ頃造営されたかははっきりしていないが、『古今和歌集』

や『後撰和歌集』に納められている和歌などから、貞観年間頃には源融の河原院が一応の体裁を整えていたことがうかがえる。9世紀前半の遺構や9世紀中頃までさかのぼりうる瓦類などの遺物の出土は、このような文献記載と符合するもので、十一町の北辺に何らかの瓦葺の施設があったことを予想できる。ただこれが直ちに河原院に関連するものであるかどうかは、検討を要する。

10世紀後半の遺物が最下層から出土する池状遺構S X 132は底から肩にかけて川原石を敷き詰めていることから、園池に関連した施設の一部と考えられる。さらに遺構を確認した範囲の南端では松・桃の種子、葉・枝などの植物遺体が数多く認められたことから、この近辺にこのような樹木が繁茂していたと考えられ、園池に関連した施設とあわせると庭園としての景観がうかがえる。

このような遺構が存在した10世紀後半は、文献史料からみた河原院では源融の曾孫で内匠頭適の子安法法師がここに居住した時期に相当する。そして河原院には天禄年中(970～972)すでに寺院があったことが知られ、また文人交遊の場所として脚光を浴びる時期でもあった。しかし天元二年(979)の暴風災害により河原院は壊滅的な打撃を受けたといわれる。さらに『続古事談』巻四にみる仏師康尚が造立した丈六の釈迦仏が河原院に安置され、正暦二年(991)三月十八日仁康上人により五時講の供養も行われていたが、長保二年(1000)水害を恐れて釈迦仏を祇陀林寺に移している。その後安元の大火による記載まで河原院を含めた当地一帯の記録は文献史料にはみられない。池状遺構S X 132の南側で確認した11世紀前後の鴨川の氾濫と考えられる砂礫層の存在は、上述した文献記載を裏付けるもので、その後湿地化した状況も遺構が放置され荒れ果てていったことを示すものと考えられる。このような検出した遺構の変遷は、文献史料にみる河原院の推移と一致する点が多々みられることから、当調査地が河原院の一郭であった可能性は高く、9世紀までさかのぼりうると推測される。すなわち9世紀段階まで河原院の範囲が六条坊門小路まで含まれていたことになり、『拾芥抄』東京図にみる河原院が十三町だけに占地したとは考えがたい。そうすると河原院の園池は当地までおよんでいたことになり、東三条殿のような寝殿造の園池とは異なる配置であったと考えられる。

以上のような変遷をたどった河原院に関連した遺構群は洪水を受けた後、整地され町屋に関連した遺構があらわれることから都市化していったと考えられる。しかしながらそれも室町時代前期には衰退し、遺構群は消滅する。朝日神明宮の「幸神の森」が存在した時期には、調査範囲内には顕著な遺構は存在していなかったとみられ、文献記載の森であったと考えられる。

そして桃山時代には町屋に関連する遺構が出現し、その中に多量の土鈴、小壺、ミニチュアの把手付き片口などを廃棄した土壙群の存在から、このような土製品を扱った店屋の存在が予想される。

(堀内明博)

7 平安京左京七条二坊・本圀寺跡 (図版1・9)

経過 調査地点は、平安京左京七条二坊八町および六条大路ならびに本圀寺に位置する。当地における本願寺聞法総合施設建設計画に伴い試掘調査を行ったところ、平安時代から室町時代にかけて各時代の遺構が良好に遺存していることを確認したため、発掘調査を実施する運びとなった。建設予定地の北端には六条大路の南半が東西方向に延長し、その南に八町が展開する。また本圀寺は南が七条大路、北が六条坊門小路、東が堀川小路、西が大宮大路にいたる計

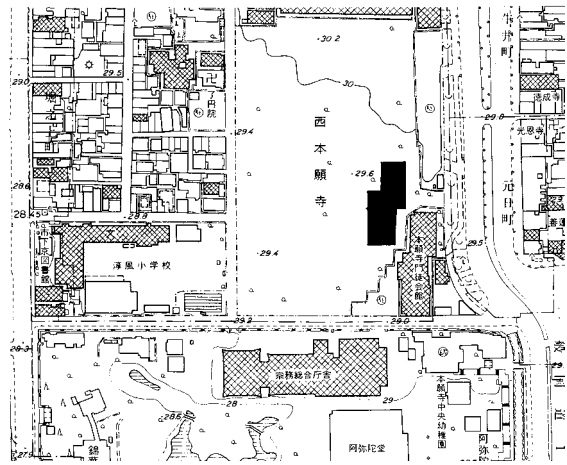


図 12 調査位置図 (1 : 5,000)

12 町の広大な寺域を占めていたとされる。調査地点は寺域のほぼ中央に位置することから、中心的な建物の検出など本圀寺に関する資料が得られるものと想定された。

遺構 遺構の遺存状況の良好であった南西部では、近現代の攪乱および盛土層を除くとすぐに室町時代の遺構面に達する。ここから以下、室町時代の整地層3層と平安時代の包含層があり、現地表面から約1.2mで黄褐色砂泥層の地山に達する。ただし、調査区の大部分は現地表下2.0～2.5mまで現代の攪乱により削平されており、これらの部分では井戸や堀以外の遺構を検出することはできなかった。

江戸時代の遺構には土壇、井戸、堀状遺構がある。土壇134は南北方向の堀状遺構である。検出面での規模は幅約3.0m、深さ約1.2mで北方は調査区外へ延長するが、南端は調査区内で検出した。土壇79も東西方向の堀の可能性がある。

室町時代の遺構には、堀、土壇、溝、柱穴、井戸がある。溝1(堀)は南北約34mにわたって検出した。それぞれ調査区外に延長し、検出面での規模は幅約6m、深さ約2.0m、断面形は台形を呈する。出土遺物より16世紀中頃には一旦埋没するものの、最上層には江戸時代後半の遺物も含まれることから、規模を縮小しながらも長期にわたって機能し続けたものと推定できる。埋土の観察から水流の痕跡は底部にしか認められず、いわゆる空堀であったようである。また、堀の底部では橋脚とみられる柱穴も検出した。土壇91は調査区北西部で検出した石組みを伴う遺構で、北・西それぞれ調査区外に延長するため、規模は不明である。底部では川原石10数個を検出したが、遺構の性格は不明である。出土遺物から15世紀末頃のものと考えられる。

鎌倉時代後期から室町時代初頭にかけての遺構には、土壇、柱穴、溝がある。土壇216は東西約1.7m、南北0.7m、深さ0.3mの方形の土壇で多量の土器が出土した。底部には杭跡があり、鉄釘も多数出土していることから、木枠を伴ったと推定できる。遺物は整理箱に13箱出土し、その大半は土師器皿である。土師器皿は完形品が多く、4～5枚が重なった状態のものもあり、大部分は完形品が放棄されたと考えられるが、その出土状態に特に規則性は認められない。

土師器皿のほかには須恵器、瓦器、陶器、輸入青白磁、瓦類、鉄釘が出土した。このうち須恵器鉢、瓦器鍋はほぼ完形に復原できるものがあり、瓦器椀、青磁双魚文貼付け鉢はそれぞれほぼ完形の状態で出土している。これらの出土遺物から13世紀末頃のものと考えられる。

平安時代末期から鎌倉時代前期の遺構には、土壇、溝、井戸、柱穴がある。溝227は東西方向の溝で一町内の2・3門境界に位置する。検出面での幅約0.4m、深さ0.3mで断面形はV字を呈する。井戸は13基検出した。素掘りと木枠を用いたものがある。柱穴も多数検出したが、建物の復原にはいたらない。

このほか平安時代中期の井戸・土壇、前期の土壇も検出した。土壇171は、9世紀前半に属する土壇で、検出面での規模は東西約1.8m、南北約1.0m、深さ約0.1mだが、後世の削平を受け底部のみが遺存していた。埋土からは土師器など比較的多くの遺物が出土している。

遺物 遺物は整理箱にして317箱出土した。溝1（堀）と江戸時代の大型遺構出土の瓦類が約半数をしめる。瓦類には軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、甕、鬼瓦などがあり、明らかに本圀寺所用の瓦である「本国寺」「大光山」「大光山本国寺」「大光山本圀寺」銘の瓦も多数出土した。このほか室町時代以降の瓦類の多くも本圀寺に関係する瓦であろう。また江戸時代の堀状遺構から、金箔軒丸瓦の破片が1点出土した。平安時代の瓦類も井戸などから少量出土している。

土器類は土壇、溝、柱穴などから比較的まとまって出土している。なかでも井戸や土壇216の遺物は、一括遺物として良好な資料である。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器などがある。輸入陶磁器には青磁、白磁のほか、青白磁の合子、

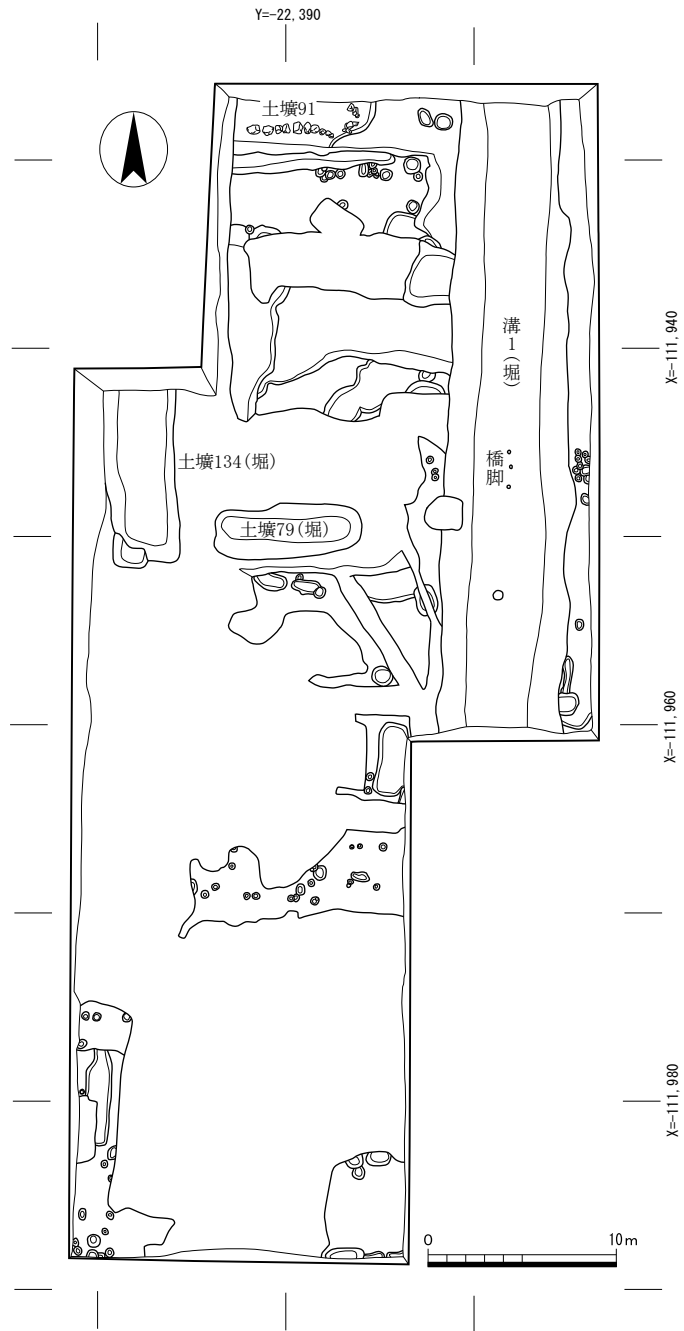


図13 江戸・室町時代遺構平面図(1:400)

大型遺構出土の瓦類が約半数をしめる。瓦類には軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、甕、鬼瓦などがあり、明らかに本圀寺所用の瓦である「本国寺」「大光山」「大光山本国寺」「大光山本圀寺」銘の瓦も多数出土した。このほか室町時代以降の瓦類の多くも本圀寺に関係する瓦であろう。また江戸時代の堀状遺構から、金箔軒丸瓦の破片が1点出土した。平安時代の瓦類も井戸などから少量出土している。

土器類は土壇、溝、柱穴などから比較的まとまって出土している。なかでも井戸や土壇216の遺物は、一括遺物として良好な資料である。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器などがある。輸入陶磁器には青磁、白磁のほか、青白磁の合子、

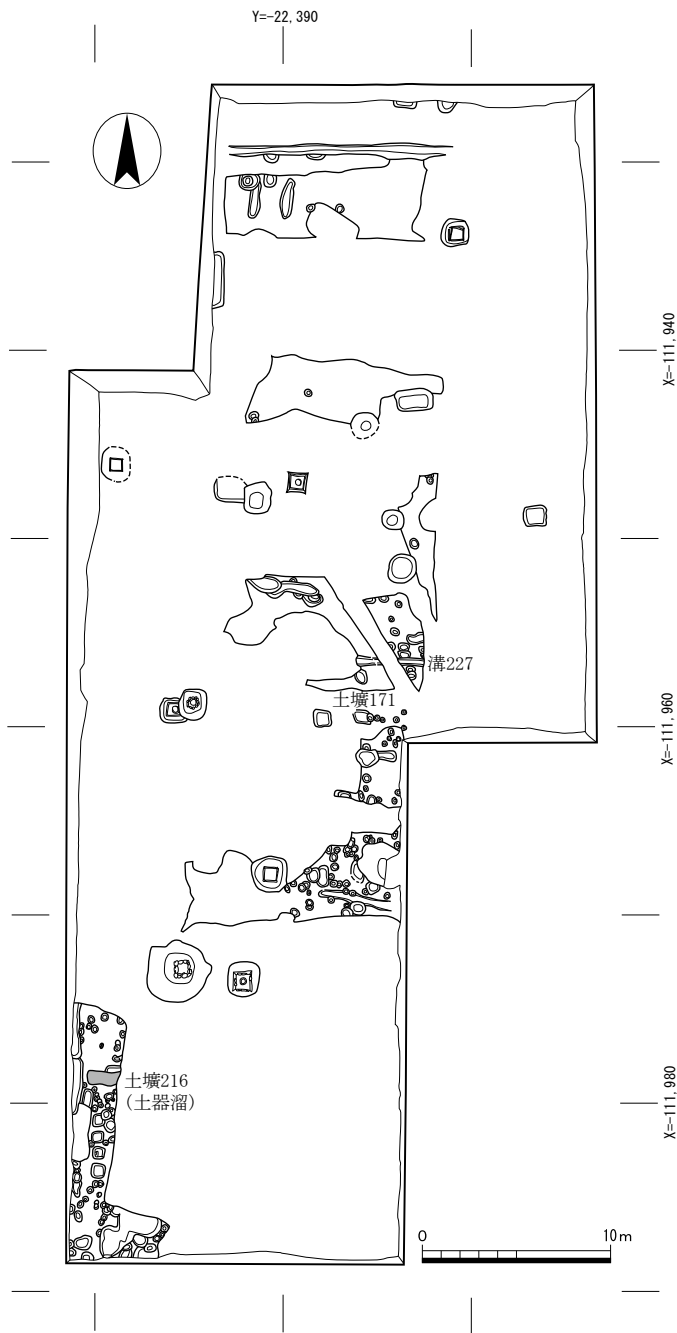


図14 平安・鎌倉時代遺構平面図 (1:400)

褐釉陶器の四耳壺、褐釉緑彩陶器の盤などもある。

このほか石製品では砥石、滑石鍋片など、金属製品では鉄釘、銭貨（寛永通寶、乾元通寶など）、土製品では土馬も出土した。

また、井戸枠をはじめ木製品も出土している。井戸枠以外には箸、楔、漆器椀、曲物、桶、木彫人形、経文断簡などがある。経文断簡は江戸時代の堀状遺構から出土したもので幅約3.5cm、長さ35～37cmの薄板に「南妙法蓮華経」の墨書がある。筆跡から数枚を一組みとして用いたと考えられる。

小結 本圀寺は、創建時の貞和元年（1345）、12町におよぶ広大な寺域を有していた。天文五年（1536）法華の乱に破れ一時は逃れるが、細川晴元により再建された。本願寺建立の際に寺地の南2町を減じられたものの、豊臣秀吉らの援助により再び繁栄した。その後天明の大火（1788）によりほぼ全焼する。現在山科に移転している本圀寺（1971年移転）の建物は、大火後に再建されたものである。

今回の調査で検出した室町時代および江戸時代の遺構は、本圀寺に關係するものである。

溝1（堀）は寺域の東限に位置し、法華の乱の際に一旦は埋没したものと推定できる。調査地点に北接する現東急ホテル建設に伴う調査でも、法華の乱前後の遺物を多量に含む堀を検出しているが、これらはほぼ同時期に機能していたものだろう。

平安時代から鎌倉時代の遺構も多数検出した。調査地点は平安京左京七条二坊八町の南西部に該当し、右大将貞保の邸宅があったことで知られ、さらに東市外町が南接する。今回検出した多くの井戸や柱穴などは、当該地に平安京造営以降営まれ続けた生活の痕跡であるといえる。

(近藤知子)

8 平安京左京八条三坊1 (図版1・10～12)

経過 京都駅周辺では、京都駅ビルの新築に伴って平成5年(1993)以来、数次の埋蔵文化財調査が実施されている。今回の調査は京都駅前立体駐車場建設工事に伴うものである。平成5年(1993)に行われた試掘調査の結果、遺構の残存状況が良好と認められたため発掘調査を実施した。

調査地は、平安京左京八条三坊三町の北東部および鎌倉時代の八条院町の西側に位置する。左京八条三坊内では、これまでに20件の発掘調査および試掘・立会調査76件を実施しており、平安時代から室町時代後期までの遺構・遺物を多数検出している。

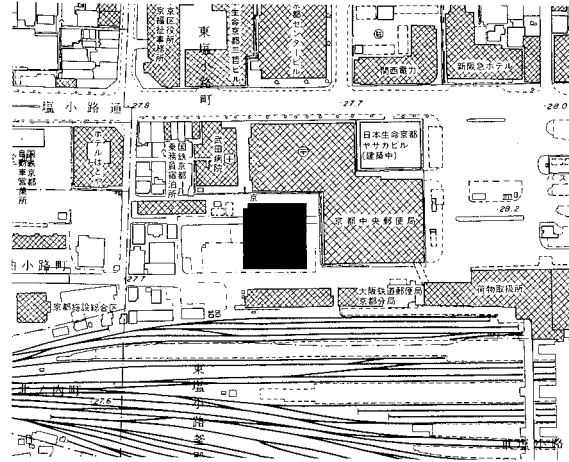


図15 調査位置図 (1:5,000)

調査区は一辺約40mで方形に設定した。現地表下約1.5mまで重機掘削を行ったのち第1面の遺構検出にとりかかった。

遺構 調査地の堆積状況は、盛土が厚さ1.5～1.7mなされ、直下は厚さ5～35cmの明治時代に京都駅が建設される以前の耕作土層が全面にみられ、北東部は厚く、南部および西部は薄くなっている。北東部は、耕作土層が2層みられ双方ともに暗渠排水溝がそれぞれの土層に掘り込まれていることから、おそらく北東部以外のところでは耕作土が大規模に削り取られたものと考えられる。

耕作土層直下が厚さ10～20cmの灰黄褐色砂泥層あるいは褐灰色砂泥層からなる第1・2面である。標高25.9～26.0mを測りわずかに南下がりの傾向がある。続いて厚さ10～15cmの黄褐色泥砂層あるいはにぶい黄褐色泥砂層を主とした第3面となる。第3面もわずかに南下がりの傾向を持つ。なお第3面は下層の流路などの影響もあり砂礫層がすでに露出している部分もある。以下は砂礫層となり、数条の平安時代以前の旧流路が確認できた。

第1面(桃山時代から江戸時代) ほぼ真南北方向に走る81条、東西方向に走る11条の小溝群を検出した。小溝は幅30～40cm、深さ5～35cmで南部ほど遺存状況が良くない。その成立する耕作土層の違いおよび密集する部分や切り合いがみられることから時期差が考えられる。このほか、北東から南西の傾きを持つ杭穴列を4条検出した。明治時代のレンガ建築における地盤を安定させる基礎工事であろう。

第2面(室町時代) 第2面は第1面と同一遺構面である。井戸、土壇、溝、柱穴など多くの遺構を検出した。中でも南北溝895は、区画の施設と考えられる。幅1.0～1.5m、深さ1.2m前後の溝で調査区を縦断する。これに南西側に平行する同様の規模の南北溝1199が直角に折れ曲がり、溝895に取付く。また地業状の施設と考えられる石敷遺構1170は西側が溝895に接する。

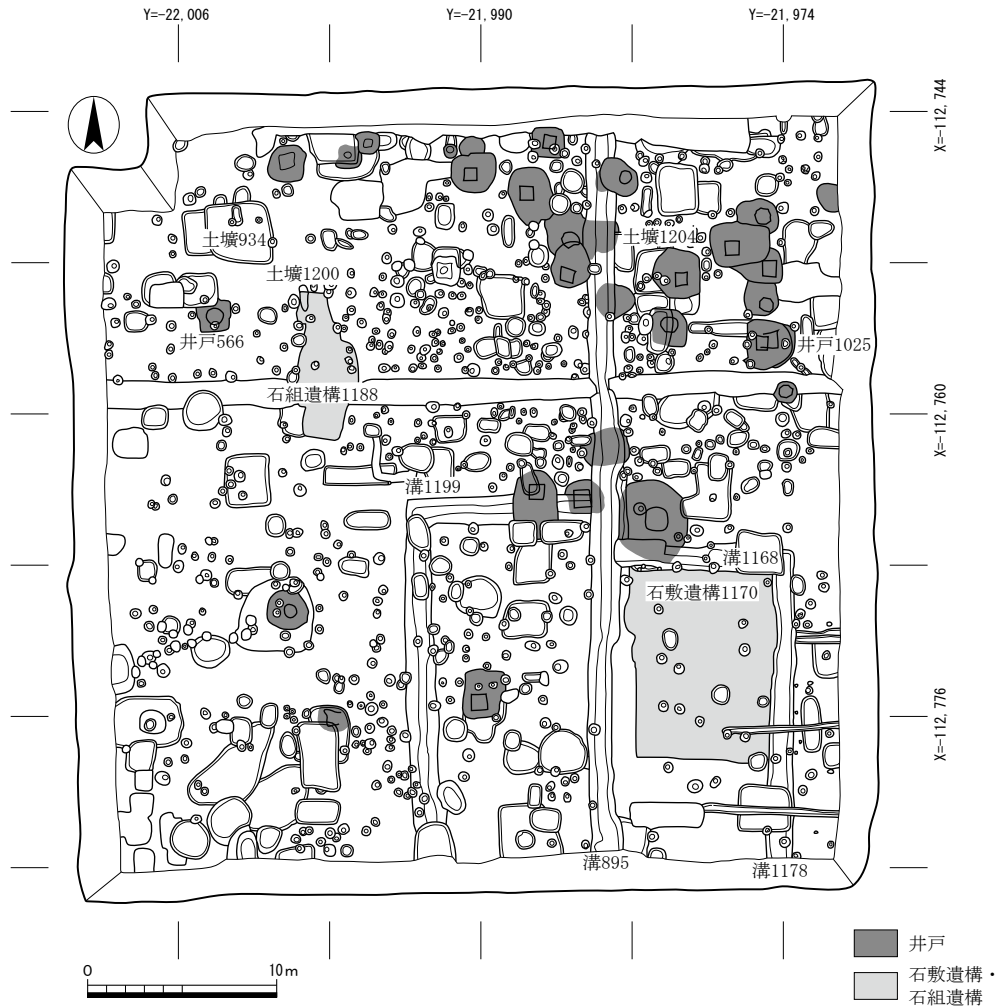


図 16 第 2 面遺構平面図 (1:400)

南北約 9.5 m、東西約 7.5 m の規模を持つ 5 ～ 10 cm 大前後の礫を多く含む遺構である。北側は東西溝 1168、東側は南北の浅い溝 1178 と三方を溝によって区切られる。

土壇 1204 は、南北約 1.95 m、東西約 1.0 m、深さ約 0.6 m を測り長方形をなす。約 0.3 m 掘り下げた時点で長方形の木枠を約 1.42 × 0.77 m、高さ約 0.2 m の規模で検出した。土師器皿を一気に多量に投棄した状況および土層中から植物の種などの食物残滓が出土していることから、最終的にゴミ溜に転用したもので、元来は厨房施設の一つではなかったかと推定している。

井戸は 30 基あまりを検出した。すべて木枠を持つ井戸である。井戸枠の形態は、方形縦板組みのものが多数を占めるが、そのほか幅 30 ～ 40 cm の長方形の板材を使用した八角形ないしは九角形に組み上げたもの、桶を井筒にしたものなどがある。井戸枠の遺存状況は良好なものは少ない。鋳型・埴塼片、焼土などが多量に投棄された井戸 566、多量の土師器皿が投棄された井戸 1025 などがある。また井戸は調査区の北東部に集中する傾向がある。

このほか、石組遺構 1188 や墓跡とみられる土壇 934・土壇 1200 がある。

第 3 面 (平安時代から鎌倉時代) 金属加工・生産跡に関する遺構・遺物を検出した。

土壇 1462 は、直径約 0.7 m の円形で、深さ約 1.15 m を測る。埋土には焼土、炭などが多量に



図17 第3面遺構平面図(1:400)

含まれる。埋土の上層から多くの鋳型、埴埴、銅滓などが出土した。中でも注目されるのは、銭の鋳型である。左京八条三坊では、銭の鋳型は、当研究所が実施した1978年の七町での発掘調査（現新阪急ホテル）で出土しており、今回で2例目となる。

南北溝1628は、長さ約11.5m、幅0.8～1.1m、深さ約0.3mで検出した。溝全体にわたって土師器皿が多量に出土した。出土状況は、完形品が折り重なって出土したものではなく、細片がぎっしりと詰まっている状況であった。なお溝1628は三町を東西に二分する線のやや西側にある。

第3面でも20数基の井戸を検出した。方形縦板組みの井戸が主流であり、かつ底部に曲物を据えるものが多い。遺存状況は良好なものは少なく、底部の曲物のみ残るものも数基みられた。分布状況は、第2面と比べると、あまり偏りがなく分布している。

第2・3面を通じて、調査区の北半部および東半部を主として1000基を越す多数の柱穴を検出した。中には礎石を持つもの、柱根の残存するものもあるが、現時点では建物を復原するまでにいたっていない。

遺物 各面・各遺構から整理箱にして535箱の遺物が出土した。

第1面で出土した遺物は、土師器、陶器類、磁器類などがある。ほとんどが小溝・耕作土層か

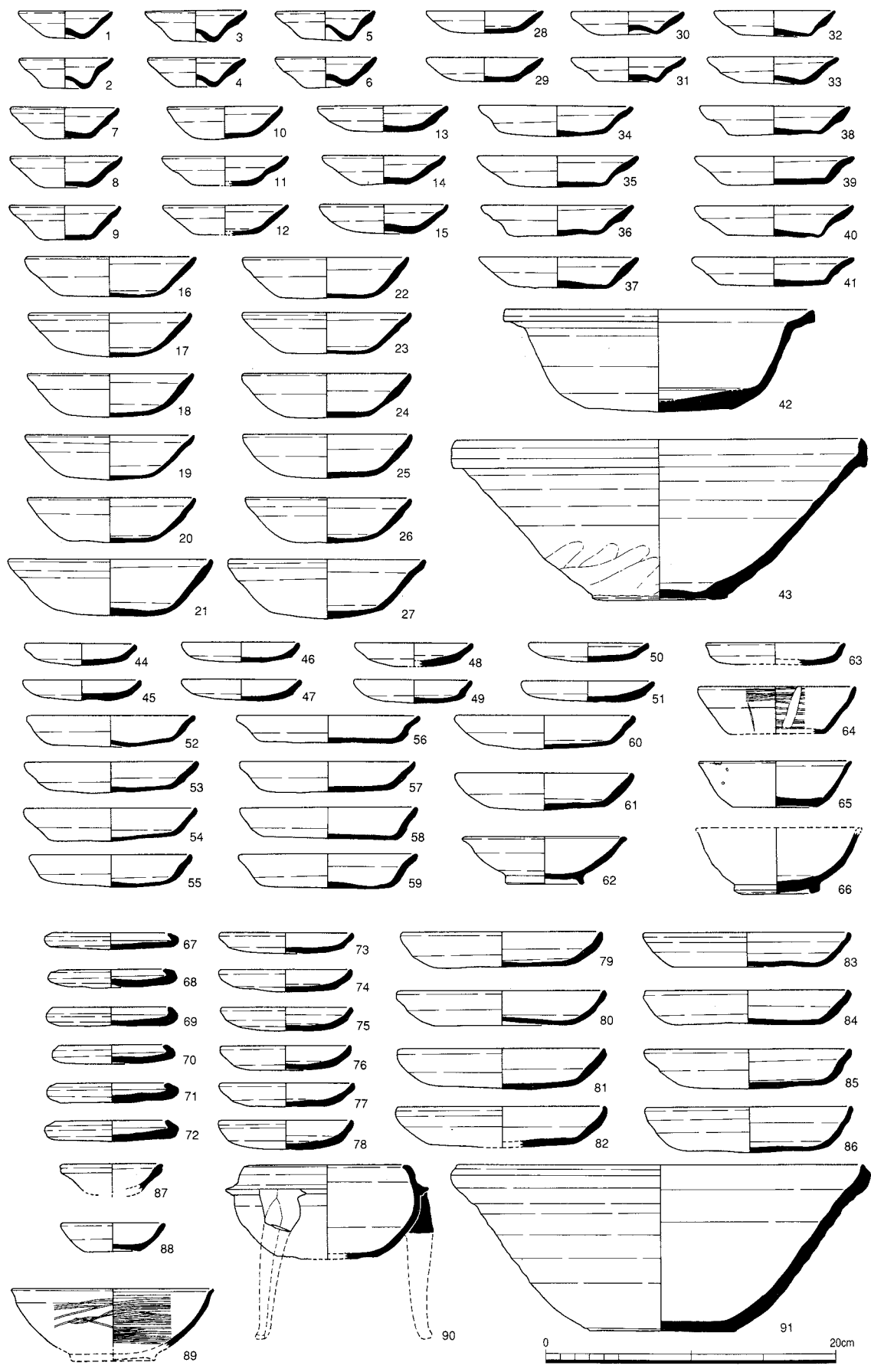


图 18 出土土器実測図 (土壙 1204 : 1 ~ 43 井戸 1025 : 44 ~ 66 溝 1628 : 67 ~ 91) (1 : 4)

ら出土している。出土量も少なく、小破片が大部分である。

第2面で出土した遺物は、量的には最も多く、良好な状態で遺存していたものも多い。また、遺構の年代を推定できる一括資料をいくつか得た。土壌1204出土土器(図18-1~43)はその一例である。この遺構は土師器皿が多量に出土したいわゆる土器溜であるが、これらの土師器皿は時期差がほとんどみられず、ごく短期間に投棄されたものであると考えられる。出土総破片数は4,770点あり、土師器、瓦器、陶器Ⅰ類(43)、陶器Ⅱ類、施釉陶器Ⅱ類(42)、輸入陶磁器類などが出土した。このうち土師器の皿が4,497点で約94.3%を占める。土師器の皿は赤色系(28~41)と白色系(1~27)の2系統があり、両者に大小の器形がある。出土量は赤色系の土師器皿がやや多い。標準的な法量は、赤色系の大皿が口径11cm前後、器高2cm強。小皿は口径8cm前後、器高1.5cm強。白色系の大皿は口径11.5~12cm、器高3.0cm前後。小皿は2種類あり口径8cm前後、器高2cm強と口径9cm、器高2cm前後。へそ皿は口径7cm前後、高さ2cm前後である。年代は14世紀中頃から後半代にかけてと思われる。

井戸1025は、井筒内から130点を超す完形の土師器の皿が出土した(図18-44~66)。出土総破片数は掘形内をあわせて2,962点で、全体の83%以上の土師器(44~62)のほか瓦器(63・64)、陶器Ⅰ・Ⅱ類、輸入陶磁器類(白磁65・66)などがある。ここでは井筒内から出土した土師器皿にふれる。井筒内出土総破片数1,327点のうち95.4%を土師器の皿が占める。皿は数片の白色系の土師器がみられるものの、ほぼ一系統の大小で、法量は大皿が口径11.5~12.5cm弱、器高2.0~2.5cmの間にある。小皿は口径8.0~8.5cm強、器高は1.5cm前後にある。年代は13世紀後半代と思われる。これらの土師器皿は井筒の底より30cmも高いところに集中していることから、土砂が堆積し使用できなくなった井戸に投棄したものであろう。なお65の白磁の皿は井筒の底から出土した。

第3面でもいくつかの良好な資料を得た。溝1628出土土器(図18-67~91)は、土師器(67~86)、瓦器(88・89)、陶器Ⅰ類(91)、陶器Ⅱ類、施釉陶器Ⅰ類(87)、輸入陶磁器類などがある。出土総破片数は31,462点あり、土師器の皿が99.15%を占める。皿は大小と受皿の3種がある。法量は大皿が口径14.0~14.5cm弱、器高が2.5~3.0cm弱である。小皿は口径9.5cm前後、器高は1.5cm前後である。受皿は口径9.0~9.5cm、器高1.0~1.5cm弱である。また、若干量の白色系陶器もみられる。年代は12世紀末頃と推定している。

第3面では鑄造関係の遺物が注目される。埴塙片とともに鑄型片が多量に出土しており、鏡・銭・刀装具・仏像などの鑄型を確認した。

この中では鏡の鑄型が最も多い。小破片に砕けていたため全容がわかる個体はないが、大部分は直径9cm程度の大きさの鏡を鑄造していたと推定できる。粗土の上に約3mmの厚さで真土を重ね、内区には菊・松・飛禽・亀甲などの文様を描き出している。

銭の鑄型(図19・20)は先述の土壌1462から出土した。銭面の中央に幹線の湯道が通り、両側に銭部とそれらを繋ぐ枝の湯道が配してある。(92)は湯口にあたる。鏡の鑄型と同様、全容はわからないが、最も大きい破片で一つの銭面に14枚以上の銭部が確認でき

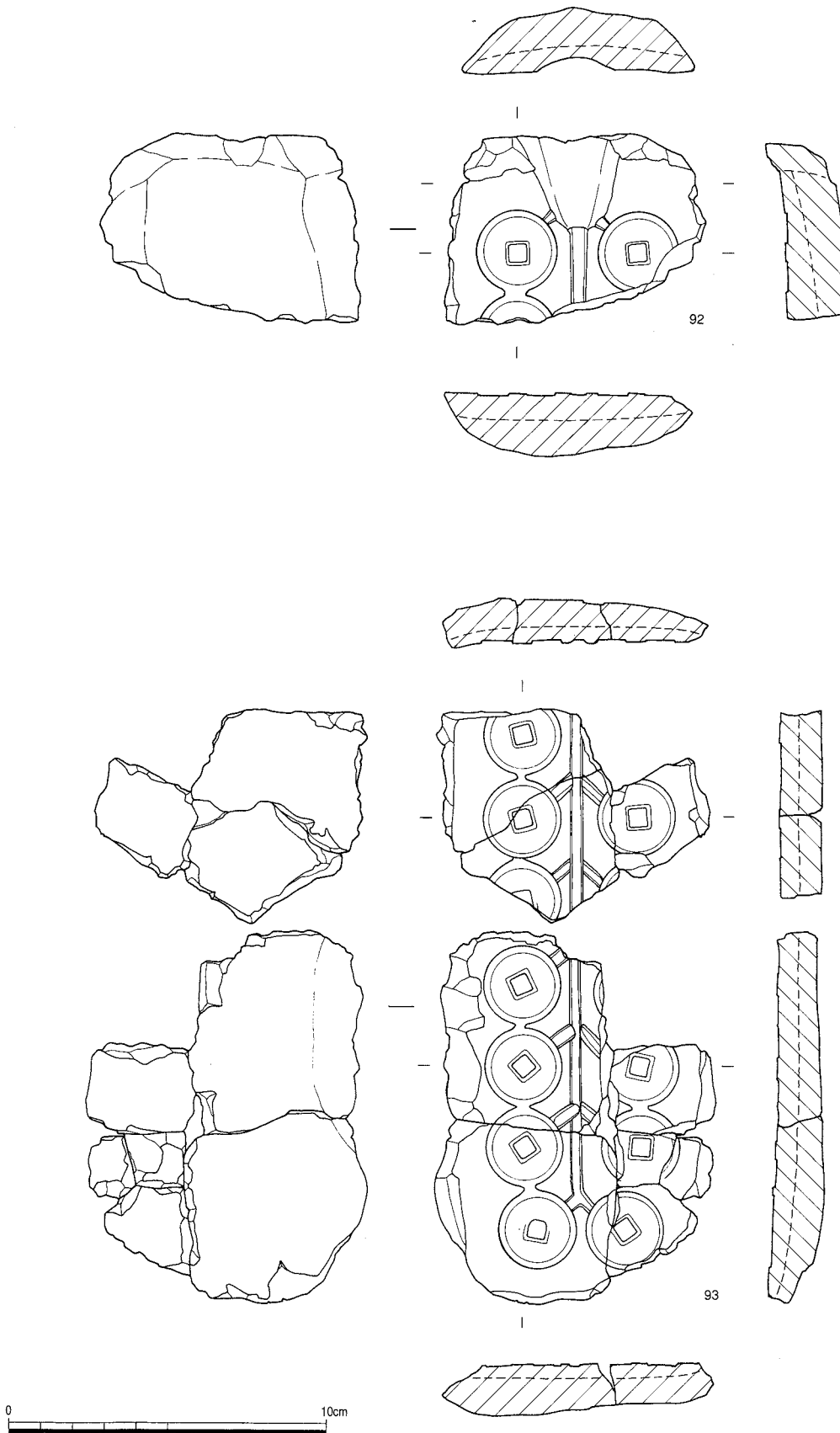


图 19 土壙 1462 出土錢鑄型實測圖 1

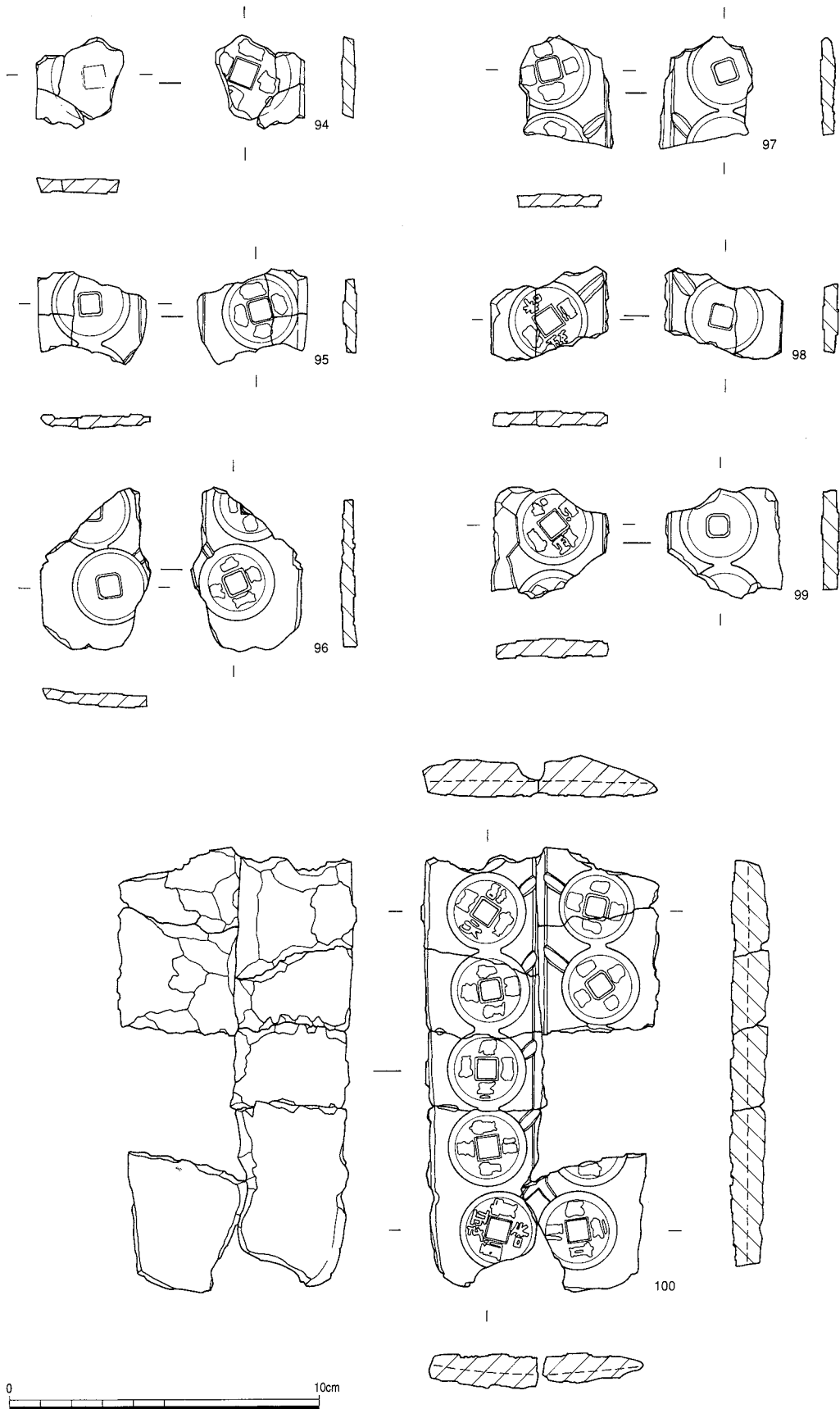


图20 土壤1462出土錢鑄型実測图2

る。鋳型には銭面が片面にしかないもの（92・93・100）と、両面にあるもの（94～99）がある。前者は厚さ約2cmで、粗土の上に約3～6mmの厚さで真土を重ねる。一方、後者は厚さ約0.5cmで真土のみで造られている。鋳造にあたっては後者を前者の間に挟んで使用したと考えられ、1回あたりの鋳造枚数を増やすための工夫と評価できる。銭銘の多くは摩耗しており、判読できた銭銘には「政和通寶」（北宋・1111年初鋳）や「紹聖元寶」（北宋・1094年初鋳）がある。なお、土壙1462からは厚さ約1.5～3.0cmの板状の土製品が出土している。銭の鋳造に関連する遺物と推定しているが、現在のところ使用法を明らかにできていない。

ほかの刀装具・仏像などの鋳型はごく少数が散発的に出土したにとどまる。

小結 今回の調査では、平安京の条坊に関連する遺構は明確にできなかったものの、平安時代後期から室町時代にいたる当該地の変遷を知ることができた。

第2面における遺構の分布状況は北部・東部は密度が濃くしかも多様であるが、南西部は密度が薄くなっている。また町尻小路に平行した南北溝895・1199などは、町屋と空地とを区切る溝であると推定でき、八条坊門小路寄りを除いてこの溝を境に遺構の粗密が分かれる。南北溝895が縦断するその東側の町屋内では、三方の溝による排水を重視した蔵の地業とも考えられる石敷遺構1170や、北東部の近接した場所で繰り返し掘り直される井戸。その近くで検出した厨房に関係するとみられる遺構（土壙1204）、礎石の建物が多いことなどは町尻小路沿い地区の繁栄した一端を示すものだろう。

これまでの左京八条三坊内の発掘調査では、多くの調査で生産跡に関連する遺構・遺物を検出しており、「七条町」や「八条院町」の解明に資料を提供している。今回の調査でも、鋳造関係遺構（土壙1462）の検出をはじめ、そのほかの遺構および遺物包含層からも鋳型、坩堝、鞆羽口などが多量に出土している。これらにより八条院町推定地のみならず、今回の調査地のような文献に記されていない地域にも工房が広がっていたことが明らかになった。

（鈴木廣司・山本雅和）



図21 土壙1204（北から）

9 平安京左京八坊三坊2 (図版1・13～21)

経過 調査地は、平安京左京八条三坊六町・十一町・十四町に相当する。ここは中世に八条院町と称される地域である。昨年度に実施した1次調査に引き続き、2次から8次調査の総計4,000㎡を超える広い範囲で発掘調査を実施した。2・3・5～8次調査は六町・十一町地域の調査で、室町小路の路面とともに平安時代から鎌倉・

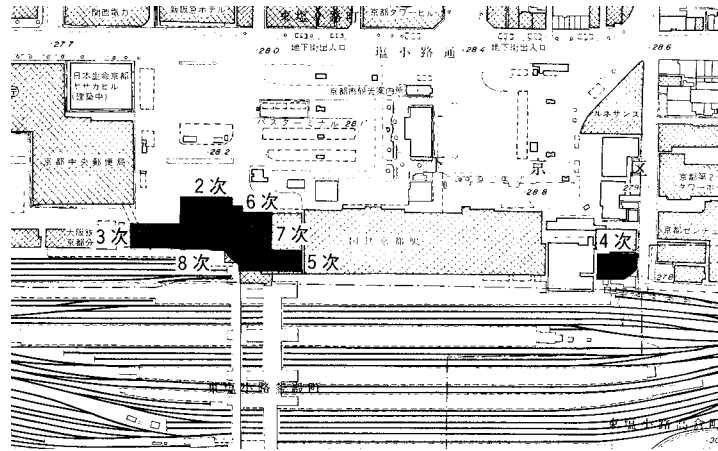


図22 調査位置図 (1 : 5,000)

室町時代の遺構を良好に検出することができた。また、4次調査は東洞院大路に面した十四町地域で、やはり鎌倉・室町時代の遺構が検出できた。発掘調査の間には建設工事に並行した立会調査を実施しており、断面観察ではあるが十一町と十四町の間で遺物包含層の広がりを確認している。

遺構 以下では調査成果の主体を占める中世の遺構の概説を中心に行う。記述は最初に六町・十一町地域での遺構の概説を順次行い (図23・24)、次に4次調査区の十四町の遺構についてふれる (図26)。なお、平安時代の遺構については最後にまとめて述べ、六町・十一町については平安時代の遺構図と鎌倉時代末から室町時代初頭の遺構図を全体的に対比させた (図27)。

<室町小路> 5次調査と7次調査で、小礫によって舗装された室町小路を確認した。室町小路の成立期に関しては12世紀後半、八条院御所が造営される頃南北に流れる流路を埋め立てて造られている。当初は西半分だけを埋め立て幅約2.0mの路面とし、中央部を幅約3.0mの流路として利用していたが、13世紀には流路を埋め立てて路面全体を再舗装している。流路の東側は路面として機能していたかどうか明らかでない。13世紀後半から14世紀初頭の遺構面では室町小路西側溝は『延喜式』京程とほぼ同じ位置で検出でき、側溝の下層から溝底を円形に窪めた遺構を確認した。それらはいずれも底に方形の板が敷かれており、厠もしくは汚物溜の可能性はある。東側溝に関しては、幅約1mの南北溝を4条検出している。前述したように小路中央部は当初流路として機能しており、この流路の東側に掘られた側溝が路面の拡張の度に東へ付け替えられている。最も東で検出した東側溝では西側溝と類似した方形板材を数地点で検出している。なお、最終的にはこれらの側溝も埋められ、14世紀前半では小礫石を伴う建物の柱穴を室町小路に面して検出でき、側溝は建物の雨落と想定できる幅0.5mほどの浅い溝を礫石列の東で確認したにとどまる。

<室町小路沿いの建物群> 室町小路に沿って、多くの建物柱穴が検出できた。傾向として、14世紀前半の建物には小礫石が原位置を保っているのが多いのに対し、13世紀の建物は小礫石

を持たず掘立柱建物であった可能性が高い。14世紀前半の建物は六町域での小礎石の並びから、ある程度の復原は可能である。まず、室町小路に面した小礎石列は一直線に並んでおり、各建物が小路に面して出入りなく建てられていたことが判る。間口は3～5m間隔で東西礎石列が確認でき、狭いところでは礎石間が2.0mに満たない。奥行きについては12m程までは礎石が並ぶ地点もあるが、すべての礎石が並ぶわけではなく、裏手に関してはかなり建物の出入りがあったことが判る。全体としては奥行き9～10m程の建物の並びが想定できる。また、5次調査区西端では、隅丸方形の竪穴の壁沿いにピットが並ぶ遺構（SX300）を検出しており、倉庫として利用された簡易な建物と考えている。なお、各建物が独立して建てられていたかどうかは明らかでないが、南北の柱筋が通っている部分が多い。建物内では、六町で粘土塊で造られた小さな炉を数地点で検出している。また、十一町では室町小路の想定東築地ラインから約6mの地点で、銅鑿鑄型と炉壁で構成され、中に炭が充満した炉床（SX794）を検出しており（図25上段）、水銀も採取している。

<室町小路側の井戸・土壌> 想定築地ラインから10～15m程の地点で、南北に数多くの井戸を検出している。構造は方形縦板組みか円形縦板組みがほとんどである。また、井戸群のさらに裏手では不定形な廃棄土壌が、やはり南北に並んでいる。なお、この土壌群の中には、拳大の石や粘土とともに多量の鑄型片（鏡・懸仏・仏具など）や炉壁片が充満した鑄造関係の土壌があり（SK450・744・757）、炉床の可能性もある。また、室町小路に面した方形縦板組井戸（SE762）の一つから南北朝時代前後の特徴を持つ和鏡の鑄型が出土しており、このほか方形縦板組井戸（SE758）や円形縦板組井戸（SE650）からも鏡や仏具関係の鑄型が多量に出土している。鑄造関係の遺物が多く出土した廃棄土壌（SK540・1486）もあり、5次・7次調査区全

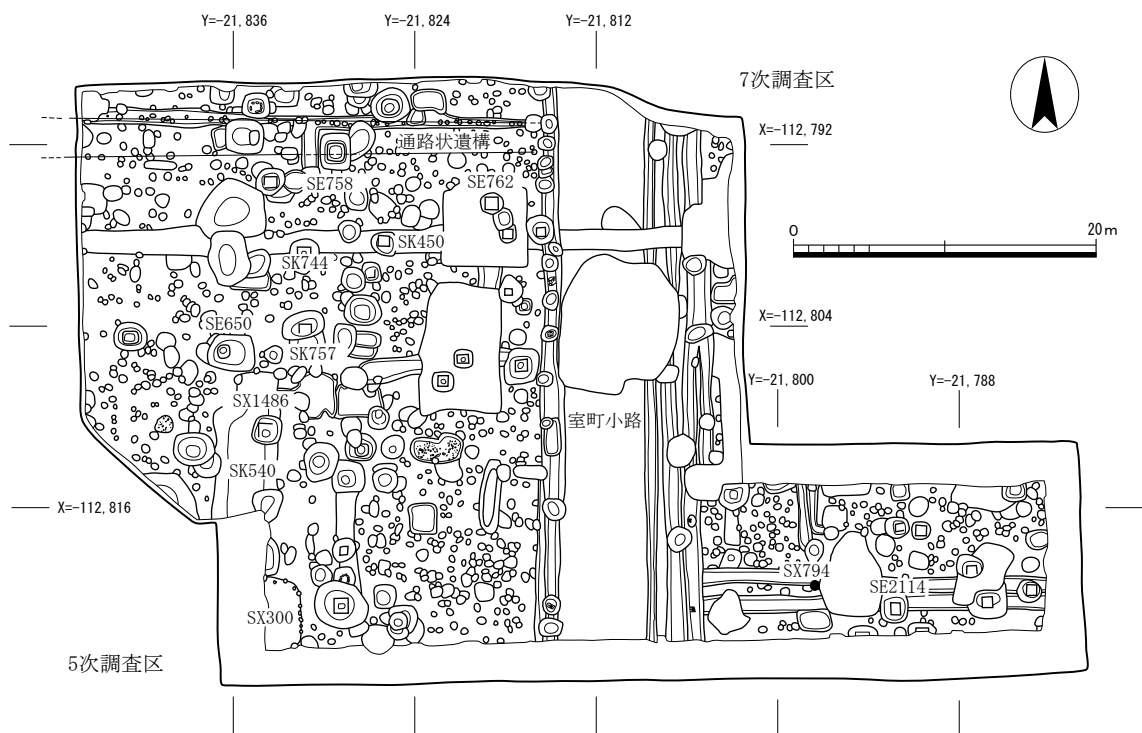


図23 5・7次調査区遺構平面図(1:500)

域から多量の鋳型・埴塙・鞆羽口・炉壁片が出土していることから、六町・十一町で14世紀前半に銅細工の盛んに行われたことが想定できる。

〈六町中央部の遺構〉 7次調査区の六町南北中心ラインに相当する地点で、室町小路から六町中央部に入る通路状遺構を検出している。通路には細かい礫で舗装されており、室町小路からこの通路に入る部分でも雨落ち状の溝が途切れ、入念な舗装が施されていた。この通路に伴うと想定できる柵列が、8次調査区で小路想定ラインから約30mの地点で南へ折れ曲がり、小路側建物の敷地と中央部を区画している。この柵列の西でも建物柱穴や井戸・廃棄土壌などを検出しており、建物の北側で検出した土壌（SK202）と溝状遺構（SD230）から埴塙・鞆羽口・炉壁片とともに鏡や仏具関係の多量の鋳型が出土している。また、SD230の北東では瓦質羽釜と鍋がセットで据えられ多量の土師器・白土器が廃棄された土壌（SK214）を検出している（図25下段）。3次調査区では遺構密度が低く鋳造関係遺物もほとんど出土していないが、小礎石がまとまって検出できる地点があり建物の存在を示唆している。この下層には肥溜め状の堆積を示す土壌（SK201・260）が東西に並んでおり中央部の土地利用を考える上で注目できる。これら中央部の遺構は、室町小路側の遺構群と同じく13世紀末から14世紀前半にかけてものが主流である。なお、2次調査区でも通路状遺構の北側で、小礎石がまとまっており同時期の建物が想定できるが、下層では2条の南北柵列で区画された中に南北を長軸とし北辺と南辺中央に柱穴を持つ方形竪穴遺構を4棟検出している。最大のものが南北2.5m×東西1.5mで、床面直上から菊花文や亀甲繫ぎ文などの鏡鋳型やフイゴ羽口・埴塙片などが出土した（SX332）。この遺構は共伴した土器から13世紀前半のものと想定でき、この地域での銅細工の初源が知れる。

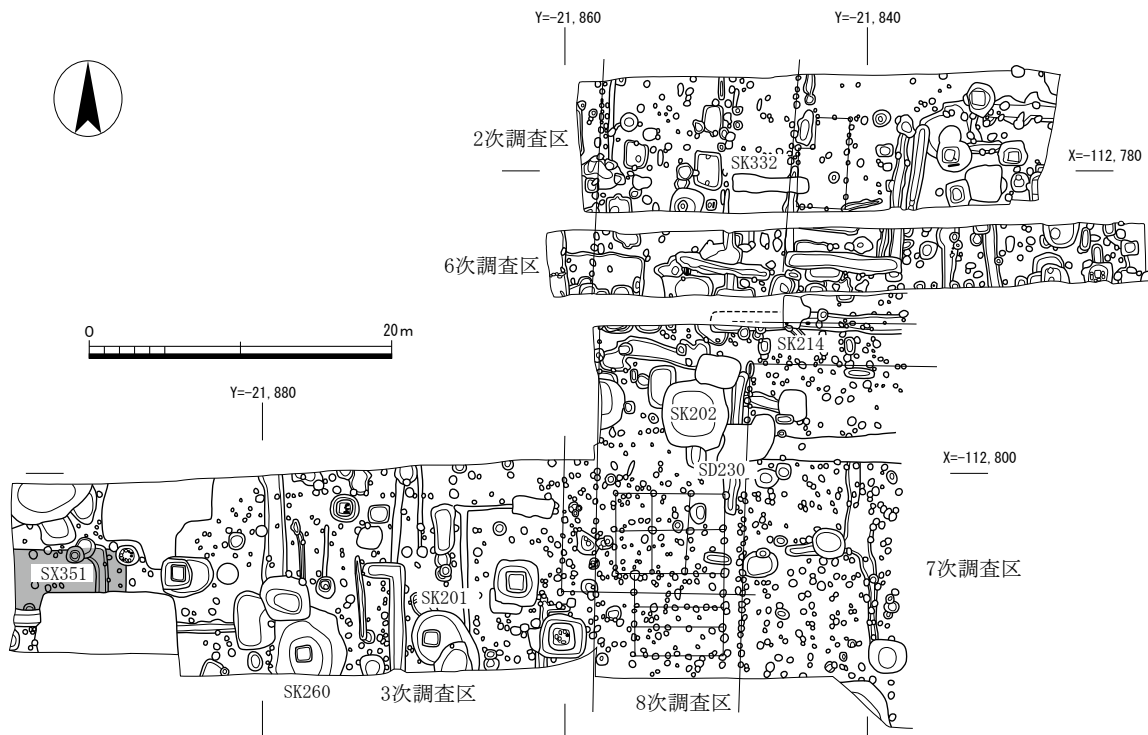


図24 2・3・6・8次調査区遺構平面図(1:500)

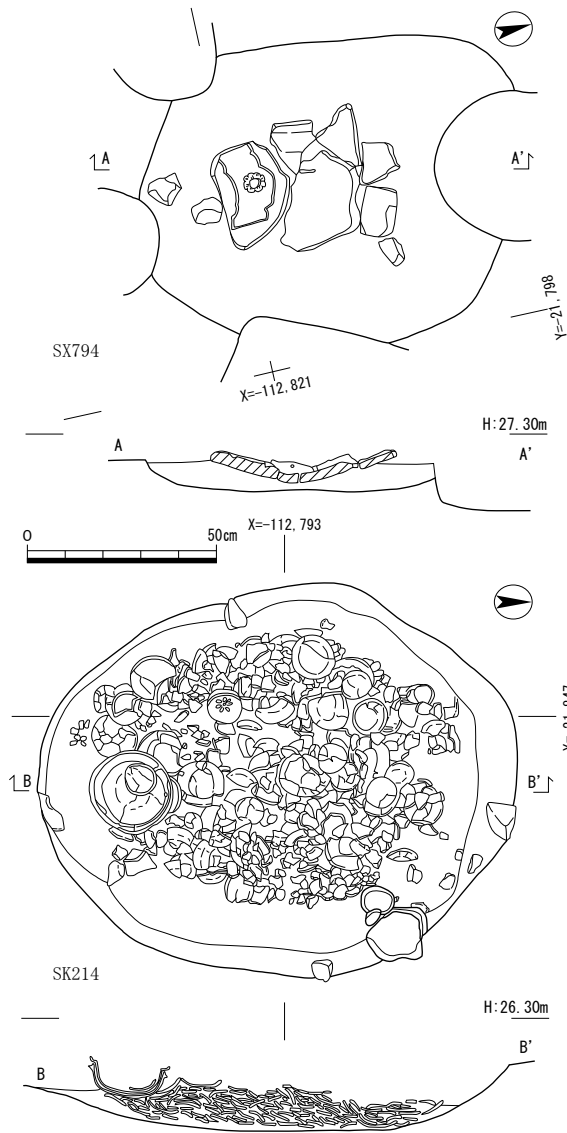


図 25 S X 794・S K 214 実測図 (1:20)

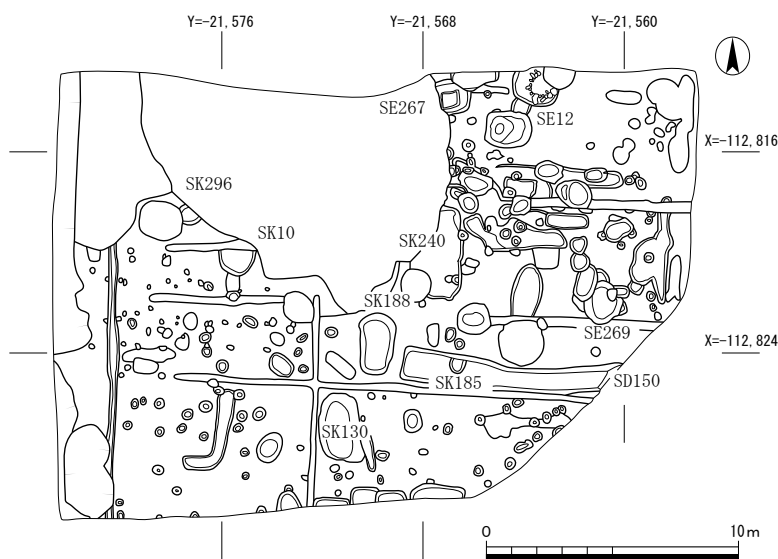


図 26 4次調査区遺構平面図 (1:300)

〈町尻小路側遺構〉 3次調査区西端では、1次調査区と関連して溝で区画した宅地割りや下層から井戸群を検出している。また、区画溝に規制された東西8m×南北4m程の方形石敷き地業を検出している。この地業は14世紀後半から15世紀前半のもので、溝で宅地を区画するなど室町小路側の遺構と性格や年代を異にしている。なお、室町小路側の遺構群からは仏具とともに鏡の鋳型が多量に出土しているが、この地域では金剛鈴などの仏具類が中心で鏡鋳型はまったく出土していない。室町小路側と町尻小路側では、銅細工は異なる銅製品を生産していたことが推測でき注目できる。

〈十四町の遺構〉 鎌倉時代の遺構は、13世紀後半の遺構が中心である。溝、土壇、柱穴などがある。溝(SD150)は、幅1.0～1.3mの東西溝で、上層には径5cm前後の礫が厚く堆積し、礫で埋め戻し整地した状況が判断された。溝の下層からは草履状木製品・箸などが出土し、完形の土器が10点前後出土している。検出状態から判断して、宅地の区画の溝で廃棄する時に完形の土器を埋めたものと

考えられる。また、腐植土層が堆積する土壇(SK130・188)を検出している。プランはいずれも径2.5m前後の楕円形で、木製品を主体とする遺物が出土した。形態、規模、埋土などから水溜の遺構と考えられる。その他、素掘井戸(SE269)・竪穴状の遺構(SK240)がある。

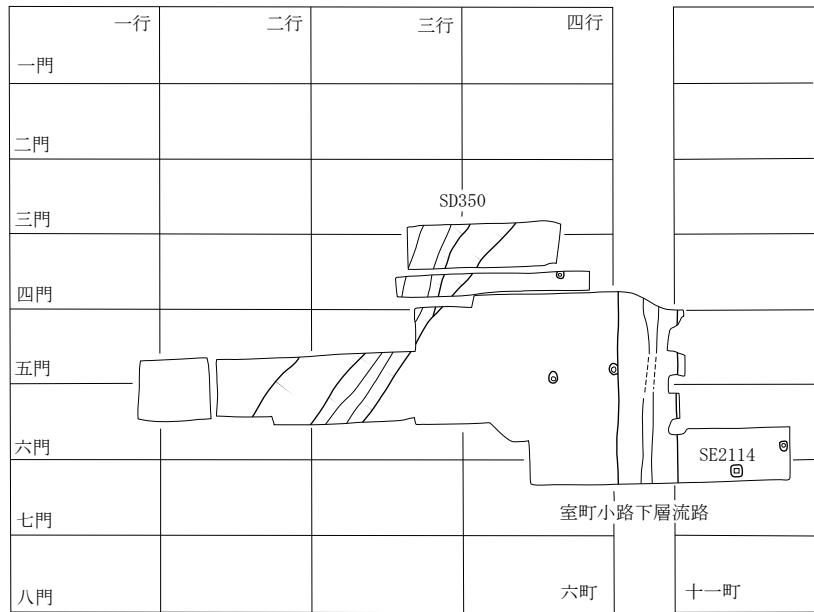
室町時代の遺構は井戸、土壇、柱穴などを検出した。

井戸（SE 12）はトレンチの北部で検出した。構造は、石組みであるが、石が不揃いで、組み方も華奢で簡易な石組みである。土壌（SK 10・296 など）は、トレンチの北東部と北西部に集中する。いずれも径が1.0 m前後、深さ0.5 m前後で、木製品と土器が多量に出土した。形態、出土遺物からゴミ捨穴として機能していたものと考えられる。

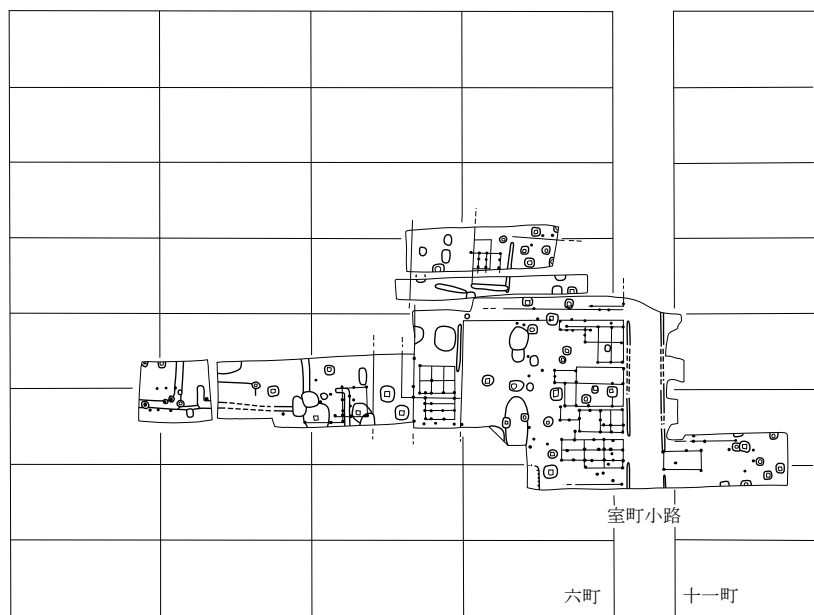
室町小路に面する六町・十一町の遺構群が14世紀前半でなくなっていくのに対し、十四町では15世紀前半まで遺構が形成されており、町尻小路側における遺構群の年代の下限と合致している。

＜平安時代の遺構＞

六町・十一町での平安時代の遺構は、調査区全体で流路2条と井戸5基を検出している(図27上段)。流路は室町小路下層流路と、六町域を北東から南西に流れる流路（SD 350）である。室町小路下層流路はほぼ路面幅で南北に流れており、包含している土器から11世紀までは流路として機能していたことがわかるが流路としての初源は不明である。SD 350は幅約18mの大きな流路で、下層から9世紀の土器群が出土しており最終的に埋没したのは11世紀頃で、12世紀の遺物を包含する土層によって整地されていた。おそらく、平安時代前期から左京南東部の排水処理のために両流路が機能しており、八条院御所の造営に伴って流路としての機能を停止し、周辺が



平安時代の遺構



鎌倉時代末から室町時代初頭の遺構

図27 六町・十一町遺構変遷図(1:1500)

開発されたものと推測できる。井戸は10世紀の井戸を4基検出しているが、いずれも底部の曲物あるいは枡を残すだけのものであった。ただ、十一町で検出した方形横板組井戸（S E 2114）は12世紀後半のもので、八条院の時期に並行する唯一の遺構である。南北1.0 m×東西0.8 mの当地では大型の井戸で隅柱の溝に横板を落とし込んで組み上げ、さらに外側に縦板を組んで補強するという特殊な構造を持っていた。部材もほかの井戸とは異なりしっかりしており、八条院御所に関連する井戸と考えられる。十四町では、平安時代後期の湿地とともに排水用の「L」字状溝を検出している。

遺物 全調査区における遺物の総数は、整理箱にして912箱におよぶ。ここでは、六町・十一町地域の遺物と十四町地域の遺物を分けて記述する。

<六町・十一町地域> この地域から出土した遺物は、整理箱で708箱分である。そのほとんどが中世、とりわけ13世紀後半から14世紀前半にかけての限定された時期のものである。

土器類は遺物の大半を占めており、各遺構から出土している。全体の傾向として土師器・白土器の碗皿類が主流で、瓦器碗や輸入陶磁器が極端に少ないのが特徴的である。また、瓦質鍋・羽

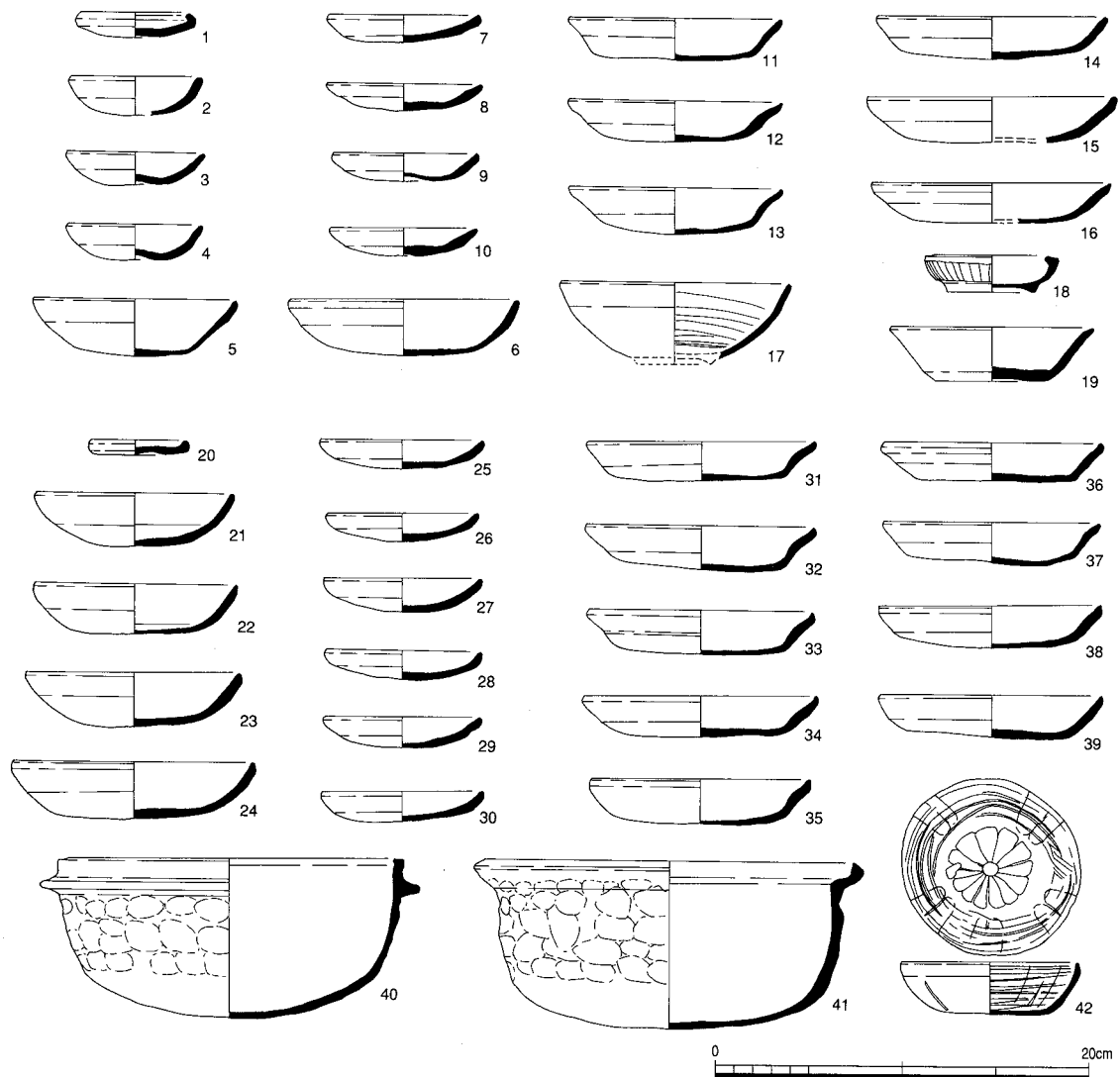


図 28 SK 202・214 出土土器実測図（SK 202：1～6 白土器 7～16 土師器 17 瓦器 18～19 輸入陶磁器 SK 214：20～24 白土器 25～39 土師器 40～42 瓦器）（1：4）

釜や火鉢が多く、滑石製鍋の破片も多く出土している。このうち滑石製鍋片は温石として加工されたものがみられる。ここでは、8次調査区で出土した土壌SK 202とSK 214の一括資料の実測図を掲示しておく。SK 202は多量の鑄造関係遺物と共伴した土器群で、14世紀前半と想定できる(図28-1~19)。鑄造関係遺物はほとんどこれらと同じ時期の土器類と共伴しており、この地域での銅細工の年代を示すものである。SK 214は13世紀末と考えられる土器溜の資料で、多量の土師器・白土器碗皿類とともに小型瓦器碗・瓦質鍋・羽釜が据えられていたものである(図28-20~42)。なお、平安時代の資料として、下層流路SD 350の土器類も図示している。下層(図29-1~10)と中層(図29-11~22)の土器群で9世紀の年代が与えられる。

瓦類は調査区全体で出土しているが、数量としては非常に少ない。出土地点別にみれば、室町小路に面した地点から若干多く出土しているようである。時期的には、12世紀から13世紀前半のものが主流である。これらの瓦類は、ほかの遺物からみた八条院町の盛行する時期より先行しており、八条院領に関わる瓦類であった可能性が高い。出土軒瓦の全体的な様相を示すために、平安京の四行八門別に地点を分けて軒瓦の拓影を掲示しておく(図30・31)。

鑄造関係遺物は、鑄型・坩堝・鞆羽口などが廃棄土壌や井戸などから出土している。特に、7次調査区の室町小路に面した建物群の裏手にあたる地域から多量に出土しており、六町での盛んな銅細工活動を示している。鑄型は鏡が圧倒的に多く、鏡生産の初源的な資料として2次調査区

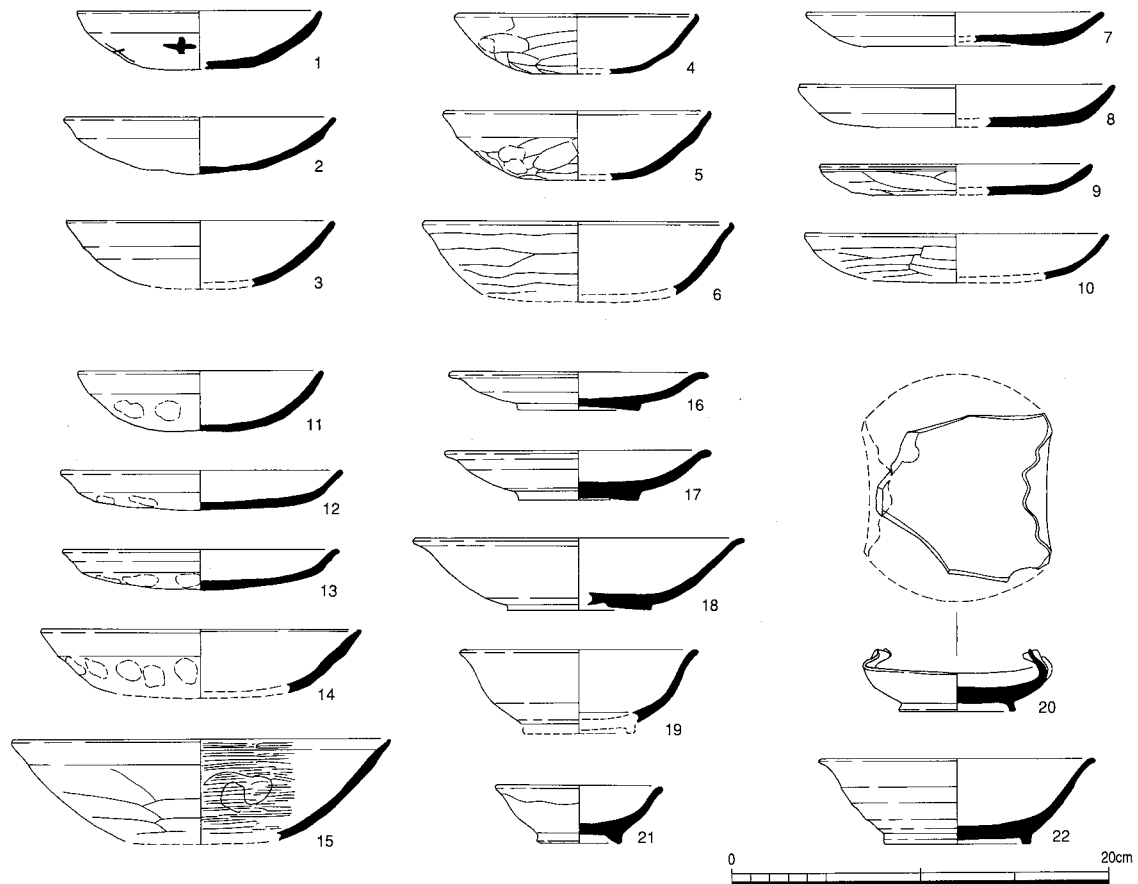


図29 SK 350出土土器実測図(下層:1~10土師器 中層:11~14土師器 15黒色土器 16~20緑釉陶器 21~22灰釉陶器)(1:4)

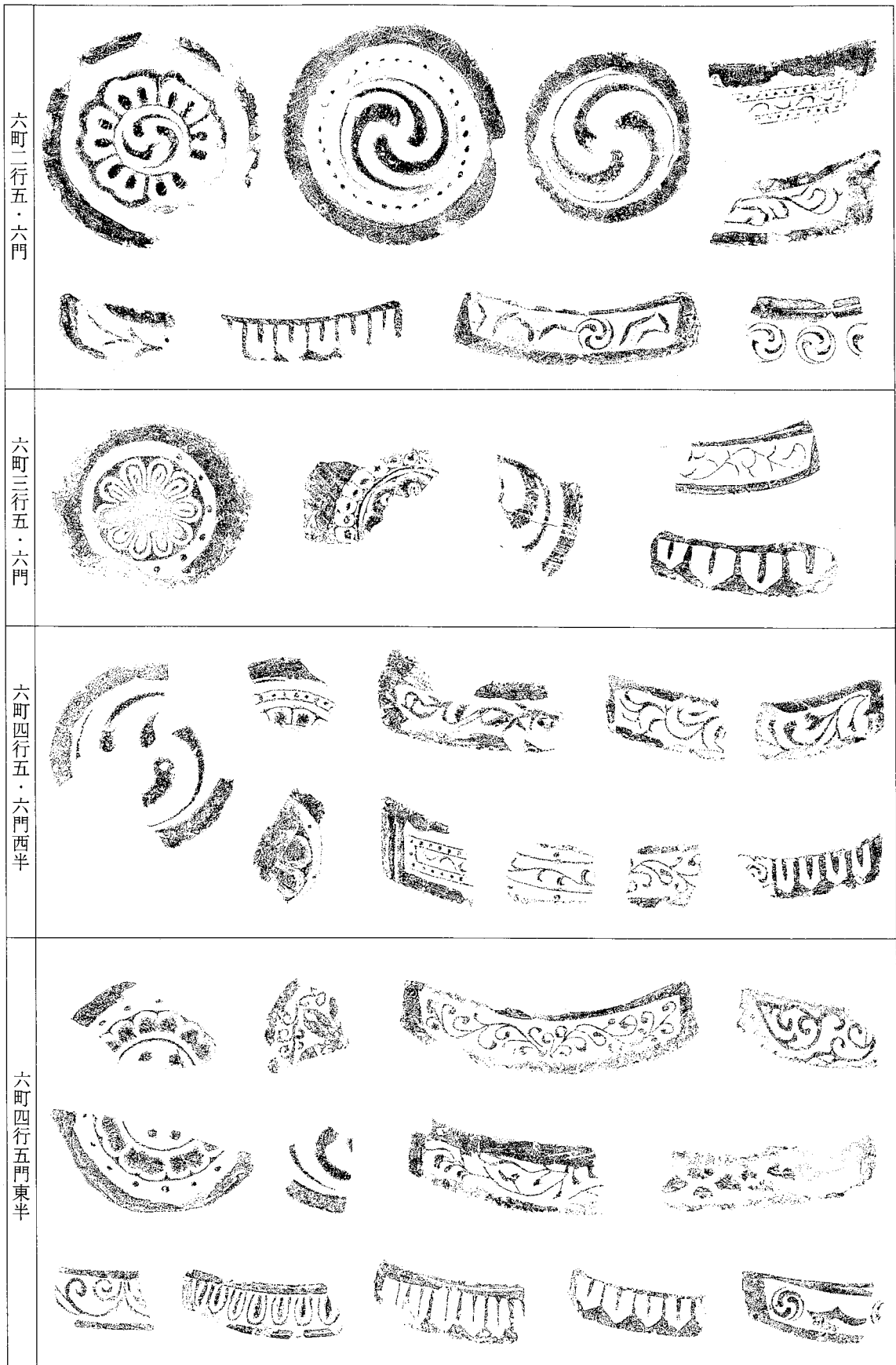


图 30 六町・十一町地点别出土軒瓦拓影 1 (1:4)

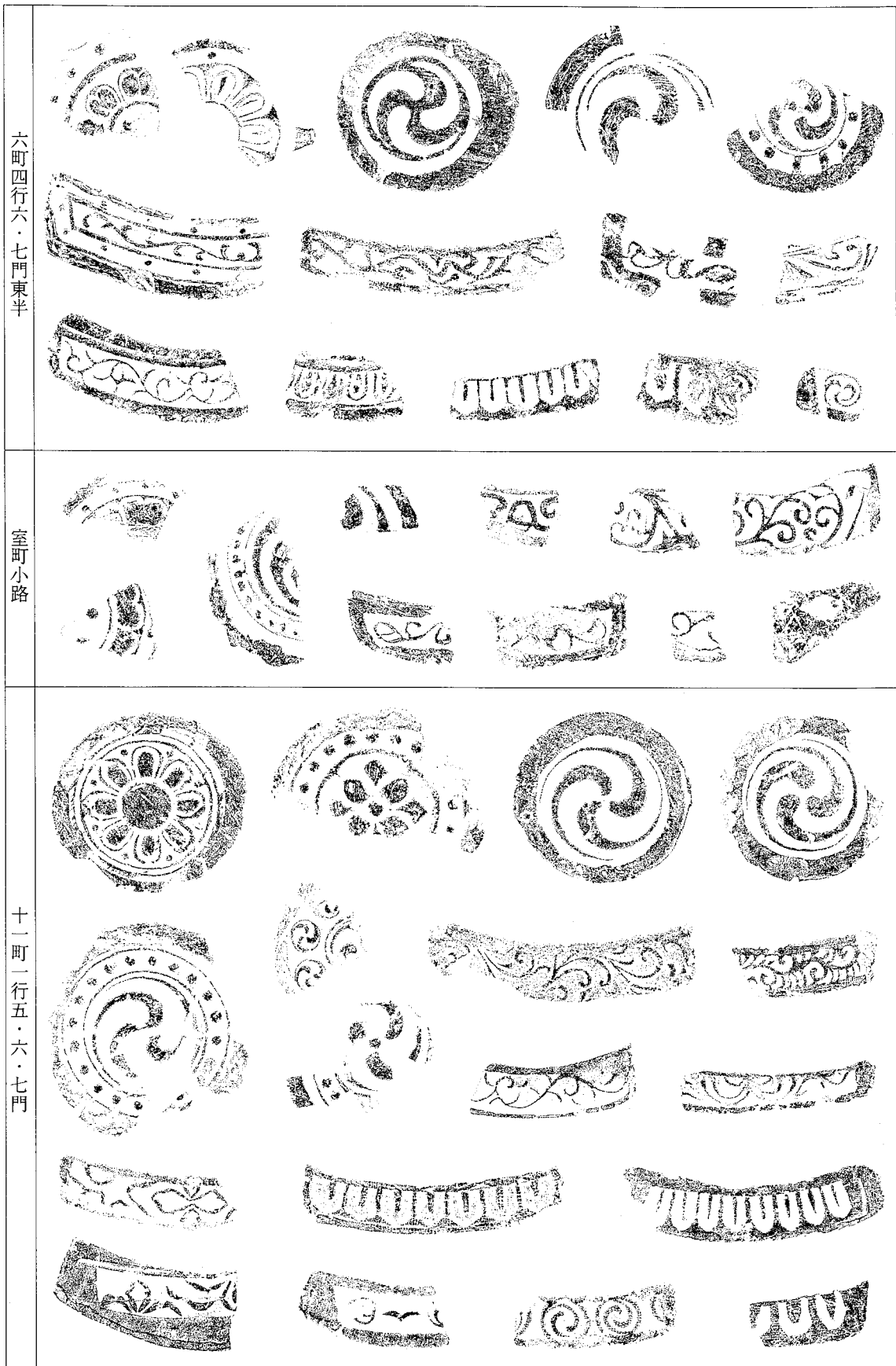


图 30 六町・十一町地点别出土軒瓦拓影 2 (1:4)

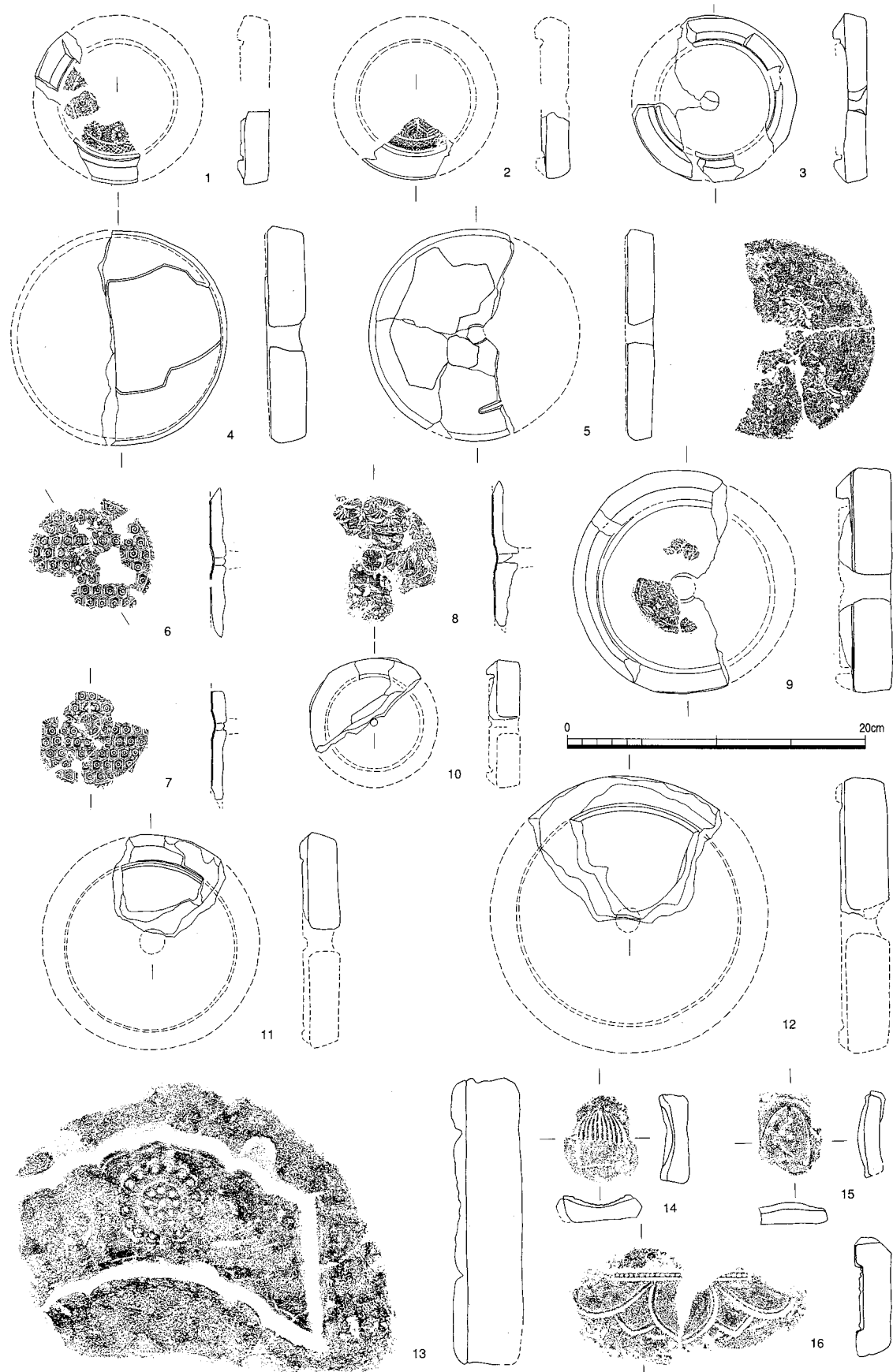


图 32 六町・十一町出土铸型实测图 (1~12: 鏡 13: 銅磬 14~15: 台座蓮弁 16: 蓮弁飾金具) (1:4)

で検出した S K 332 の資料があげられる。ここでは直径 8 cm 程の小型の鏡（図 32 - 1 ~ 3）と直径 12 cm 程の中型の鏡（図 32 - 4 ~ 5）が製作されていたらしい。特に後者は鏡面の鑄型であるが、アラガタ裏面に鏡背面の双鳥文がかすかに残されている例がある（図 32 - 5）。類例では亀甲繫ぎ文も確認できるが、真土が施されておらず性格が明らかでない。共伴土器から 13 世紀前半の資料である。

銅細工が最も盛んに行われた 13 世紀末から 14 世紀前半の鏡鑄型の類例は、ほとんどがアラガタだけであるが、中には S E 762 出土例（図 32 - 6 ~ 8）のように剥離した真土部が多量に出土し、亀甲繫ぎ双鳥文鏡や秋草双鳥文鏡・牡丹（双鳥）文鏡など鏡背面の文様が明確なものもある。S K 450 出土例では真土部とアラガタが良好に残っており、鏡鑄型の構造がよくわかる（図 32 - 9）。同じ構造は小型の鏡鑄型にも観察でき（図 32 - 10）、この時期の鏡鑄型の特徴として捉えられる。つまり、S K 332 の資料は真土部が薄く、鑄上がった製品に真土部全体が付着するようにアラガタと剥離するのに対し、この資料では真土部が厚く鑄上がった製品の周縁部分に斜めに真土部が付着し剥離する。これらの資料は、鏡鑄型の変遷を知る上で貴重な資料となっている。このほか、素文鏡あるいは鏡板らしき鑄型が S K 1486（図 32 - 11）や S E 758（図 32 - 12）から出土している。

仏具類に関しては、六町の S K 744・S K 757 などから半肉の仏座像・小型華瓶・台座などの鑄型が出土しており、懸仏が製作されていたと推定できる。同遺構のほかに S K 540・1486 などから仏具関係の鑄型が出土しており、S E 650 からは葉脈を持つ台座蓮弁鑄型がまとまって出土している（図 32 - 14・15）。六町中央部では、S D 230 から懸仏や仏具関係の鑄型が出土しており、S K 202 からは平板な蓮弁台座らしき鑄型が出土している（図 32 - 16）。十一町では S X 794 でほぼ完形に近い銅磬の鑄型が炉床構造物に転用されていた（図 32 - 13）。なお、多量の砥石とともに擦り石も若干出土しており、鑄造作業に関わる使用が想定できる。

<十四町地域> 4

次調査区で出土した遺物は整理箱にして 204 箱である。古墳時代後期、奈良時代、平安時代中期・後期、鎌倉時代、室町時代、近世の遺物が出土した。遺物は井戸、土壇、溝、土器溜などから出土し、土器、木器、金属器、石炭などがある。また溝、土壇などから漆器

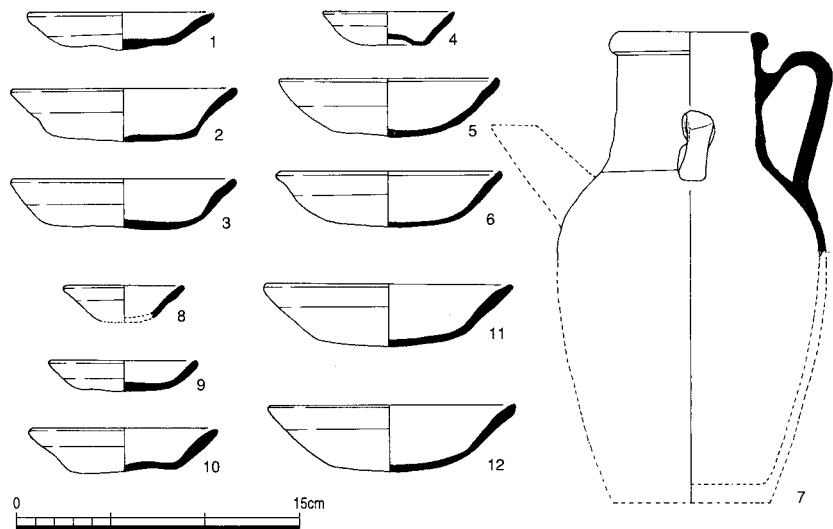


図 33 4 次調査区出土土器実測図（S D 150 : 1 ~ 6
S E 269 : 7 S E 12 : 8 ~ 12）(1:4)

椀・皿も少量出土した。

室町時代の土壌（SK 10・296 など）から多量の土師器皿や木製品が出土した。土師器はいずれも破片で廃棄され、完形のものはない。別の場所で破壊され、土壌に廃棄されたものと考えられる。

陶磁器では、黒釉陶器の水注（図 33 - 7）が出土している。また、緑釉陶器の枕が出土し、曲線文と刷毛目で文様を陰刻してあるが、細片のため詳細は不明である。胎土は、ピンク色を少し含む白色で器壁は薄い。文様と胎土から中国の製品である。磁州窯系壺は、灰青色の硬質胎土に白色のスリップをかけ鉄釉で花卉文を描く。

木製品では草履状木製品（図 35 - 13 ~ 17）がある。長辺 16.5 cm、短辺 8 cm 前後から長辺 23.5 cm、短辺 10 cm 前後まで各種の大きさがある。形は両脇に切り込みがあり、先端には径 0.5 cm 程の穴が開き、保存の良好なものには、藁状の編物の痕跡が残る。下駄も数点出土したが、草履状木製品が圧倒的に多い。その他、全長 30 cm の船の模型（図 35 - 12）がある。近世の三十石船に似

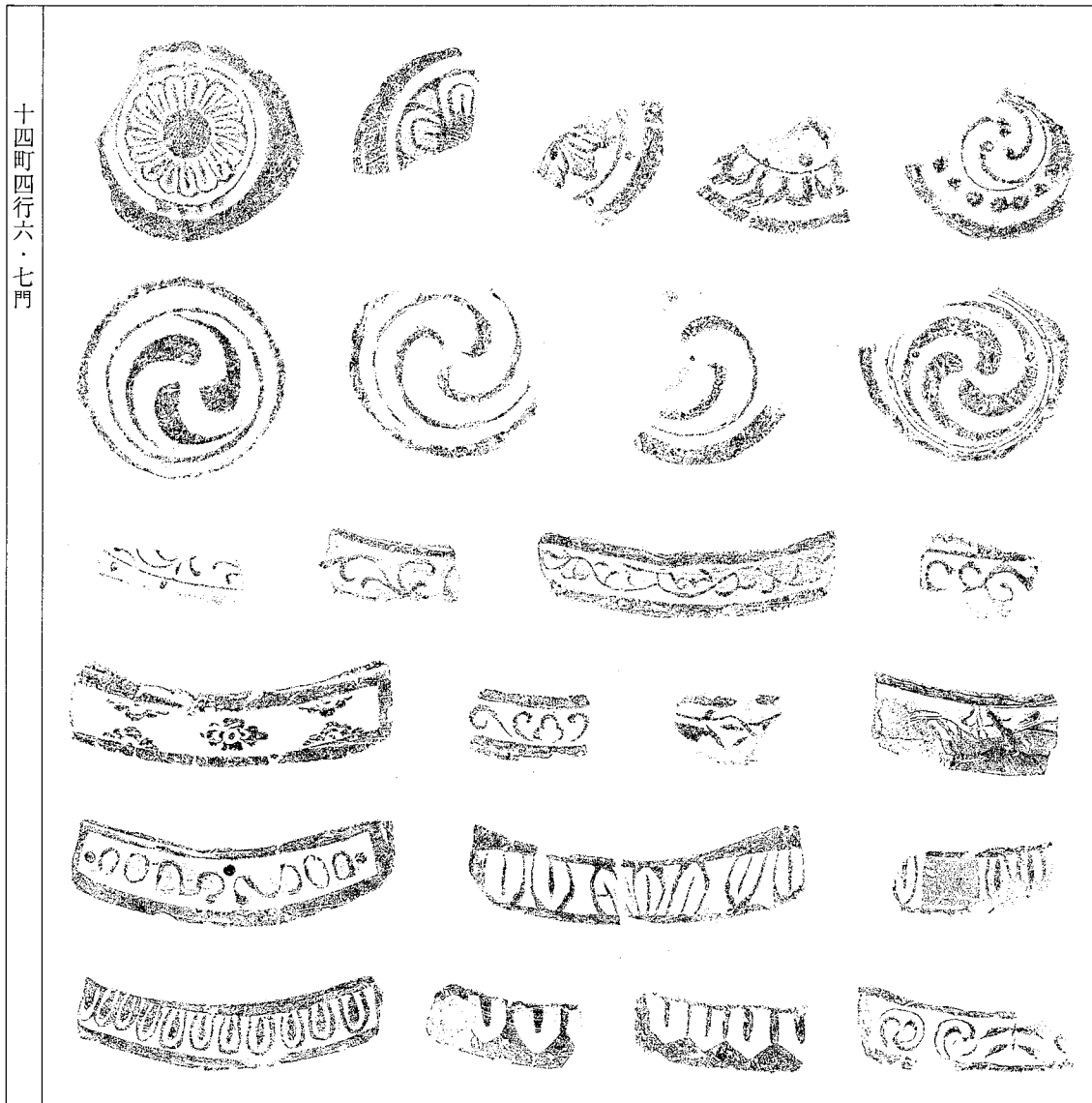


図 34 十四町出土軒瓦拓影 (1:4)

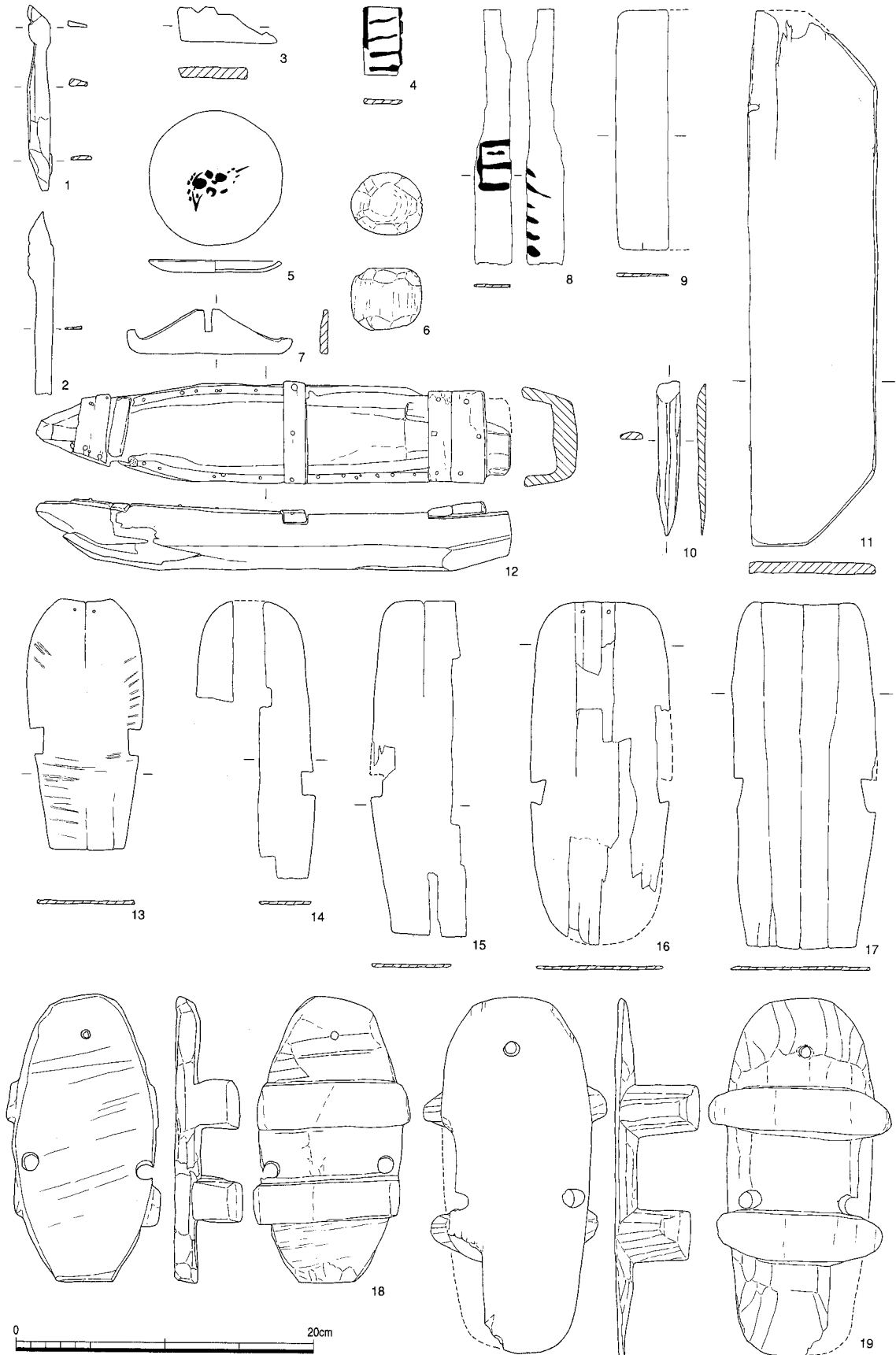


図35 4次調査出土木製品実測図 (SD 150:1~4・7~10・14・15・17・18
SK 10:5 SK 130:6・11・13・19 SK 185:12 SK 240:16) (1:4)

た形態をする。船底は丸木をくり貫き、舷側には密にほぞ穴を開け、甲板の板を止めている。全長 30 cm、幅 6 cm である。きわめて精巧に造られており、模型の可能性がある。

小結 京都駅の駅舎とその構内は、平安時代末期に造営された八条女院御所の比定地となっている。広大な敷地を持つ八条院領の解体後は女院御所関連の敷地の大半が東寺の所有になるが、後宇多院から東寺に施入された正和二年（1313）十二月の「院町十三箇所」の記載によれば、十一町は「女院庁跡」、十四町は「女院御倉跡」となる。また、六町室町小路面にも「八条院御倉」が推定されている。八条院町はこのような八条院領としての発展を下地に成立してきたことが知れる。東寺に施入された6年後の元応元年（1319）六月の『八条院町年貢帳』では、室町小路に西面する六町に27人もの請人が登録されている。今回の一連の調査で検出できた室町小路の両側に展開する建物や多数の井戸・土壇は、八条院町におけるこれらの人々の生活の痕跡として充分理解できる。特に、鏡・仏具を中心とした鋳型片が多数出土していることは、院町における銅細工の活発な活動を裏付けるものである。

なお、この地域での遺構は13世紀から14世紀前半が中心となり、14世紀後半から15世紀になると遺構は極端に減少し、16世紀には確実に耕作地と変化するようである。『東寺百合文書』に収められる貞治六年（1367）の『学衆方評定引付』によると、院町百姓らの起請文からここが銅細工などの跡地だったと記されており、この史料によって院町での銅細工の下限がおさえられることになる。その後、15世紀末には「院町庄」と記載されるようになり、寛永元年（1624）に描かれたと考えられる『洛中洛外地図屏風』では八条院町の地域は「畠」としか書かれていない。遺構の上でも十四町域の東洞院大路側や六町域の町尻小路側で15世紀まで下がる遺構を検出するにとどまっており、16世紀以降は耕作溝しか検出していない。文献史料から推測できる変遷と遺構の上での変遷が非常に合致しており、今回の調査成果は八条院町の変遷だけでなく中世京都の様相を知る上での貴重な成果であったといえよう。

最後に現地調査に関して、馬田綾子・五十川伸矢・伊藤幸司・斎木秀雄・河野真知郎・久保智康・高橋康夫・玉井哲夫・西山良平・福岡澄男・原田一敏、前田洋子・森 郁夫・三宅敏之の各氏より有益なご教示をいただいた。ここに感謝の意を表する次第である。

（網 伸也・東 洋一・南 孝雄・百瀬正恒・清藤玲子・桜井みどり・真喜志悦子）

10 平安京右京三条一坊 (図版1・22)

経過 調査地は、旧国鉄二条駅構内の南西部分で、中京区西ノ京栂尾町地内にあり、平安京右京三条一坊四町に相当する。調査は、二条駅地区土地区画整理事業に伴う道路部分である。トレンチは、東西 65 m×8 m (13 号線) と南北 40 m×6 m (16 号線) を A 区とし、A 区の南延長の南北 70 m×6 m (16 号線) を B 区として、逆 L 字形に設定した。予想される遺構としては姉小路の北・南側溝、および路面がある。試掘調査では、南側溝の一部を確認していた。

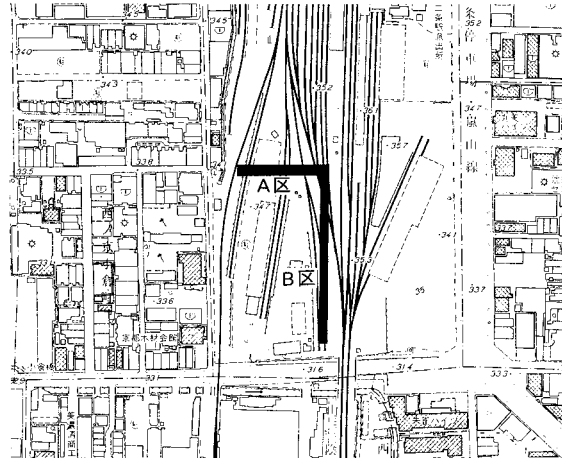


図 37 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構 A 区では、姉小路北側溝 SD 40 が東西トレンチ全域で確認できた。その内 Y=-23,340 m 以西 (SD 40 D) は鎌倉時代で、以东 (SD 40 A) は平安時代中期であり、対応する南側溝の SD 4 は鎌倉時代に埋没している。このことから、鎌倉時代に両側溝が改修されたが、部分的なものにとどまるとみられる。

溝 SD 92・93 は、姉小路北側溝と直角に交わり、杭や板によって補強されており、四町のうち、東三行と四行の境界溝であると思われる。A 区南北トレンチの SD 4 より南側は、石や瓦で叩込んだ整地面が広がっていた。柱穴 P 1・2 と P 3・4 の建物は直角に隣接している建物で平安時代に属している。

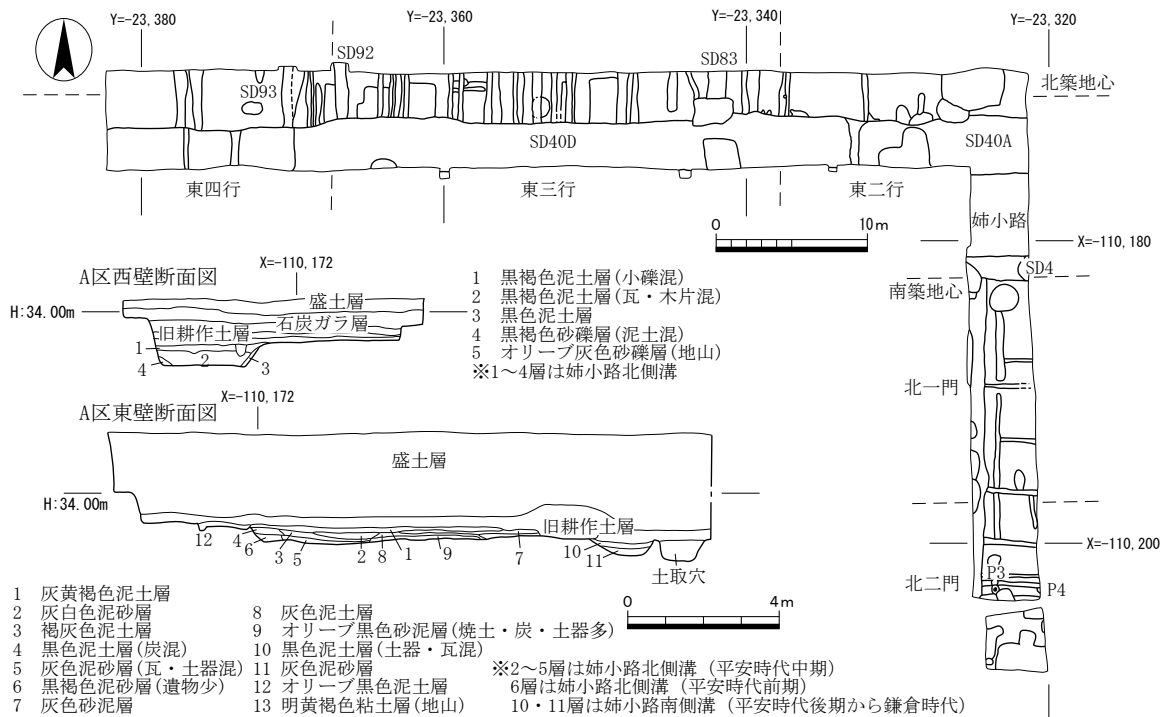


図 37 A 区遺構実測図 (1:500, 1:200)

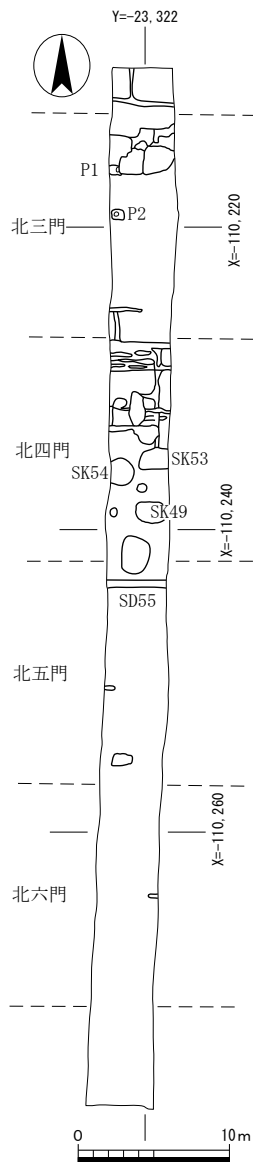


図 38 B 区遺構平面図 (1:500)

B 区の北端は、土取穴が広くあり、遺構は残っていなかった。中央部で検出した S K 49・53・54 は、石と瓦を多量に含む平安時代の土壌であった。また、溝 S D 55 は 1 町の半分の位置にあり、宅地班給の地割溝とみられる。

遺物 平安時代の遺物は、S D 40 の東端周辺に集中して出土した。緑釉陶器碗や土師器皿が多く、ほかに灰釉陶器碗、黒色土器杯、瓦類があり、「厨」と書かれた黒色土器もあった。いずれも平安時代中期の遺物であった。鎌倉時代の遺物は、S D 4 の底部、S D 40 D より土師器皿、須恵器鉢片が出土した。

江戸時代の遺物は、B 区北端の土取穴から出土し、水田の床土とみられる部分からも採取している。

小結 B 区の西側で調査では池状遺構を確認しており、10 世紀中葉の遺物が多量に出土した。また、2 期に分かれる建物も検出している。今回は、この池の北側と東側の調査であった。B 区北辺と A 区南北トレンチ南端で確認した東西方向の建物 A (P 3・4) と、南北方向・3 間×2 間の建物 B (P 1・2) は、いずれも池の周囲に配置された建物の一部とみられる。また、姉小路南側溝 S D 4、路面、北側溝 S D 40 が確認でき、一旦埋まったところを鎌倉時代に改修されたことも判明した。この改修は、一部は未改修ではあったが、地山を掘り込んだ徹底したものであった。未改修部分では、「厨」と墨書された土器が出土し、北側の遺構を示唆するとみることができる。 (吉村正親)



図 39 S D 92・93 (南から)

11 平安京右京六条一坊 (図版1・23～25)

経過 JR丹波口駅周辺再開発事業に伴う本年度の調査として、9次、10次調査を実施した。9次調査は右京六条一坊六町と十四町の一部、10次調査は十四町の東西中央から西側において実施した。9次調査では六町にあたる京都リサーチパーク北側の緑地部分において、平成5年度に実施した発掘調査（8次調査）



図40 調査位置図 (1:5,000)

で一部残った緑地の北西部分および緑地北側の駐車場（9-1・2・4区）と、十四町にあたる大阪ガス旧京都工場跡地北西部の公団詰所の建設予定地（9-3区）が、10次調査では工場跡地西部で平成4年度に行った7次調査1区の北、3区の西が対象になった。10次の調査区は南側の10-1区と、9-3区をはさみ現五条通に接する敷地北西隅の10-2区の2箇所を設定した。10-1区の当初の予定地は南北72m、東西45mの範囲であったが、北西部分は9-3区において旧河川の流路や競馬場の濠を確認しており、顕著な遺構の残存している可能性がほとんどないと判断された。このため北西の一部を割愛し、2,410㎡を対象に調査を実施した。また10-2区は平成7年度以降の調査対象地である現五条通沿いの最西部にあたるが、今後の調査のための仮設事務所の建設予定地、東西20m、南北18m、約360㎡について先行して調査を行うことになった。

調査の結果、六町地区の9-1・2・4区では、井戸、溝、土壌や8次調査で南岸を検出していた園池の北岸や池、あるいはその前身の湿地へ流入していた溝状遺構、柱穴など、多数の平安時代から鎌倉時代の遺構を検出した。十四町地区の9-3区では近代の遺物を含む整地層を確認したほかは顕著な遺構はなく、その下層で調査区全面に広がる旧流路の一部とみられる砂礫層を確認したにとどまった。10-1区では調査区のかなりの部分が河川の旧流路によって削平されていたが、7次調査で一部を確認していた楊梅小路の北側溝の延長を追認したほか、その北部に溝、井戸、掘立柱建物、柵列など平安時代前期の遺構を検出した。10-2区は10-1区で検出した流路の延長上に位置しており、この流路の対岸の状況の確認を調査の主眼においた。しかし、この調査区では、一部に平安時代の柱穴と遺物包含層を検出したのみで、その下層には古墳時代の遺物を少量含む流路の堆積を確認したにとどまり、これらの流路の西岸を検出することはできなかった。

遺構 9次調査における六町地区の主要な遺構としては、古墳時代から平安時代前期にかけての旧流路および湿地S X 988、平安時代前期の柱穴、平安時代後期から鎌倉時代の井戸S E

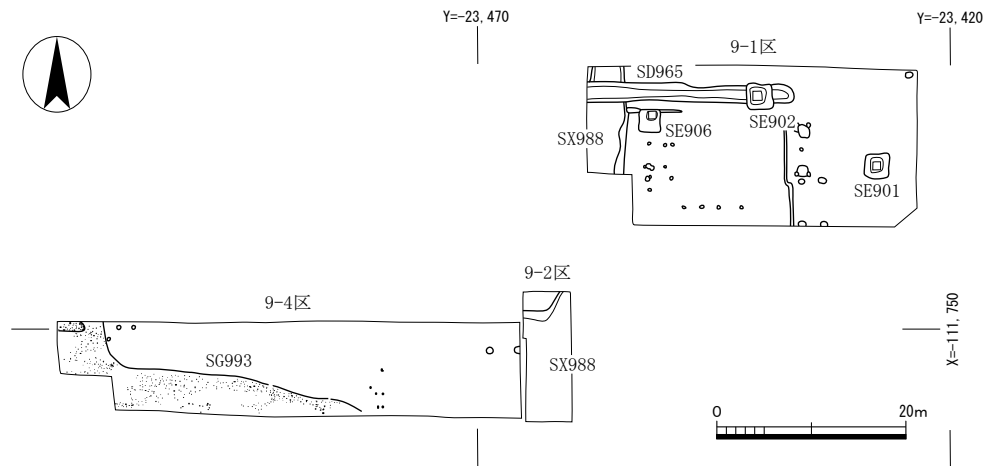


図 41 六町地区（9-1・2・4区）遺構配置模式図（1:800）

901・902・906、溝SD965、池SG993などがある。古墳時代から平安時代前期の湿地SX988はこれまでの付近の調査で確認しているものと一連のもので、東肩付近から遺物がまとまって出土している。旧流路が次第に埋積し、湿地状になったもので、平安時代前期にはかなりの部分が埋められており、平安時代末頃には、その残存部を利用した池SG993に改修されている。3基の井戸はいずれも構造は方形縦板組みだが、部材の残存状況は良くない。SE902は溝SD965を切って成立している。SD965は六町南北中央に位置する東西溝で、東一・二行界付近で途切れている。池SG993は8次調査ですでに確認していたが、その北岸を検出したことになる。南岸が拳大の礫を用いた洲浜であったのに対して、北の汀は礫はほとんどなく、細砂が敷かれている。ただ調査区西端部には南岸同様の拳大の礫が集中している部分もあった。

10次調査で検出した古墳時代から平安時代後期の河川は調査区（10-1区）内では全体的に北東から南西方向に向かう流れを形成しているが、局所的には北西から南東へと大きく蛇行した状況を示す部分も認められた。下層では古墳時代の遺物を含む層も随所で確認できたが、大部分の堆積が平安時代前期以降のものである。この河川は10-1区南東隅を残して、それより東にはおよんでおらず、東岸以東の高まりの部分には井戸、柵列、溝など平安時代前期の遺構群が良好に残存していた。この東岸寄りの堆積（流路1）が平安時代のものとしては最も古く、I期中（9世紀初頭）の遺物が出土する。これ以降の流路堆積の全般的な傾向としては流れの中心が漸次西部に移動していったようであるが、堆積の重複状況は複雑で、一旦整地され宅地化した部分で、その後再移動した流路によって削平を受けたところもみられた。10-1区の範囲内では流路5が平安時代のものとしては最も新しく、12世紀代の土器、瓦などが出土している。これらの流路以外の遺構の概略を以下に記す。

SB1001・1002 調査区中央西寄りに検出した掘立柱建物。規模は同一で、柱筋も揃う。柱間は桁行が北から6尺、6尺、9尺で梁間は9尺である。南東側の遺構群に対して流路1を挟んだ位置に12尺の間隔で東西に並ぶ。

SB1003 10尺の間隔で東西1間分の柱跡を検出した。北八門のほぼ中央に位置しており柵の一部かもしれない。

SA 1004 流路1の東に
検出した柵。南北に7.5尺
等間で5間、北端で東に方
向を変える。

SA 1005 東西方向に3
間を検出。柱間は7.5尺等
間で、やや東偏する。

SA 1006 流路1の東肩
に沿って並ぶ柵列。柱間は
北2間が7尺、南2間は8
尺。

SA 1007 流路が埋まっ
た後の小規模な杭列。SD
1008とSD 1009の中間に
位置する。

SD 1008 楊梅小路北側
溝。造営当初には流路1が
生きており、その時点では
流路1以西は成立しておら
ず、後に流路を埋め戻して
造られている。7次調査1
区で検出した南側溝の状況
と総合すると、楊梅小路が
ここで途切れていたか、あ
るいはこの流路1が初期の
小路を横切って流れていたことになる。

SD 1009 SD 1008の南側に位置する東西
方向の溝。すでに7次調査で検出していたもの
だが、今回の調査区でも東側の延長部を追認し
た。SD 1008と同様に楊梅小路北側溝と思われ
る。

SA 1010 SD 1008北肩にそって十四町南
限に並ぶ東西方向の柱列。柱間は不揃いで東か
ら12尺、10尺、7尺、10尺。

SD 1026 東三・四行界のやや東に位置す

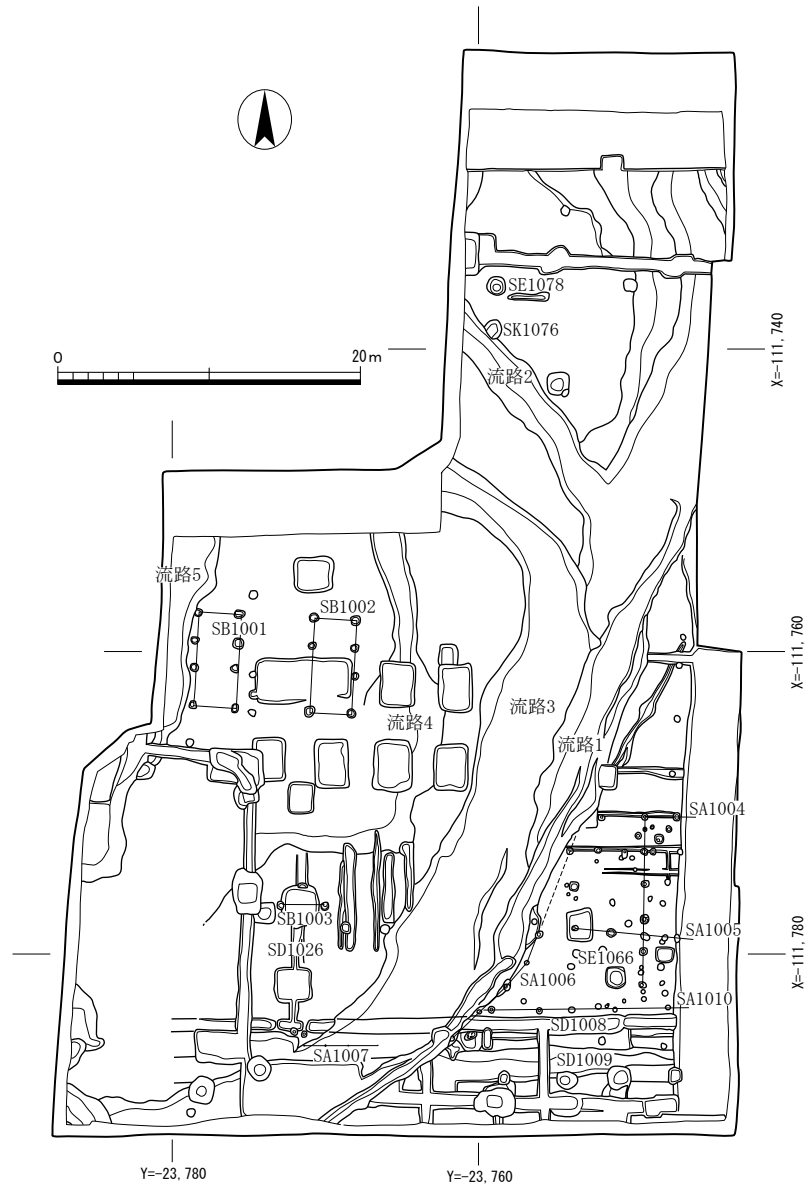


図42 十四町地区(10-1区)遺構平面図(1:500)

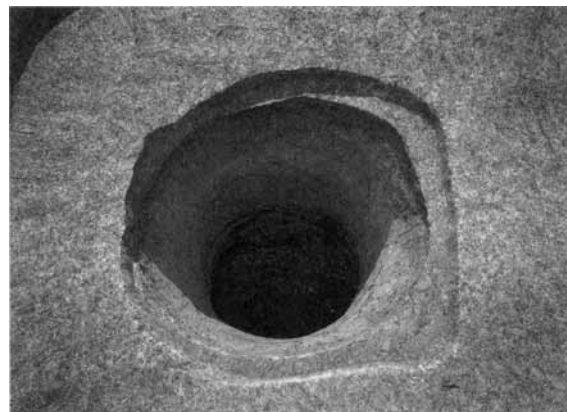


図43 SE 1066(北から)

る南北方向の溝。南方で、S D 1008 に接続している。北へは約 10 m 確認できたが、それ以北は後世の流路によって削り取られており不明。

S E 1027 方形木枠組みの井戸。上部は流れによって削平を受け、底部の枠の一部のみを検出。

S E 1066 円形板組みの井戸。部材は崩落した状態で検出された。同様の構造の井戸は 1、2 次調査（五町）でも 2 基検出している。

S E 1078 底部の曲物だけを検出した。上部構造は流路による削平のため不明。京造営当初に近い時期（I 期中）の遺物が出土している。

遺物 遺物は整理箱にして 9 次調査が 76 箱、10 次調査が 126 箱の計 202 箱出土している。

9・10 次とも土器類が多く、特に六町地区の遺物の 9 割以上は土器類である。その他の遺物としては、十四町地区の平安時代後期の河川（流路 5）の瓦類が、また六町地区の井戸や、十四町地区の平安時代の河川（流路 1・2・3・4）などの少量の木製品がある。六町地区では湿地下層の流路から古墳時代の土師器、須恵器、湿地 S X 988 から平安時代前期の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、井戸や池 S G 993 などから平安時代後期から鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、白磁、青磁、瓦が出土した。十四町地区では主に流路およびそれを埋め立てた整地層から出土したものが数量的に主体を占める。これらの遺物の時期は平安時代前期から後期にまでおよんでいるが、各流路の肩部付近の堆積層や、整地層の各单位から出土したものは、それぞれ型式的まとまりを持つものも多く、破片も比較的大きなものが含まれている。中でも平安時代前期の流路 1 や流路 4 から土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器などの土器類が多量に出土した。このほか井戸 S E 1078・1066 からは 9 世紀初頭、溝 S D 1008 からは 9 世紀後半の土器類が比較的まとまって出土した。また流路 5 の一部からは土師器、瓦器のほか平安時代末頃の軒丸瓦など瓦類が出土している。木製品は大半が加工痕のある木片や箸の破片で、容器や用途、形状の明らかなものはほとんどない。下層流路からは古墳時代の土器類に混じって少量の弥生土器、大型の石包丁などが出土している。

小結 六町地区の 9-1・2・4 区では、1・2 次および 8 次調査で確認していた平安時代後期から鎌倉時代の遺構に関連する遺構群を検出することができた、特に西部の池の規模がほぼ判明した点は大きな成果といえるだろう。また東部では比較的近接した時期の井戸が複数検出されたことや、検出位置から六町内の区画施設と推定される溝 S D 965、あるいはそれら遺構相互の前後関係などの成果は、今後に予定されている周辺の調査とあわせ、宅地の復原およびその変遷を考察する材料の一つとなりうるものである。

十四町地区の調査区は、十四町の東西中央から西側に位置している。特に大きな面積を占める 10-1 区は十四町の南西 1/4 町の東側部をほぼカバーしている。この町についてはこれまでに 5 次調査で南東隅の一部を、7 次調査の 3 区でその西側つまり町の南東 1/4 町の主要部を明らかにしている。これら一連の調査で十四町南半の状況はかなり明確になってきたが、今次調査の 10-1 区と 7 次調査の 3 区との間にはまだ幅 20 m 強の未調査部分が残されている。したがって十四町南部の状況を詳細に記すには不明な点も多く残されているが、現時点での認識を略記して

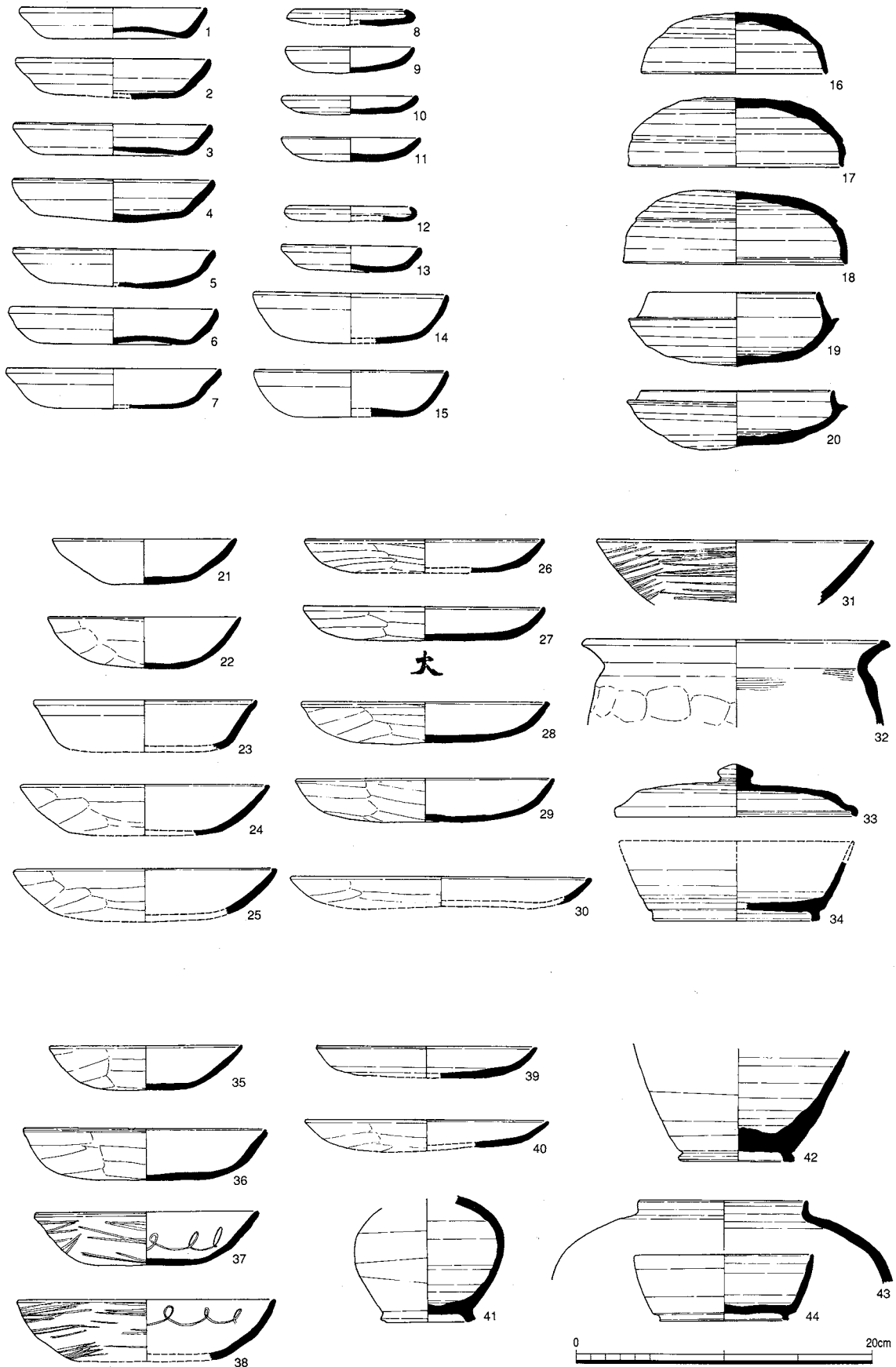


図44 出土土器実測図(六町地区SG 993: 1~15 土師器 SX 988 下層: 16~20 須恵器 十四町地区流路1: 21~32 土師器 33・34 須恵器 SE 1066: 35~40 土師器 41~44 須恵器) (1:4)

おく。

第一に重要な点は平安京造営からしばらくの間、自然流路が町内を流れていたことが確認できたことである。出土遺物の時期や遺構の分布状況、特に川岸に沿ったS A 1006のあり方やこの南側において実施した7次調査1区の成果などから、この地域が宅地として利用され始めた平安時代初期にこの河川が存在したことは明らかであり、また前述したように楊梅小路はこの河川の部分で途切れていた状況を示している。この部分に整地がなされ、側溝も含め小路が整備されるのはしばらく後、少なくとも遷都後数十年を経た時点のことである。これまでに右京城において記録に残っていない平安時代の河川が検出された例はいくつかあるが、いずれも条坊の配置に沿うか、町内を流れている例にしてもほぼ南北に配置されたもので、宅地が機能している間は管理された状況を示しているものが多い。その意味でこの河川が存在が確認できたことは右京城の形成と変遷を考える上で興味深い一資料が得られたといえよう。10-1区西側の7次調査3区では、掘立柱建物をはじめとする平安時代前期の遺構群が重複してかなり高い密度で検出されたが、それと比較すると今回の調査の遺構密度はかなり低い。これもこの川の影響とみることができるだろう。宅地割りの施設と思われる遺構はS D 1026だけであるが、この地域のこれまでの調査結果をみれば、皇嘉門大路の西側では町をいくつかに分割した例が多いことや、井戸の数や検出位置などからこの町もいくつかに分割されていた可能性は高い。また遺物ではS E 1066出土土器の中に、京内ではこれまで類例のあまりなかった中河内産と考えられる特徴を持った土師器の食器類がかなり含まれており、注目される。

(平尾政幸)



図45 S B 1001・1002(西から)

12 平安京右京九条二坊 (図版1・26)

経過 調査地は、西寺跡から東へ約120 m、平安京右京九条二坊二町および七町に位置し、西鞆負小路と九条坊門小路の交差点が検出されることが予想された。調査の結果、室町時代の溝、平安時代の西鞆負小路の東西両側溝および九条坊門小路北側溝、古墳時代の竪穴住居などを検出した。

遺構 基本層序は、現地表下90 cmまでが盛土層、以下10 cmの旧耕作土層、5 cmの室町時代の耕作土層、平安時代の遺構面であるオリ

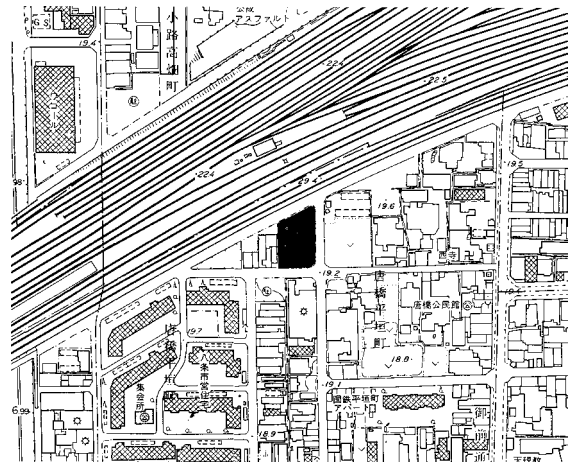


図46 調査位置図 (1:5,000)

ブ褐色の砂泥層の地山となるが、七町内の一部には平安時代前期の整地層である暗褐色砂泥層の堆積もある。

室町時代の遺構は水田に伴うものとして、床を固める礫敷、溝などを検出した。礫敷は調査区の南東部で主に検出し、礫に混ざって多くの瓦が使われている。平安時代後期から室町時代の遺構は溝のみである。溝は西鞆負小路の東西両側溝の位置を踏襲するようにそれぞれ3条、合計6条を検出している。遺物の出土は少なくそれぞれの時期は明確ではない。溝はすべて素掘りで、幅は0.4～1.0 m、深さは浅いもので0.2～0.4 m。道路側溝と考えるよりも耕作に伴う水路と思われる。

平安時代前期の遺構として、西鞆負小路東西両側溝、九条坊門小路北側溝、橋に伴う護岸施設などがあり、このほかに水田に伴うと思われる畦状遺構などを検出している。

西鞆負小路西側溝 (S D 85) はその西側の全面を杭と板で護岸している。幅1.2 m、深さ0.5～0.8 mを測る。護岸に使用されている杭は0.8、0.7、0.5 mの3種類があり、1トレンチの北半分では0.8 mと0.5 mの杭を交互に打つが、南半分では0.7 mの杭のみである。また、2トレンチでは、側溝の東肩にも護岸がなされており、橋の架橋部分の護岸と考えられる。

西鞆負小路東側溝 (S D 87) は幅は1.5 m、深さ0.4 mを測る素掘りの溝である。3トレンチでは側溝の西肩の一部が東へ張り出し、これも橋の架橋部分の可能性もある。

東西両側溝に挟まれた路面部分は約6 mである。ここには後世の削平のためか路面に伴う整地層は確認されなかった。

九条坊門小路北側溝 (S D 104・105) は、調査区の南壁際でその北肩のみを検出した。溝の深さは0.2 mであるが、西鞆負小路と交差する部分は深く0.3 mとなる。幅は1 mである。なお、西鞆負小路と九条坊門小路の側溝は、先に九条坊門小路の側溝が埋まり、その後に西鞆負小路の側溝が埋まっている。

二町の宅地内は、東側溝にそって幅1.2 mの畦状の高まりが存在し、ここより東側では約10

cm宅地側が低く落込んでいる。この低くなっている部分には、黒褐色の粘土層が堆積しており、この粘土をプラントオパール分析を行った結果、1グラム中3,000～5,000個という高い密度でイネ科のプラントオパールを検出した。この結果、平安時代前期にこの地で稲作が行われていた可能性が考えられる。

西靱負小路では、道路側溝が造られる以前の遺構も検出している。平安時代前期の南北方向の

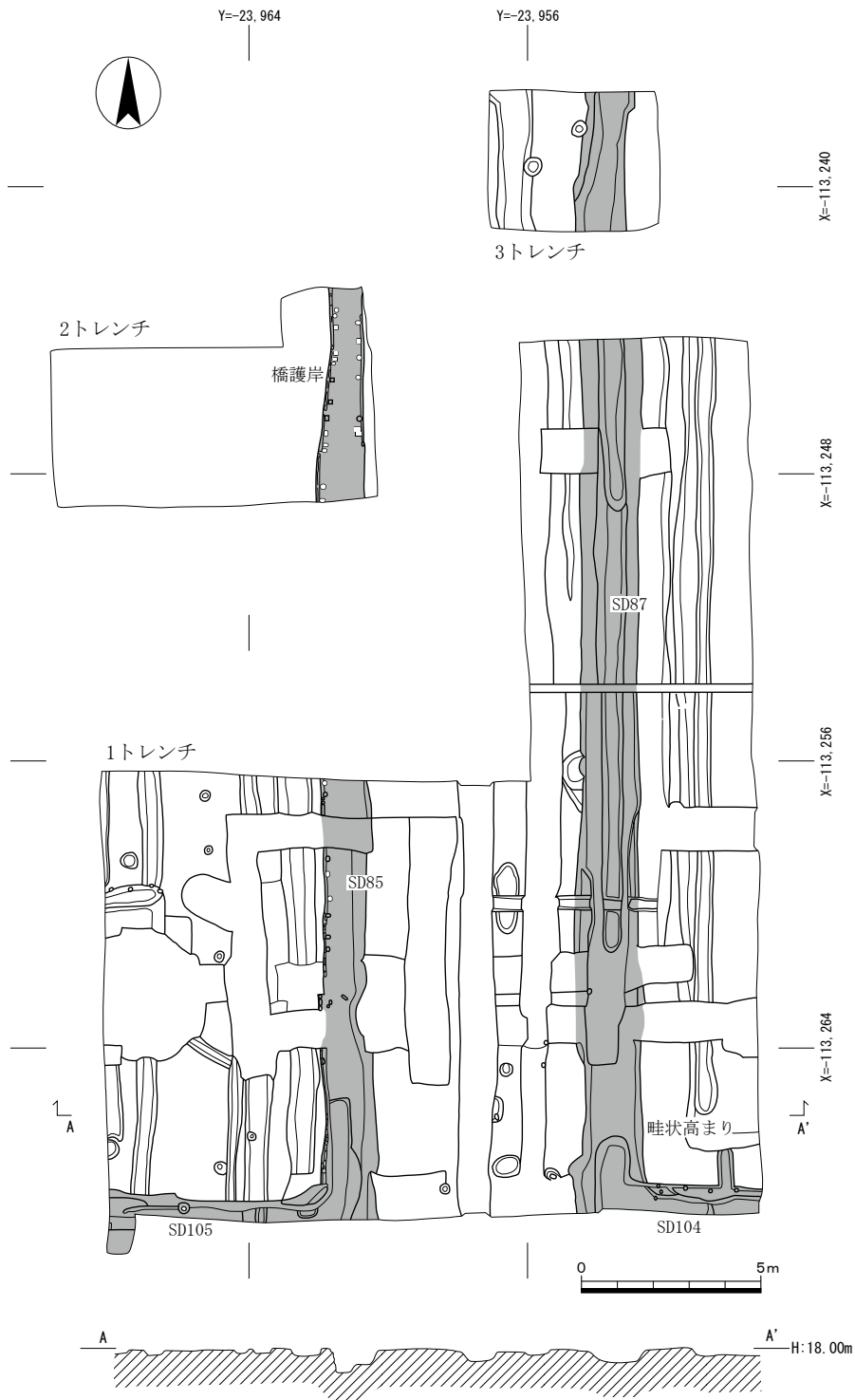


図 47 遺構実測図 (1:200)

流路である。この流路は、ほぼ西靱負小路の幅で約 12 m、深さは 0.3 m。埋土は砂層。

七町内の暗褐色泥砂層より下層では、1辺 7 m の方形プランの竪穴住居を検出した。遺物は少ないが古墳時代と思われる。

遺物 今調査で出土した遺物の時期は、古墳時代から室町時代にまでおよぶが、その出土量は各時期ともに少ない。

古墳時代後期の遺物は、土師器高杯、須恵器杯が出土している。

平安時代前期の流路からは、土師器・須恵器・製塩土器・瓦・獣骨・木簡などが出土している。木簡は残存長 6.5 cm、文字は 3 文字で習書木簡と思われるが判読不明である。

西靱負小路の東西両側溝からは、土師器・須恵器・櫛・杓子状木製品・漆器などが出土している。また文字は不明であるが、墨書土器と大きさの異なる土馬が数個出土している。西側溝護岸の板材には刻印があるが、傷みがひどく詳細は不明である。

出土遺物の大半を占める瓦類は、平安時代前期から室町時代までの各層から出土している。平城宮式（1・2・9・11）、長岡宮式（3）の搬入瓦、西寺に供給するために製作された瓦（4～7）などがある。瓦当面に「西寺」銘のある軒丸瓦の小片と、平瓦凹面に『西浄』銘のある文字瓦も出土している。これらは西寺に使用された瓦と思われる。

銭貨も各層から出土しており、和銅開珎・神宮開寶・隆平開寶・富寿神寶・承和晶寶・貞観永寶の 6 種類が出土している。

小結 調査の結果、平安時代前期の西靱負小路と九条坊門小路の交差点部分を確認した。西靱負小路の側溝は、東側溝が西側溝に比べて幅が広く造られている。このような状況は右京のほかの調査例でもみられ、北東に高く南西に低い地形を考慮して造られたためとみられる。ただし、構造上は西側溝にのみ護岸が施され深く造られるなど、側溝に面した町ごとにその管理形態が異なっていたことがうかがわれる。

西靱負小路下面の南北方向の流路は、埋土の堆積状況や存続期間の長さなどから平安京造営途上において、西堀川などととも北からの雨水などを南へ流すためのものと考えられる。

二町内での水田状遺構の検出は、平安時代前期に水田があった可能性を示唆するものであるが、

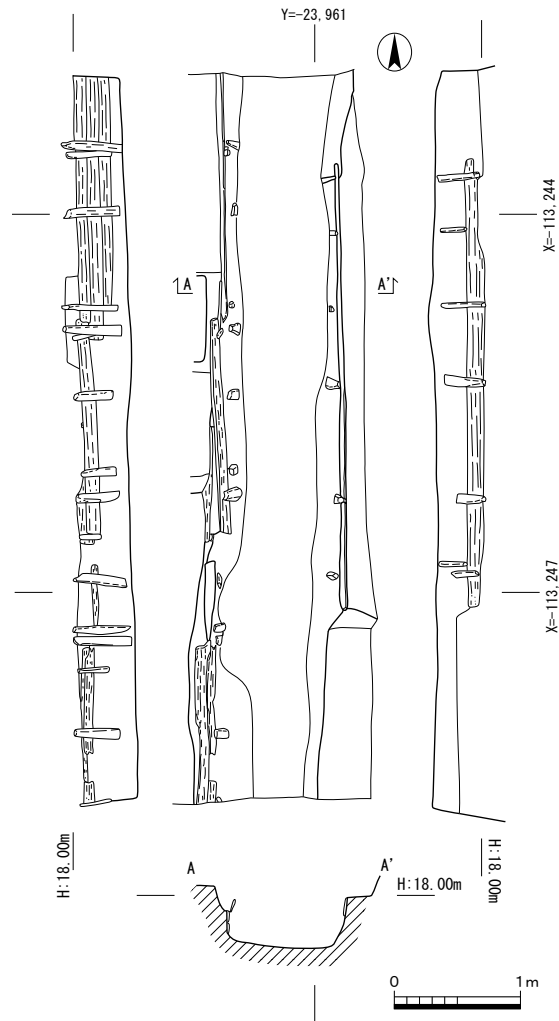


図 48 橋護岸実測図 (1:60)

京内での稲作は禁止されており、今後類例の増加を待ちたい。

また、遺物では搬入瓦、前期の瓦が特徴的であるが、西寺周辺の調査では同様に瓦の出土が報告されており、西寺造営に際してはその周縁地も関連があったことを推測させる。

(南 孝雄・桜井みどり)

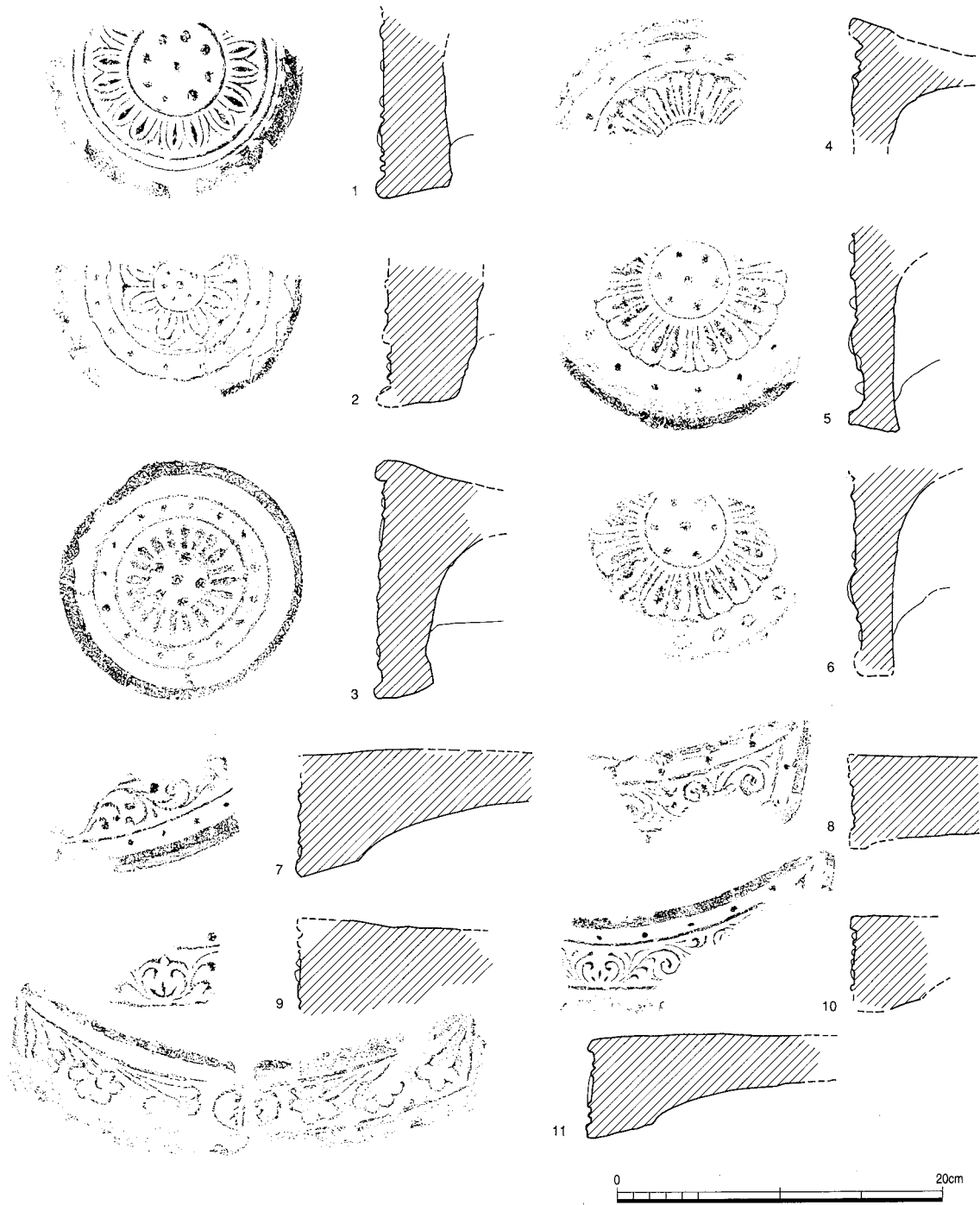


図 49 出土軒瓦実測図 (1 : 4)

III 白河街区跡

13 白河街区跡 (図版1・27)

経過 遺跡は、京都市左京区聖護院円頓美町にあり、白河街区跡となっている。1994年7月18日、事前調査を京都市埋蔵文化財調査センターが実施した結果、現地表下50cmで、川原石を敷き詰めた厚さ1mの地業のあることを確認した。遺構は、ビル建設にかかるため、発掘調査を実施することになった。当地は、六勝寺のうち尊勝寺跡の北側に位置しており、推定される寺院跡はあったが、明確な遺構を明らかにできていなかった。

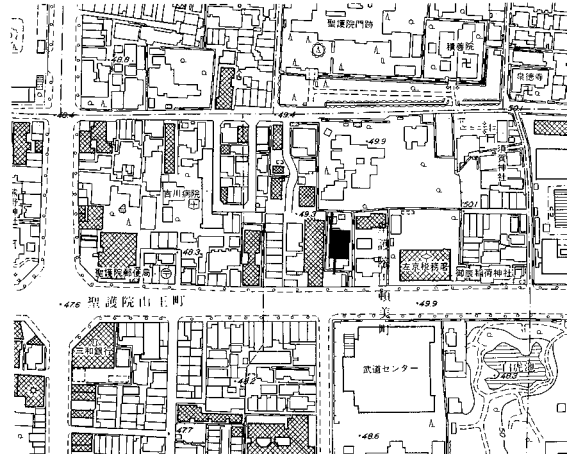


図50 調査位置図 (1:5,000)

遺構 方形周溝墓 (SD5) 南拡張区の南端において、幅1.3m、深さ0.5mの溝を確認した。溝底部から庄内式期の土器が出土し、方形周溝墓の一部であると推定できた。丸太町通の南にある京都市武道センター内の調査でも確認されていることから、ここまで広がるものとみられる。

土壌 (SK1A・1B) SB2の南側にあつて、一本の溝状になっているが、SX4によって西 (SK1A)、東 (SK1B) に分かれる。遺物の年代差は認められないので、同一の土壌であると考えた。東西約4m、南北1.4m、深さ0.35mで、黄褐色砂泥の地山を掘り込んでいる。遺物は、平安時代前期の土師器を中心として、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄釘、炭で、ほとんどは接合可能であった。何らかの儀式に使用した後に、まとめて埋められたと思われる。

建物地業 (SB2) 現地表下0.6~1.5mの間に、黒色砂泥層と川原石を交互に敷き詰めた地業が5層あった。中央トレンチにおいて南限と東限が確認できた。地業は、白川砂の柔らかい部分を除去し、比較的堅い土層になる深さ0.9mまで掘り込んでいる。ここに20cm前後の川原石を中心に、南北幅約3.1mを一区画とし東西方向の帯状に整然と石を並べている。一部分に雑然としているところや石の置かれていないところも認められた。10×12mの範囲の石の総数は、上から第1面約4,300個、第2面約4,400個、第3面約4,600個、第4面7,000個、第5面約6,500個あった。この内、攪乱の少ない第4・5面の平均をとる

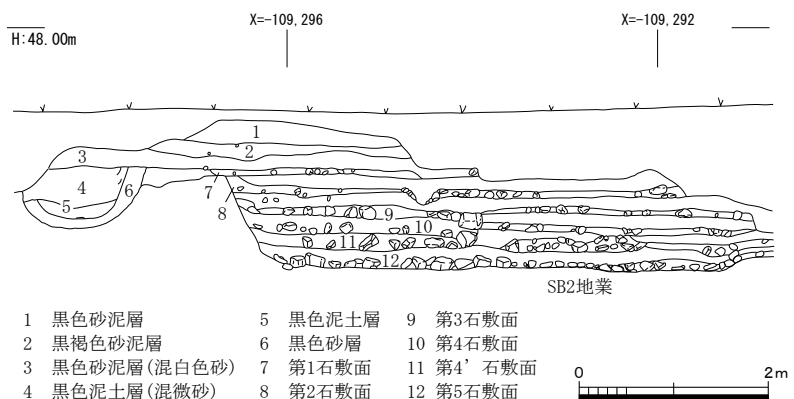


図51 SB2断面図 (1:80)

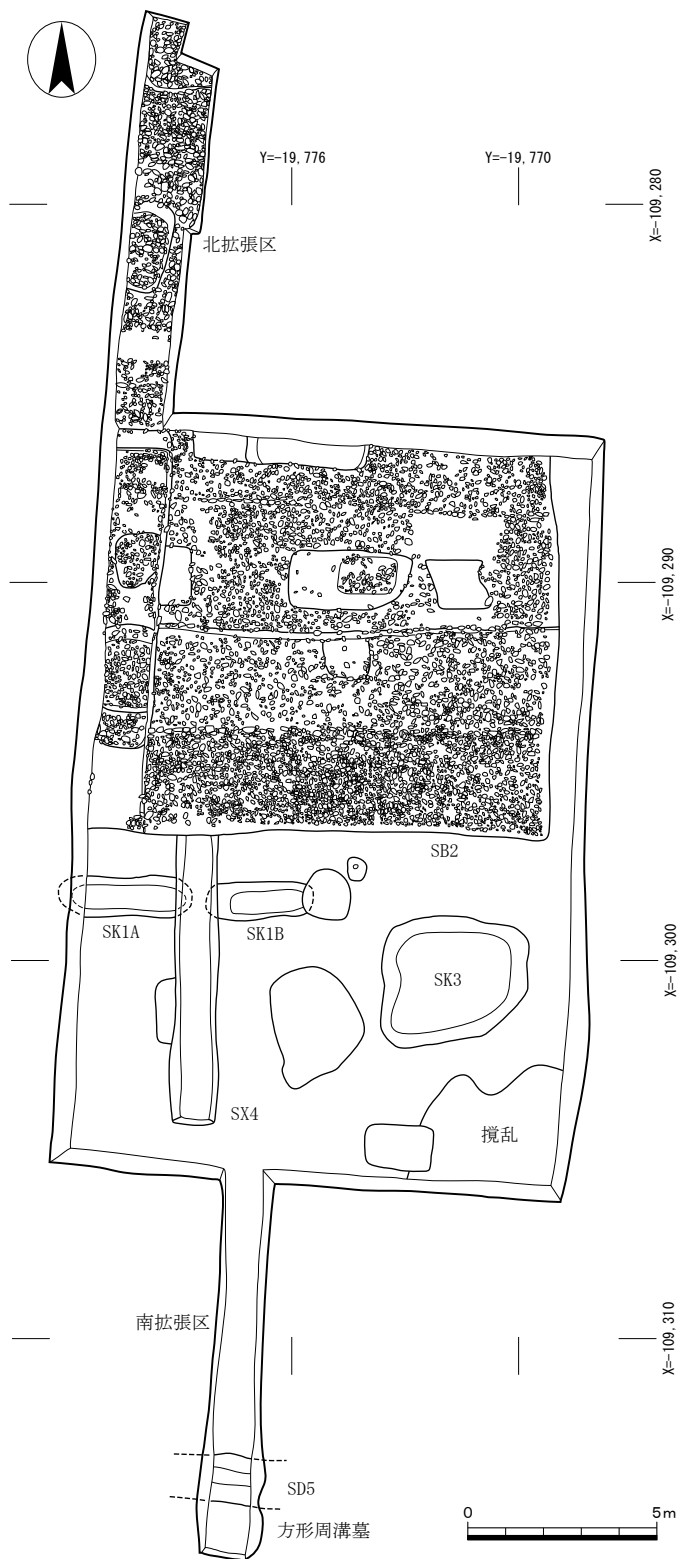


図 52 遺構平面図 (1:200)

いため、新発見であるといえる。出土した遺物は完形品が多く、炭、釘、鉄板などが含まれているため、何らかの祭祀に使用された後に廃棄された一括品であると考えている。建物地業(SB2)は南東コーナーのみの検出であって、一辺がどのくらいあるかは確認できなかった。また、北側拡張区の調査を行ったが、石敷地業はおならず、隣地に延びるのは確実である。建物位置が尊勝

と、1㎡あたり56.3個となった。

土壌(SX4) 規模は東西1.1m、南北8.0m、深さ0.5mあり、埋土は暗黒色粗砂である。土壌の南端の中層(暗褐色砂層)から京都産(手づくね)と地方産(糸切りとへらオコシ)の土師器皿・椀が完形で出土し、12世紀後半に属したものとみられよう。

土壌(SK3) 近世の耕作土層面より掘り込まれたもので、底部から土師器片と陶磁器片が出土した。

遺物 SD5からは、庄内式土器の壺の口縁部が出土した。

SK1からは、平安時代前期の土師器杯・皿・甕、黒色土器A杯・甕、灰釉陶器杯、緑釉陶器椀、須恵器鉢、釘、鉄板が出土した(図53)。

平安時代後期(12世紀後半)の遺物は、SX4から一括出土し、回転台成形の後、糸切りやへらオコシで切り離す土師器杯、皿類が大半を占めていた(図53)。

地業(SB2)からは、奈良時代から平安時代後期までの各期の遺物が含まれていたが、結局、12世紀後半に造営されたものと考えている。SB2に相伴する瓦類は確認できなかったため、瓦葺建物か否かは判断できなかった。

小結 土壌(SK1A・1B)は、この付近で類似する遺構が確認できな

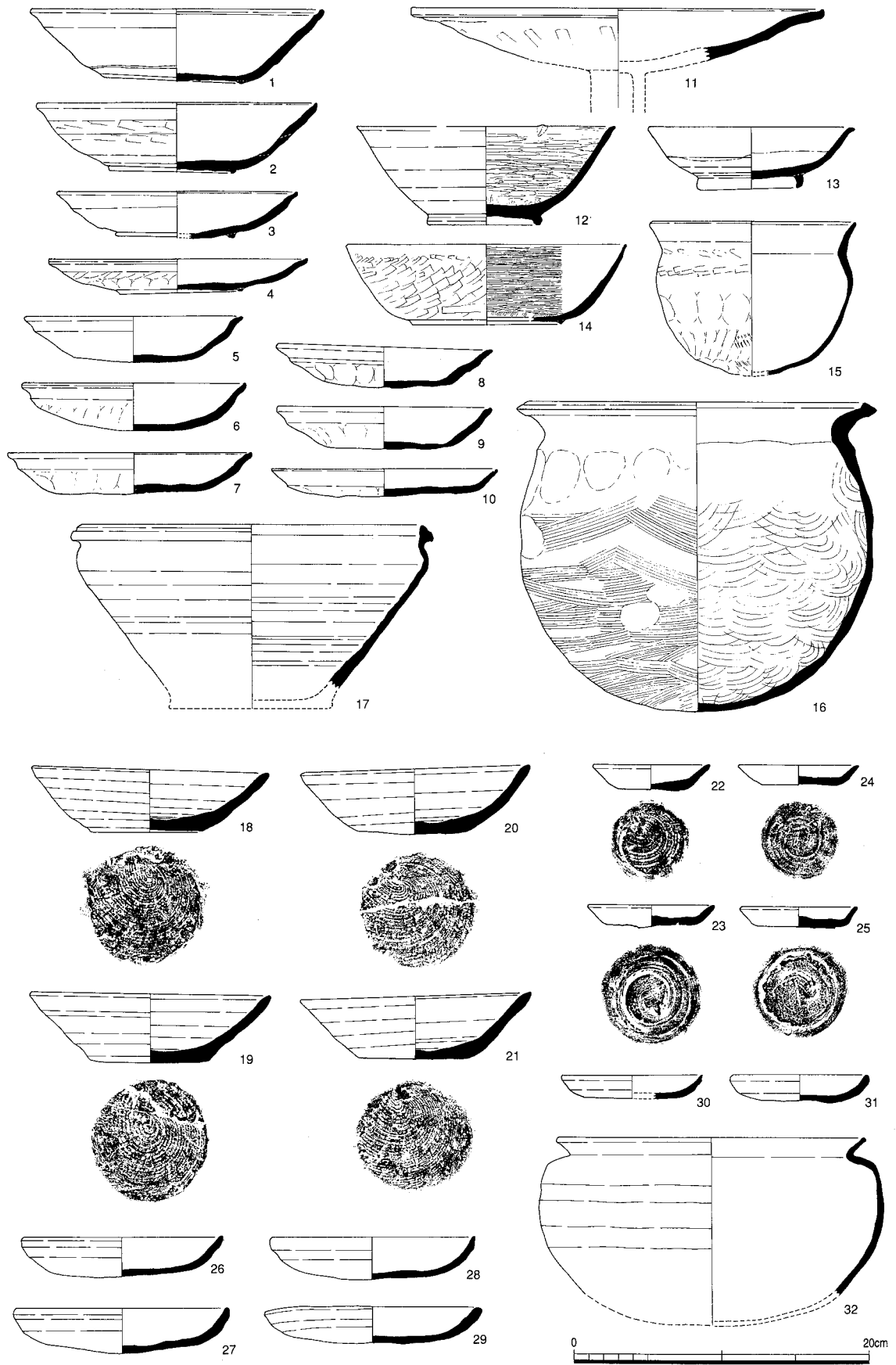


図 53 出土土器実測図 (SK 1 : 1 ~ 11・15・16 土師器 12 緑釉陶器 13 灰釉陶器
14 黒色土器A 17 須恵器 SX 4 : 18 ~ 25 回転台成形土師器 26 ~ 32 土師器) (1:4)

寺伽藍の中軸線上にあり、軸線で折り返すと正方形ないし、南北に長い建物を想定できる。南北に長い建物は敷地の中央にあるとは考えられない。一辺 28 m の建物と想定すると、塔か戒壇ではないだろうか。付近の地名が円頓美町であるため、天台宗の大乘戒壇の別名である円頓戒壇と何らかの関係があるとすれば、戒壇関係の遺構とみることができよう。また塔であるなら、大塔（多宝塔）を中心とした寺院を想定すべきであろう。 (吉村正親)

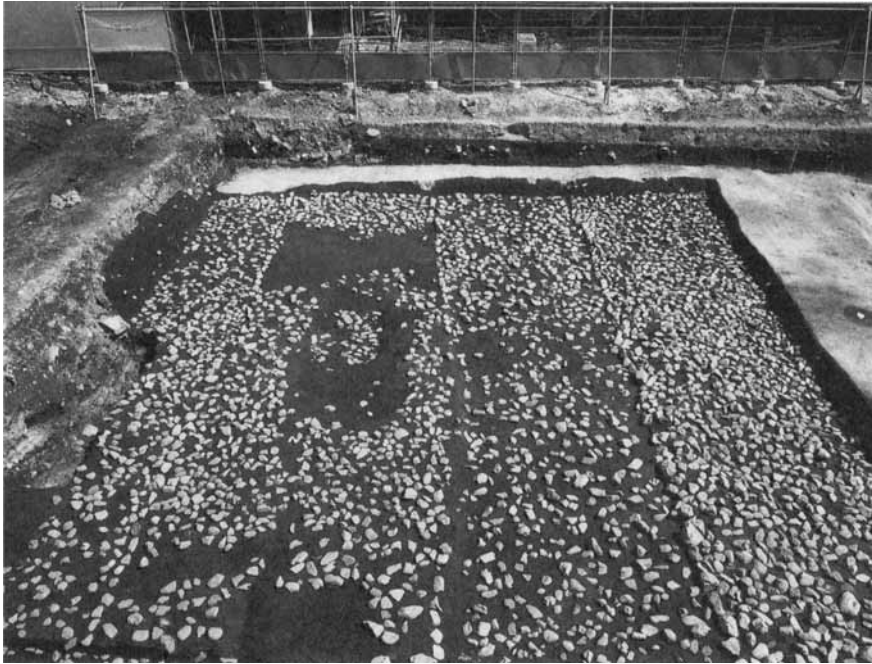


図 54 SB2 第3面 (西から)

IV 中臣遺跡

14 中臣遺跡 73 次調査 (図版 2-2・28～30)

経過 この調査は、京都市勧修寺第一市営住宅団地の建て替えに伴うものである。

調査地は、中臣遺跡がそのほぼ全域を占める栗栖野台地上の最も高位に位置し、標高は 40～42 m ある。これまでの調査では台地縁部の遺構の検出が多く、調査地周囲の立会調査などにおいて際立った成果をみなかった。ところが、今回の調査に先立って実施した立会・試掘調査では、多くの黒色土の落込や、古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴住居を確認した。当

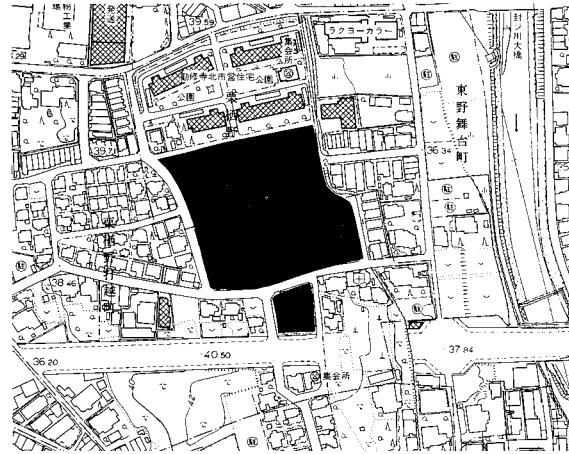


図 55 調査位置図 (1 : 5,000)

初の調査計画は、建物の建設範囲内のみを調査対象とするものであった。しかし、調査対象地の西半では遺構検出面がきわめて浅く、全面的な破壊が免れなかったことなどの理由で、開発範囲全域を発掘調査の対象とした。中臣遺跡では、これまでにない大規模な発掘調査となった。

調査はまず、先行して実施される調査対象地の外周道路拡幅工事に対応して、調査区を設定し、平成 6 年 (1994) 4 月 16 日に開始した。これと併行して、調査区北西部の 1 区、南西部の 2 区、南東部の 3 区の重機掘削を行い、1 区から調査を開始した。調査開始後、ほどなく調査対象地の南側の街区ブロックを先行調査する必要性が生じたため、5 区と D 区を設定し、これも併行して調査した。これらの調査終了後、調査区北東部に設定していた 4 区部分の重機掘削を行った。4 区は結果的に 3 区と一連の調査区になったため、新たな掘削分を含めて調査区全体を 3 区とし、4 区の名称は消滅した。3 区では、縄文時代晩期および古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構を多数検出した。10 月 17 日、すべての現場作業を終了した。なお、1 区と 2 区の遺構平面図は空中写真測量で作成し、それ以外は手描きで行った。

この間、社会科授業の一環として、5 月 17 日に勧修小学校、同 18 日に小野小学校、同 20 日に安朱小学校、9 月 8 日に山階南小学校の各 6 年生生徒の見学を受け、検出遺構と出土遺物の公開展示・説明に努めた。8 月 5 日には、京都市考古資料館の夏期教室を行い、中学生 49 名が、竪穴住居の発掘と遺物整理作業の体験授業を行った。9 月 3 日には現地説明会を実施し、調査成果の公開に努めた。

遺構 調査地は台地の頂部にあたり、その中でも高位の 1 区と 2 区は遺構面が著しい削平を受けている。盛土層・表土層もきわめて薄く、そのために残存する遺構が少ない。一方、台地頂部から東と南に向かって緩やかな斜面を形成する 3 区の東半と南半に遺構が集中する。部分的に 1 m 程度の黒色の表土層が残る地点もあり、遺構が良好に保護されている。

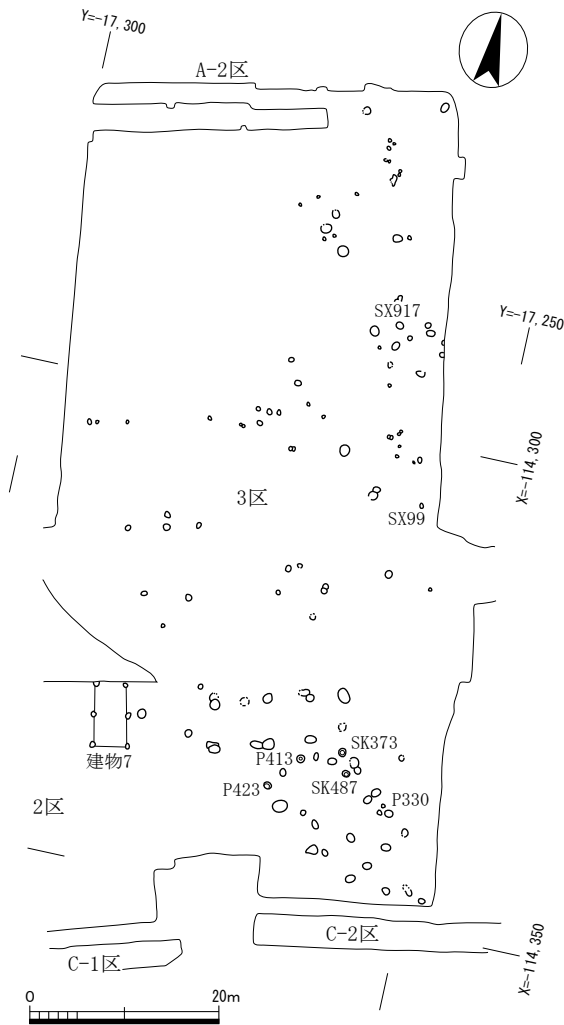


図 56 縄文時代遺構平面図 (1:800)

縄文時代晩期の遺構は、2区の東部および3区の南半から東半にかけて集中して検出した。土器棺墓、掘立柱建物、立柱、土壌などがある。

土器棺墓2基を検出した。SX 99は、甕1個体を棺に転用し、横倒しにして墓壇に収めたものである。上半は削平され土器片を失する。SX 917は、墓壇内に、連続爪形文を有するほぼ同型式の甕2個体を合わせ口にて棺を造る。2個体とも底部を欠く。

掘立柱建物(建物7)を1棟検出した。東西1間×南北2間以上で、柱の抜き穴を有する。柱間は東西方向の1間分が約3.8m、南北方向がやや狭く柱間約3.3mある。

立柱を5基検出した。P 330・413・423は、柱痕の直径が約40cm、掘形の直径が60～80cmある。P 487は、掘形の規模は上記の3基と同様であるが、柱痕は短径25cm、長径45cmの楕円形を呈する。P 373は、柱痕の直径が約50cm、掘形の直径が約100cmあり、ほかより一回り大きい。これら5基の立柱の分布

は特に秩序だっていないが、直径12m程度の半円形を呈するようにもみられ、環状木柱列の一部の可能性はある。

土壌群は約60基検出した。規模と形態、および埋土の堆積状況で幾つかの類型に分類できるが、長径もしくは直径が80～100cmの楕円ないし円の平面形を呈し、人為的に一気に埋め戻されているものが一般的である。深さは様々であるが、円形のもの概して深く、80cm以上に及ぶものがある。

以上の遺構は、おおむね滋賀里ⅢB式期のものである。しかし、出土遺物の中には、ごく少数ではあるが突帯文土器の破片もみられ、滋賀里Ⅳ式期以降に下るものが存在すると考える。

古墳時代から飛鳥時代にかけての遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、柱穴、土壌などがある。

竪穴住居は15棟を検出した。方位は一定していない。竪穴16・17以外は平面的な規模が明らかで、大きさによって大型、中型、小型の3種類に分類できる。方形ないしは長方形の平面形であること、一辺に竈を有すること、黄褐色粘土を貼って床面を造ることなどの諸点はすべての竪穴住居に共通する。大型(竪穴3・9)は、1辺7m以上あり、4箇所の支柱穴と周溝を有する。中型(竪穴1・2・5・6・11・13・14)は、1辺5m前後あり、4箇所の支柱穴と周溝を有し、

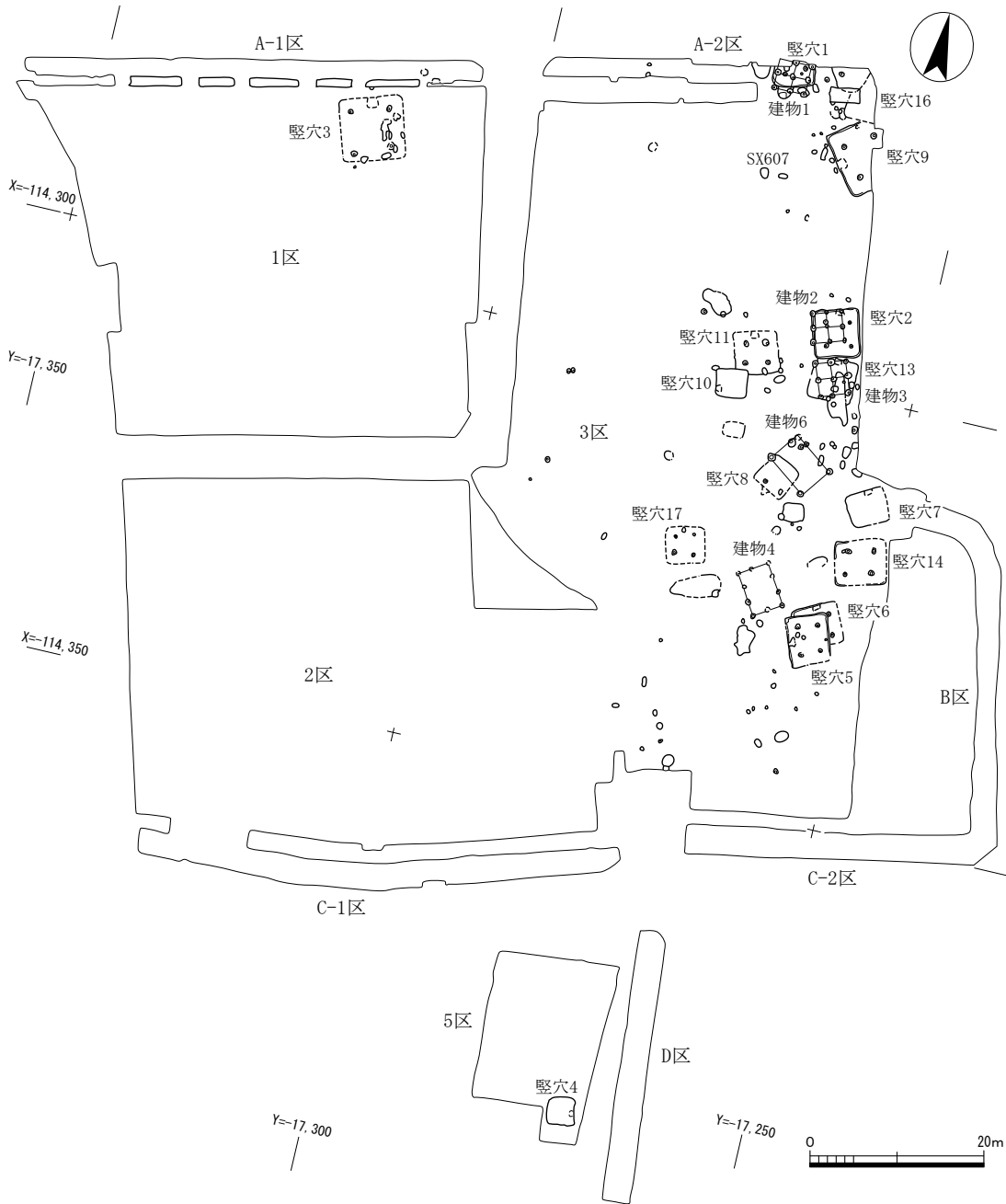


図 57 古墳時代後期から飛鳥時代遺構平面図 (1:800)

竈の向かって右側に隣接して貯蔵穴を有する。小型（堅穴4・7・8・10）は、1辺3～4mあり、主柱穴と貯蔵穴はなく、周溝はめぐらないのが一般的である。出土遺物から、大型は6世紀後半から7世紀第1四半期、中型と小型は7世紀第2四半期から第3四半期にかけてのものと同断できる。なお、堅穴5の竈対面の壁ぎわ床面下に土器の埋納遺構を検出した。土師器小型甕を正位に置き、土師器杯で蓋をしたもので、いわゆる「胞衣壺」の遺構と考える。

掘立柱建物は3区とB区で5棟検出した。建物1～3は2間×2間の総柱で、柱間は約1.7mある。柱穴の掘形は隅丸方形で一辺約60cmある、柱痕は円形で直径約20cmある。建物1は、ほぼ南北方向にのり、建物2・3は北で西に振る。建物4は2間×3間で、柱間は1.5～2.0mと一様ではない。柱穴の掘形は隅丸方形のものや円形のものがあり、これも一様ではない。方位は

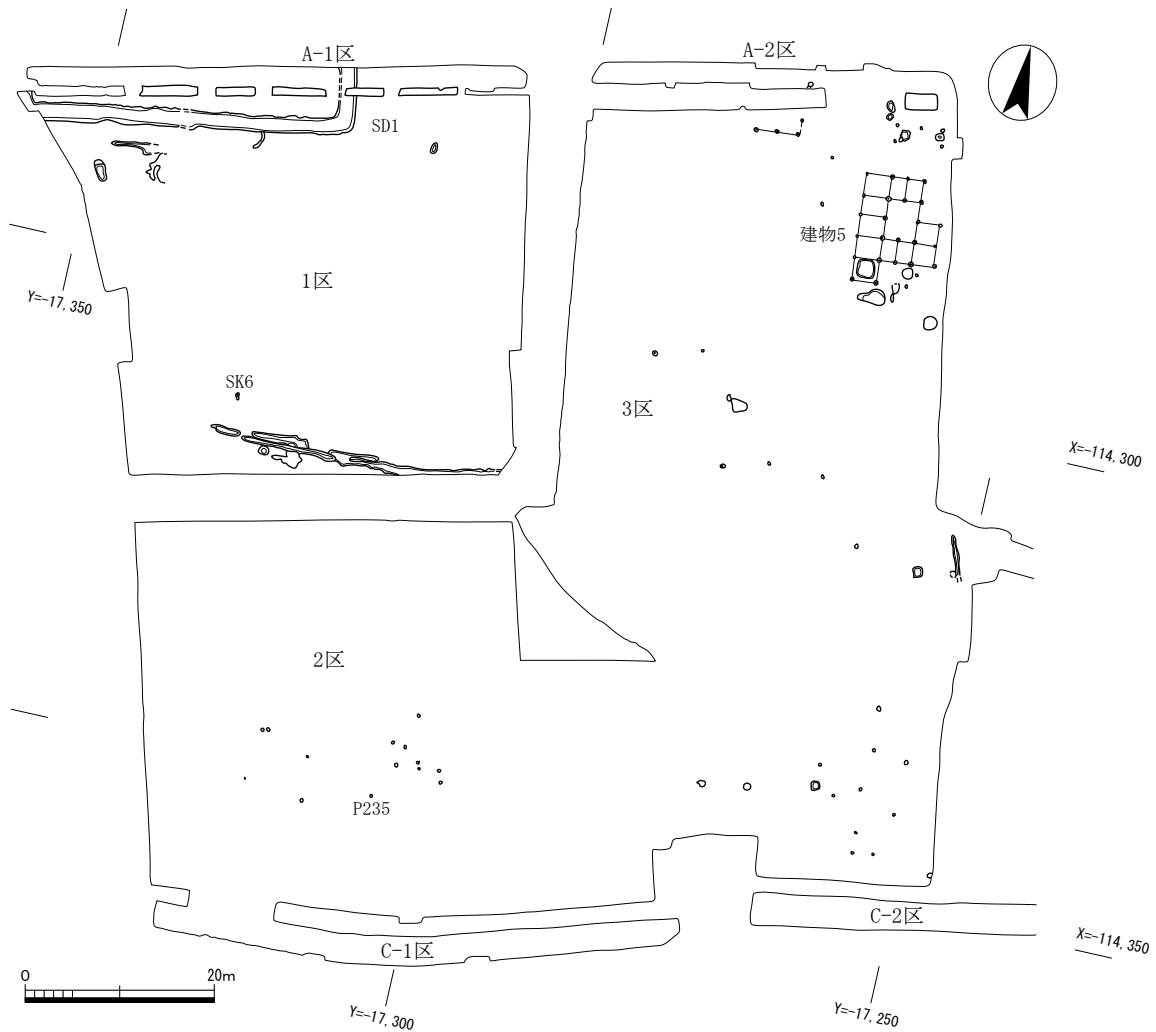


図 58 平安時代以降遺構平面図 (1:800)

北で西に振る。建物 6 は 1 間×1 間の長方形の平面形で、柱間は東西が約 5.2 m、南北が西側が 3.6 m、東側が 4.1 m ある。柱穴掘形は直径 80 ~ 100 cm、柱痕は直径 40 ~ 50 cm あり、大型の「楼」風の建物と考える。建物 6 は堅穴 8 によって切られているが、堅穴群と出土遺物の時期に差はない。建物 1 ~ 3 は堅穴住居の埋土を切って造られている。出土遺物は 7 世紀第 3 四半期から第 4 四半期に下るものを含み、一部の堅穴住居と併存するか、後続するものである。建物 4 からは時期を明瞭に示す出土遺物がないが、同様に理解する。

また、長方形の平面形を呈する SK 607 は土壙墓の可能性はある。このほかに、建物としてまとまらない柱穴やゴミ穴と思われる土壙などを多く検出している。

平安時代の遺構は、調査区全体にわたって散見できるが、1 区の南半から 2 区にかけて比較的多い。2 区で検出した土器埋納ピット P 235 は、柱穴状の掘り込みに完形の土師器皿 1 個を納める。時期は 11 世紀である。

鎌倉時代の建物 5 は 3 区の北部から B 区にかけて検出した。2 間×2 間の身舎の 4 面に底を有する構造である。柱穴は柱痕のみを残すものと、掘形内を固めて浅い位置に礎石を置くものとが

ある。東面の底は南から2間分のみある。建物南西に1間×1間の張り出し部が取り付け、その中に土壇状の凹みがある。これを牛馬の小屋と考える。建物南東隅の一面には土間状の堅い面と焼土の広がりを検出し、これを台所と考える。時期は13世紀である。この時期の柱穴は、3区東半の全域にわたって散見できる。

室町時代の遺構に火葬墓と濠がある。火葬墓SK6は楕円形の掘形の中央に常滑産の三筋壺を埋設し、前後に角礫を配したものである。土師器皿で蓋をした壺の中には、土やほかの異物を一切含まない火葬骨が口縁部近くまで詰め込まれる。明らかに厚さの異なる2種類の頭蓋骨片がある。時期は14世紀である。濠SD1は1区から一部A-1区にかけて検出した。断面形はU字で、検出幅約170cm、残存深50～60cmある。コの字形に曲がり、館や村落を囲う施設と考える。時期は15世紀である。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、堅穴住居などから出土した古墳時代後期から飛鳥時代にかけての土器類が主体を占め、縄文土器がこれに次ぐ。縄文土器は、縄文時代の遺構以外に、後世の遺構中からも多量に出土している。

縄文土器は数多く出土しているが、小片が大半を占め、全体の形を復原できるものは少ない。また、早期の押型文土器の細片が1点出土しているほかは、すべて晩期である。土器棺墓SX99に使用されていた縄文土器は、端部に刻み目を有する波状口縁の甕である。頸部外面は貝殻条痕をナデ消す。胴部から底部の外面はヘラケズリする。内面はヨコ方向のナデである。土器棺墓SX917出土の縄文土器の実測図を(図59)に掲げる。ほぼ同型の甕2個体を用いている。(2)は刻み目を有する平縁の3箇所突起を有し、突起下の頸部にタテ方向の連続爪形文を施す。頸部と胴部の境界にはヨコ方向に連続爪形文を施す。頸部外面の器面調整はヨコ方向の貝殻条痕、胴部から底部の外面の器面調整はヘラケズリである。内面はヨコナデし、平滑に仕上げている。(1)も、同様の型式的特点を示すが、3箇所に突起を有する緩やかな波状口縁である点が異なる。その他の各破片も、ほとんどが無文で貝殻条痕もしくはヘラケズリの器面調整を残すものが大半を占める。外面をヘラケズリするものには内面を黒色磨研するものがある。内外面とも黒色磨研するものもある。器種は、甕・深鉢類のほか、浅鉢・椀類がある。これらはおおむね、滋賀里ⅢB式の範疇に収まるものである。また、少量ながら刻み目突帯を有する破片が出土しており、滋賀里Ⅳ式以降に下る破片も含まれていると考える。これ以外にこれらと同時期と考える北陸系の土器片が1点出土している。縄文時代の石器類は、少量出土して

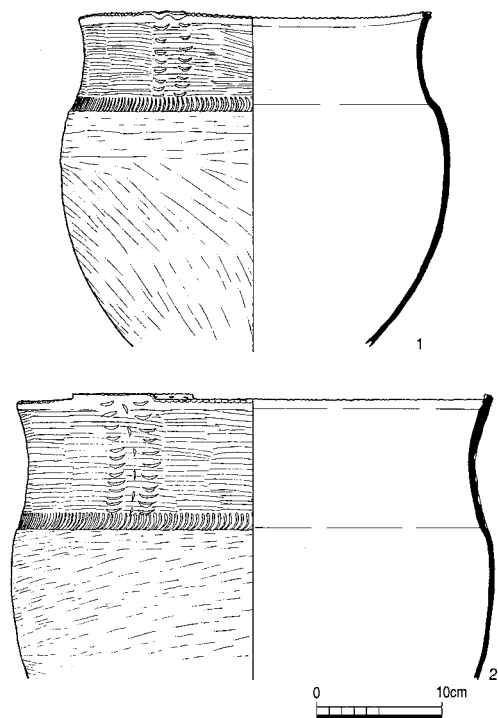


図59 S X 917 出土縄文土器実測図(1:6)

いる。サヌカイト製の利器類は石鏃8点のみである。その他に、叩き石、石皿、石刀、石棒などがある。石棒のうちの一つは、飛鳥時代の竈穴10の竈付近で出土し、竈の支柱石として利用されていた可能性がある。

弥生土器は、前期の壺破片が後世の遺構中から混入して、1点出土したのみである。D区の倒木痕内から大型蛤刃石斧が1点出土している。また、上記した石鏃8点のうちの一つは、弥生時代の石鏃に型式的に類似したものがある。

古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器・土師器は、竈穴住居、柱穴、土壙などから多く出土している。須恵器は蓋杯類を主体とし、ほかに高杯、甕、平瓶、瓶、甗などがある。陶邑TK 209型式からTK 46型式^{註1}に併行する時期のもので構成される。土師器は、長甕、小型甕などの煮沸具が大半を占め、ほかに暗文を有する杯類の出土が目立つ。土師器杯類は、飛鳥I～III期^{註2}に併行する時期のものである。(図60)に竈穴2・6・11出土の須恵器(1～13)と土師器(14～22)の実測図を掲げる。須恵器杯Gを主体とする供膳具と多様な土師器甕からなる煮沸具を主体として土器様式を構成する。とりわけ体部が張り口縁部が外反する須恵器杯G(9～12)の多量な出土は特徴的で、中臣遺跡の竈穴住居出土の土器群としては、これまでにない様式的特徴を示す。7世紀第3四半期に下る土器群と考える。また、各竈穴住居内の床面に残されていた礫類を採取

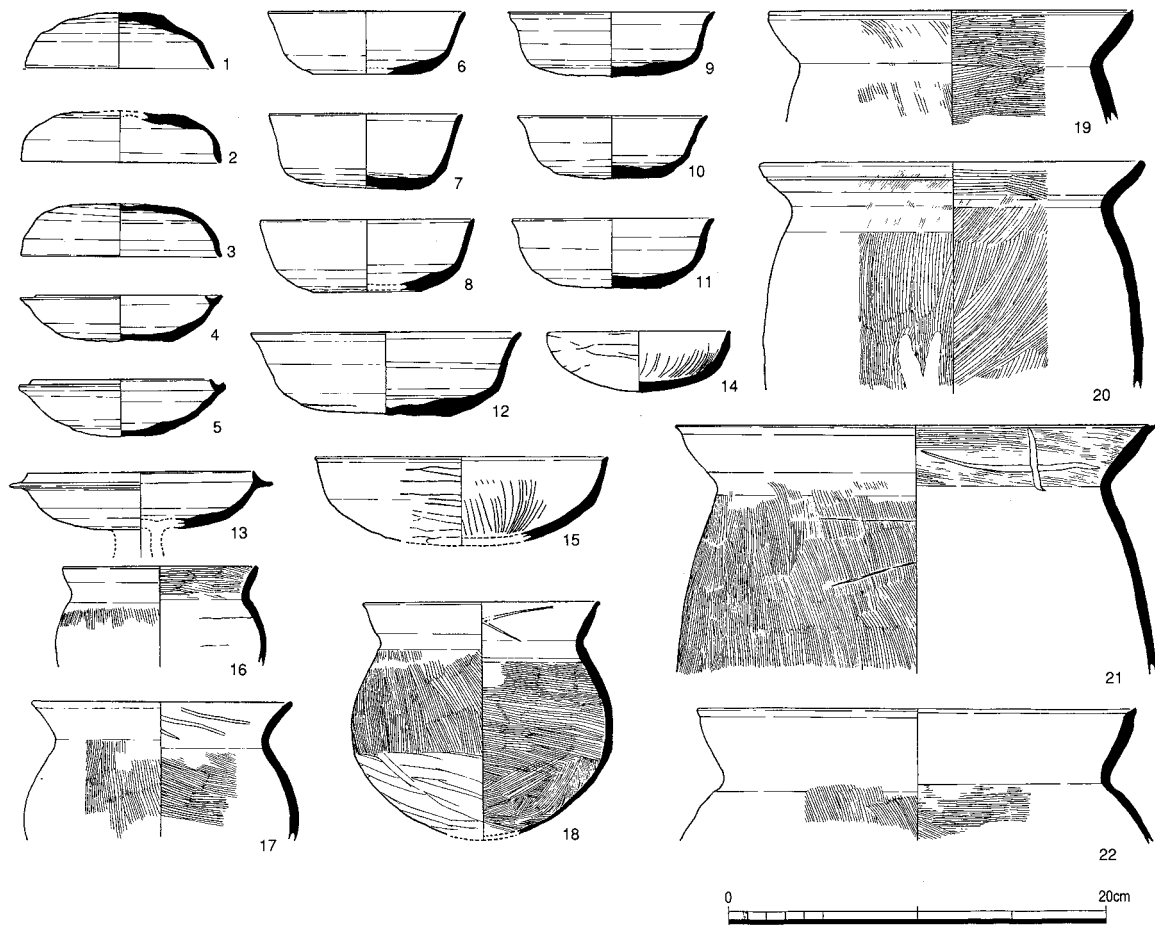


図60 飛鳥時代土器実測図(竈穴2床面上:5・7・9・10・12・21 竈穴2竈:20
竈穴2貯蔵穴:13・15 竈穴6竈:18・19・22 竈穴2貯蔵穴:3・16・17
竈穴11床面上:4・6・11・14 竈穴11竈:1 竈穴11貯蔵穴:2・8)(1:4)

している。これらの中には明らかに研磨の跡を残すものが多い。金属器では、鉄製の刀子と思われるものが、竪穴 11、土壙墓の可能性のある S K 607 などから出土している。竪穴 5 と竪穴 11 からは鉄滓が出土している。

奈良時代の土器は須恵器蓋杯片が少量のみ出土している。平安時代の土器は、土器埋納ピット P 235 出土の土師器皿と S K 6 の蔵骨器のほかに少量出土している。鎌倉時代の土器は、建物 5 などの柱穴から出土している。土壙などからのまとまった出土はないが、平安京内に比べて、明らかに瓦器碗の占める割合が高い。室町時代の土器は S D 1、S K 6 以外からは、ほとんど出土していない。

小結 縄文晩期の立柱・建物は、これまで東日本で多く検出されていた遺構である。ごく最近、近畿地方でも検出されており、同様の例として重要である。

飛鳥時代の竪穴住居群の検出は、中臣遺跡における竪穴住居の終焉を考える上で重要である。今回調査の竪穴住居のうち最も新しいと考える竪穴 2、10、11 などは、7 世紀第 3 四半期に下るものと思われ、併存するか後続する掘立柱建物 4 などの存在から考えて、中臣遺跡では、この時期に竪穴住居の建設がおわるものとみなすことができる。

これらの竪穴住居群と掘立柱建物群が営まれた 7 世紀は、律令国家の形成期にあたり、建物の分布と機能およびその変遷は、当該地に居住した人々の社会的存在形態の変化と当時の政治状況を色濃く反映しているものと考えられる。(内田好昭・高橋 潔・平方幸雄)

註 1 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

註 2 西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986



図 61 S K 6 (北東から)

V 長岡京跡

15 長岡京左京一条三坊・東土川遺跡 (図版2-3・31・32)

3次調査

経過 調査に先立ち試掘調査を行った結果、長岡京跡、古墳時代の遺構が良好に残存していることがわかったため、京都市下水道局と協議の上、発掘調査を実施した。当調査は、久世ポンプ場建設に伴う3回目の調査（長岡京左京第340次調査）で、長岡京左京一条三坊十一町の推定地および弥生時代から古墳時代の東土川遺跡にあたる。調査区は1次発掘調査（長岡京左京第203次調査）の南側に位置する。

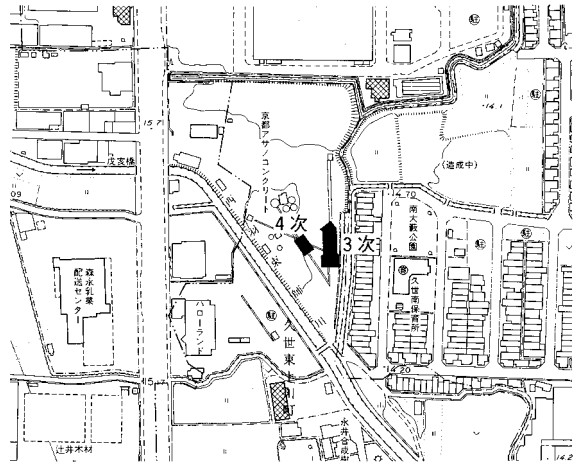


図62 調査位置図 (1:5,000)

遺構 トレンチ北西部分では古墳時代の陸部、トレンチ北東から南東、南西にかけての流路2

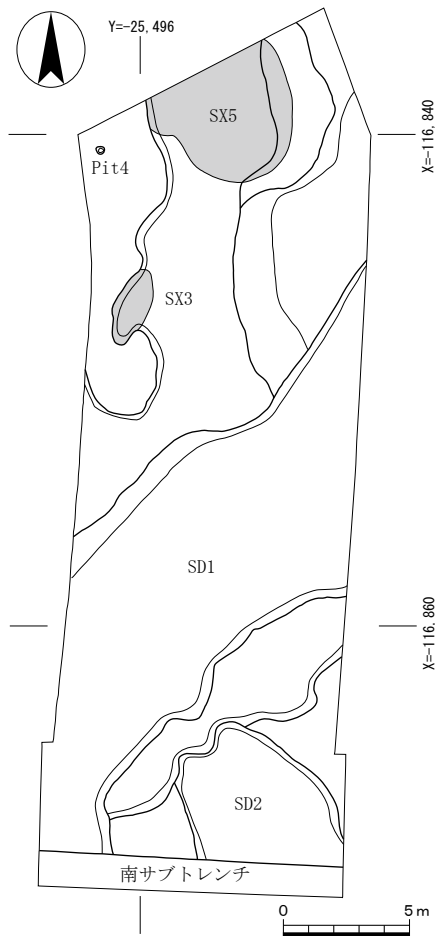


図63 3次調査区遺構平面図 (1:300)

条を検出した。また試掘調査時に確認された長岡京跡の遺構面は、流路上面包含層を遺構面と誤認しており、遺構成立面は試掘で検出した面よりさらに平均1.5m下がる。中央から南側部分では、少量の遺物を包含する砂礫層を確認したが、明確な遺構は検出できなかった。

砂礫包含層下層からは、南東端に流路SD2、中央東部から南西に流路SD1を検出した。SD2は中央部分でSD1に切られる。SD2はSD1の分流かよどみ部分であると思われる。SD1の規模は幅5m、延長15m、深さ0.4~2.0mと確認できた。またSD1の土器出土状況からみて長岡京期以降の土器が少量ではあるが、砂礫層上面の砂層から出土していることから、この流路ないし低湿地は、長岡京期以降に埋没したものとみられる。

トレンチ北側では、東に下がる緩斜面で土器、獣骨、木器などが多量に投棄された状態の土器集中部分SX5を検出した。またトレンチ北側の中央部分の緩斜面では、土師器甕・壺・短頸壺・高杯などが投棄された

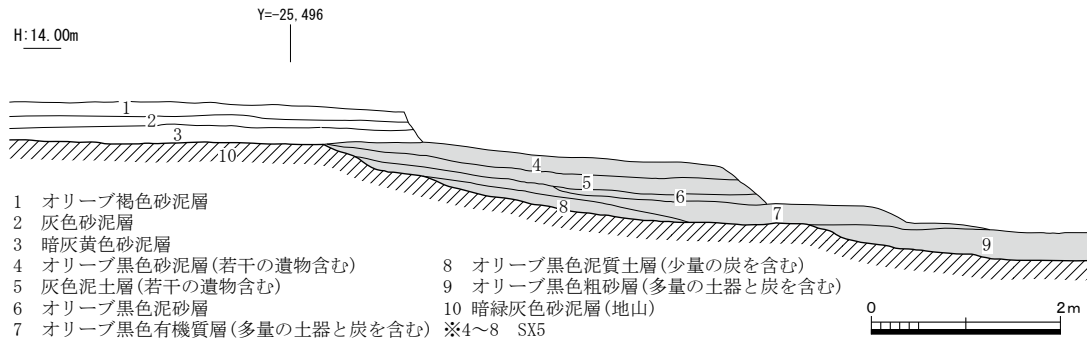


図64 3次調査区北壁断面図(1:80)

状態の土器溜SX3を検出した。

トレンチ北西部分の陸部分については、遺構は少なく柱穴1基(Pit 4)を検出することどまった。時期は北側の緩斜面の遺物と同じく古墳時代前期である。

南サブトレンチでは、古墳時代の5世紀末から6世紀の須恵器杯・甕を包含する砂礫層を確認したが、流路の最下層は4.5m以上下がり、安全に掘削する深度を越えるため中断した。

遺物 大半が土器類で、古墳時代、長岡京期から中世のものがある。古墳時代の土器には、庄内式・布留式併行期の土師器小型丸底小壺・壺・甕・大型壺・高杯・器台が大半をしめる。布留式併行期の土師器には、河内産、山陰地方産、長岡周辺の製品がある。また須恵器には、杯・甕・甕などがあり、特にTK 216併行期の杯身・甕も出土している(図67-13・24・26)。その他には、木製品の農耕具・加工痕のある用途不明品、獣骨・下顎骨・その他の骨が出土した。長岡京期以降の遺物については、須恵器瓶子、瓦器椀、青磁椀、丸瓦、木器・斎串・曲物などが出土したが、きわめて少量である。それ以外に鞆羽口、窯体、金属片が出土したが時代については不明である。

小結 調査の結果、長岡京期の遺構は検出されず、古墳時代の柱穴1基と、流路2条を検出した。この流路は、調査区の大部分を占め、古墳時代前期に成立、中世には完全に埋没したことが出土遺物からわかる。出土した遺物の大部分は古墳時代のもので、前期からのものを含み、古墳時代の堅穴住居群の成立を考える上で好資料となった。特に今回出土したTK 216併行期の須恵器杯身・甕などは出土例がきわめて少なく好資料といえる。



図65 SX5(北西から)



図66 SX5出土須恵器甕

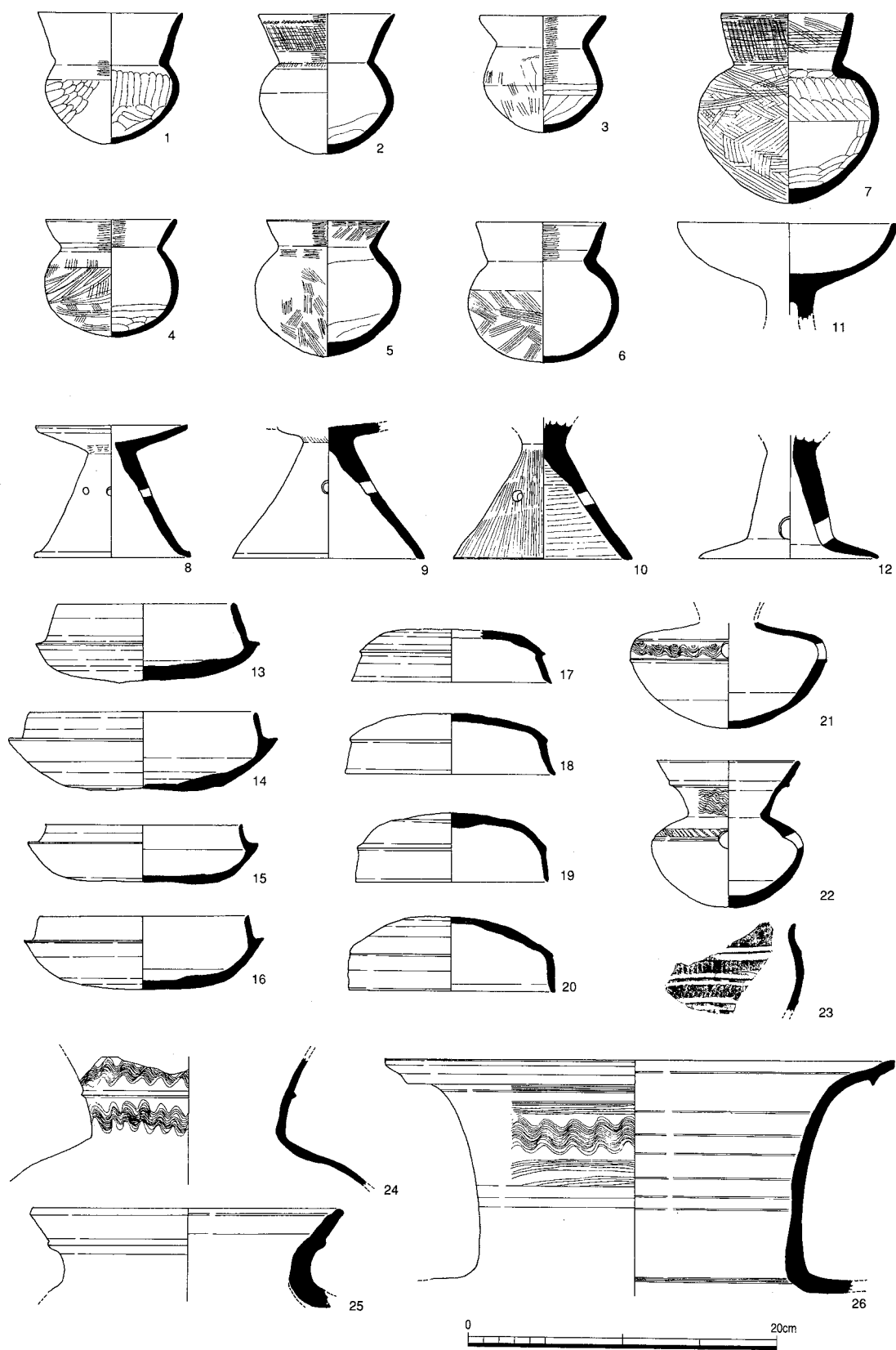


図 67 3次調査出土土器実測図 (SD 1 : 7 土師器 21・25 須恵器
 SD 2 : 3・9 土師器 19・20・22 須恵器 SX 3 : 18 : 23 須恵器
 SX 5 : 1・2・4 ~ 6・8・10 ~ 12 土師器 13 ~ 17・24・26 須恵器) (1 : 4)

4次調査

経過 調査地は、3次調査地の西側にあたり、前回の調査成果から古墳時代～長岡京期の複合遺跡であることがわかっている。当調査は久世ポンプ場内では4回目の調査(長岡京左京第347次調査)であり、長岡京左京一条三坊十一町推定地にあたり、長岡京戌亥遺跡の南側にもあたる。また弥生時代から古墳時代の集落跡の東土川遺跡にも隣接するため、成果を期待した。

遺構 現地表下約2.7mの黄褐色泥土層上面で遺構を確認した。長岡京の条坊に関する遺構は検出できなかったが、建物としてまとまらない古墳時代から長岡京期の柱穴を検出した。柱穴は主に古墳時代の遺構で柱穴40基、溝3条、土壇3基を検出したが、遺物はいずれも小片で数量も少ない。中・近世の遺構も明確なものはない。

遺物 出土した遺物はすべて小破片で、完形遺物の出土はない。時期は古墳時代から中・近世の遺物である。古墳時代の遺物は、土師器の甕・壺がある。中・近世の遺物は、上層からの混入とみられる青磁1片と染付1片が出土した。柱穴Pit38からは、時期不明の石製品の破片が出土している。

小結 調査の結果としては、古墳時代の遺構を3次調査の北西部分で検出し、古墳時代の陸部が西側部分に広がっていることが確認できた。遺構面は現地表下約2.7mで検出し、過去3回の調査から、古墳時代の集落跡は、1次の調査地を中心とした比較的狭い範囲に限定できそうである。長岡京跡の明確な遺構は確認できなかったが、古墳時代の遺構成立面を被っている緑灰色泥砂層の堆積は長岡京期のもので、少量の遺物を含む整地層であることがわかった。溝などからの土器出土量からみて、竪穴住居の検出数が少ないのは、長岡京期以降の削平のためと考えられる。

(永田宗秀)

註 百瀬正恒「長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概報』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993

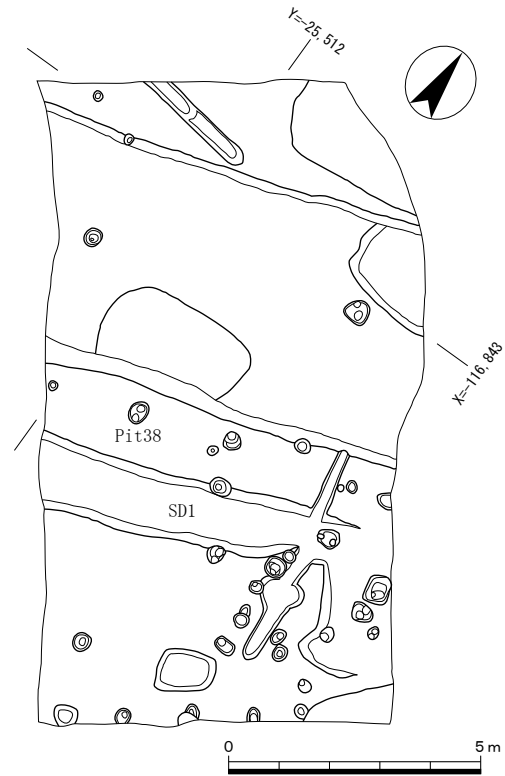


図68 4次調査区遺構平面図(1:150)

16 長岡京左京六条三坊・水垂遺跡 (図版2-3・33～35)

経過 この調査は、平成2年度から継続して実施している京都市清掃局の埋立処分地拡張事業に伴うものである。今年度はC区(C1・2区)の中世(鎌倉・室町時代)、平安時代、古墳時代の遺構を対象として実施した。C1区では古墳時代の遺構面が2面あり、上面を今年度、下面は次年度の対象とした。

さらに、前年度実施したE区とD区の間、長岡京期の遺構と平安時代の条里遺構の状況を確かめるために、補足調査1・2トレンチを設定し調査した。

また、一連の調査区から南東に約300mの地点で、同事業に関連する排水機増設工事が計画され、これをH区として調査した。

遺構 以下、各調査区ごとに遺構の状況を述べる。

[C区]

遺構は大別して古墳時代、平安時代、中世(鎌倉・室町時代)のものがある。この調査区では

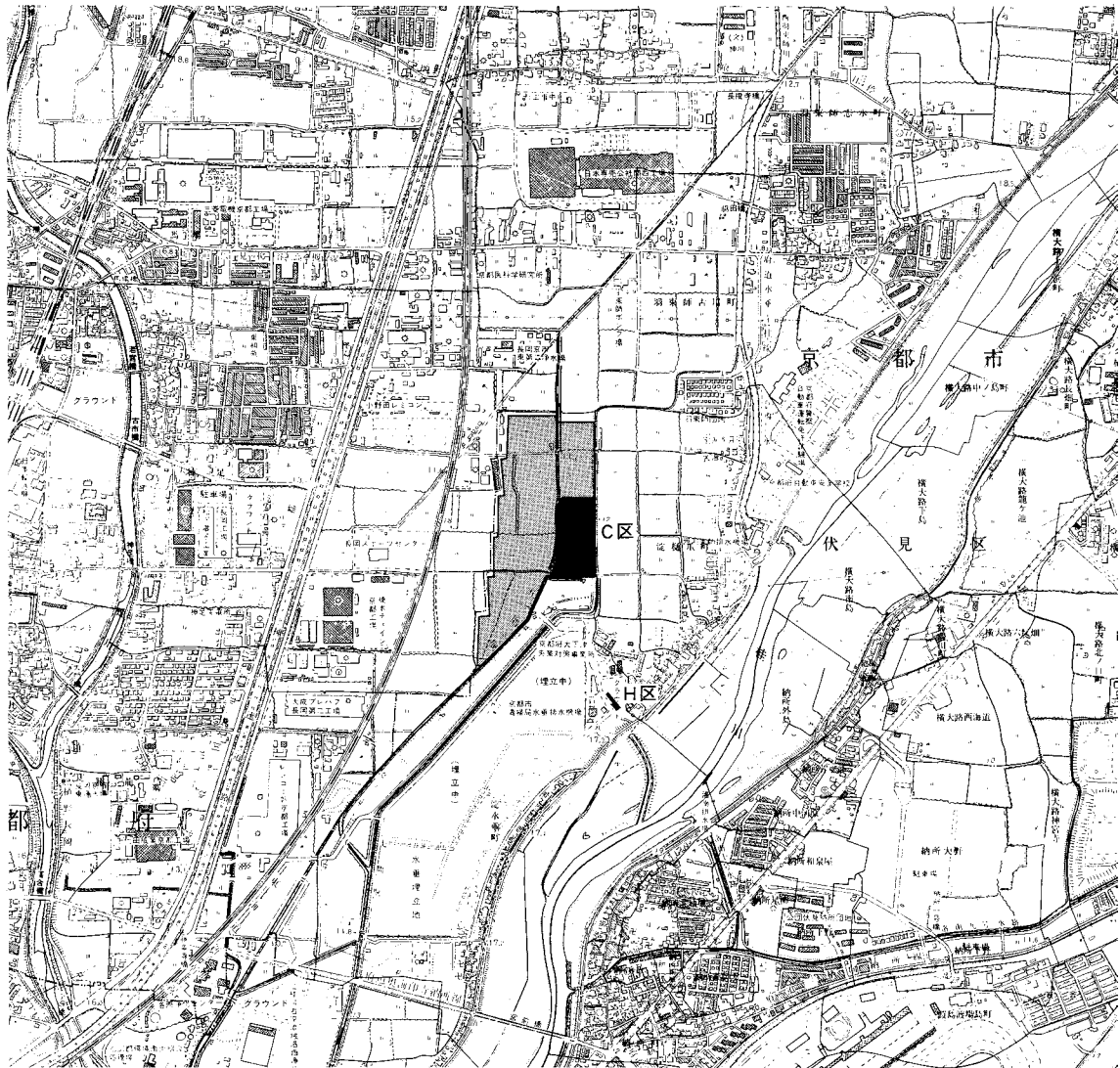


図 69 調査位置図 (1 : 5,000)

長岡京期の遺構は検出できなかったが、平安時代の堆積層の下が長岡京期の遺構面にあると考えられる。

古墳時代の遺構 調査区の東部に幅約10 m、深さ2.0 mのほぼ南北方向に流れる河川がある。これと同規模と考えられる河川の一部を調査区の東端で確認しており、これらが調査区の中央部で合流し、その後東南流している。いずれの河川も堆積層は大きく2層に分けることができ、下層には6世紀前半頃の洪水による砂礫層が、上層には腐植土層がある。河川内には水量調節用と考えられる堰が5箇所認められ、これらは、いずれも、下層の砂礫層が堆積した後に構築されている。

河川の西側では調査区の北部にE区から続く、耕作に関連すると考えられる小穴群が認められ、所々には畝状の遺構も認められる。また、河川と平行した方向で溝も数条ある。

調査区の南部ではF区で検出した東西方向の古墳時代から飛鳥時代の溝が、東側の河川に流れ込んでいる。

平安時代の遺構 調査区の東部で河川を検出している。これは古墳時代の河川をほぼ踏襲しており、10世紀頃の洪水で砂礫層が厚く堆積している。

また、調査区のほぼ中央では条里坪境の位置に東西方向の溝を確認している。

鎌倉・室町時代の遺構 古墳時代から続く河川の跡は低湿地状になってこの時期まで残っている。こうした河川の中に南北約20 m、東西10 m、深さ1 mの池状遺構がある。池の東岸部は木杭で護岸されており、所々に径30～50 cmの石を配置している。また、池には条里の坪境と考え

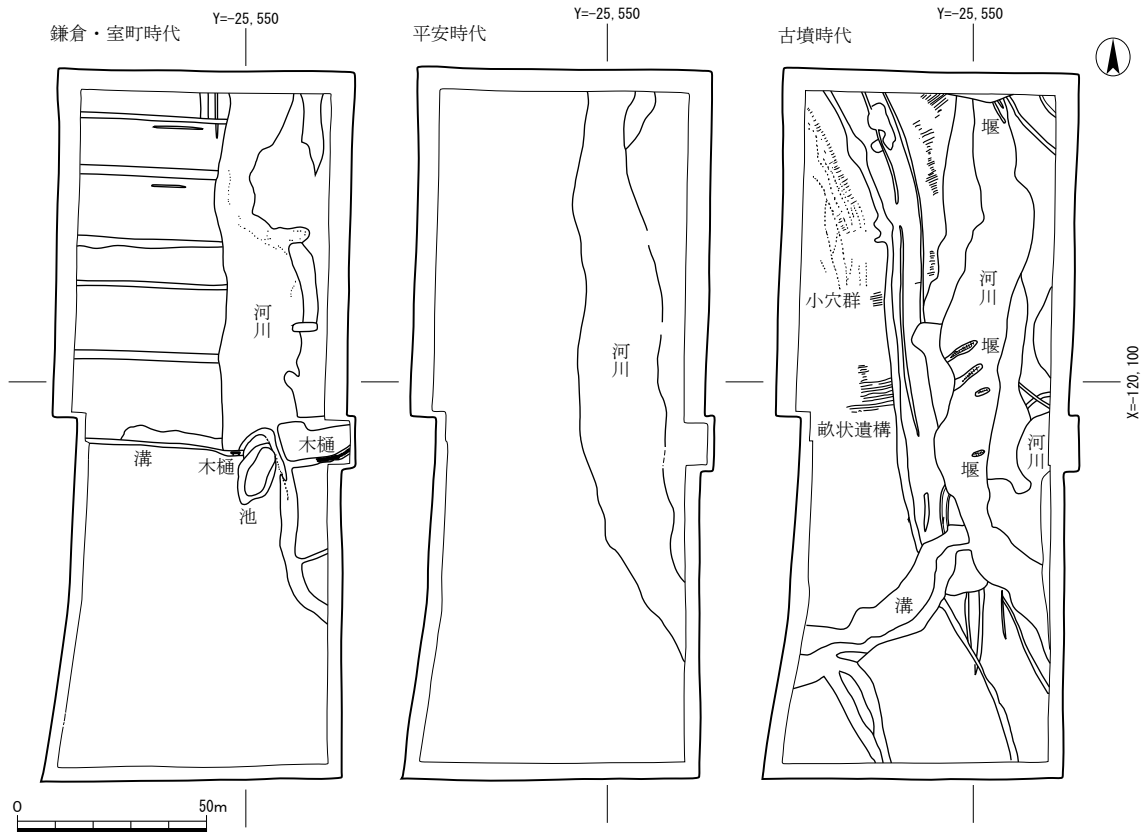


図70 C区遺構平面図(1:2,000)

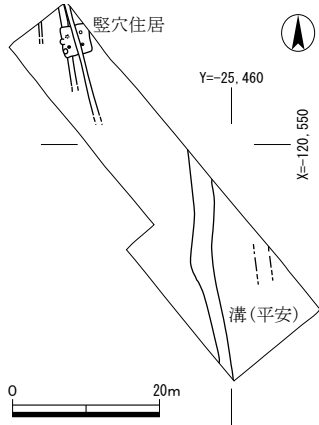


図 71 H区遺構平面図 (1:1,000)

られる溝が東西から通じており、池近くには2箇所の木樋がある。西側の木樋は残存長2.5m、幅0.2m、高さ0.2mで、角材をコの字にくり貫いたものを、開いた側を下に伏せた状態で据えていた。東側の木樋は2種類からなり、池に近い側は両端を切り欠いた丸木舟を逆向きに伏せた状態で、残存長6.3m、幅0.9m、高さ0.45mを計る。遠い側は両側に板材を立て、上に板材をかぶせて蓋にしている。長さ約3.3m、幅0.3～0.4m、高さ0.3mを計る。

[H区]

古墳時代から飛鳥時代、平安時代の遺構を検出している。

古墳時代の遺構 調査区の北部で竪穴住居を1棟検出した。住居は一辺約4.0mの方形で西側に竈を持つ。竈の南側には貯蔵穴と考えられる土壌もある。また、古墳から飛鳥時代の溝も2条検出している。

平安時代の遺構 調査区の南部で平安時代後期の南北溝を検出している。また、これと平行して東側に1条の溝を確認しており、あるいは同時期のものかもしれない。

[補足調査区]

長岡京期の遺構 1トレンチではD・E区で確認したものに続く小溝群を検出している。小溝群は調査区の北半では南北方向、南半では東西方向を向いている。

2トレンチでは小溝群と東三坊第一小路の側溝を検出した。西側溝は途切れてしまい、東側溝も途中から南東方向へ折れ曲がる。また、東側溝の折れ曲がる部分には木棺墓が造られている。

平安時代の遺構 1・2トレンチともに、ほぼ中央に条里の坪境のものと考えられる東西方向の溝を検出した。

遺物 出土した遺物は古墳時代から中世（鎌倉・室町時代）の各時代にわたる。

古墳時代の遺物 C区では、河川から庄内式併行期・布留式併行期の土師器・須恵器などの土器類が多く出土している。また、河川内に造られた堰からは建築部材・梯子・鍬・槽・案などの木製品が多くみつまっている。このほか河川から曲玉が出土している。

H区では竪穴住居から土師器・須恵器などの土器類が出土している。

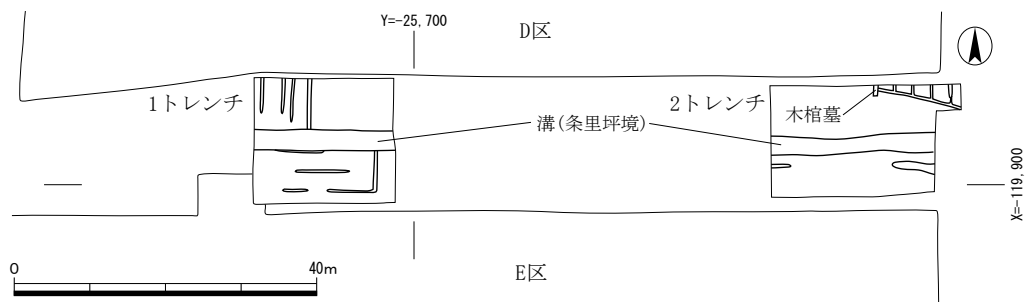


図 72 補足調査区遺構平面図 (1:1,000)

飛鳥時代の遺物 CおよびH区で検出した溝から土師器・須恵器などの土器類が出土しているが、量はきわめて少ない。

長岡京期の遺物 補足調査トレンチで土師器・須恵器などの土器類が出土している。

平安時代の遺物 C区の河川から土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器など中期の土器類と、土師器・須恵器・瓦器・白磁など後期の土器類が出土している。瓦類もわずかに認められる。このほか、河川からは銭貨が10数枚まとまって出土している。

H区では調査区南部の溝から土師器・須恵器・瓦器などの後期の土器類が出土している。

補足調査トレンチでは条里坪境の溝から土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・白磁などの土器類が出土しているが量は少ない。

鎌倉・室町時代の遺物 C区の河川、条里坪境の溝などから、土師器・瓦器・陶器・青磁・白磁などの土器類が出土している。また、丸木舟のほか箸・曲物・建築部材などの木製品もある。

小結 今回は古墳時代と中世（鎌倉・室町時代）遺構の調査に大きな成果があった。その点を時代別にまとめる。

古墳時代 D・E区で確認した小穴群の広がりを確認した。さらに、今回、畝状の遺構を確認することができた。これらは何らかの耕作に関連するものと考えられており、水垂遺跡の農業生産の実体を解明する上で重要な資料を得たことになる。

また、H区では竪穴住居を確認した。これまでの認識では調査区の南東部は、かつて存在した巨椋池へとつながる低湿地であると予想されていた。しかし、この発見でH区付近にも別の微高地があり、集落が存在する可能性が高まった。D区で確認した住居と重なる時期のものであり、水垂遺跡の状況をあらためて考え直す必要がある。

鎌倉・室町時代 C区で木樋を伴い、木杭や石で護岸した池状遺構を確認した。これらの遺構は、その状況から庭園遺構とも考えられるが、周辺に建物がないことなど否定的な面もあり、性格の解明は今後の調査に委ねられることとなろう。

また、木樋に転用されていた丸木舟は、底面にフナクイムシによる腐食と考えられるものがある。もし、フナクイムシのものであれば、この船は海水域に存在していたことを示している。京都盆地は古代からごく近年まで淀川を通して、大阪湾と密接なつながりがであったとされており、この船はそうした事実の証しとなるかもしれない。

(吉崎 伸・木下保明・上村和直・加納敬二)

VI その他の遺跡

17 特別史跡・特別名勝鹿苑寺庭園（図版1・36）

経過 調査区は鹿苑寺境内の北東部に位置する石不動に隣接した茶所の跡地である。茶所が老朽化し南側の斜面に造られたバルコニーも危険な状態となったため、建て直すことになり、それに伴って発掘調査を実施する運びとなった。茶所は金閣寺境内の中では石不動とともに、比高差6mを測る一段高い場所に位置し茶所の南側は斜面である。当初、茶所の建物部分は幅2.0mの試掘トレンチを設定し、遺存状況を確認してから、建物全域を調査対象とした。そのため斜面に沿って2本のトレンチを設けることにした。

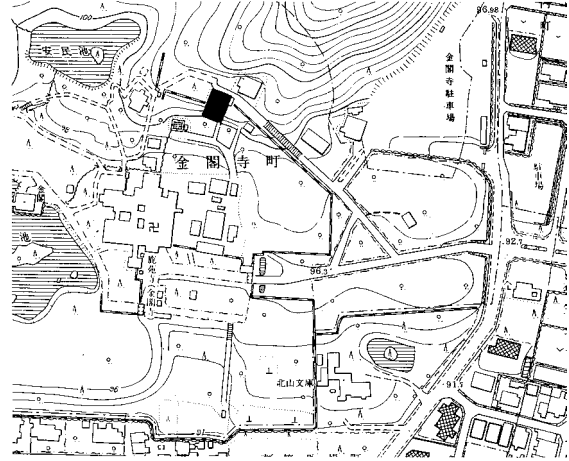


図73 調査位置図（1：5,000）

遺構 江戸時代後期と江戸時代前期を第1面、桃山時代と室町時代の遺構を第2面で検出した。室町時代の遺構には柵列と柱穴列がある。柱穴列は柱穴の底部に石を敷いたもので、柱が沈まないようにしたものがある。柵列はこれらより掘形が小さくて根石がなく、また面的に対応する柱穴が認められない。柱穴列85は東西に9間並び西へはさらに延びる。柱穴列86は85から北へ折れ、さらに北へ延びる。いずれもほぼ120cm等間隔で、底部に根石を持つ柱穴がある。柱穴列87は東西方向で、柱穴に根石はあるが等間隔にはならない。そのほか多数のピットがみられたが建物としてまとまらない。

桃山時代の遺構は南側の斜面を埋め立てた整地土である。土層の観察では北から土を入れたように縞状の堆積が明瞭に認められ、肩部からは瓦や花崗岩の切石が出土している。

江戸時代前期の遺構としては調査区西端で検出した溝4がある。溝4は幅20cm、深さ20cmで5～30cmの石を護岸として用いている。石材はすべて周辺で調達できるチャートである。調査区北西端で南北方向に長さ2.5m程しか残っていないが、その南側は後世の削平によって、溝の大半が掘形まで削られ消滅している。溝4は排水溝と考えられる。江戸時代後期の遺構には溝・落込・集石などがある。溝は瓦を立てて護岸したもので、南北方向に2条ある。溝2は幅20～30cm、深さ20cmを測り、調査区を南北に縦断している。護岸の瓦は一部棧瓦を用いている。溝7は溝2の東側に平行しているが、護岸の瓦は南部に残すのみで、大半が抜取られている。溝の底部には砂質土が堆積し、水の流れた痕跡が認められるため、排水溝と思われる。

遺物 出土遺物は整理箱で33箱を数え、各時期のものがあるが、江戸時代以降が大半である。室町時代の遺物は、小破片ばかり少量みられる。土師器・輸入陶磁器・香炉蓋・瓦・甕があり、そのうち香炉の蓋はあまり出土例をみない石製である。角を丸く落とした長方形を呈し、頂部は

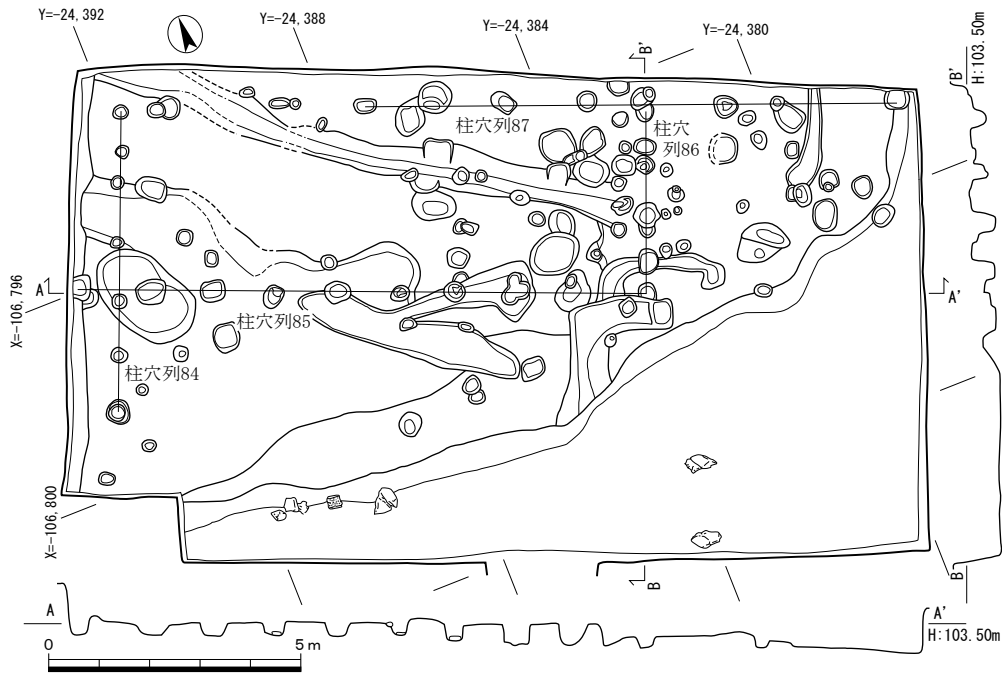


図74 遺構実測図 (1:150)

丸みを帯び菱形を3個連続した透かしを設ける。中央の菱形が大きく、脇が小さい。その外側に草花文を筋彫りで描く。内側には受部を切り込む。長辺7.4cm、短辺5.8cm、高さ1.7cmを測る。甃は上層から出土しており、数点みられるがいずれも二等辺三角形を呈する敷甃である。軒瓦はこれまでの発掘調査で出土している瓦と同様な巴文軒丸瓦や唐草文軒平瓦である。

桃山時代は土師器・陶器・焼締陶器・瓦などがある。江戸時代前期は土師器・陶磁器・輸入陶磁器などで、陶磁器には唐津・伊万里・瀬戸など、輸入陶磁器は染付皿である。銭貨としては「寛永通寶」が出土している。

小結 室町時代から桃山時代にかけては多数の柱穴を検出した。逆L字形に並ぶ柱穴列は、建物の規模が明らかではなく、柱間寸法が等間で120cmと短く、当該期の一般的な柱間寸法の半分程度である。また側柱列に対応する内側の柱穴もみあたらず、特殊な掘立柱建物と考えざるをえない。初期の『洛中洛外図』である町田本（16世紀前半）と上杉本（16世紀中頃）には金閣と石不動が描かれている。石不動は両方とも類似した表現で、切妻造りの板葺建物2棟があり、それを廊らしい板葺建物でつないでいる。注目されるのは、左側の建物が舞台造りとなっていることである。中央の参道と岩の表現からみれば東からみていることになり、発掘調査地点付近にこの舞台造りの建物が建っている位置関係である。今調査で検出した柱穴列は、舞台造りの一部にあたる可能性がある。次に、17世紀に下る洛中洛外図をみると、門と入母屋造りが描かれるが、舞台造りではなく現石不動と同じ配置である。この間に変更されたことがわかる。宇喜多秀家が天正年中（1573～1592）に不動堂を再建したという伝承は、洛中洛外図の年代とも時期的に一致する。現石不動が建てられる時に斜面の切土と盛土を行い、平坦地を造成したと思われる。

(前田義明)

18 北野遺跡 (図版1・37)

経過 北区平野宮本町19-6番地に所在する京都市立衣笠小学校で、校舎の建て替えが計画された。調査地は、北野遺跡の北辺に位置する。北側への遺跡の広がり範囲が確認できる重要な地区であった。このため、遺構の有無を確認する試掘調査を、平成6年(1994)7月11日から18日にかけて実施した。調査では奈良時代の溝状遺構を検出した。このため、平成7年(1995)1月5日から5月2日にかけて発掘調査を実施した。東西13m×南北10m=130㎡、東西25m×南北29m=725㎡、あわせて855㎡を調査した。

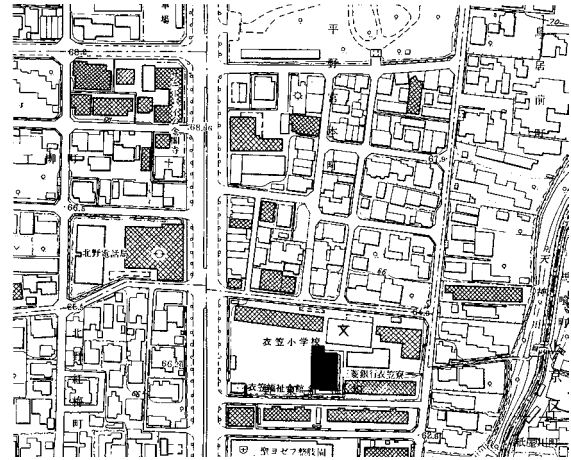


図75 調査位置図 (1:5,000)

遺構 検出した遺構は、飛鳥時代から奈良時代の溝・堰・柵・土壇、平安時代前期の回廊状建物・建物・溝・柱穴、平安時代中期の建物がある。また、室町時代の溝・柵・垣塀、江戸時代の溝・土壇などがある。

飛鳥時代から奈良時代にかけての溝SD5は、調査区西端で検出した。幅3.0m、深さ1.5mを測り、延長40mにわたって確認した。ほぼ南北方向に流れるが、真北からやや東に振れる傾きを持つ。堰SX31は調査区西端中央部のSD5内で検出した。杭や板材を据え付けた痕跡を確認した。SX31の上流部4mの位置で、西方向に流れる溝を確認している。土壇SK22は調査区北西部に検出したもので、竪穴住居の可能性はある。

平安時代初期の回廊状建物SB31は、径0.9mの方形掘形を持つ柱穴からなる。桁行10尺(2.98m)、梁間15尺(4.47m)と計測できる。東西方向に伸び、6間分を検出している。建物SB32は、東西30尺(8.94m)、南北20尺(5.96m)と計測できる。柱穴の平面形は方形で、0.9~1.0m前後の径を測り、深さは0.5m前後を測る。3間×4間の建物に推定できるが、なお検討が必要である。溝SD53は南北方向で幅0.8m、深さ0.15mを測る。溝SD76と合流する。SD76は、幅1.2m、深さ0.1mを測る。柱穴P75・81は2箇所検出した。構造物としてまとまらない。

平安時代中期の建物SB33は、東西5間、南北1間、南庇付き建物で、身舎桁行10尺、梁間15尺を測る。ほぼ同一場所で3時期の建て替えを確認している。

室町時代に属する溝SD4は南北溝で、幅1.5m、深さ0.5mを測る。この溝の東2.0mの位置で、同じく南北方向の柵SA34を検出した。垣塀SA1は、東西方向に並ぶ。柱跡は幅0.4m、深さ0.3mで布掘りした溝の底に礎石を置いたもの、あるいは柱穴を穿って柱を建てるものがある。江戸時代の溝は、調査区南側で検出した。東西方向のもの2条と、東から南側に向かい円弧を描いて延びる溝SD35がある。

遺物 調査で出土した遺物は、縄文時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代前期・中期、室町時代、江戸時代に属したものがある。

縄文時代の遺物は、石器（刃器）が出土している。

飛鳥時代の遺物は、土師器杯・椀・高杯・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕、瓦（平瓦・丸瓦）がある。主としてSD5下層から出土した。

奈良時代の遺物は、土師器杯・椀・高杯・鉢・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕、瓦（平瓦・丸瓦）、石製品（石帯）、土塊などがある。SD5から多量に出土した。

平安時代前期の出土遺物は、土師器杯・皿、須恵器杯・皿、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）がある。

平安時代中期の遺物は、柱穴から出土したもので少量である。土師器皿、須恵器鉢・甕、黒色土器、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、白磁椀（輸入陶磁器）、瓦（丸瓦・平瓦）などがある。

室町時代の遺物は、溝から出土したものが主で、土師器皿、瓦器皿・鍋・釜、陶器椀・甕、瓦（丸瓦・平瓦）などがある。

江戸時代の遺物は、調査区南側の溝から出土したもので、土師器皿、陶器甕、磁器皿・椀、瓦（丸瓦・平瓦）などがある。

特殊な遺物では、奈良時代の須恵器椀に墨書したもの、江戸時代の火舎に金箔を押ししたもの、また金属製品鑄造の際に生ずる鋳滓などが出土している。

小結 調査区西端で40mにわたり検出したSD5は、奈良時代後期に埋没している。成立時期は、溝下層肩口から飛鳥時代の土器類が検出されるため、この時期に造られたものといえる。溝として機能した期間は、約1世紀間と考えられる。溝底に10数本の杭が検出される地点があり、堰施設の痕跡とすることができる。堰の北5m前後の位置に、西方向の流路が存在した痕跡を確認している。堰を利用して水流を調節し、西方へ流下させる施設とみられる。北野遺跡内での主要な水路の一部を検出したといえる。

溝が埋没した平安時代初期には、方形の柱穴を持つ回廊状建物と、この東端の位置で特殊な構造の建物が建設されている。また南側20mの位置に東西方向から南北に屈曲する溝が検出されており、建物に伴う雨落溝と考えることもできる。中期には、回廊状建物が廃絶し、この地区に、

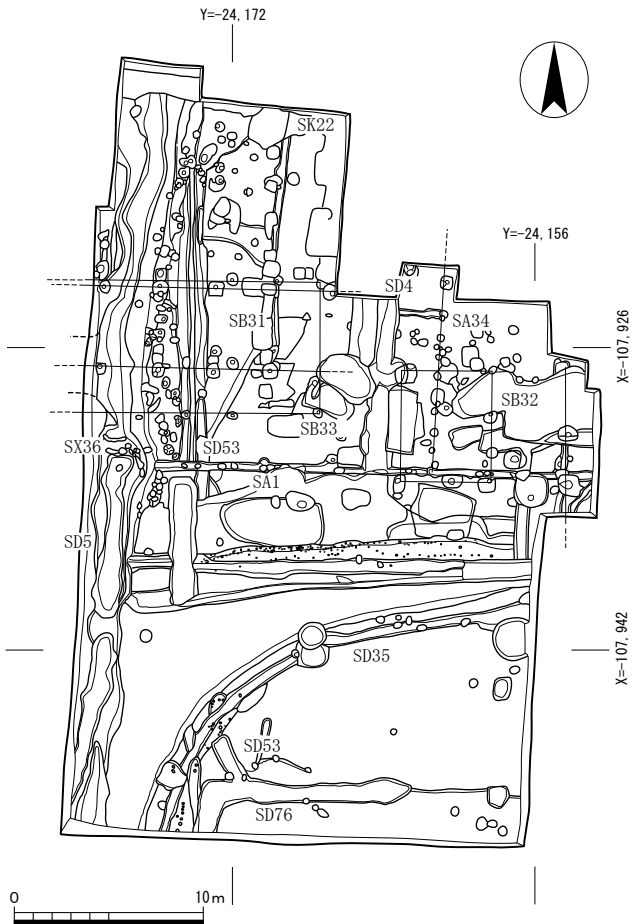


図76 遺構平面図(1:400)

2ないし3時期の建て替えが確認できる建物が建設されている。

これらは寺院建築に関係した建物の可能性がある。北野地域で、この時期の建物を有する寺院では、桓武天皇が建立したとされる常住寺（野寺）がある。常住寺の寺域は明確ではないが、平安京一条大路に北接した東西2町、南北3町の6町地に比定できれば、調査区の中央付近が、北3町の北域にあたる。時期や建物の規模からすれば、常住寺に関係した建物とみることも可能である。

室町時代中期には、溝、柵、垣塀などの施設が造られる。この時期に、宅地としての土地利用が再び開始されたといえる。中心の建物は、垣塀や溝の北東に位置するとみられる。居住者の階層は、調査地北方200 mに鎮座する平野神社に関わる社家層を想定できる。

江戸時代には、東西溝や円弧を描いて南方に流下する溝など、耕作に関係した遺構が増加する。この地区が中世の屋敷地から近世に至って、田園に変貌した経過を追うことができる。

(平田 泰)



図 77 調査区南半全景（北から）

19 小倉町別当町遺跡 (図版1・38・39)

経過 本調査は、左京区北白川別当町に所在する京都市立北白川小学校の屋内運動場の改築工事に伴い、平成6年(1994)9月22日から12月末日まで実施した発掘調査である。校内での発掘調査は本調査が3回目となる。調査面積は700㎡を測った。試掘調査では北側に主な遺構が残存するだろうとの成果を得ていたが、対象範囲のほぼ全面的な調査を実施した結果、予想に反して南側に飛鳥時代の集落跡が良好な状態で残存していることが判明した。

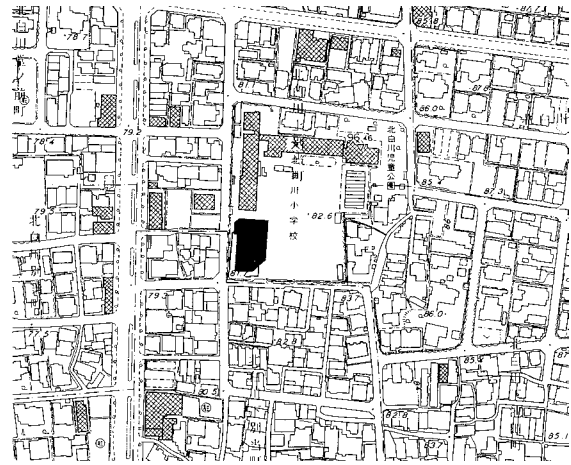


図78 調査位置図 (1:5,000)

1次調査は、昭和57年(1982)3月に南北校舎の北端部(校内北西隅)の新築工事に伴って実施されており、縄文時代晩期の遺物包含層や幅約4.0m、深さ約1.5mの川のほか、古墳時代後期から飛鳥時代前半の竪穴住居7棟や掘立柱建物3棟などが発見され、小学校北側に隣接する北白川廃寺と関連する集落であろうと考えられた^{註1}。

2次調査は、昭和59年(1984)10月に先の地点から南へ約50m離れた南北校舎南端の新築工事に先立って実施した。この際にも竪穴住居2棟と掘立柱建物を検出し、集落がさらに南方に広がること、また、これらは先の遺構よりも新しく、飛鳥時代中頃から奈良時代前期にかけての遺構であることなど、集落内での遺構分布に関する成果を得た。特に完存の軒丸瓦の瓦当1点は北白川廃寺の所用瓦であることが判明し、集落と寺との密接な関連がより明らかとなった^{註2}。

遺構 調査区全体として3面の調査を実施し、遺構総数は315基を数えた。第1面では中世以降の耕作溝とみられる格子状に直交した溝群、第2-1面では飛鳥時代後半から末頃の竪穴住居、柱穴、土壇、ピットなど、第2-2面ではほぼ同時期の掘立柱建物、柱列、柱穴などを検出した。また、調査区北西角では幅約1m、深さ約0.4mの平安時代中期の南北溝(溝32)を検出した。

竪穴住居は計10棟を検出した。大半は調査区南西部に集中する傾向がみられ、さらに調査区外に展開する状況であった。住居の構造はすべて隅丸方形で、その規模から3種類に分かれた。大型の8号住居は一辺6.5~7.0m、今回検出した中で平均的規模の1~7号住居は一辺約3.8~4.5m、小型の9号住居は一辺約3.0m前後を測る。深さは0.15~0.51mを検出した。竈の痕跡を残した住居は6棟を数え、2・5号住居では火床・煙道が良好に残存していた。また、住居の北辺に竈が造られ中軸線が約20度程西偏した1・4~6号住居の傾きと、東辺に竈を持ち中軸線が約55~70度程東偏した2・3号住居の傾きが大きく異なることから、竪穴住居の配置構成には2群あることが判明した。

掘立柱建物は、計2棟を検出した。建物1は柱間が1.5~2.0mで並ぶ2間の総柱建物、建物2は桁行4間、梁間2間の掘立柱建物で、掘形は各々径0.7~0.9m、深さ0.5~0.7mの規模

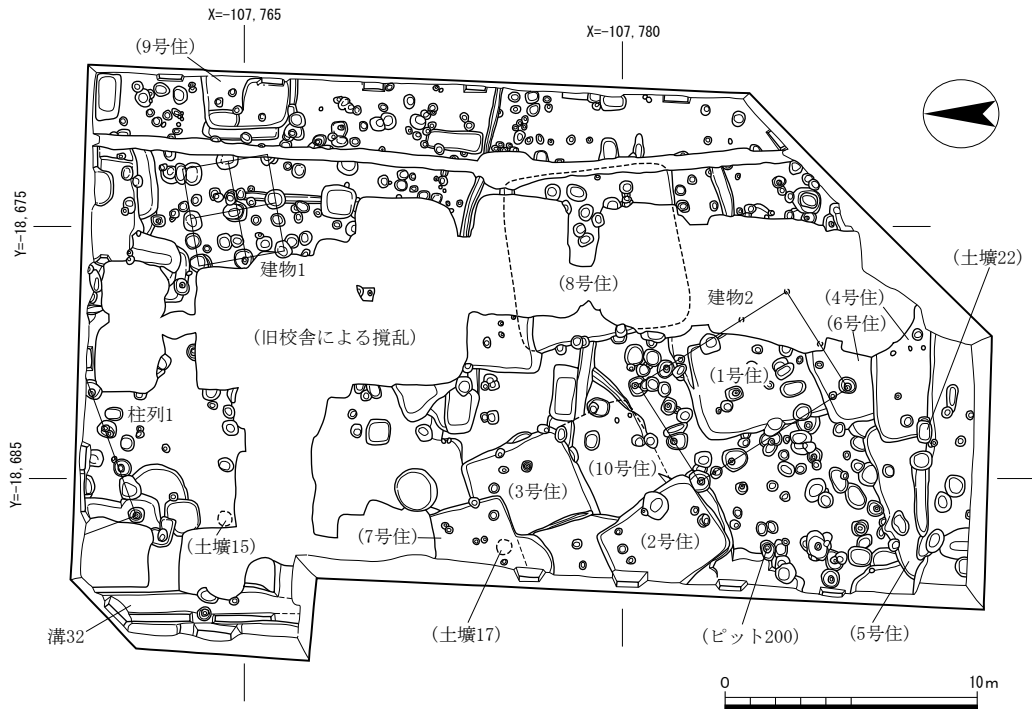


図79 第2-2面遺構平面図(1:300)

である。ほかに、調査区北壁際で同じ規模の掘形を持つ3間の柱列1を検出した。対応する柱穴は調査区外と推測され、掘立柱建物の一部分と考えられる。いずれの遺構も中軸線は10～30度ほど西偏していた。ほかの柱穴についても明瞭な柱あたりの痕跡を残すものが多く、調査区南西部ではこれらが入り乱れて残存した状況であった。建物および柱穴の成立時期は2時期以上に分かち、竪穴住居群を中間にして相前後した状態で検出した。2次調査の際にも同様の遺構状況が確認されている。

その他、特徴的な遺構として、土師器や須恵器を密集して埋めた土壙およびピットを計3基検出した(土壙15・17、ピット200)。なお、縄文時代の遺構は未確認であった。

遺物 出土遺物は整理箱にして55箱が出土した。縄文時代の遺物は、下層に堆積する厚さ0.4～0.6mの黒色砂泥層のほか各層・遺構からも鉢、石鏃、石匕、サヌカイト剥片などが混入して少量出土し、神宮寺併行期に比定される押型文土器の小片も出土した。

整地層とみられる厚さ0.1～0.7mの黒褐色泥砂層では、飛鳥時代後半から奈良時代前期と平安時代前期から中期の遺物が混在しており、土師器碗・杯・高杯・鉢・甕・竈・土錘、須恵器杯・蓋・高杯・鉢・播鉢・壺・甕、製塩土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒平・軒丸瓦、銭貨(承和昌寶)、鋤先、小鍛冶鉾滓、砥石など、30箱以上が出土した。土師器には「⊕」「文」の墨書土器もみられた。出土量は飛鳥時代後半から奈良時代前期の遺物が圧倒的に多い。調査区西側中央の谷地形では、遺物の混在はそれほど認められなかった。土壙および柱穴・ピットでは、土師器杯・高杯・鉢・甕、須恵器杯・蓋・甕・円面硯などが出土した。竪穴住居では、土師器や須恵器のほか、滑石製紡錘車、骨角製装身具、刀子、鏝鉋、小鍛冶鉾滓などの出土がみられた。これらの内、3号住居の遺物を中心に飛鳥時代中葉から末頃(7世紀中頃から8世紀初頭)の土器

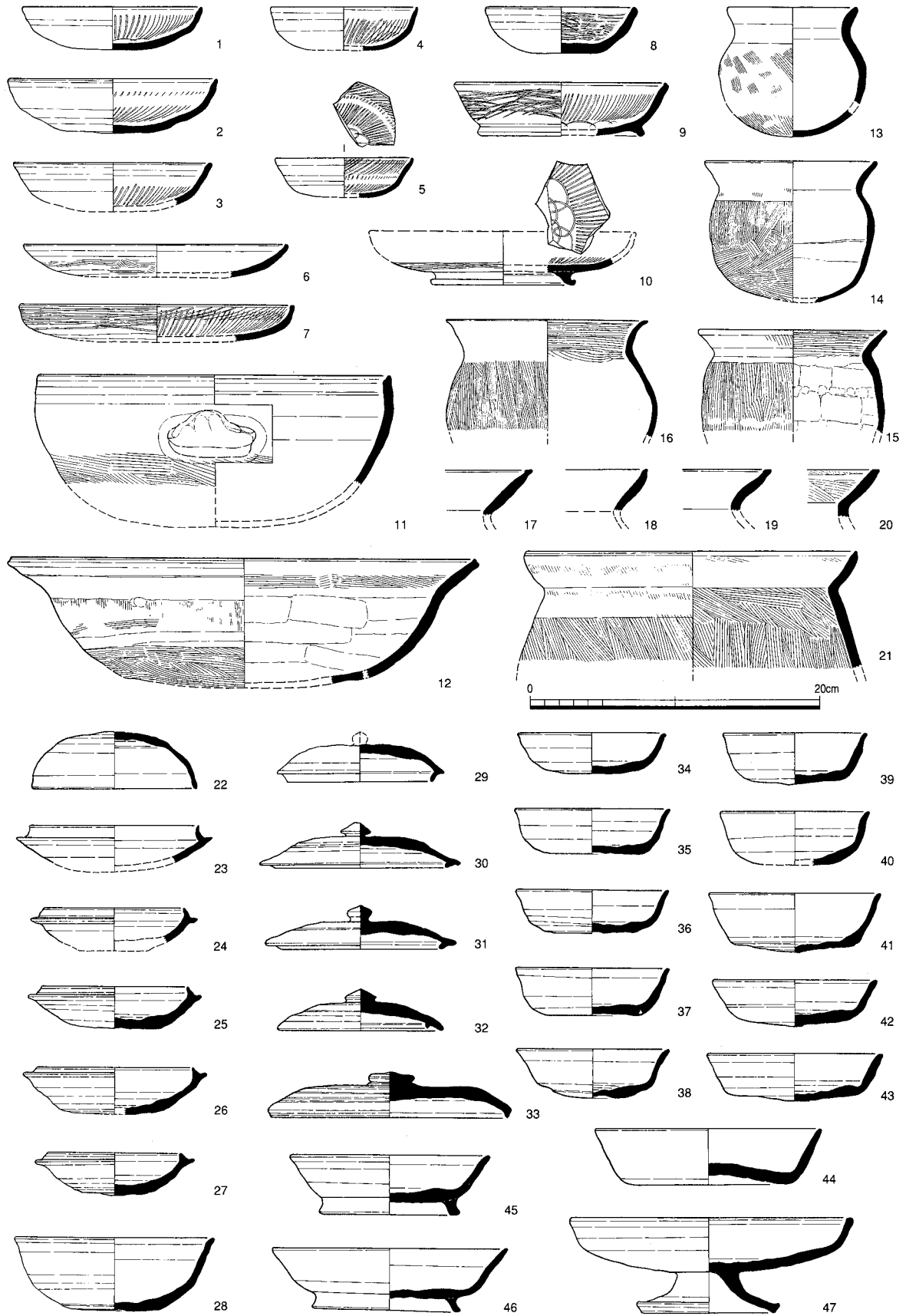


図80 出土土器実測図（2号住居：13・14・17・18・36・37 3号住居：1・2・4・6・7・11・12・19～21・23・24・29～31・39・46 4号住居：22・28・34・35・40 5号住居：16 溝32：10 土壇17：5 土壇22：3 ビット142：38 ビット200：15・32 整地層：8・9・25～27・33・41～45・47）（1：4）

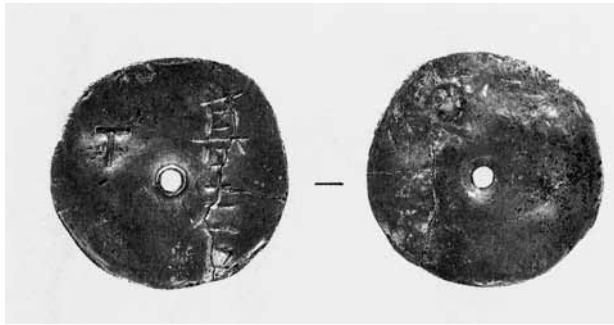


図 81 土壌 22 出土無文銀銭

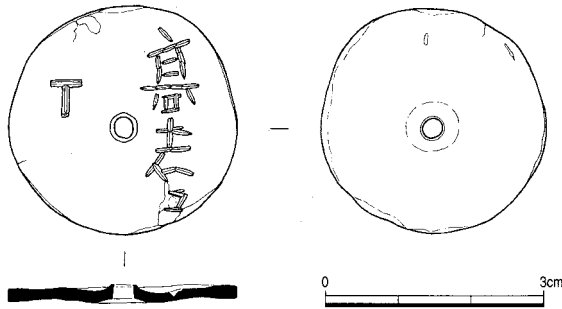


図 82 土壌 22 出土無文銀銭実測図

などを記したものは知られていたが、このように判読できる文字を刻んだ無文銀銭は全国でも最初^{註3}の例である。

唐三彩皿は、調査区南西部の整地層から破片 1 点が出土した。輪花状の口縁を持つ小型の皿で、型押し^{註4}の文様もあるが、約 2.5 cm の小片で二彩しか認められない。厚さ 2.0 ~ 3.0 mm。唐三彩の出土は京都市内で 6 例目である。北白川廃寺でも出土しており、この付近で 2 例を数える。中でも皿器形は初例で、同一器形と推測される唐三彩が大英博物館所蔵品にある。西アジアの出土品にみられる器形の特徴を持つ径 14.0 cm の三彩双魚文曲杯であり、中晩唐の三彩と考えられてい^{註4}る。

瓦塔は、調査区南西部の整地層から須恵質の破片 5 点が出土した。内 1 点は屋根の軒隅を含む部分であり、大きさ 21.0 × 10.5 cm、厚さ約 1.5 cm を測る。瓦葺きの細かい文様を施していないのが特徴的であり、破片に残る内角から六角形の多角塔と推測される。瓦塔の出土例は関東地方に数多くみられ、寺院跡や窯跡で出土例が多いとされている。これまで京都府内では瀬後谷窯跡^{註5}出土の緑釉瓦塔が知られていたに過ぎない。

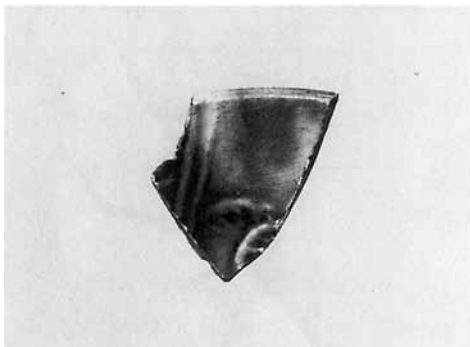


図 83 整地層出土唐三彩皿



図 84 整地層出土瓦塔

類を図示した。

上記のほか、とりわけ注目された遺物が、無文銀銭、唐三彩皿、瓦塔の 3 点であろう。

無文銀銭は、調査区南端部の土壌 22 底部から土師器杯（図 80 - 3）とともに出土した。京都府内では初めての出土例である。土壌 22 は、やや長方形を呈し、東西 0.9 m、南北 0.6 m、深さ 0.6 m を測る。飛鳥時代後半から末頃の遺構である。無文銀銭の大きさは、直径約 30.6 mm (29.6 ~ 31.5 mm)、厚さ約 2.0 mm、重量 9.5 g を測り、銀の含有率は 94.9% である。表面には「高志口」の三字と「T」字形の記号が鑿で刻まれていた。これまで「○」「×」「田」な

小結 今回の調査では飛鳥時代の遺構や遺物に関して以下のような成果を得た。

集落跡に関して、平安時代中期まで断続的ながら存続していたと考えられ、飛鳥時代後半の遺物が圧倒的に多いことは、この時期に集落が最も隆盛した可能性があることを示している。また、これまでの計 19 棟の竪穴住居の配置構成は、2～3 群に分かれる可能性が高いことを確認した。掘立柱建物にみられた中軸線の傾きは、先の調査を通じて同様に確認しており、北白川廃寺の調査においても下層遺構の掘立柱建物が同様の傾きを示していることから、飛鳥時代後半の一時期、付近一帯には南北 250 m 以上にわたって建物群が存在していたことが想定された。

遺物に関して、無文銀銭は本遺跡と北白川廃寺の関係のみならず、近江大津京との関連をも示唆する契機となった。「高志口」の解釈は謎の多い無文銀銭の研究を進める上で貴重といえよう。唐三彩皿および瓦塔は、この付近に地位のある有力な勢力が活躍していたことをうかがわせる資料である。また、飛鳥時代後半の土器類は、その形態や製作技法の特徴を残した完形品や大型片が多く、これまで京都市内では出土例の少ない時期の遺物として質量ともに資料的価値が高い。

なお、無文銀銭や瓦塔に関して、森 郁夫氏、西山良平氏、鎌田元一氏、井上満郎氏、菅谷文則氏、柴原永遠男氏、田辺昭三氏、宮城洋一郎氏、藤井一二氏、椿原靖弘氏、西口寿生氏、橋本義則氏、入江正則氏、石井清司氏より数々の御教示を得た。ここに記して厚くお礼申し上げます。

(長戸満男)

註1 平方幸雄・吉崎 伸「小倉町別当町遺跡」『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983

註2 梅川光隆・磯部 勝「小倉町別当町遺跡」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987

註3 長戸満男・百瀬正恒・磯部 勝「小倉町別当町遺跡の『高志』銘無文銀銭」『日本考古学協会第 62 回総会研究発表要旨』日本考古学協会 1996

註4 弓場紀知編『平凡社版 中国の陶磁』第 3 卷三彩 平凡社 1995

註5 石井清司「瀬後谷遺跡」『京都府遺跡調査概報第 51 冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992

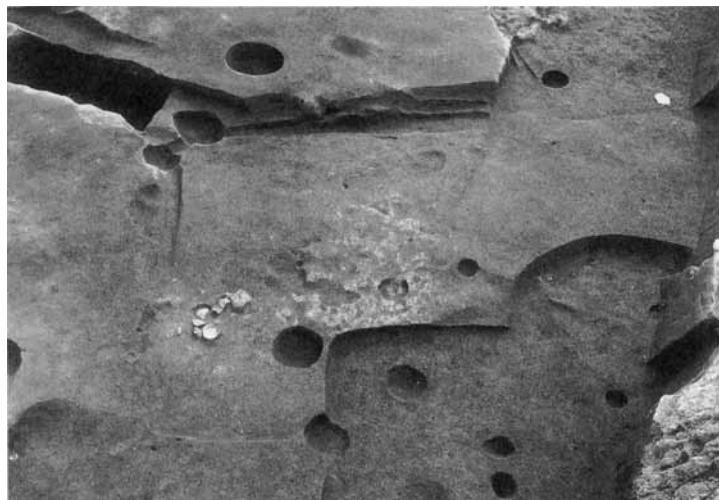


図 85 3号住居(北西から)

20 安祥寺下寺跡 (図版2-2・40・41)

経過 本調査は山科駅前の再開発事業に伴う第2次調査である。調査地は嘉祥元年(848)創建の安祥寺下寺の推定地にあたる。安祥寺下寺については、昨年度の調査で9世紀後半の木炭木槨墓や平安時代後期を中心とする遺構群を検出したが、寺の堂宇と目される遺構は検出できなかった。本調査は約3,000㎡と調査面積が大きく、その推定地中央を対象地とするため、その核となる部分の検出が期待された。

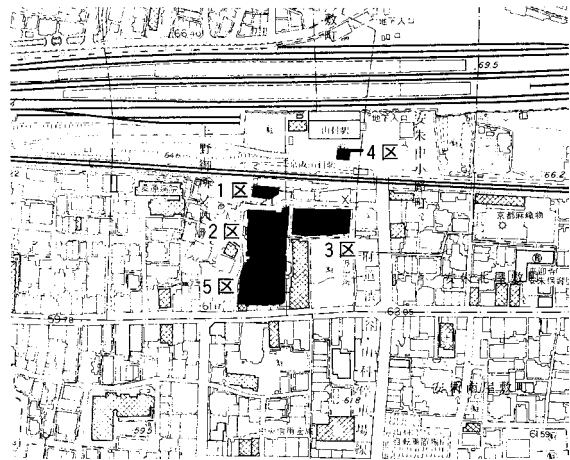


図86 調査位置図(1:5,000)

遺構 調査は1～5区の調査区に分けて進めた。基本層序は3区南壁を例にとると、上から現代盛土層(厚さ約40～50cm)、旧耕作土層と床土層(厚さ約30cm)、暗オリーブ褐色砂泥層(遺物包含層、厚さ約10cm)があり、地山(暗褐色混礫泥土層)となる。

遺構は縄文時代の甕棺墓、飛鳥時代の竪穴住居・土壇墓、奈良時代の掘立柱建物、平安時代前期の掘立柱建物・柵列、平安時代後期の掘立柱建物・柵列・井戸・溝・土器溜・柱穴・土壇、江戸時代の井戸・柱穴・土壇などを検出した。以下、主要な遺構について時代別に概要を記す。

縄文時代の遺構は2区の西端で甕棺墓1基を検出した。墓壇の規模は長径0.75m、短径0.48m、深さ0.30mを測り、楕円形を呈する。甕棺1個体分がほぼ完全な形で出土しており、口縁部を北に横置き南側(底部)には径3～5cm程度の角礫を充填する。甕は単体で埋置され、口を塞ぐ施設はみあたらなかった。縄文時代晩期のものである。

飛鳥時代の遺構は竪穴住居を2区と5区で検出した。平面形はいずれも隅丸方形のものである。2区の北西端で竪穴住居2棟(住居2-1・2-2)を切り合った状態で検出した。いずれも南西隅部を検出しただけで、大部分は調査区外であるため、その全容は不明である。両者の時期は7世紀中葉と考えられ、ほとんど時期差はないようである。また5区では北西端で竪穴住居3棟分を検出した。住居5-1は一辺が3.6～3.7m、住居5-2は一辺が約3.0m、住居5-3は南東隅の一部を検出しただけでその規模は不明である。遺物は土師器小片が出土しただけであるが、2区のものとはほぼ同時期とみられる。3区の飛鳥時代の土壇墓は昨年度調査時で確認したものの延長にあたり、今回残り部分を検出したことで規模を確定することができた。土壇墓の規模は長さ2.9m、幅0.65mである。

奈良時代の遺構は2区と5区の西端で掘立柱建物2棟などを検出した。建物5-1は南北4間、東西2間の南北棟である。柱間は2.2～2.4mで、方位は北で約4度東に振れる。建物5-2は東西2間、南北1間以上の建物で南側は削平をうけており明らかでない。柱間は南北2.9m、東西2.3～2.5mで、方位はほぼ真北である。両者は近接しているにもかかわらず方位を異にして

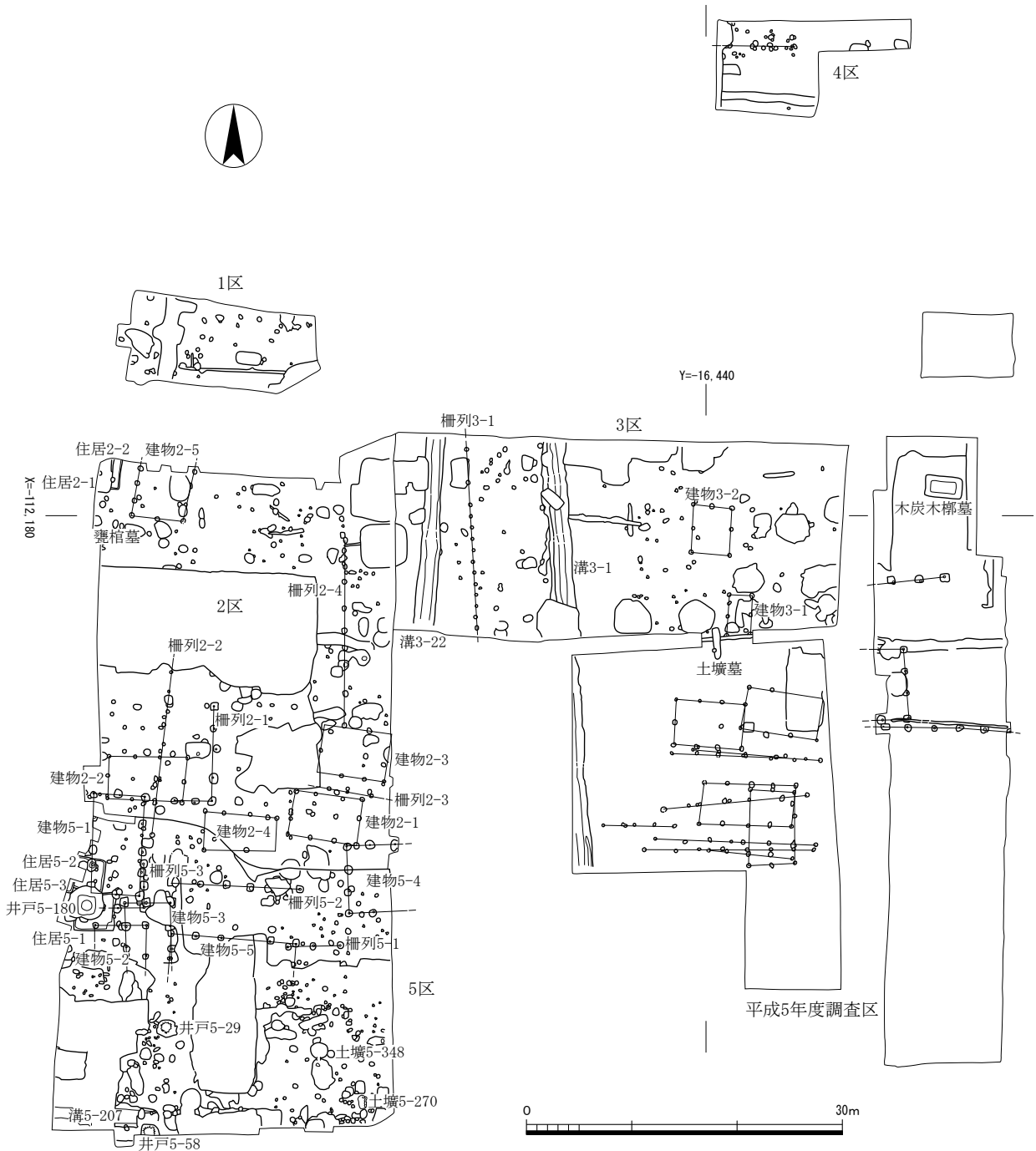


図 87 遺構配置図 (1:600)

おり、同時に並存したとは考えにくい、その先後関係は不明である。

平安時代前期の遺構は2区の南半から5区の北半にかけて掘立柱建物3棟・柵列4条などを検出した。建物5-3は東西2間、南北2間以上の建物で、南側は削平をうけており明らかでない。柱間は2.1～2.2mで、方位は北で約2～3度西に振れる。柵列5-3に切られる。安祥寺創建前の平安時代初期の建物である。建物5-4は南北3間、東西2間以上の建物である。柱間は南北2.1m、東西2.3～2.4mで、方位は北で1～2度西に振れる。建物5-3と同じく安祥寺成立前の建物である。柵列5-1は南側が削平されているので、南に延びる建物の可能性もあるが、

ここでは取りあえず柵列として扱う。柱間は2.4 mで方位は建物5-4と一致し、時期もほぼ同様である。

これに対して安祥寺下寺創建時期以降につくられた建物・柵列として、建物5-5、柵列5-2・5-3・2-1がある。建物5-5は東西5間、南北1間以上の規模をもつが、南側は削平されており明らかでない。柱間は南北2.4 mで、方位は北で3~4度東に振れる。柵列5-2は建物5-5の北側に位置し、東西に5間分検出している。建物5-5と柱筋がほぼ一致しており、両者は並存していたものと推定される。柱間は2.4 m、方位は東で約3度南に振れる。柵列5-3は南北2間、東西1間以上のL字形の柵列である。柱間は2.0~2.1 mで、方位はほぼ真北である。柵列2-1は南北4間、東西2間のL字形の柵列である。柱間は東西1.9 m、1.7 m、南北の柱間は北から2.1 m、2.15 m、2.55 m、2.2 mで、ばらつきがある。柱筋は中央の一つが東に大きくずれる。方位は北で約1度東に振れる。

平安時代後期の遺構は掘立柱建物7棟、柵列4条、井戸1基、溝4条、土器溜1基、柱穴、土壙などを検出した。建物・柵列は2・3区で検出した。ほとんどの建物は柱間が一定せず、桁行と梁間も直角にならない。建物2-1は東西3間×南北2間の東西建物で、方位は北で約10度東に振れる。建物2-2は東西3間×南北2間の東西建物で、北で約4度東に振れる。建物2-3は東西2間以上、南北2間の東西建物で、北で4~8度東に振れる。建物2-4は東西3間、南北2間と推定され、北で6.5度東に振れる。建物2-5は東西2間、南北3間以上の南北建物と推定され、北で10~13度東に振れる。建物3-1は1間×2間の南北建物か、あるいは北辺西側の柱穴を含めて2間×2間の方形の建物とみられ、北で3~4度東に振れる。建物3-2は東西2間×南北2間の規模をもち、北で3度東に振れる。

柵列2-2は南北方位の柵である。5間分確認したが、柱間はばらつきが大きい。方位は北で約6度東に振れる。柵列2-3は東西の柵で、東西2間分、長さ4.1 mある。柵列2-4は2区東端で合計7間分検出した。溝3-22の西側から6~7 mの位置にあり、北で約1度西に振れる。柵3-1は溝3-1の中心より西へ約7 m離れ、南北に15間分検出した。南北ともに調査区外に延びる。方位が溝3-1とほぼ一致することから同じ時期とみられる。柱間は1.1 m弱であるが、北から三つ目と四つ目の柱穴の柱間はほぼ2間分あり、出入口としての可能性が考えられる。

井戸5-180は5区北西側に位置する。径3.2~3.4 mの不整形の掘形をもつ木組井戸である。検出面から底部まで深さ2.9 mを測る。木質は残っていなかったが、埋土の状況から上下に異なる井戸枠を使用していたことが確認できた。底部から上へ0.9 mまでは径1.0~1.05 mの円形井戸枠を用い、その上部には一辺1.7~1.8 mの方形井戸枠を使用していたものと考えられる。

溝3-22は3区西側で検出した。規模は検出長約18 m、幅1.5~2.0 m、深さ1.3~1.5 mを測り、方位は北で約4度東に振れる。溝が同じ方位を維持しながら南に延びるならば、2区の南東隅から5区にかけて現れるはずであるが、検出しなかった。ここからは飛鳥時代から平安時代の土器が出土しているが、最も新しいものは11世紀末から12世紀初の時期のもので、この時

期に機能を終えたものと考えられる。溝3-1は3区中央西よりに位置し、昨年度の調査でもその南側を検出している。検出長は昨年度の調査分も含めて41 mに達し、幅1.8~2.4 m、深さ1.1~1.3 mある。方位は北で約4度西に振れる。ここからは奈良時代から平安時代の土器が出土している。方位の異なる大型の溝が隣接して同時に存在したとは考えにくく、溝3-22の埋まった後に溝3-1が掘削されたものとみられる。最も新しいものは12世紀末から13世紀初めの土器であり、この溝の廃絶時期はこの頃と考えられる。溝5-207は5区南端で検出した。調査区西半中央から西へ延びる大型の東西溝である。検出長9.7 m、最大幅2.3 m、深さ0.45 mであるが、削平をうけているため、本来の深さは明らかでない。溝3-1と同じ頃の遺構と考えられる。

江戸時代後期の遺構としては井戸2基、柱穴、土壇などを確認した。柱穴は建物としてのまとまりを把握できていない。江戸時代の遺構は主にこの5区南半に集中してみられる。井戸5-58は径0.8 m、旧三条通の道端にあった辻井戸と推定される。完掘していないので、正確な開掘時期は不明である。井戸5-29は石組みで、検出面で径0.80~0.85 mある。完掘していないためその開掘時期は不明であるが、近年まで使用されていたものである。土壇5-270は長径約1.2 m、短径0.7~0.8 mの不整楕円形を呈する。一部攪乱を受けているが、東側と北側の壁には石積をもつようである。陶磁器の他にも銅銭・鉄釘・筭・煙管が出土している。土壇5-348は径0.72 m、深さ0.45 mの土壇内に播鉢を据えたもので、その上部に径10~20 cmの偏平な石を2つ重なるように置いている。

遺物 整理箱58箱分の遺物を出土している。調査面積に対して遺物の総量は多くない。その内訳は、1区2箱、2区11箱、3区5箱、4区1箱、5区39箱である。遺物は縄文時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、江戸時代の各時代の遺物が出土した。

縄文時代の甕(1)は甕棺墓のもので、口径27.7 cm、器高39.9 cm、胴部最大径36.5 cmあり、突帯と突帯にはさまれた口縁部には絵画風の線刻を有する。晩期、滋賀里IV式に属するものである。

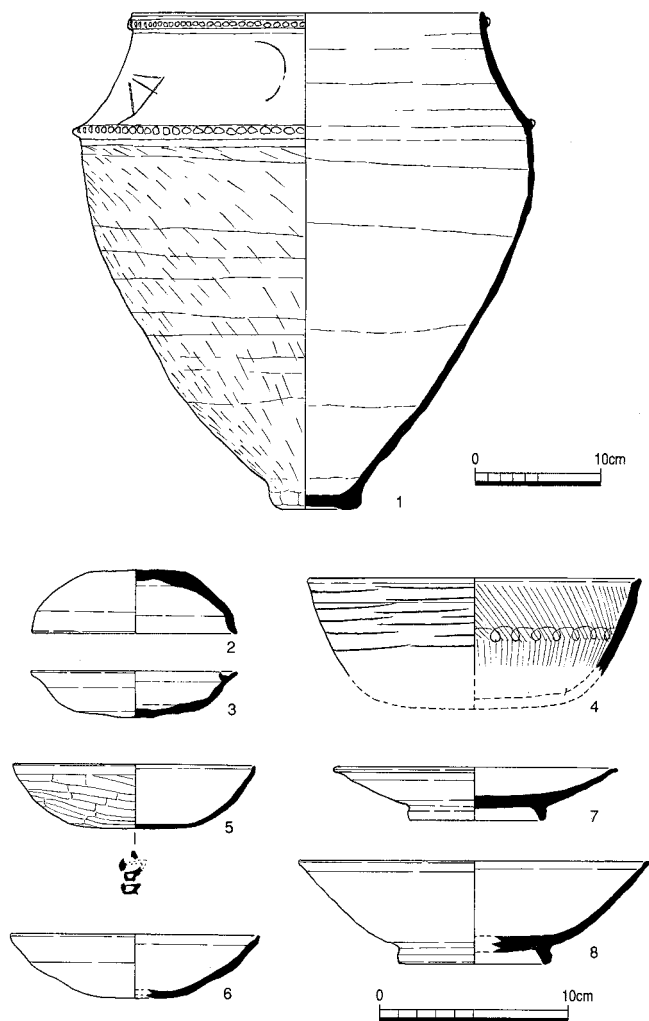


図88 出土土器実測図(1:6)(1:4)

飛鳥時代の遺物は竪穴住居を中心として土師器・須恵器が少量出土した。図示したのは住居2-1出土の須恵器蓋(2)・杯身(3)、土師器杯(4)である。

奈良時代の遺物は建物の柱穴などから須恵器・土師器が少量出土しているのみである。

平安時代の遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器・黒色土器・瓦質土器・平瓦・鞆羽口などが出土した。遺物はその後期のものが主体をなす。図示したのは建物5-3の柱穴上部から出土した「宮」と墨書された土師器碗(5)、柵列2-1柱穴出土の土師器碗(6)、柵列5-2の柱穴出土の灰釉陶器皿(7)・碗(8)である。(5)は9世紀初め、(6~8)は9世紀後半代ものと考えられる。

鎌倉時代の遺物は溝3-1を中心に土師器・瓦質土器・輸入陶磁器が出土した。

江戸時代の遺物には土師器・陶磁器・瓦・一朱銀・銅銭・筭・煙管などがあり、後期のものである。

小結 本調査では安祥寺下寺創建以前の遺構を検出した。山科盆地北部の新遺跡として注目される。今回新たに確認した遺構は、縄文時代晩期、飛鳥時代、奈良時代から平安時代初期の3時期のものである。

縄文時代の遺構は甕棺墓のみで、遺構密度は薄い。飛鳥時代は3区で土壙墓を1基検出し、2区と5区で同時期の竪穴住居を5棟分検出した。これらの遺構の分布状況から調査地は集落の縁辺部と考えられ、中心はその西側に位置するとみられる。また奈良時代から平安時代初期の建物4棟、柵列1棟を検出し、安祥寺創建直前の様相を垣間見ることができた。特に建物の柱穴から「宮」という墨書銘をもつ土師器杯が出土しており、当地の性格を知る上で重要な資料となるだろう。

安祥寺下寺に併行する時期の主要な遺構としては、平安時代前期の掘立柱建物1棟、柵列3条、同後期の掘立柱建物7棟、柵列3条、井戸1基などを確認した。建物中には建物5-5のように北側に柵列を伴う比較的大型の建物もあるが、いずれも寺院の中心伽藍を構成するものとは考えられない。遺物においても安祥寺上寺では瓦が発見されているが、当地では布目瓦を数点しか確認していないなど、寺院に関連する遺物が希少である。

『安祥寺伽藍縁起資財帳』の記述から当地が安祥寺の寺地内にあることは疑いないが、木炭木槨墓の存在とともに、この地区の安祥寺寺地にしめる役割を再考する必要がある。

調査地中央で大型の南北溝2条を検出した。平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて維持された溝である。溝の性格は不明であるが、当地の地割りに関わるものと考えておきたい。この溝は溝3-22が機能を停止したのちに、溝3-1が新たに掘削されたと考えられる。両者はその方位が異なっており、山科盆地北部の地割りの変遷を考える上で重要な資料となるだろう。

13世紀後半以降江戸時代まで当地は遺構・遺物がほとんどみられなくなる。その中で5区南半では江戸時代後期から生活の痕跡が現れてくる。ここには江戸時代に創業されたとされる「奴茶屋」が調査前まで存在しておりその遺構と考えられる。

(高 正龍・久世康博・丸川義広・津々池惣一)

第2章 試掘・立会調査概要

I 平成6年度の試掘・立会調査概要

平成6年度の原因者負担による試掘・立会調査の委託契約件数は、試掘調査が10件、立会調査が13件、試掘+立会調査が1件、計24件である。これらには、試掘結果を含め第1章で扱ったものや、『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』で報告済みのもの、継続調査のため次年度の調査概要で報告予定のものがある。また、目立った遺構・遺物を検出できなかったものは、試掘・立会調査一覧表(表4)の記載にとどめた。その他、文化庁国庫補助事業である京都市内一円の立会調査(表4-22)が524件ある。これは『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度および平成7年度で報告しており、本書では省略した。

平安宮跡 平安宮朝堂院跡(1)では、夜間の試掘調査ではあったが、大極殿基壇の一部を初めて検出した。また、平安宮朝堂院跡～内蔵寮跡(2)の試掘調査でも大極殿基壇南縁、大極殿院北面回廊基壇南縁、大極殿院北面回廊基壇北縁を検出している。大極殿院は平安宮の最重要施設であり、平安宮を復原するうえで、最も重要な定点である。今回、大極殿院に関連する遺構が検出できた意義は大きい。他に内蔵寮南面築地の内・外溝を検出している。平安宮内蔵寮跡～中和院跡(3)では、内蔵寮、内膳司、中和院の推定地を縦断して立会調査を行い、これらの官衙に関連する溝の検出をみている。

平安京跡 左京八条二・三坊(4)の試掘調査では、上層は近代以降の盛土が分厚く堆積しており、下層は平安時代から江戸時代の包含層が層位的な関係を保って堆積していた。西洞院川の旧流路や近世以前の堀など、大規模な遺構も残存していた。右京三条一坊1(5)の試掘調査では、姉小路北築地内溝、土地区画を示す溝などを検出している。右京三条一坊2(6)の試掘調査では、平安時代前期の溝や建物、柵列を検出しており、柵列は皇嘉門大路の東築地心にほぼ合致している。溝や建物は、穀倉院の推定地内にあり、今後の穀倉院の発掘調査に向けて期待が持たれる。右京四条四坊(7)の試掘調査では、平安時代の遺構は検出できなかったが、室町時代後半の濠を検出している。西院城との関連で注目される。

その他の遺跡 北白川廃寺(8)では、白川通を南北3kmにわたって立会調査を実施し、縄文時代から室町時代までの土層観察、遺物の採取を行い、北白川地域の基本資料を得ることができた。小倉町別当町遺跡(9)の試掘調査では、鎌倉時代の溝、室町時代の濠状遺構を検出している。遺物には平安時代のものも多数あり、各時代の遺跡がまたがる複合遺跡といえる。その他、遍照寺跡(10)の立会調査では、現在の広沢池の西側で汀線を検出しており、旧広沢池は現在より西側にあったことが判明した。別に、古墳時代の須恵器や平安時代の遺物を採取しており、付近に立地する古墳や平安時代の寺院である遍照寺と関連すると思われる。(永田信一)

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院跡 (図版1)

経過 調査地点は上京区小山町から革堂前之町地内に所在する。千本丸太町交差点北側の道路西端で実施した試掘調査である。調査対象地域にはほぼ平安宮の中軸線が通り、平安宮における最も重要な施設である大極殿をはじめとして、大極殿後殿の小安殿および大極殿院北門である昭慶門などが推定されている。調査区は大極殿に1箇所、小安殿に2箇所、昭慶門に2箇所の5箇所に設定した。調査区の設定に際しては、これまでの平安宮跡の調査研究成果から想定できる各施設の基壇縁に該当する地点を考慮した。

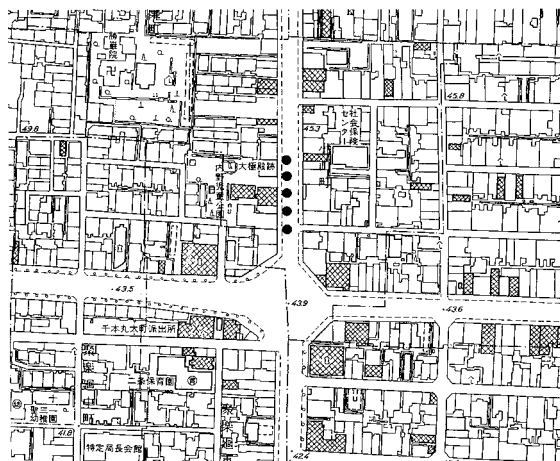


図 89 調査位置図 (1 : 5,000)

調査区は、対象地域が千本通の道路上のため設定範囲は最小限に限定され、いずれも東西1m、南北2mの規模に設定した。同様に、調査は交通量の少ない夜間調査を採用した。

遺構・遺物 昭慶門・小安殿比定地点に設定した調査区では、江戸時代の遺構と重複していたため、平安時代の遺構は一切検出することができなかった。しかしながら、大極殿比定地点に設定した調査区では、現地表下約0.3mで大極殿基壇の一部を検出することができた。遺物は、基壇の北側から瓦片が数点出土したが、遺構に伴う遺物ではない。

小結 今回の調査によって、大極殿に関係する遺構を初めて検出することができた。これにより、大極殿比定地点がほぼ間違いないことが確かめられた。(鈴木久男)

『平安宮 I』 1995年報告



図 90 夜間撮影風景 (北東から)



図 91 大極殿基壇 (北東から)

2 平安宮朝堂院跡～内蔵寮跡 (図版1・42)

経過 千本通の上長者町通から丸太町通間で道路工事が実施されることとなり、一連の道路工事に先行して試掘・立会調査を実施した。調査対象地域は、平安宮の中核ともいべき朝堂院・中和院・内膳司・内蔵寮などの諸官衙が所在した地域である。なかでも工事区間の南端部には平安宮内で最も重要な施設である大極殿も含まれており、これらの遺構を検出することを主目的として調査を進めた。試掘トレンチは、大極殿推定地点に1～3トレンチ、小安殿推定地点に4・5トレンチ、大極殿院北面回廊推定地点に6・7トレンチを設定した。このほかに、前述のトレンチ位置を含めて合計22箇所を南北3m、東西1mの規模で設定した。

遺構・遺物 1トレンチでは大極殿基壇南縁を示すと考えられる遺構を検出した。

4・5トレンチでは聚楽第に関連すると考えられる遺構から緑釉瓦や凝灰岩の破片が多数出土したが、平安時代に属する遺構は検出できなかった。

6トレンチで大極殿院北面回廊基壇南縁に伴う遺構を検出した。また7トレンチでは回廊基壇北縁の延石および雨落溝を検出した。延石の規模は長さ45cm以上、幅44cm、厚さ16cmあり、上面内側には幅8cm、深さ7cm程の地覆石と組み合わせるための切り込みがある。延石上面の標高は44.40mである。

18・19トレンチでは、内蔵寮南面築地の内溝と外溝にあたると思われる遺構を検出した。溝内より9～10世紀の遺物が出土した。

なお、11・12トレンチで平安時代の東西方向の溝状遺構を検出し、他のトレンチでも平安時代の遺物包含層を確認している。

小結 今回の調査は、小範囲であったが平安宮の最も重要な施設である大極殿の遺構を検出できた意義は大きい。(伊藤 潔)

『平安宮 I』 1995年報告

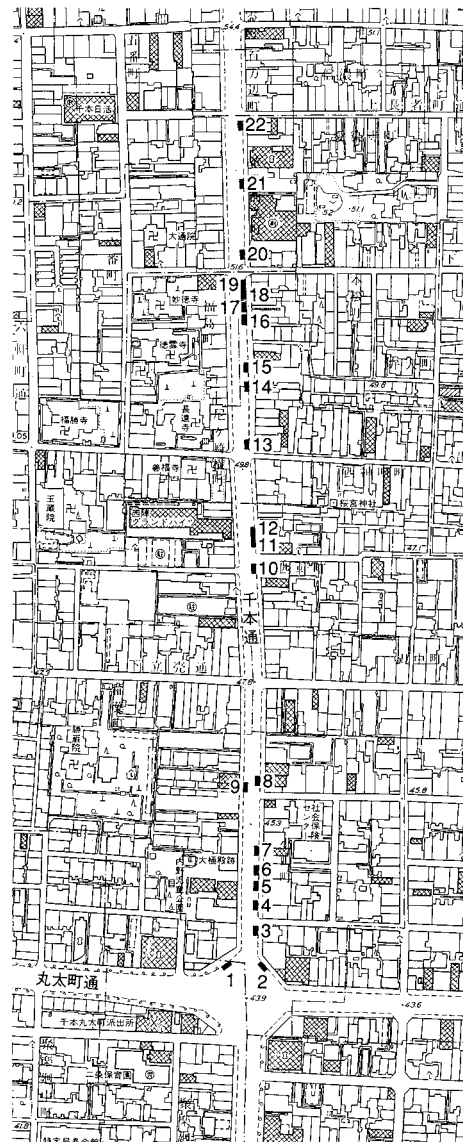


図92 調査位置図 (1 : 5,000)

3 平安宮内蔵寮跡～中和院跡（図版1）

経過 千本通の上長者町通から下立売通の間の西側歩道部分で、ガス低圧管入れ換え工事に伴う立会調査を実施した。調査区間は南北約 375 m である。当地は平安宮内蔵寮・内膳司・中和院に該当する。

調査開始は平成 6 年（1994）4 月 11 日で、まず試掘工事に伴う調査を実施した。その結果、歩道には電話、上水、下水、不明管など 4 本の既設管があり、かなり激しく攪乱されていた。しかし最も浅い埋設管による攪乱深度は、現地地表下 80 cm 前後であり、その下層には平安時代の遺構、遺物包含層が残存することが判明した。また、一部民家への枝管の埋設工事では現地地表下 30 cm 程度で平安時代の遺物包含層を確認することができた。本管敷設工事に伴う調査では平安時代の溝・土壌、桃山時代の堀状遺構などが検出された。なお、断面観察は、東壁が下水管により深く攪乱されているため、民家前 1 m 前後の西壁断面で行い、測量は、縮尺 1/500 の地図で民家の敷地南端や北端を起点とし、現歩道面を仮水準点とした。

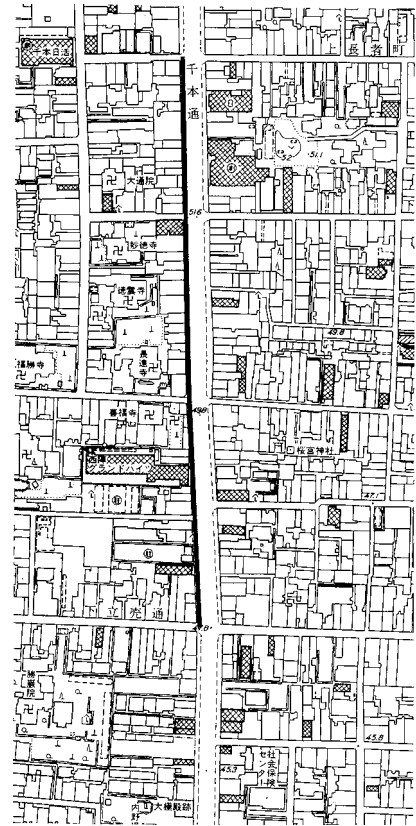


図 93 調査位置図（1：5,000）

遺構・遺物 検出した遺構総数は 28 基である。平安時代の東西溝は、推定内蔵寮で 2 条、鷹司小路の宮内延長上に 1 条、推定内膳司で 2 条、近衛大路の宮内延長上に 1 条、推定中和院で 1 条がある。いずれも築地に伴う溝あるいは官衙内を区画する溝と考えられる。また内膳司中央部では幅約 4.8 m、深さ 0.5～0.8 m の土壌を検出した。埋土に平安時代初期の土器類を多量に包含しており、土器溜状を呈する。近世の堀状遺構は 3 例ある。上長者町通の南 48 m では南北幅 13 m の北肩を、出水通の北 10 m では南北幅 26 m の南肩を、下立売通の北 13 m では南北幅 21 m の南肩をそれぞれ検出している。いずれも底部は確認できず、工事掘削深の 1.5 m 以上である。

出土遺物は、平安時代の瓦類が主で、なかに緑釉の鴟尾、熨斗瓦、丸瓦が各 1 点ある。土器類では土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器が出土している。内膳司で検出した土壌からは完形の須恵器壺蓋など大半が接合可能な状態で出土した。他に基壇に使われたと思われる加工痕の残る凝灰岩が 4 点出土している。桃山時代の遺物には各堀内より出土した瓦類がある。

小結 調査区は、内蔵寮・内膳司・中和院の中央部を縦断する位置にあった。これらの官衙の四至・施設などはほとんど解明されておらず、近隣で発掘調査が行われた時に、さらに性格や位置付けが明確にできるといえよう。

（本 弥八郎）

『平安宮 I』 1995 年報告

4 平安京左京八条二・三坊（図版1）

経過 今回の調査は道路付設工事に先立つ試掘調査である。調査地は平安京左京八条二坊十四町・八条三坊三町・西洞院大路にあたる。今回は4箇所の調査区を設定し、平安京や中世京都に関わる遺構の検出を目指した。

遺構 各調査区ごとに概要を述べる。

1区 現地表下165 cmまで石炭ガラ、その下には約100 cmの厚さで江戸時代から室町時代の遺物包含層が順に堆積している。最下層では幅240 cm以上、深さ約70 cmの東西方向の堀1条を検出した。その下は砂礫層である。

2区 現地表下160 cmまで石炭ガラが堆積、現地表下180 cmで厚さ約15 cmの焼土層を検出した。江戸時代の火災の痕跡と考えている。この下には室町時代・平安時代の遺物包含層が堆積しており、現地表下260 cmで砂礫層に至った。平安時代後期の瓦片を含む土壌を1基検出している。

3区 調査区西側現地表下75 cmで江戸時代後期の整地層を検出した。東側には深さ220 cmに及ぶ大規模な攪乱があり、その下面で西洞院川を検出した。幅310 cm以上、深さ100 cm以上ある。東岸には杭と板による護岸施設が遺っていた。現地表下320 cmまでしか掘削できなかったが、下層には古い時代の遺物包含層が埋積すると推定できる。

4区 調査区内に明治時代のレンガ造りの壇状施設が残っていた。攪乱の下には江戸時代・室町時代の遺物包含層が堆積しており、現地表下300 cmで砂礫層に至る。なお、壇状施設の盛土からも江戸時代から古墳時代の遺物が出土している。

遺物 1区 包含層から江戸時代後期の土師器・施釉陶器・磁器、堀から室町時代の土師器・瓦器・焼締陶器・瓦・鋳型が出土した。鋳型は小破片である。

2区 焼土層の上から江戸時代後期の土師器・磁器、焼土層の下層から室町時代の土師器・瓦器・焼締陶器が出土した。最下層からは平安時代後期の土師器・中国製白磁・瓦とともに古墳時代後期の土師器も出土している。

3区 江戸時代後期の施釉陶器の細片と西洞院川の護岸杭の一部を採集した。

4区 壇状施設の下層から室町時代の土師器、盛土から古墳時代後期の須恵器、江戸時代の磁器・瓦が出土した。

小結 調査地には近代以降の盛土が堆積しているが、下層には平安時代から江戸時代の遺物包含層が堆積することが判明した。また1区の堀や3区の西洞院川のような大規模な遺構を確認することができた。出土遺物は古墳時代から江戸時代にわたっており、各時代の遺構や遺物包含層が周辺に遺存する可能性は高い。

（山本雅和）

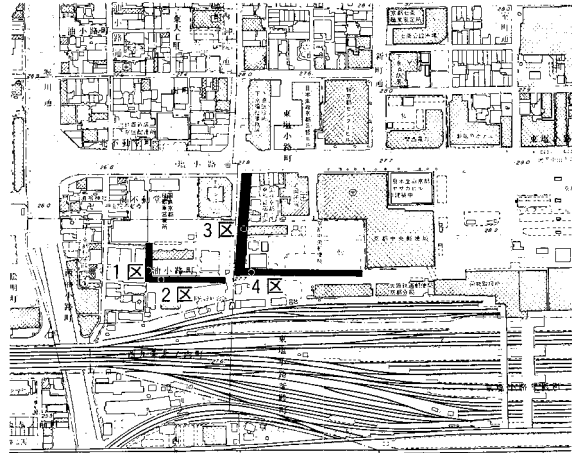


図94 調査位置図（1：5,000）

5 平安京右京三条一坊 1 (図版1・43)

経過 調査地は、中京区西ノ京梅尾町に該当し、当地は「街並み・まちづくり総合支援事業」に伴う二条駅文化ゾーンの予定地である。この地は右京三条一坊三町に該当し、平安京諸官衙の内の「右京職」が置かれた所であり、遺構・遺物の有無を確認するために調査区を5箇所を設定して試掘調査を実施した。

遺構 調査地の基本層序は、上層に旧国鉄時の整地層が0.9～1.6m、整地層下に江戸時代の耕作土である暗灰色砂泥層が厚さ約0.1mあり、以下に平安時代の遺構ベースである黄褐色砂泥層が堆積する。検出した遺構の総数は179基で、平安時代のものが主体であった。以下、各調査区ごとに検出した遺構の概略を述べる。

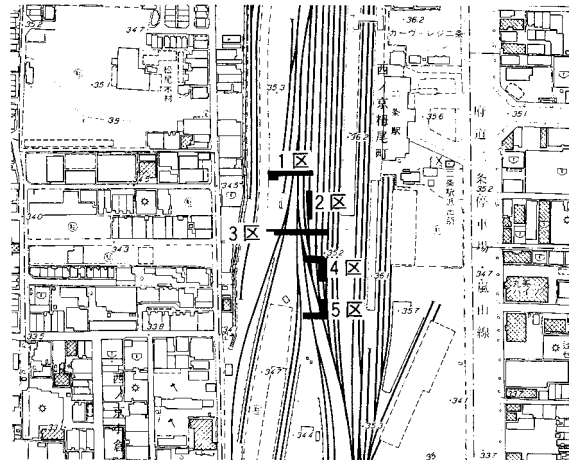


図95 調査位置図 (1 : 5,000)

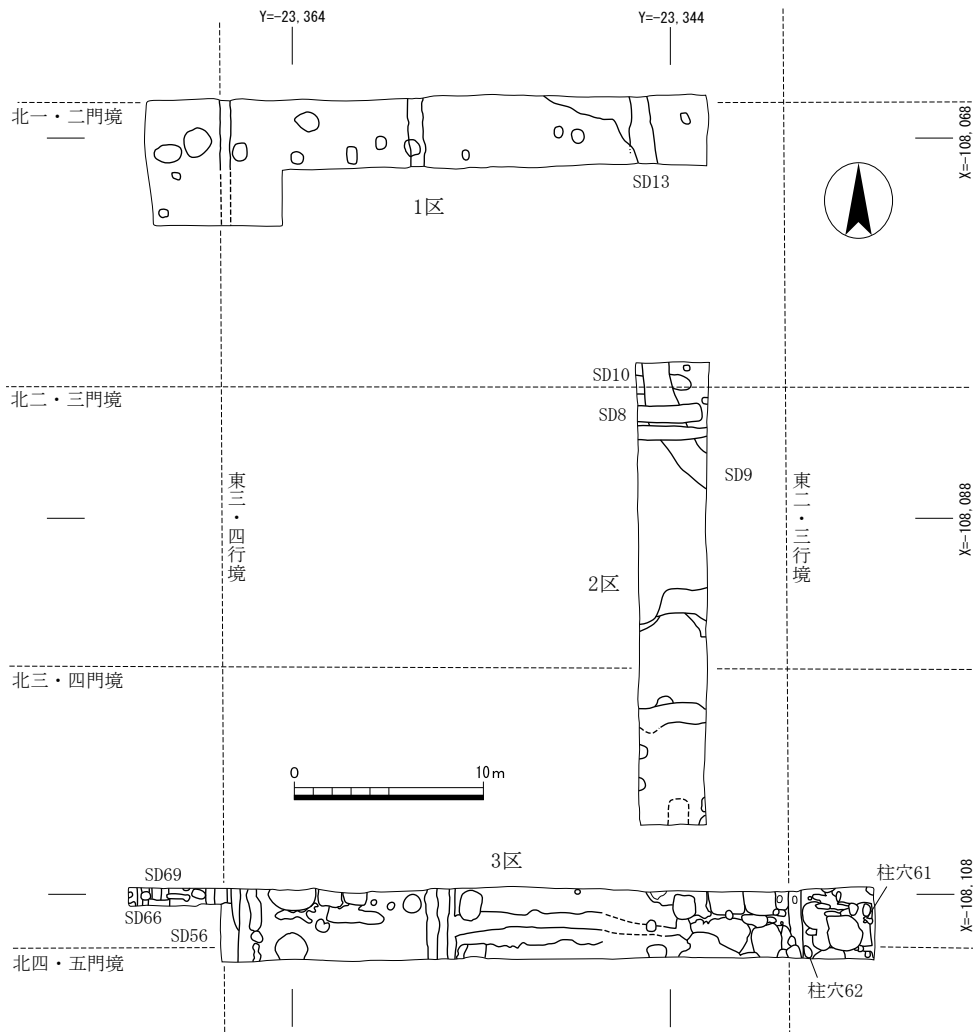


図96 1～3区遺構平面図 (1 : 400)

1区 西半部で、平安時代中期の東西方向の柱穴列を検出した。これらの柱穴は直径0.4～0.8mで、円形から隅丸方形を呈しており、上部は削平されて底部のみが残る状態であった。南側に拡張した結果、さらに2基の柱穴を検出したが建物規模は想定できなかった。東部では、鎌倉時代前期の南北方向の溝SD 13を3.6mにわたって検出している。

2区 この調査区は、北部に遺構が集中している。平安時代中期の東西方向の溝SD 10は北二・三門を区画する位置にあたり、幅1.0mの規模である。溝SD 9は1区のSD 13の延長とみられ、調査区南側で東に緩やかに曲がり、南東方向に延びている。また、東西方向の溝SD 8は、SD 9の廃棄後に成立しているが、出土した遺物からは時期差はほとんどみられない。調査区の南部には近世の土取穴がある。

3区 平安時代の南北方向の溝SD 56は東三・四行境の位置にあたり、幅2.0mで、約4mにわたって検出している。さらに西側には2条の南北方向の溝があり、SD 66は幅0.3m、SD 69は幅1.1mである。また、東部で検出した平安時代の柱穴61・62は、ともに小規模で中には柱が残存していたが、建物を復原するには至っていない。

4区 東部で、平安時代後期の地業SX 34を検出した。規模は南北12m以上、東西2m以上で、瓦片と拳大の石を多量に含み、さらに南と東に広がるとみられる。また、東二・三行境の位置では南北方向の溝を16mにわたって検出している。

5区 この調査区は、三町の南辺中央部に設定し、平安時代の東西方向の溝2条を、姉小路北築地内溝の推定位置で検出した。東側に位置するSD 30は、東端で南にL字状に屈曲し、さらに東に屈曲している。溝の幅は0.6mで、溝内には直径3cmの杭が多数打ち込まれている。西側に位置するSD 30Bは、幅0.8mの規模で調査区の中央部で北に屈曲しており、溝内の両岸には、2.1mにわたって半截した杭を対称位置に打ち込み、横板で護岸していた部分があった。さらに両溝の北側には、溝に沿って柱穴列を検出している。また、東部では4区のSX 34の延長とみられる地業SX 31を検出しており、東西4m以上、南北は36m以上の規模になることがわかった。

遺物 整理箱に98箱出土した。遺物の大半は瓦類で、丸・平瓦が大部分を占めており、なかには鴟尾片・緑釉瓦片や旧都から搬入した軒瓦もみられる。そのほとんどは、2・4・5区の地業・整地土層からのものである。土器類は、3区の推定東三・四行境の溝SD 56から10世紀代

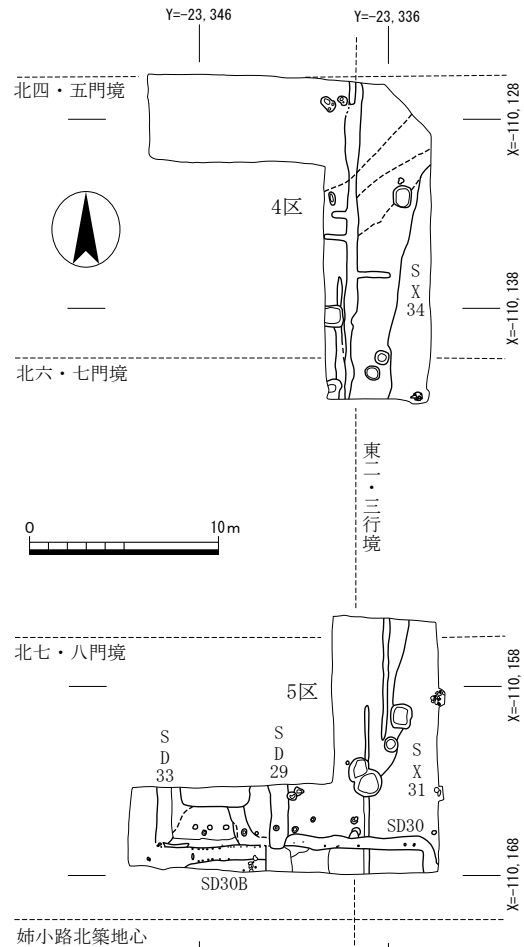


図97 4・5区遺構平面図(1:400)

のものが出土している。また5区のSD 30 Bからは9世紀代、SD 30からは12世紀代の土器類が出土した。さらに、複数の調査区で弥生時代・古墳時代の遺物が平安時代の地業や整地層などから出土している。

小結 平安時代に属する東西方向の溝SD 30・30 Bは、検出した位置から姉小路北築地内溝とみられる。前期のSD 30 Bは、溝内に半截した杭と板材を用いた橋とみられる施設をもっており、後期のSD 30は、SD 30 Bの廃棄後に地業SX 31・34と関連して造られたものと考えられる。また、SD 10・56など東西・南北方向の溝の位置は、四行八門の区画に合致するものがみられ、三町内における土地区画の一端を知ることができた。

今回実施した試掘調査の結果に周辺地の調査結果を踏まえて、三町西半部の遺構の状況をみると、平安時代から鎌倉時代の遺構は良好に遺存している。今後、広面積の発掘調査を実施することによって、官衙「右京職」の建物配置、平安時代以前の遺跡の発見や鎌倉時代以降の土地利用の変遷を解明できる可能性は高いとみられる。

(小檜山一良・小松武彦)



図 98 SD 30・30 B (北西から)

6 平安京右京三条一坊2 (図版1)

経過 中京区西ノ京星池町地内に所在する、330 m²の宅地で、二条駅地区土地区画整理事業に伴う事前の試掘調査を実施した。調査地は、平安京右京三条一坊七町、穀倉院、皇嘉門大路東側道路施設などに比定されている。

調査区は1区を東西9 m×南北8 m = 72 m²、2区を東西6 m×南北17.5 m = 105 m²と設定した。調査面積は合わせて177 m²を測った。調査は、平成6年(1994)10月27日から12月6日にかけて実施した。

遺構 検出した遺構には、平安時代前期、江戸時代に属したものがある。

平安時代前期の遺構は1区で検出した。溝、土壇、建物、柵、柱穴などがある。東西方向の溝SD4は、幅0.2 m、深さ0.05 mを測る。この溝は、土壇SK3北端につながる。SK3の平面形は不定形で、東西幅1.5 m、南北幅3.5 m、深さ0.3 mを測る。建物は2棟を検出した。ほとんどが円形の柱穴で、径0.2 m前後を測る。SB12は東西2間(3.0 m)以上、南北2間(5.3 m)。SB7は東西2間(2.0 m)以上、南北3間(4.0 m)以上を測る。柵SA9は調査区西端で6間分を検出した。その他、建物としてまとまらない柱穴を数箇所検出した。

江戸時代の遺構は2区を中心に検出した。溝、柵、柱穴、湿地堆積土層がある。溝は湿気抜きのためと考えられるもので、4条が東西に2 m間隔で並ぶ。柵は同じく東西に並ぶもので、数条を検出している。湿地状堆積は0.5 mに及び、最下層で江戸時代の遺物を含む。上層では近代に属した遺物が出土する。

遺物 出土遺物は平安時代前期、桃山時代、江戸時代、近代に属するものがある。

平安時代前期の遺物は、9世紀前半のもので、土師器皿・甕、須恵器杯・甕・壺、緑釉陶器椀、灰釉

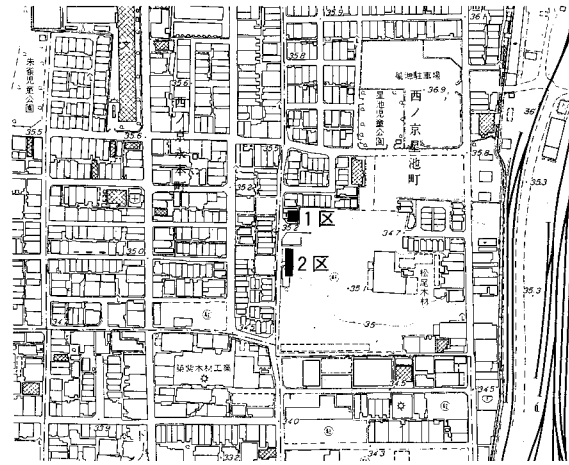


図99 調査位置図 (1:5,000)

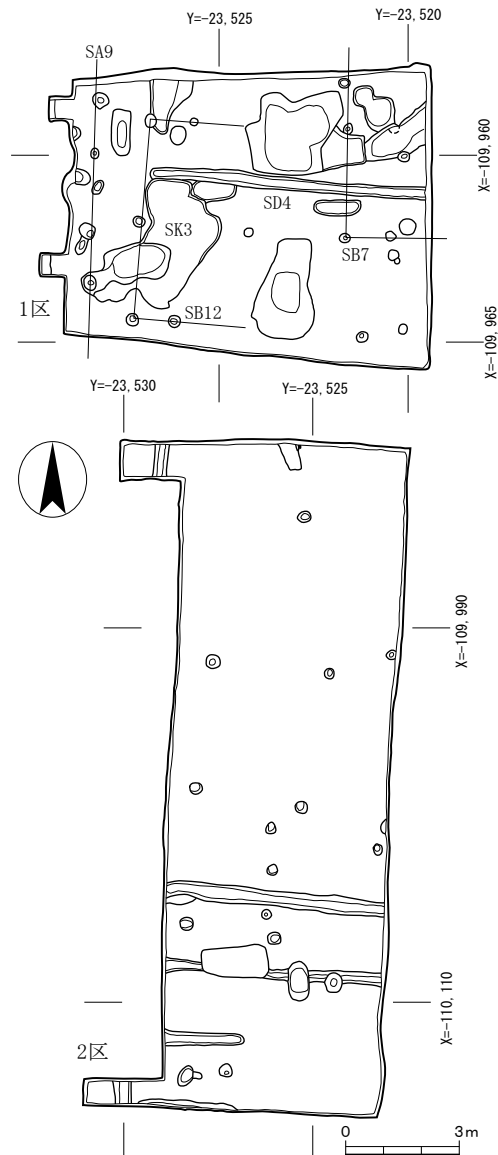


図100 遺構平面図 (1:200)

陶器皿・椀、黒色土器椀、瓦（丸瓦・平瓦）、加工面を持つ凝灰岩片などがある。

桃山時代の遺物は、土師器皿、陶器椀、磁器椀などがある。江戸時代の遺物は、土師器皿、陶器椀、磁器椀、ガラス製品、金属製品がある。その他、近代以降の遺物も出土している。

小結 1区で検出した東西溝、土壇、建物は9世紀前半に属しており、互いに関連を有した遺構群とみられる。柵列は推定皇嘉門大路東築地心にほぼ合致している。西への拡張調査で、溝の肩口を一部で確認した。このため、これらは大路東側道路施設の垣塀と側溝に比定できる。

調査地は穀倉院方4町地の南西端にあり、文献ではこの付近に院内雑舎群の存在が記述されている。今回の調査では、これを裏付ける遺構群が明らかになり、穀倉院の解明に向けた端緒が得られたものといえる。

（平田 泰）



図 101 1区全景（南から）

7 平安京右京四條四坊（図版1）

経過 葛野大路の拡幅に伴い、試掘調査を右京区山ノ内池尻町で行った。既存施設の確保のために、調査位置の設定に制約を受けたが、錦小路と無差小路の交差点南西コーナー推定部分（No.1 トレンチ）、および無差小路西側溝と路面の確認のためそこから南へ約32 mの位置（No.2 トレンチ）に調査区を設定した。

当調査地近隣の調査には昭和55年（1980）下水道工事に伴う立会調査、昭和61年（1986）西院笠目町、同年山ノ内苗田町での試掘調査などがある。

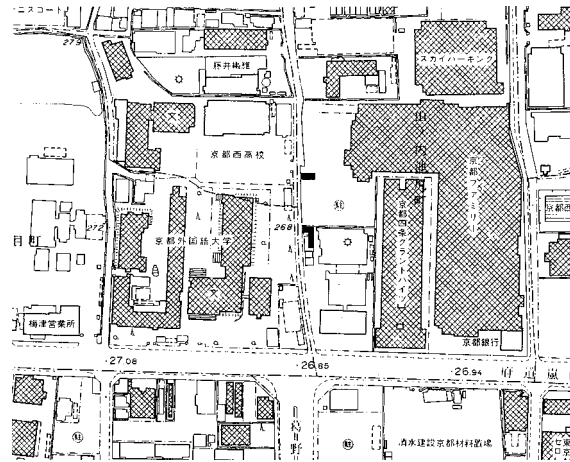


図102 調査位置図（1：5,000）

遺構 両試掘トレンチでは基本的に西下りの斜め堆積の土層が認められ、大規模な南北方向に延びる濠跡と推定される遺構が東側から徐々に埋っていった状況が観察できた。安全が確保できなかったため、現地表下2.3 mまで掘り下げたが底部は未確認である。東側がやや高い状態で、現地表下0.5～0.6 mで水田が成立するが、この段階でも西側が流路として残ることがわかる。堆積土の出土遺物は室町時代末期の遺物が中心をなすが、No.1 トレンチでは近世初頭の陶器を検出しているため、室町時代末期から近世の早い段階に堆積した土層と推定される。流路は現在では確認できないが近年までその機能を果たしていたようで、調査区西壁でさらに新しい護岸の板も認められた。調査地が限られているため一番古い段階の濠肩は西側はもちろん、東側でも確認できず、いずれも調査区外にある。

遺物 遺物の出土量は多くない。近代以降の瓦・陶磁器片以外は、大半が濠、流路の埋土、堆積土からの出土である。平安時代、鎌倉時代に属する遺物は少量で、ほとんどが小片で磨滅しているものも多い。その他は、室町時代後半期、16世紀代の遺物が大半で、桃山時代から江戸時代に属する遺物も少量である。

小結 調査地は平安京の錦小路、無差小路の推定地にあっていたが、室町時代後半代の規模の大きな濠と、縮小しながら後世にまで続く流路が検出され、平安時代の遺構は残存していなかった。推定される濠は南北方向で、室町時代後半代（16世紀代）に徐々に東側から西へ埋まり始め、調査区のほぼ中央部で東肩を形成する流路に姿を変えていく。東部分は、近世に入って田畑として利用された形跡があり、遺物の量的な推移もこれを裏付けている。流路は灌漑用水として利用されたものであろう。天文二年（1533）に法華宗徒と丹波から侵入しようとした細川晴国が西院、梅津で戦っている。また、西院城をめぐるのは、天文二十二年（1553）七月足利義輝（13代将軍）がこれを攻めている。西院城は大規模な環濠式平城であったとする説もあり、この流路の前身となる濠は、規模も大きく、存在した時期からみても西院城とこれらの事柄に関連するものとも考えられる。

(上村憲章)

Ⅲ その他の遺跡

8 北白川廃寺 (図版1・44)

経過 左京区白川通東側（一部西側も含む）の茶山通から東今出川通の間において、京都市水道局による配水管布設替え工事が計画された。その総延長3kmに及ぶ工事区は茶山通付近で北白川瓦窯跡、御陰通付近から北方では北白川廃寺、南方では小倉町別当町遺跡に推定されている。そのため、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、京都市水道局、盛建設株式会社の協力のもと、当研究所が原因者負担による立会調査を実施した。

調査は試験掘り、仮設管理設工事、本管工事に伴い、No. 1～70 地点まで番号をつけ、断面観察、実測、写真撮影、遺物採集を行った。その結果、縄文時代の土層・包含層、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代の包含層を検出し、遺物を採集した。調査期間は平成6年（1994）2月14日から開始し、途中中断もあり、平成7年（1995）4月6日に終了した。

遺構 調査区北端の白川通西側歩道部、東鞍馬口通南側歩道から北は地山が確認できなかった。東西に幅広く掘ったNo.2 地点の東側断面では、硬く締まった断面を観察しており、歩道の車道近くで土層が大きく変化している可能性がある。南側のNo.4・11 地点で現地表下0.9 m以下は粗砂層や砂泥層の無遺物層であった。同じく東側歩道部分においては、東鞍馬口通交差部より北側では、盛土層の下は粘土層の無遺物層であり、白川通造成時に削平されている。交差部から南へNo.26 地点までは、粗砂層・砂泥層などの無遺物層の水平堆積が認められた。

No.27～31 地点までは、粗砂層と砂泥層が互層に堆積し、東側から谷筋に流入し堆積したと考える。No.27～29 地点の堆積は、落込になる可能性がある。

No.16 地点から御陰通北側のNo.20 地点までは、No.35・36 地点に粗砂層が堆積しており、一時期の谷筋の可能性がある。

御陰通南側のNo.40～51 地点までは、無遺物層と考える黄褐色系の粗砂層の上に黒色や黒褐色の砂泥層が堆積していたが、遺物は確認できなかった。

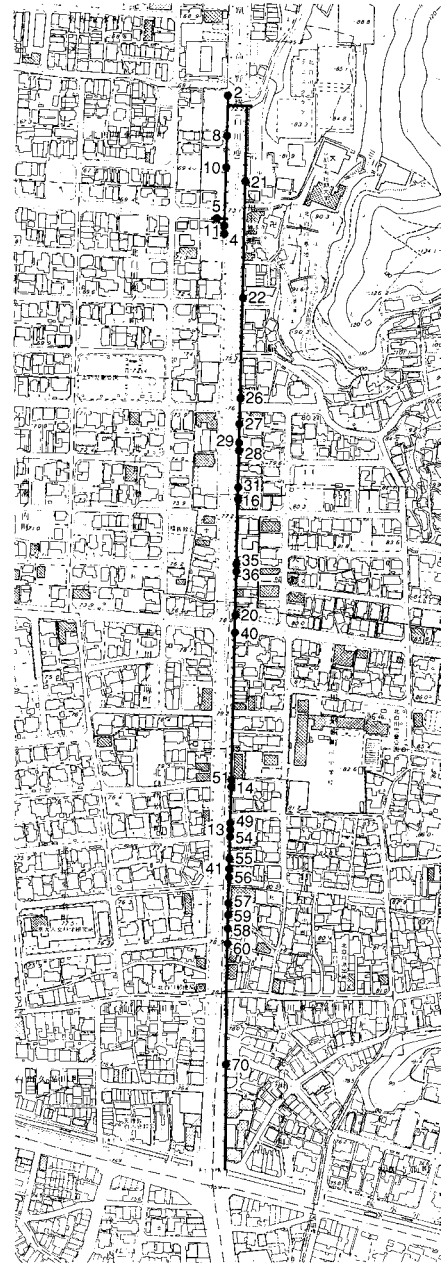


図103 調査位置図 (1:7,500)

No. 14～57 地点までは、盛土層の下に中世から飛鳥時代の遺物包含層があり、その下に黒色ないし黒褐色砂泥層の縄文時代の遺構や遺物包含層がみられ、以下砂層や粗砂層の無遺物層となる。遺構は、縄文時代の土壇1基、落込1基、遺物包含層を2箇所検出した。土壇はNo. 57 地点の現地表下72 cm、幅310 cm、深さ60 cm、落込はNo. 49 地点の現地表下34 cm、幅350 cm以上、深さ44 cm、遺物包含層はNo. 54 地点の現地表下20 cm、No. 55 地点の現地表下34 cmで検出した。No. 54 地点では排土中より縄文土器を87片採集した。縄文土器はこの地区しか出土していない。その他に平安時代前期の遺物包含層をNo. 56 地点で確認している。

No. 59 地点から東今出川通交差部のNo. 6 地点までは、黒色ないし黒褐色砂泥層はみられず、室町時代や平安時代後期の遺物包含層下は無遺物の粗砂層や砂礫層になる。室町時代の包含層はNo. 58・59 地点、平安時代後期の包含層はNo. 70 地点である。No. 70 地点の遺物包含層は遺構になる可能性もある。No. 57 地点と59 地点の間の「かに道楽」南隣地境界から北へ2.5 mの地点では、石材が検出され、それより南のNo. 58・59・60 地点の28 m間では無遺物層が深くなっており、これは室町時代の東西方向の何らかの遺構を想定できる。

遺物 遺物は、整理箱に4箱出土した。小倉町別当町遺跡にあたる下別当町では、No. 13・14・49・54・55・57 地点にて縄文時代の鉢、古墳時代の土師器甕、飛鳥時代の土師器皿・甕・鉢などを採集した。北白川廃寺にあたる大堂町・山田町では、No. 28・29 地点で平安時代前期の土師器皿・杯・高杯・甕、緑釉陶器碗、須恵器甕、平瓦を採集し、北白川瓦窯跡に近接する北白川上

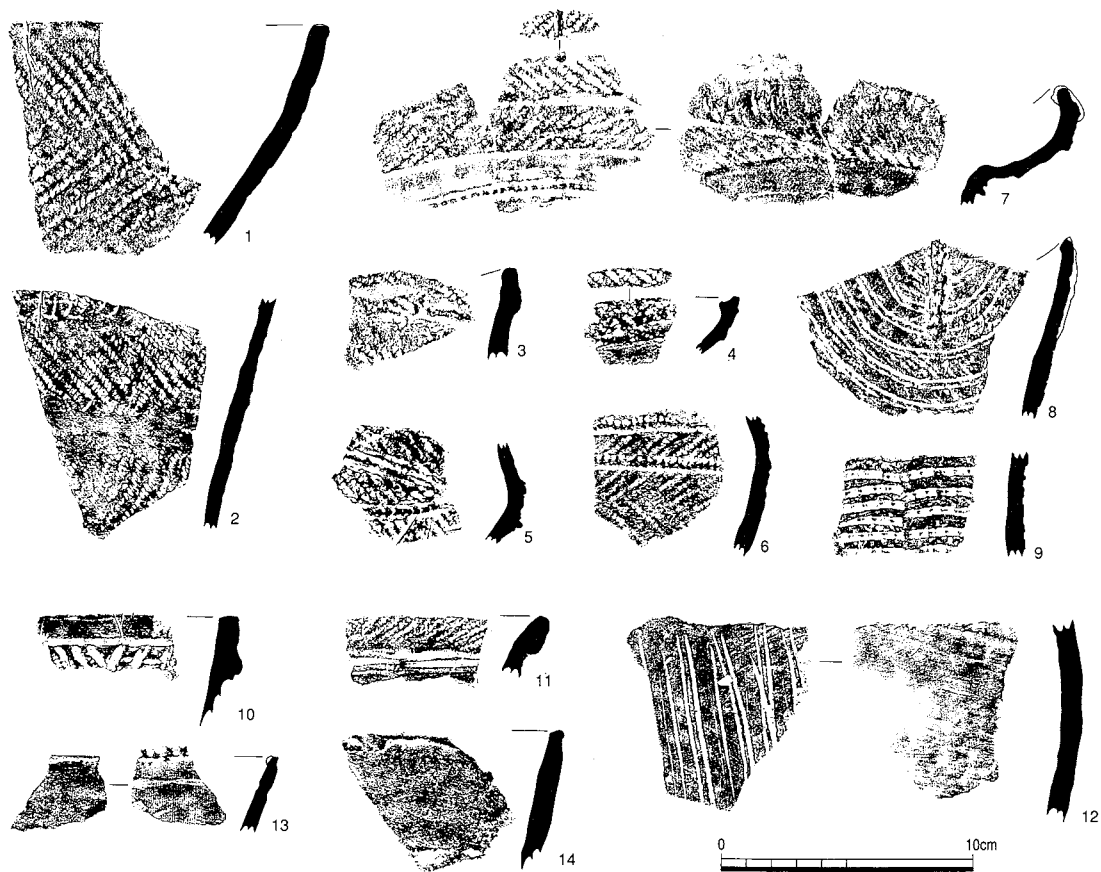


図104 縄文土器実測図 (No54 地点 : 1・3・4・6・8～14, No49 地点 : 5・7) (1 : 3)

終町では、室町時代の土師器皿（No.5 地点）、時期不明の土師器皿（No.8・10 地点）を採集した。

縄文時代前期の土器は、（図 104 - 1 ~ 7）の深鉢。1・2 は羽状縄文を施文し、1 は口縁端部に浅く押さえた刻み目をもつ。3 ~ 6 は縄文地に隆帯または突帯をもつ。7 は特殊な突帯をもち、内面に爪形文を施文する。1・2 は北白川下層Ⅱ - b 式、3 ~ 6 はⅡ - c 式 ~ Ⅲ式、7 はⅢ式に比定される。

縄文時代後期の土器は、（図 104 - 10 ~ 12・14）の深鉢、（13）の鉢。10 は口縁端部の下端を沈線で区画した中に、対向する斜めの平行な沈線を施文。11 は肥厚した口縁外面に縄文を施文。12 は体部外面に縦方向の条線を施文。13 は口縁端部内面に刻み目をもつ。14 は無文のもの。すべて北白川上層式におさまるとみられる。

その他に、（図 104 - 8）は粗い縄文地の上から半截竹管で何重にも円弧状に軽く押し引きし、波状口縁の先端部から隆帯を垂らす。（9）は横方向の押し引き沈線を平行に何条も施文する。いずれも類例が少なく時期不明である。

小結 大正時代の地図をみると、御陰通付近は谷筋となっており、白川の形成した扇状地を分けている。このことは立会調査の結果、御陰通付近を境に南北で基本土層が変わっていることと符合する。北側は、粗砂層・泥砂層・砂泥層などが互層堆積をしており、その上の層から平安時代の遺物などを採集した。一方、南側は、現地表下 1 m 以下は粗砂層となっており、その上の黒ボク状土層では縄文時代から中世にかけての遺構を検出し、遺物を採集した。このあたりは各時代の遺物が出土することから、良好な立地条件が整っていたと考えられる。しかし志賀越道付近から南側は、粗砂層・砂礫層の洪水層となっており、その上の層には中世の包含層しかなかった。

小倉町別当町遺跡では、東方の北白川小学校における発掘調査（本概要第 1 章Ⅵ - 19）、No. 41・56 地点に東面するエトワール中山における国庫補助立会調査（94 B B - K S 504）などで、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。今回の立会調査の結果、土壌や遺物包含層の検出範囲は、北は上別当町との町境の No. 14 地点から、南は志賀越道より一本北の路地の No. 57 地点であることが明らかになった。これが遺跡の南北範囲と考える。

北白川廃寺跡では、No. 27・29・28 地点で平安時代の遺物包含層、No. 16・18 地点で少量の遺物を採集したが、北白川廃寺の遺構は検出できなかった。

北白川瓦窯跡の周辺では、No. 5・8・10 地点にて少量の遺物を採集したのみで、窯跡に近い No. 21・22 地点においては、窯跡に関連する遺構・遺物は検出できなかった。これは道路などで上部を削平され、遺構の残存状態が悪かったものと考ええる。

今回の調査では、このような上・下水道、電気、電話、ガスの配管の新設・入れ替えに伴う掘削工事による文化財調査で、線的に遺跡範囲を確認できる有効性が再認識される結果が出た。立会調査は掘削幅の狭い調査ではあるが、線の調査をさらに重ねることで、遺跡の全体像を把握する一助になるであろう。

（竜子正彦・尾藤德行）

9 小倉町別当町遺跡 (図版1・45)

経過 北白川小学校は、都市公園内の既設プールを廃止し、新設する計画を立て、隣接する民家を買収し、用地に充てた。当該地は小倉町別当町遺跡内にあたり、同時期に校内の南西部で体育館の改築に伴って実施していた調査区で各時代の遺構が検出されていた(本概要第I章VI-19)。プール建設予定地でも遺構の存在は予想されたが、調査期間・費用など原因者の要望もあり、遺構面の深さを確認するために短期間の試掘調査を計画した。調査は、平成6年(1994)11月21

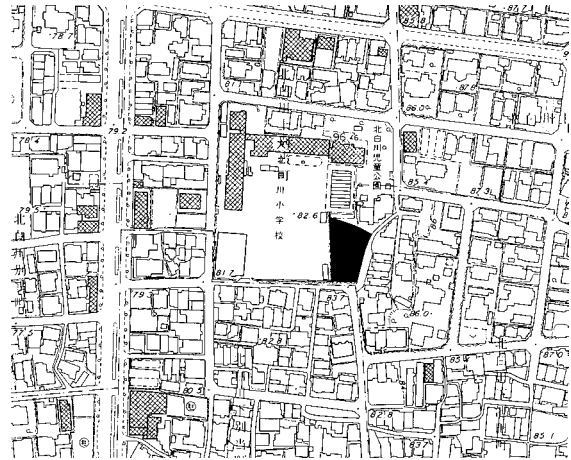


図105 調査位置図(1:5,000)

日から12月16日まで行い、260㎡を調査した。その結果、地表下0.3m前後に遺構面があり、全域に広がっていたため、建設にあたっては、敷地に盛土を行い、遺構を保存する方向で協議した。

遺構 東西方向に3本(EW1・EW2・EW3)、南北方向に1本(NS1)のトレンチを設定し、重機で掘削した。EW1トレンチでは、現地地表下0.3m前後まで掘削し、飛鳥時代の土壌を検出した。EW2トレンチでは、現地地表下0.2～0.3mで遺物包含層を検出したため、以下の掘削を中止した。EW3トレンチでは、表土層の直下で灰白色の砂層を確認したが、トレンチの中央部でなくなり、河川(SD15)の堆積土層と認識した。河川の西肩部には径0.5mの花崗岩が据わり、礎石と考えた。NS1トレンチでは、北部で土壌・柱穴・流路などを検出し、南部で基壇状の東西方向の石列を検出した。EW3・NS1トレンチでは基壇建物を推定させる礎石、石組み遺構を検出したため、トレンチの拡張を行った。

拡張区で検出したSD15は当初、自然流路と考えたが、攪乱の断面では西肩が垂直に落ちていること、西肩のプランが直線的であることなどから掘状遺構と考え、当初のトレンチ北壁沿いに幅0.8mの断ち割りのトレンチをいれ、底の確認作業を行った。その結果、掘形が垂直に落ちる箱形になり、しかも東・西にテラス部があり、その間は幅約4mにわたって一段掘り下げている状況がわかった。深さは、西肩部で0.4m、東肩部で0.8m、埋土上面から最深部までの深さは2.2mになる。また、東・西のテラス部には黄褐色泥砂と灰白色砂を混ぜる土を敷き、地山の灰白色砂層が流失するのを防いでいる。底には微砂層が薄く堆積しているが、泥土層はなく水が停滞した痕跡はない。埋土は砂層と微砂層で大きく2層に分かれるが、砂層(白川砂)が卓越する。断面から判断すると西肩部が早く埋没し、次に東側が埋まっている。底部に遺物がなく、埋土の上層からは瓦器椀・ヘソ皿などが少量出土した。西肩、北肩は室町時代前期の遺物包含層を切って成立しており、廃絶期の上限は室町時代前期とみられる。なお、付近には現在河川がなく、どこからSD15に引水したか問題になるが、仮に東約250mにある白川から引水したと推定すると、白川が現在のように川底が深かったと仮定するなら、ダムを構築して水を流したものと考えられる。

SD20は東西溝で、幅は3.1～4.0mある。底のレベルは場所によって異なり、しかも凹凸

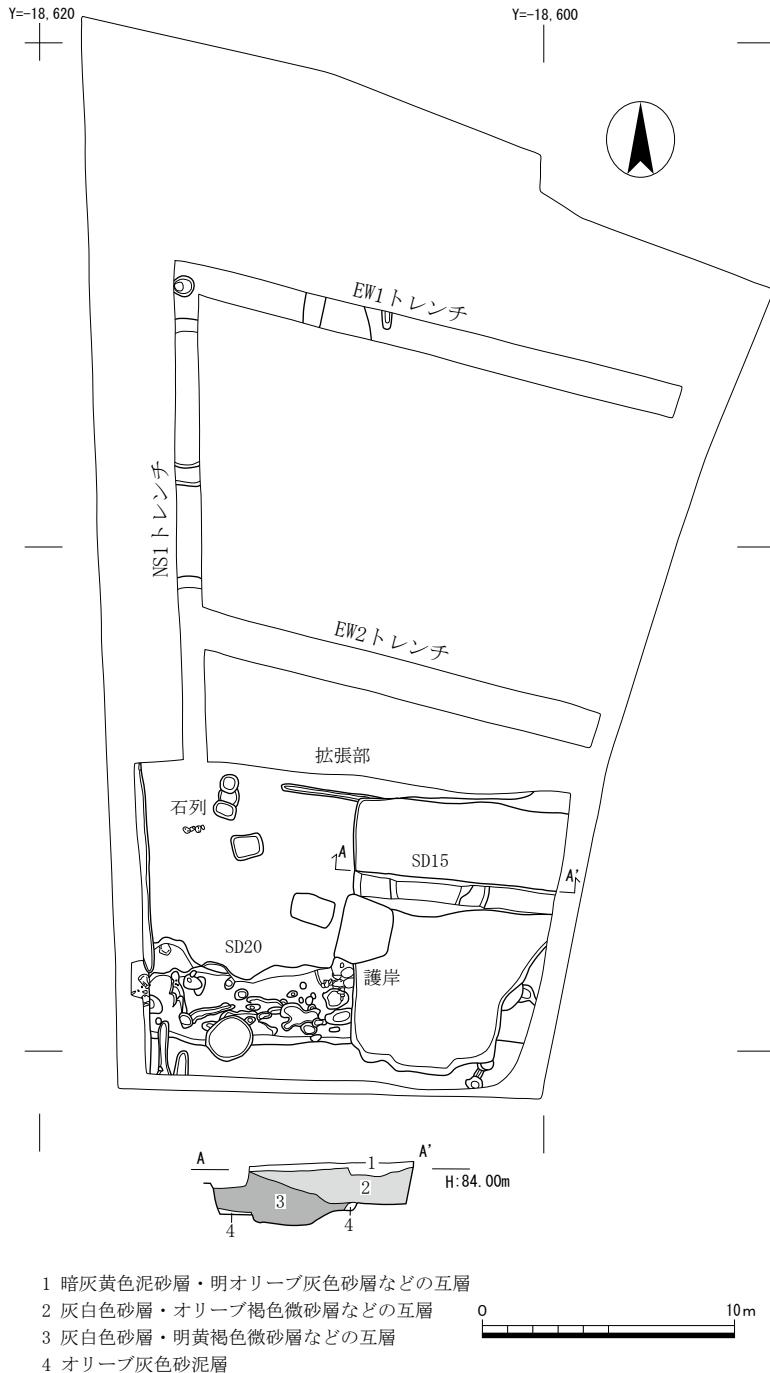


図 106 遺構実測図 (1:300)

が激しい。全体に東部が浅く西部が深い。底の凹凸は地山の砂層が流水によって削られたものである。東部と西部の2箇所の埋土には多量の礫が放り込まれていた。特に東側の礎石と誤認した花崗岩は一部が溝の護岸として構築されていた。

遺物 縄文時代晩期から室町時代にわたる各時代の遺物が整理箱7箱出土した。時代別出土量では飛鳥・白鳳時代から鎌倉時代の遺物が多く、他の時代のものは少ない。出土遺構別では、鎌倉時代後半に埋没したSD20から各時代の遺物が多量に出土した。

縄文土器は、SD20から晩期の土器が1点出土した。弥生土器は、SD20・遺物包含層から少量の畿内第V様式の遺物が、古墳時代の遺物はSD20・遺物包含層などから出土した。飛鳥時代から奈良時代の遺物は、SD20・遺物包含層から出

土した。平安時代の遺物は11世紀の遺物が量的に多く、鎌倉時代の遺物もSD20から出土した。室町時代の遺物は、SD15・遺物包含層などから少量出土している。

小倉町別当町遺跡は白鳳時代を中心とする遺跡であるが、調査により東部の丘陵に各時代の遺跡が存在することを遺物が証明している。個々の遺物では、平安時代後期に属する白磁の獣の台座、軒瓦などが注目される。

小結 小倉町別当町遺跡を対象とした試掘調査であったが、対象とする時代の遺構は少なかった。しかし、鎌倉時代の溝SD20、室町時代の堀状遺構SD15を検出し、各時代の遺構が、北

白川小学校東部の丘陵に広がっていることがわかった。丘陵は北を山中越、東を白川、西を白川通東側の南北断層に囲まれた、東西約300m、南北350mの規模で、平坦地と緩やかな緩斜面で構成される地形である。調査地点はこの台地の南東よりの地点であった。

遺跡地図には、台地上に後期古墳が2基（池田町1・2号墳）掲載されているが、今回の調査で検出した遺構・遺物から、縄文時代から奈良・平安時代におよぶ各時代の集落の存在は確実である。さらに、SD 20の方向・規模・出土遺物などから、10世紀から13世紀に中心をもつ集落が台地に展開し、巴文の軒丸瓦、山茶碗、山茶碗を転用した朱墨の硯、猿面硯、白磁碗・皿、灯明皿に使った青磁皿などの遺物から、寺院跡・邸宅跡などが予想される。

SD 15は近隣に展開した城郭、北東の瓜生山の山頂にあった瓜生山城、東部の銀閣寺の北側に位置した中尾城と関連して考えると、両城共に指呼の位置にあり、出城に伴う堀と考えられる。堀は南に続かないことから、北西の土橋の部分と考えられるが、検出規模が一部なので推定にとどまった。

なお、現地で米原町教育委員会の中井均氏から近隣の城郭と堀について教示を受けた。

（百瀬正恒）

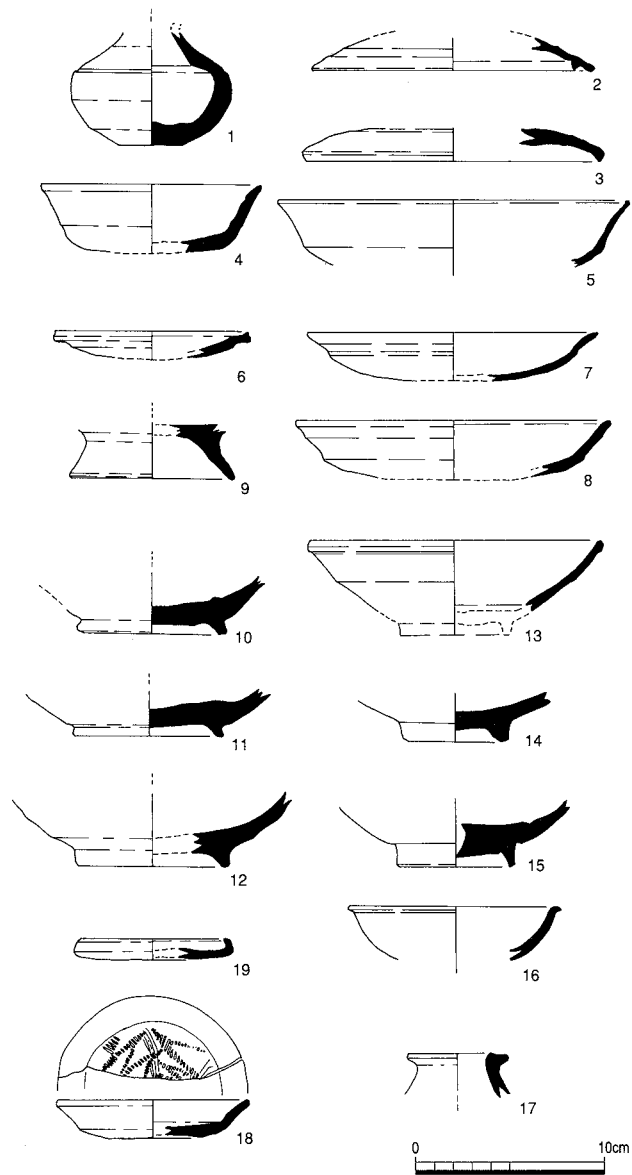


図107 出土土器実測図（包含層：1～3、SD 20：4～19）（1：4）



図108 出土軒瓦拓影（1：4）

10 遍照寺跡 (図版2-1・46)

経過 西部第二排水区西部(第二)系統支線整備(その1)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は右京区嵯峨広沢町、嵯峨釣殿町、嵯峨大沢落久保町地内に位置し、平安時代に開創した遍照寺跡に比定されている。当該地は遺跡範囲の南端部にあたり、さらに縄文土器散布地、一本木古墳、広沢古墳群などが近接している。

調査は、工事区を2区に分割して実施した。

遺構・遺物 1区は、児神社の西から嵯峨七七

塚古墳群に向かう道である。ここでは60m以上の距離にわたって、現代盛土層の下に、3~8層に及ぶ旧路面の堆積を連続して検出した。これらの層は主に黄褐色から暗灰色系の泥砂層で、2~3cmの大きさの礫が多く混じり、よくしまった堆積である。

2区は、同神社の東から広沢池西岸を北上する道である。No.3地点では旧路面の下で、鎌倉時代の遺物包含層を検出した。この遺物包含層は厚さ約0.3mで、さらに西側に広がるとみられる。また、No.1地点から南に13m以上にわたって、現地表下1.1mに暗褐色砂泥層が約0.5mの厚さで堆積していることがわかった。この堆積層の下部では、池の洲浜とみられる石敷きを部分的に検出した。No.2地点の土壌は、幅0.3m、深さ0.3mの小規模のもので、埋土からは江戸時代の狐をかたどった土製人形が出土している。

小結 調査対象である遍照寺跡は、広沢池の北西にある朝原山麓が寺域とされ、花山天皇の勅願により永祚元年(989)に宇多法皇の孫にあたる寛朝僧正が開創したとされる。大覚寺が所蔵する『大覚寺伽藍図』には、朝原山麓の広沢池北西部に檜皮葺の堂宇として描かれており、近年の確認調査では、池の北西岸に方形の基壇状遺構と雨落溝が残存していることが明らかになっている。

今回の調査では、遍照寺跡に直接関連する遺構の検出はなかったが、No.1地点で洲浜や池の堆積層を検出したことにより、旧広沢池の汀線はさらに西側に存在したことが明らかになった。さらに、鎌倉時代の遺物包含層の広がり、調査区北の嵯峨釣殿町(No.5地点)で同寺の創建年代に合致する10世紀末の土器類を採取していることから、主要伽藍は池北西部に立地し、池の西岸部にも関連する施設が展開しているとみられる。

また、児神社境内の南西隅にある地表がマウンド状に盛り上がる部分(No.4地点)で、古墳時代後期に属する須恵器杯片を2点表面採取している。この地点の南西に近接して古墳時代後期に築造された古墳群があり、このマウンドも同時期の古墳の可能性が高いとみられる。

なお、出土した土製人形はこの神社に奉納されたものとみられる。

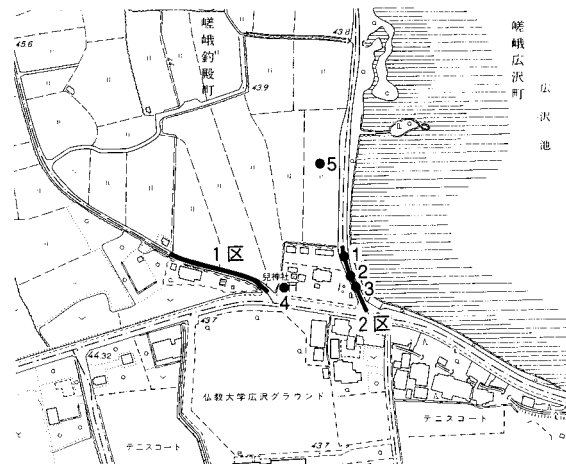


図109 調査位置図(1:5,000)

(小檜山一良)

第3章 資料整理

1 遺跡測量

本年度における遺跡測量作業は、27 調査現場 62 件の調査基準点測量や地形測量における図根点作成作業、および 7 調査現場 19 件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。また、外部からの依頼をうけて 7 調査現場 12 件の基準点測量を行っている。調査基準点測量の内訳は発掘調査 69 件、試掘・立会調査 3 件、その他 2 件である。

遺構平面図の実測が手書きからトータルステーションの利用や写真測量によるデジタル化が進んでいる。このため、どこでも利用できる標準の遺跡測量におけるデジタルフォーマットの提唱を行ってきた。これらの利用は、ただ単に保存のためではなく遺構や遺物とのデータリンクによるトータルな利用、遺跡の修復におけるシミュレーションなどへの利用、啓発事業への展開などコンピュータの進歩と歩調を併せて進化していくであろう。2次元から3次元データの利用頻度がますます増加することは明確であり、画像とのリンクを含めた今後の考古学会の情報の統一が重要度を増すと思われる。そのためにも遺跡測量における精度の統一管理やトータルステーションなど機械類の保守管理の重要度が増し、基礎的な測定の知識が必要となってくることは明確である。

(辻 純一)

2 コンピュータ

(1) はじめに

当研究所では、郵政省の平成 6 年用お年玉付年賀葉書など寄付金でコンピュータシステムの導入・整備を行った。以下にその概要を説明する。

(2) 目的

当研究所では、すでに郵政省の昭和 63 年用お年玉付年賀葉書など寄付金でコンピュータシステムの導入を行っていたが、情報が年々蓄積されるにつれ、データベースの検索の遅さ、ネットワークサーバーの応答性の悪さとファイル容量の少なさ、使いにくさが顕著になっていた。そこで今回は以下の点に注目してコンピュータシステムの導入・整備を行った。

1. データベースの検索・応答速度の向上
2. 多量のデータの一元管理
3. 高速で使いやすいネットワーク
4. 高品質な画像の出力

なお、機器の選定にあたっては既存のソフトウェアの互換性や、データ・作業の継続性も考えて、次にあげる機器を導入した。

ネットワークサーバー

本体	SONY NEWS NWS-5000WI
OS	NEWS - OS (Berkeley Version Unix)
主記憶	48MB
補助記憶	3.5GB
データベース	Informix - SE、SQL、ESQL/C
G I S	CITYIS

パソコン（主に画像処理用）

本体	Apple PowerMacintosh 8100
主記憶	48MB
補助記憶	500MB
画像処理	Adobe PhotoShop

ネットワーク

ARA Server	LanRover / E3.0
ISDN-TA	OKI PCLINK-TA / 296
モデム	Midori-Hayes Optima 288

カラープリンター

本体	FUJI PictroGraphy3000
主記憶	32MB

これらの性能を以前のお年玉付年賀葉書など寄付金で導入した機器と比較してみると、

ファイル容量	6 倍
CPU能力	70 倍
浮動小数点演算	140 倍
モデムスピード	12 倍

この数年間でコンピュータの性能は劇的に向上しているのがわかる。

(3) 導入後

最新のネットワークサーバーに換えたことによって、データベースの検索・応答速度は飛躍的に向上した。特に検索・グラフィック処理を多く用いる GIS（地理情報システム）では、今まで1枚の遺構図を画面に表示するのに1～2分かかっていたが、新しいシステムでは十数秒で表示できるようになった。

また、ARA（Apple Remote Access）という非常に使いやすいネットワークと高速モデムを導入したので、遠く離れた現場からでも比較的簡単に本部のネットワークサーバーにアクセスできるようになった。ちなみに関西ではARAを使っている組織は多く、事実上のネットワーク標準になっている。

(4) 今後

蓄積された情報を加工・利用するシステムは比較的短期間でつくれるが、その情報を作り出すシステムの構築は遅々として進まないのが現状である。これからは発掘現場と密に連絡を取り合って、発掘現場からのデータが迅速に情報として蓄積されるようなシステム構築が急務である。

そして、この先も多くの組織と協力をしながら、お互いにより良い情報システムの構築をめざして行きたい。
 (宮原健吾)

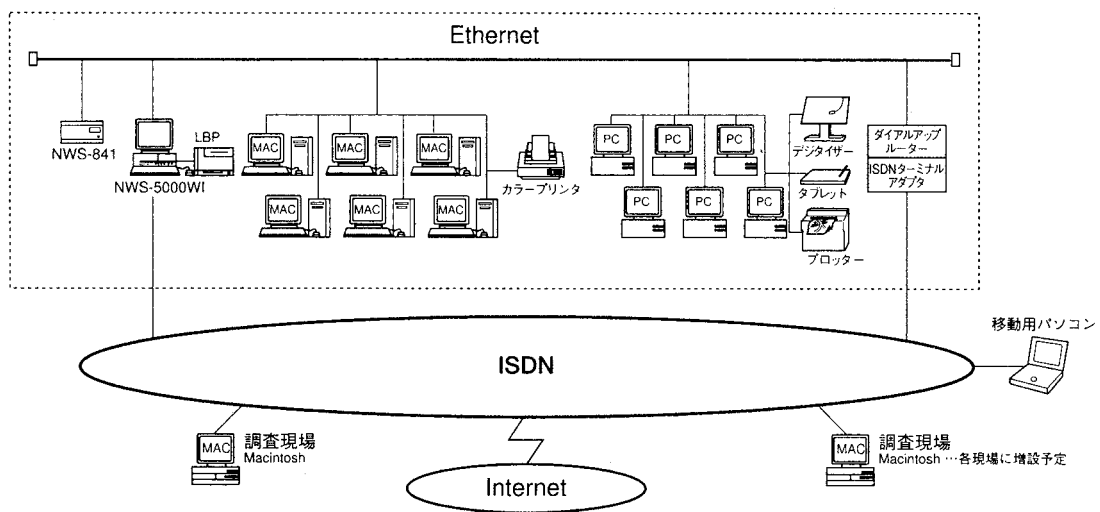


図 110 システム構成図

3 復原

—平安宮内裏内郭回廊雨落溝の複製作り—

本年度、通常の遺物復原の他に、市内の発掘調査で平安時代の雨落溝が発見されて複製作りを行った。調査地は上京区下立売通千本東入田中町で平安宮内裏を囲んでいた内郭西面回廊の一部にあたるのが判明していた。雨落溝が非常に良好な状態で発見されたので、これを何らかの形で一般公開を行いたいと考え、部分的であるが複製を作る運びになった。

この回廊雨落溝の複製作りするにあたり、現地で雌型を取り、それをもとにして樹脂で雄型を取ることにした。作業は資料係を中心に1994年6月から9月の期間内の中で実施した。

作業内容は以下のとおりである。

(1) 雌型製作の工程

型取りの準備

型取りをする遺構部分(1.1×1.6m)の周りに固定する型枠(ウレタン樹脂用)を前もって作り、遺構平面の凸凹部分にあわせて板材を荒削りしたものを準備しておく。遺構部分の周りに垂糸を張りめぐらして、型枠の底部が水平レベルの面で設置できるようにする。シリコン樹脂の流出防止と型枠として、带状にした粘土を遺構面に置く(図111)。型取りをして遺構部分に損傷を与えない為にと、型離れが良い為に離型剤としてカリ石鹼液を噴霧又は塗布する。

シリコン樹脂の塗布

シリコン樹脂は、シリコン基剤1kg：硬化剤10g：硬化促進剤5gの割合で加え攪拌するのが基本であるが、外気温や作業条件などで硬化促進剤の量を調節する必要がある。シリコン樹脂1層目は丁寧に順々に、遺構面の高いところからよく混ぜたシリコン樹脂を流し込むようにしながら塗布する。このとき、どうしても低いところにシリコン樹脂が溜まってくるので、なるべく全体のシリコンの厚みが均一になるように心がける(図112)。

1層目の硬化後あまり時間を開けないで、シ



図111 型枠として带状粘土を置く



図112 シリコン樹脂を塗布



図113 ガラスクロスで貼り込む

リコン樹脂2層目には補強の為のガラスクロス（あらかじめ10×20cm切ったものを主に）を、シリコン樹脂で貼り合わせ（約1cmの端の重なり）ながら、刷毛でガラスクロスの下の空気を叩き出すようにしながら塗布する（図113）。

シリコン樹脂3層目は、石の出っ張っている角などシリコン樹脂層が薄くなっている所を重点的に塗布する。

型枠を設置

前もって作っておいた型枠板材4枚と直角三角形の板材4枚のそれぞれに、離型剤の代わりとして薄ビニールで包み込む。そして型枠板材をL形金具や直角三角形の板材（これで雌型の底部部分四隅に水平レベルが平面としても現われる）で固定して、型枠全体の歪み防止と補強をした型枠全体を作る。遺構面の帯状にした粘土の上に型枠を置き、型枠の水平レベルの調整を計りながら、型枠と帯状粘土部分の穴を粘土で補正（発泡ウレタン樹脂の流出防止）する。シリコン樹脂層に濃いカリ石鹼液を塗布する。

ウレタン樹脂を注入

発泡ウレタン樹脂は2液性で、同体積量を攪拌すると発泡し始め、約30倍（外気温によって膨張率が違う）の体積になり硬化する。発泡速度は非常に早いので、混合攪拌後すみやかに注入しなければならない。ウレタン樹脂の型離れの悪そうなところをチェックして、型離れが良くなるように分割し、その部分にウレタン樹脂を注入する。ウレタン樹脂の発泡の膨張（約30倍）は作る側の意図していないようになるので、厚手ビニールを当てがい制御する（図114）。

硬化後に、ウレタン樹脂の膨張し過ぎのところをカット調整する。シリコン型とウレタン型の合わさったところに隙間のある時は粘土を詰める（次にウレタン樹脂を入れた際に、そこへウレタン樹脂が入り込まないように）。ウレタン樹脂上部に濃いカリ石鹼液を塗布するか、ビニールを貼って離型の代わりにするかなどで処理する（図115）。ウレタン樹脂全体の補強と雌型の取



図114 部分的に発泡ウレタン樹脂を注入



図115 分割部分の調整



図116 木組みを型枠内に入れる



図117 全体的に発泡ウレタン樹脂を注入

り上げ易さのために、木組みに番線を付けたものを型枠の内に入れる（図 116）。型枠内の全体にウレタン樹脂を注入充填する（図 117）。この時ウレタン樹脂が発泡膨張して木組みを上へ押し上げようとするので、しっかりした棒などで木組みがウレタン樹脂層の内部に位置するように押さえる。硬化後、型枠を外し雌型を起こす（図 118）。現場での軽いシリコン型の清掃の時



図 118 型を起こす

に、シリコン型表面に付着した土を彩色用サンプルとして採取する。遺構整備と後かたづけを行い現場での作業は終わる。研究所内でシリコン型ウレタン型の洗浄と、シリコン型の表面の補修を行い雌型製作は完了した。

（2）雄型製作の工程 大林工房（山口アトリエ）に製作作業を依頼



図 119 FRP樹脂1層目を塗布



図 120 樹脂2・3層目はガラス繊維を貼り込む



図 121 雌型を外す

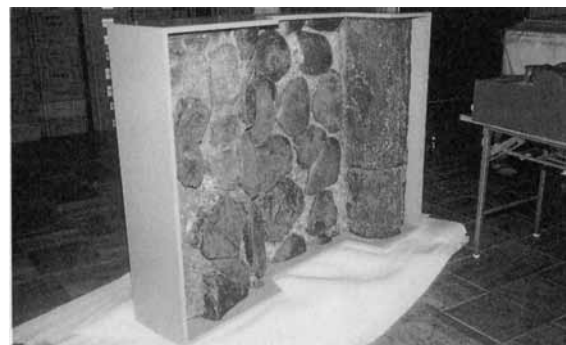


図 122 でき上がったFRP樹脂型

FRP樹脂1層目を塗布する。FRP樹脂2・3層目は、ガラス繊維（不織布のマット）を貼り込みながら塗布する。樹脂硬化後、雌型を外す。複製型を採寸し、不要な端をカットする。ディスプレイ側板へFRP型を直接接着固定する。FRP樹脂型のでき上がり。（多田清治）

4 復原彩色

本年度は復原彩色業務として、通常の遺物復原の他に遺構の復原模型に着色を行った。

(1) 遺物復原の彩色

本年度、復原彩色を行った遺物の合計は416点である。その内、「平安建都1200年展」の展示出品のために数多くの彩色復原を行った。詳細は以下のとおりである。

表1 平成6年度の遺物復原彩色件数一覧表

内 容	調査記号	点数	内 容	調査記号	点数
国庫補助概報	94 HK-Z J	22	「甦る平安京」展 (補修彩色) 展示・貸出し (補修彩色)	77 HK-NE	15
	93 BB-HR 450	1		78 HK-NS	1
	94 BB-HL 19	1		82 BB-HR 145	1
	94 BB-KS 257	3		93 HK-TH	11
平成3年度調査概要	91 HK-ED	24		77 HK-NE	228
	91 KS-OG 3	7		83 MK-HO 3	11
平成4年度調査概要	92 KS-KK 2	10		86 HK-MP	10
	92 UZ-MH	9		87 HK-RL	1
				93 HK-TH	10
				93 HK-MP 2	50
			84 HK-ML	1	

(2) 遺構復原模型の彩色

平安宮内裏内郭回廊跡（本概要第1章Ⅱ-1）より検出した雨落溝の原寸大復原模型（FRP樹脂製）に彩色を施した。模型は同じ型から大（160×110×40cm）、小（160×70×40cm）2点を作成し、FRP樹脂には顔料を混ぜて下地の色をつけた。彩色作業は、1994年9月7日から9月26日にかけて行った。工程は以下のとおりである。

着色準備 模型は樹脂臭が強いために、型を立てた状態で表裏両面から臭気を抜いた。つぎに、表面に付着したシリコン樹脂を取り除いた。シリコン樹脂型の気泡による凹部にはエポキシ樹脂系の接着剤を充填し、凸部は彫刻刀で削り取って表面を整えた（図123）。彩色部分の周囲をマスキングして準備が完了する。作業は大・小2点をほぼ同時に進めた。絵具は、リキテックスアクリルカラーとその補助材を使用した。

着色作業 発掘現場で撮影した雨落溝の石のカラー写真を参考にして基本となる色を作る。石の写真はコラージュした全体像と、個々の石をアップで撮ったものを用意した（図124）。石の基本色は、地覆石の凝灰岩のために3色、雨落溝の川原石のために5色作り、それぞれにモデ



図 123 樹脂の表面を調整



図 124 写真を参考に基本色の色出し



図 125 地色の塗り分け



図 126 川原石の細部の描写

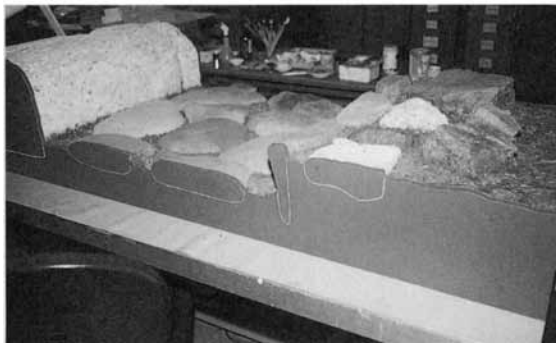


図 127 模型（小）の側面



図 128 速報展

リングペーストを混ぜて光沢を消した。石の地色は基本色を混ぜ合わせたり、他の色を加えて調整しながら塗った（図 125）。

凝灰岩の細部を、他から出土した石や現場で採集した石の破片を参考にして描く。地色の上からブラシ状のタタキ筆を使って風化した材質感を出す。また、面相筆で細かな粒子を描き込んだ。川原石も上と同様に描く（図 126）。それぞれの石の種類や表面の様子、光沢の有無を観察して丁寧に表現する。砂岩にはモデリングペーストを多めに混ぜて光沢を消し、粘板岩やチャートにはグロスメディウムを上塗りして光沢を出した。

小さい方の模型の側面に石の輪郭を破線で描き、断面の様子を表わした（図 127）。

完成した復原模型は、速報展として京都市考古資料館に展示し、後に常設展示した（図 128）。

（出水みゆき）

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

(1) 「シンポジウム 平安京 ～古代都城の変遷を探る～」の開催

日時 平成6年11月20日(日) 午前10時30分～午後4時30分

会場 京都会館会議場 (参加者 約 400名)

内容 平安建都1200年を記念し、藤原京から始まり平安京へと受継がれて行く古代都城の変遷を考古学的視点からとらえ、最新の発掘調査成果をもとに各都城の条坊制や構造を中心に検討を加えることにより、その集約点としての平安京の姿を明らかにして行くことをテーマとして、次のとおりシンポジウムを開催した。

○基調報告 研究所長 川上 貢

○事例報告①「財団法人京都市埋蔵文化財研究所の調査事例」

「長岡京」 調査第4係長 長宗 繁一

「平安京」 資料第2係長代理 辻 純一

「平安宮」 調査課主任 辻 裕司

○事例報告②「藤原京」奈良国立文化財研究所

主任研究官 橋本 義則

○事例報告③「平城京」奈良国立文化財研究所

主任研究官 小澤 毅

○事例報告④「長岡京」財団法人向日市埋蔵文化財センター

センター長 山中 章

○討 論 基調報告および各事例報告者

(司会) 資料課長 永田 信一

調査課長 鈴木 久男

主催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

後援 京都新聞社・KBS京都・NHK京都放送局

(2) 「'94発掘調査成果写真展」の開催

期間 平成7年1月18日～29日(11日間)

会場 京都市考古資料館 3階 (入場者 699名)

主催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

後援 京都新聞社・KBS京都・NHK京都放送局

(3) 平安建都1200記念事業 ～文遊回廊～

「第2回ウォーク・フェスティバル 平安京を巡る」の開催

日時 平成6年11月11～13日（3日間） 午前9時30分～午後4時
内容 平安建都1200年記念事業「文遊回廊」のテーマの一つ「平安京建都物語」のルートをもとに、平安京ゆかり遺跡や神社・寺院などを訪ねることにより、市民をはじめ全国の方々に京都の歴史・文化の魅力を再認識していただくとともに、文化財保護への普及啓発を図ることを目的として開催した。

開催にあたっては、京都市および財団法人京都市文化観光資源保護財団と共催とし当研究所は次の見学場所での講演、遺物などの展示および説明を担当した。

- 賀茂御祖（下鴨）神社研修道場（「平安京の遺跡」写真パネル展示および「豊楽殿」復原模型の展示、説明）
 - 京都市考古資料館（「平安京・宮の遺跡」講演と見学）
 - 平安神宮（平安宮・六勝寺跡および平安神宮建立時の遺物や資料、写真パネルの展示、説明）
 - 史跡平安宮豊楽殿跡（見学および説明）
 - 教王護国寺（東寺）（「東寺・西寺の遺跡」講演と遺物展示、説明）
 - 史跡西寺跡（見学および説明）
 - 平安京右京六条一坊五町邸宅跡（京都市リサーチパーク）（「平安貴族のくらしと文化」展示室の見学および説明）
 - 御室仁和寺（「仁和寺・嵯峨野周辺遺跡」講演と遺物展示、説明）
- （以上、当研究所が講演、展示および説明を担当）
- 史跡神泉苑（神苑の特別見学）
 - 大覚寺（史跡名古屋の滝跡の特別見学）

参加者 延べ 3,842名
主催 京都市・（財）京都市埋蔵文化財研究所・（財）京都市文化観光資源保護財団
後援 京都市教育委員会・京都新聞社・KBS京都・NHK京都放送局・（財）平安建1200年記念協会・（社）京都市観光協会・京都市史跡管理協会・歴史街道推進協議会
協力 京都市内博物館施設連絡協議会・京都の文化財を守る会

（4）海外技術研修員文化財修復整備技術コース専門研修の実施

期間 平成6年5月16日～6月29日
受託先 国際協力事業団大阪国際センター
研修員数 3名（国籍：パキスタン、ペルー、タイ各1名）
研修内容 発掘調査、復原、写真、コンピュータ、保存処理の実習など

（5）現地説明会の開催

ア 平成6年6月25日 「平安宮内裏内郭回廊跡」 （参加者数 約390名）
イ 平成6年9月3日 「中臣遺跡」 （参加者数 約160名）
ウ 平成6年9月11日 「平安京河原院跡」 （参加者数 約220名）

- エ 平成6年10月23日 「平安京跡（JR京都駅構内）」 (参加者数 約120名)
- (6) 「リーフレット京都」(No.63～No.74)の発行
- ・No.63 1200 平安京1 「平安京の設計」
 - ・No.64 生活・文化6 「弓の用途」
 - ・No.65 1200 平安京2 「東西の市」
 - ・No.66 土器・瓦11 「大きな宝珠形のつまみがある陶片」
 - ・No.67 1200 平安京3 「鴻 臚 館」
 - ・No.68 仏教・寺院3 「太秦広隆寺の創建」
 - ・No.69 1200 平安京4 「平 安 宮」
 - ・No.70 発掘ニュース15 「石が連なる回廊－平安宮内裏内郭回廊の調査－」
 - ・No.71 1200 平安京5 「東寺と西寺」
 - ・No.72 発掘ニュース16 「発掘調査成果をふりかえって 1994」
 - ・No.73 1200 平安京6 「神 泉 苑」
 - ・No.74 土器・瓦12 「京都出土の高麗青磁象嵌枕」

(7) 研究会などへの派遣

- ア 平成6年4月～平成7年3月(毎月開催) 於：向日市(京都府埋文調査研究センター)
- 「長岡京連絡協議会」
- | | |
|--------|---------|
| 調査第4係長 | 長 宗 繁 一 |
| 調査課主任 | 木 下 保 明 |
| 調査課主任 | 加 納 敬 二 |
| 調査課主任 | 上 村 和 直 |
| 調査課 | 吉 崎 伸 |
| 調査課 | 永 田 宗 秀 |
- イ 平成6年7月1・2日 於：奈良市(奈良国立文化財研究所)
- 「第6回埋蔵文化財写真技術研究会」
- | | |
|-----|---------|
| 資料課 | 村 井 伸 也 |
| 資料課 | 幸 明 綾 子 |
- ウ 平成6年9月10・11日 於：綾部市(中央公民館)
- 「京都府埋蔵文化財研究会第2回大会」
- | | |
|-------|-------|
| 調査課主任 | 辻 裕 司 |
| 調査課 | 南 孝 雄 |
- エ 平成6年10月6・7日 於：宇都宮市(ホテル ニューイタヤ)
- 「平成6年度研修会」(調査研究部会)
- | | |
|-------|---------|
| 資料課長 | 永 田 信 一 |
| 調査課主任 | 丸 川 義 広 |
- オ 平成6年12月5・6日 於：東京都(三田共用会議所)
- 「第1回文化庁埋蔵文化財発掘調査体制などの整備充実に関する調査研究」
- | | |
|------|---------|
| 資料課長 | 永 田 信 一 |
|------|---------|
- カ 平成7年1月26・27日 於：東京都(三田共用会議所)

「第2回文化庁埋蔵文化財発掘調査体制などの整備充実に関する調査研究」

資料課長 永田 信一

キ 平成7年2月25・26日

於：秋田県仙北町（ふれあい文化センター）

「第21回古代城柵官衙遺跡検討会・払田柵跡発掘20年の成果から」

調査課主任 堀内 明博

ク 平成7年3月4・5日

於：熊本県菊鹿町（菊鹿町公民館）

「第12回古代山城研究会」

調査課 高 正 龍

2 京都市考古資料館状況

(1) 速報展示の実施

ア 平成6年9月～3月

内裏内郭回廊跡の発掘調査により発見された西回廊内側の地覆石、羽目石や、雨落溝の一部復原模型を展示

イ 平成7年2月～3月

北白川小学校体育館改築工事に伴う発掘調査により出土した「無文銀錢」、「瓦塔」および「唐三彩」を展示

ウ 平成7年3月

JR京都駅改築工事に伴う発掘調査により発見された、室町時代の「銅鏡」、「銅磬」の鋳型および「取瓶」、「吹子羽口」を展示

(2) 特別展の実施

平安建都1200年記念特別展示「平安の古瓦展」—木村捷三郎採集品を中心に—
生涯にわたり古代瓦の研究に情熱を傾けられた、故木村捷三郎先生は、採集された古代瓦2,331点を生前、京都市に寄贈された。先生採集品と平安宮出土の古瓦合わせて112点を展示（平成6年11月8日から）

(3) 「第15回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期 間 平成6年8月2～5日

ア 「小学生夏期教室」 8月2・3日

第1日（児童のみ 参加者22名）

9：30～11：30 資料館見学、瓦の拓本の実習

第2日（親子 参加者23組）

9：30～11：30 古墳見学（甲塚古墳から蛇塚古墳の見学および遺跡や遺物の時代の決めかた、古墳の保存などについての学習）

イ 「中学生夏期教室」 8月4・5日

第1日（参加者51名）

9 : 30 ~ 11 : 30 資料館見学、瓦の拓本の実習

第2日 (参加者 50名)

9 : 30 ~ 12 : 00 中臣遺跡発掘調査現場 (山科区栗栖野中臣町) での発掘調査および遺物の復原の実習

ウ 「夏期教室拓本展並びにスナップ写真展」の開催

期 間 平成6年8月17日～9月4日

会 場 考古資料館 1階

(4) 文化財講座の開催

文化財講座は、京都市域で実施されている発掘調査の成果を速やかに市民に知らせるとともに市民の埋蔵文化財保護意識を高めるため、昭和61年度から実施している。

平成元年度には「京都の瓦」をテーマに8回の連続講座を実施し好評を得たのでその後各年度ごとにテーマを設定し、連続講座を実施している。

平成6年度の連続講座では、平成5年度に続き、建都1200年記念「平安京を掘る」をテーマとして実施することとした。平成6年度の実施状況は次のとおりである。

ア 第72回 平成6年4月23日

「平成5年度京都市域の調査結果」	資料課長	永田 信一
－平安京を掘る－講座9「平安貴族の邸宅」	調査課	吉崎 伸
		(受講者 90名)

イ 第73回 平成6年5月28日

「安祥寺下寺跡の調査」	調査課	高 正 龍
－平安京を掘る－講座10「平安京の園池」	調査課	山本 雅和
		(受講者 89名)

ウ 第74回 平成6年6月25日

「相国寺旧境内 (烏丸中学校敷地内) の調査」	調査課	近藤 知子
－平安京を掘る－講座11「平安京の祭祀」	調査課主任	久世 康博
		(受講者 94名)

エ 第75回 平成6年7月23日

「慈照寺 (銀閣寺) の調査」	調査課	南 孝 雄
－平安京を掘る－講座12「平安京の自然災害」	調査課主任	吉村 正親
		(受講者 112名)

オ 第76回 平成6年9月24日

現地講座「平安宮中務省跡の調査」	考古資料館学芸員	南出 俊彦
		(受講者 127名)

カ 第77回 平成6年10月22日

「平安京左京四条四坊跡 (旧日彰小学校) の調査」	調査課	山本 雅和
---------------------------	-----	-------

－平安京を掘る－講座 13 「平安京の搬入瓦」 資料課 原山 充志
(受講者 70名)

キ 第78回 平成7年1月28日

「松ヶ崎小学校の調査」 調査課主任 平尾 政幸
－平安京を掘る－講座 14 「国際都市平安京」 調査課主任 堀内 明博
(受講者 72名)

ク 第79回 平成7年2月25日

「水垂遺跡の調査」 調査課主任 木下 保明
－平安京を掘る－講座 15 「平安京の変質」 調査課主任 上村 和直
(受講者 87名)

ケ 第80回 平成7年3月25日

「鹿苑寺（金閣寺）の調査」 調査課主任 前田 義明
－平安京を掘る－講座最終回「考古学から見た平安京」 資料課長 永田 信一
(受講者 91名)

(5) その他普及啓発

1階「情報コーナー」において、「リーフレット京都」の配布をはじめ、パソコン、レーザーディスクおよびビデオによる展示資料・遺跡などの紹介を行うほか、次の参考資料を整備し利用に供している。

ア 考古学・日本歴史関係図書

イ 府下および近県の博物館施設などのパンフレット

ウ 発掘調査現地説明会資料

エ 発掘調査関連掲載の新聞記事

(6) 考古資料の貸出

継続貸出分 28件 725点 新規貸出分 25件 1,437点

(7) 博物館学芸員課程実習生の受入

京都芸術短期大学	7名	奈良大学	50名
立命館大学	4名	大阪市立大学	27名
京都橘女子大学	5名	近畿大学	45名
京都精華大学	3名	武庫川女子大学	40名

(8) 京都市考古資料館入館者状況

表2 平成6年度月別入館者一覽表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	26	1,288	209	93	60	1,650	63.5
5	26	1,134	217	286	471	2,108	81.1
6	26	1,319	154	144	0	1,617	62.2
7	27	1,247	318	289	0	1,854	68.7
8	26	1,350	434	63	97	1,944	74.8
9	26	1,299	284	157	0	1,740	66.9
10	26	1,379	195	199	0	1,773	68.2
11	26	1,182	135	598	80	1,995	76.7
12	23	1,012	155	118	69	1,354	58.9
1	24	1,094	198	92	0	1,384	57.7
2	24	1,239	167	114	0	1,520	63.3
3	27	1,361	165	137	0	1,663	61.6
計	307日	14,904人	2,631人	2,290人	777人	20,602人	67.1人

(参考 平成5年度観覧者数 開館日307日 延べ人数20,261人／1日平均66.0人)

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	西村正信	京都市文化観光局長
専務理事	舩橋啓輔	京都市文化観光局文化部参事
理事	上田正昭	京都大学名誉教授・大阪女子大学学長
	川上貢	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	小寺啓介	京都市文化観光局文化部文化財保護課長
	菅沼光年	京都市文化観光局文化部長
	杉山信三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	田辺昭三	京都造形芸術大学教授
	角田文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	西川幸治	京都大学名誉教授
	福山敏男	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
	山田宏晁	京都市埋蔵文化財調査センター所長
監事	能勢邦廣	京都市会計室長
	掘道夫	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事

(2) 職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名
	川上貢	研究所長(理事)	調査部 調査課	鈴木久男	調査課長
	杉山信三	嘱託(理事)		本弥八郎	調査第1係長
	田辺昭三	嘱託(理事)		平方幸雄	調査第2係長
総務部 総務課	眞下成良	総務部長(京都市出向)		菅田薫	調査第3係長
	青木春夫	総務課長		長宗繁一	調査第4係長
	村木節也	庶務係長代理		磯部勝	調査第5係長
	金島恵一	事業係長代理		吉村正親	主任
	菅田悦子	主任		平田泰	〃
	上村京子	〃		木下保明	〃
	夏原美智代	事務職員		鈴木廣司	〃
	本田憲三	〃	堀内明博	〃	
	佐藤正典	〃	百瀬正恒	〃	
	上田栄治	調査補佐員(兼職)	久世康博	〃	

	氏 名	職 名
調 査 部 調 査 課	加納 敬二	主 任
	平尾 政幸	〃
	辻 裕司	〃
	上村 和直	〃
	前田 義明	〃
	丸川 義広	〃
	吉崎 伸	研究職員
	網 伸也	〃
	内田 好昭	〃
	高 正龍	〃
	高橋 潔	〃
	山本 雅和	〃
	南 孝雄	〃
	小森 俊寛	〃
	長戸 満男	〃
	上村 憲章	〃
	近藤 知子	〃
	会下 和宏	〃 (5.31 退職)
	小松 武彦	〃
	伊藤 潔	〃
	津々池惣一	〃
	小檜山一良	〃
	永田 宗秀	〃
	東 洋一	〃
	真喜志悦子	調査補佐員
	能芝 勉	〃
	能芝 妙子	〃
	法邑真理子	〃
	鎌田 泰知	〃
	小倉万里子	〃
	竜子 正彦	〃
	桜井みどり	〃
	清藤 玲子	〃
	出口 勲	〃
藤村 敏之	〃	
山口 真	〃	
太田 吉男	〃	

	氏 名	職 名	
調 査 部 調 査 課	堀内 寛昭	調査補佐員	
	大立目 一	〃	
	川村 雅章	〃	
	近藤 章子	〃	
	西大條 哲	〃	
	布川 豊治	〃	
	宮下 則子	〃	
	吉本 健吾	〃	
	端 美和子	〃	
	藤村 雅美	〃	
	北川 和子	〃	
	北原 四男	〃	
	小谷 裕	〃	
	尾藤 徳行	〃	
	大立目道代	〃	
	調 査 部 資 料 課	永田 信一	資料課長
		中村 敦	資料第1係長代理
		辻 純一	資料第2係長代理
		岡田 文男	主 任
		原山 充志	研究職員
出水みゆき		調査補佐員	
児玉 光世		〃	
岡 ひろみ		〃	
田中利津子		〃	
ト田 健司		〃	
宮原 健吾		〃	
角村 幹雄		〃	
村井 伸也		〃	
幸明 綾子		〃	
村上 勉		〃	
多田 清治		〃	
モンペティ恭代	〃		
大槻 明義	〃		
考 古 資 料 館	塩崎 英雄	館 長	
	峰 巍	主席学芸員	
	南出 俊彦	学 芸 員	

(村木節也)

表3 発掘調査一覧表

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
平安宮	01 H6-018 内裏内郭回廊跡 94HK-ZJ001	上京区下立売通千本東入 田中町 434-5	94.06.01 ～ 94.07.04	22 m ²	京都市	磯部、山本	国庫補助	
	02 H6-008 武徳殿跡隣接地 94HK-ZB001	上京区下長者町通七本松 西入鳳瑞町 252. 253. 253-1	94.05.09 ～ 94.05.31	110 m ²	京都市	平田	国庫補助	
	03 H6-021 中務省西限跡 94HK-ZK001	上京区下立売通千本東入 中務町 491-69	94.07.11 ～ 94.08.03	29 m ²	京都市	近藤知 磯部	国庫補助	
	04 H6-035 中務省東限跡 94HK-ZL001	上京区下立売通千本東入 中務町 486-22	94.09.01 ～ 94.10.13	170 m ²	㈱近藤産業	近藤知		
平安京	05 H6-053 左京三条一坊 94HK-CL003	中京区西ノ京北聖町 62 (中京中学校)	94.11.24 ～ 94.12.26	138 m ²	京都市	小松		
	06 H6-007 左京六条四坊・河原院跡 94HK-PO001	下京区五条通河原町西入 本覚寺前町 805 他	94.04.27 ～ 94.09.30	370 m ²	関西電力	堀内明		
	07 H6-055. H7-013 左京七条二坊・本圀寺跡 94HK-WI002	下京区柿本町地内	95.01.05 ～ 95.06.02	1,321 m ²	宗教法人浄土 真宗本願寺派	近藤知 上村和	H6-045 試掘	
	* H6-028. H7-014 左京八条二坊 95HK-EH001	下京区東油小路町地内	95.05.16 ～ 95.10.05	500 m ²	京都府府民労働 部雇用保険課	百瀬	平成7年度 で報告予定	
	08 H6-030 左京八条三坊 94HK-EG001	下京区東洞院通七条下る 東塩小路町 864-3	94.06.17 ～ 94.12.26	1,600 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	鈴木広		
	09	H5-037 (1) 左京八条三坊 94HK-EF002	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	93.12.07 ～ 94.03.01	370 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	菅田、網	
		H5-037 (2) 左京八条三坊 94HK-EF003	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.03.07 ～ 94.06.10	600 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	菅田、網	
		H5-037 (3) 左京八条三坊 94HK-EF004	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.03.28 ～ 94.07.10	440 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	前田、百瀬	
		H5-037 (4) 左京八条三坊 94HK-EF005	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.04.18 ～ 94.07.22	880 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	東、南	
		H5-037 (5) 左京八条三坊 94HK-EF006	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.07.05 ～ 94.08.04	160 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	網	
H5-037 (6) 左京八条三坊 94HK-EF007		下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.08.25 ～ 95.02.08	1,200 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	網、東		
H5-037 (7) 左京八条三坊 94HK-EF008		下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	95.01.18 ～ 95.03.02	300 m ²	㈱西日本旅客 鉄道	網、東		
10 H6-012 右京三条一坊 94HK-UI006	中京区西ノ京梅尾町地内	94.04.25 ～ 94.07.15	848 m ²	京都市	吉村、小松			

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
平安京	11	H6-014 右京六条一坊 94HK-XF009	下京区中堂寺南町地内	94.04.18 ～94.08.31	1,247 m ²	住宅都市整備 公団	平尾	
		H6-037 右京六条一坊 94HK-XF010	下京区中堂寺栗田町地内	94.08.29 ～95.02.24	2,770 m ²	住宅都市整備 公団	平尾	
	*	H5-043. H6-009 右京八条二坊 93HK-YC003	下京区西七条石井町 61 (七条小学校)	93.12.16 ～94.04.07	510 m ²	京都市	辻裕 近藤知	平成5年度 で報告済
	12	H6-031 右京九条二坊 94HK-ZM001	南区唐橋平垣町 32-1	94.08.08 ～94.11.02	369 m ²	㈱山中商事	南	
白河街区	13	H6-032 白河街区跡 94KS-AI001	左京区聖護院円頓美町 17	94.08.24 ～94.11.02	304 m ²	㈱アミタ	吉村	
	*	H6-050. H7-019 白河街区跡 95KS-ZR003	左京区岡崎最勝寺町地内 (二条通)	95.03.21 ～95.07.19	発 78 m ² 立 150 m	京都市	堀内明 平方	平成7年度 で報告予定 発掘・立会
	*	H6-068. H7-021 白河街区跡 95KS-ZZ001	左京区岡崎最勝寺町地内 (冷泉通)	95.07.21 ～95.10.06	発 100 m ² 立 440 m	京都市	堀内明 平方	平成7年度 で報告予定 発掘・立会
中臣遺跡	14	H6-006 中臣遺跡 94RT-NK073	山科区栗栖野中臣町・ 打越町地内 (中臣山科団地)	94.04.16 ～94.10.17	7,802 m ²	京都市	高橋、内田 平方	H5-050 試掘
長岡京	15	H6-004 左京一条三坊・東土川遺跡 94NG-A0003	南区久世東土川町地内	94.04.04 ～94.05.20	450 m ²	京都市下水道局	永田宗	
		H6-046 左京一条三坊・東土川遺跡 94NG-A0004	南区久世東土川町地内	94.09.05 ～94.09.21	80 m ²	京都市下水道局	永田宗	
	16	H6-005 左京六条三坊・水垂遺跡 94NG-MI005	伏見区淀樋爪町	94.04.01 ～95.03.31	15,827 m ²	京都市	木下、吉崎 上村和 加納	
その他の遺跡	17	H6-044 特別史跡特別名勝鹿苑寺園 94RH-KK005	北区金閣寺 1	94.08.23 ～94.10.21	200 m ²	宗教法人鹿苑寺	前田	
	18	H6-060. H7-002 北野遺跡 94RH-KD001	北区平野宮本町 19-6 (衣笠小学校)	95.01.05 ～95.05.02	830 m ²	京都市	平田	H6-023 試掘
	19	H6-042 小倉町別当町遺跡 94KS-KB004	左京区北白川別当町 70 (北白川小学校)	94.09.22 ～94.12.28	700 m ²	京都市	長戸	H6-022 試掘
	*	H6-067. H7-020 京都大学構内遺跡 94KS-BA005・6	左京区北白川追分町他地内 (今出川通)	95.03.29 ～95.06.22	150 m ²	京都市	長戸、竜子 尾藤	平成7年度 で報告予定 + 試掘立会
	*	H5-049. H6-013 安祥寺下寺跡 94RT-FS001	山科区安朱棧敷町他地内 (山科駅)	94.02.03 ～94.06.10	635 m ²	京都市	高、丸川	平成5年度 で報告済
20	H6-027 安祥寺下寺跡 94RT-FS002	山科区安朱棧敷町他地内 (山科駅)	94.06.15 ～95.03.16	2,979 m ²	京都市	高、津々池 丸川、久世		

表4 試掘・立会調査一覧表

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
平安宮	01	H6-024 朝堂院跡 94HK-NT003	上京区小山町 ～革堂前之町地先	94.06.01 ～94.06.03	試掘 15 m ²	日本電信電話 ㈱京都整備建設センター	鈴木久	2章II-1
	02	H6-041 朝堂院・中和院・内膳司・ 内蔵寮跡 94HK-ZR001	上京区千本通上長者町 ～丸太町通間	95.01.18 ～95.05.24	試掘 33 m ²	京都市	伊藤	2章II-2
		H6-052 朝堂院・中和院・内膳司・ 内蔵寮跡 94HK-UW010	上京区千本通東側 (上長者町通～丸太町通) 地内	94.11.10 ～95.02.24	試掘立会 33 m ²	京都市水道局	伊藤	2章II-2
	03	H6-033 内膳司・中和院・大極殿跡 94HK-KZ006	上京区小山町他	94.07.27 ～94.08.05	立会 9 m ²	㈱きんでん 京都上営業所	本	
	04	H6-020 内蔵寮跡・内膳司・中和院跡 94HK-GG001	上京区千本通下立売稲葉町 ～千本通上長者町下る 革堂前之町地内	94.04.11 ～94.06.21	立会 375 m	大阪ガス	本、平田	2章II-3
	05	H6-048 大蔵省跡 94HK-UW008	上京区中立売通両側 (七本松通～千本通) 地内	94.09.26 ～94.11.24	立会 340 m	京都市水道局		
06	H6-040 豊楽院・兵部省・治部省跡 94HK-UW007	中京区旧二条通 ～上押小路通、七本松通 ～六軒町通地内	94.10.11 ～95.02.02	立会 811 m	京都市水道局	伊藤、小松		
平安京	*	H5-045.H6-010 左京三条四坊 93HK-AK001	中京区大文字町他地内 (御池通)	93.11.19 ～94.06.23	立会 348 m ² 195 m ²	京都市	小森 上村憲	平成5年度 で報告済
	07	H6-049 左京四条二坊・本能寺跡 94HK-UW009	中京区三条通 ～蛸薬師通小川通 ～西洞院通地内	94.10.26 ～95.01.19	立会 563 m	京都市水道局	竜子、尾藤	
	08	H6-002 左京六条二・三坊・ 烏丸綾小路遺跡 94HK-UW005	下京区五条通南側 (堀川通～烏丸通)、 六条通(若宮通～新町通) 地内	94.07.04 ～94.10.12	立会 729 m	京都市水道局	吉村、竜子 尾藤	
	09	H6-045 左京七条二坊・本圀寺跡 94HK-WI001	下京区柿本町地内	94.09.19 ～94.09.26	試掘 42 m ²	宗教法人浄土 真宗本願寺派	辻裕 上村和	発掘へ移行 1章II-7
	10	H6-029 左京八条二・三坊 94HK-EJ001	下京区東塩小路町地内	94.08.04 ～94.08.10	試掘 34 m ²	京都市	山本	2章II-4
	11	H6-017 右京三条一坊・壬生遺跡 94HK-UJ006	中京区西ノ京梅尾町地内	94.05.06 ～94.05.25	立会	京都市交通局	本	
	12	H6-039 右京三条一坊・右京職跡 94HK-UP001	中京区西ノ京梅尾町地内	94.09.19 ～94.11.22	試掘 605 m ²	京都市	小松 小檜山	2章II-5
	13	H6-047 右京三条一坊・穀倉院跡 94HK-UI007	中京区西ノ京星池町地内	94.10.27 ～94.12.06	試掘 175 m ²	京都市	平田	2章II-6
14	H6-025 右京四条四坊 95HK-IR004	右京区山ノ内池尻町地内	95.02.03 ～95.02.22	試掘 72 m ²	京都市	上村憲	2章II-7	
中臣遺跡	*	H6-062.H7-023 中臣遺跡 94RT-SW011	山科区勸修寺東栗栖野町 他12町	95.02.06 ～95.05.26	立会 520 m	京都市下水道局	高橋、内田 平方	平成7年度 で報告予定

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
その他の遺跡	15	H6-023 北野遺跡 94RH-KH001	北区平野宮本町19-6 (衣笠小学校)	94.07.11 ～94.07.18	試掘 27㎡	京都市	長戸	発掘へ移行 1章VI-18
	16	H5-053.H7-012 北白川廃寺・北白川瓦窯跡・ 小倉町別当町遺跡 93KS-UW012	左京区白川通東側、 茶山通～東今出川通他地内	94.02.14 ～95.04.06	立会 1,710㎡ 2,921㎡	京都市水道局	竜子、尾藤	2章III-8
	17	H6-022 小倉町別当町遺跡 94KS-KB003	左京区北白川別当町70 (北白川小学校)	94.06.23 ～94.06.30	試掘 24㎡	京都市	長戸	発掘へ移行 1章VI-19
	18	H6-056 小倉町別当町遺跡 94KS-KB005	左京区北白川上別当町70 (北白川小学校)	94.11.21 ～94.12.16	試掘 260㎡	京都市	百瀬	2章III-9
	19	H6-003 遍照寺跡 94UZ-SW002	右京区嵯峨広沢町・ 釣殿町・大沢落久保町	94.05.09 ～94.06.07	立会 110㎡	京都市下水道局	小檜山	2章III-10
	20	H6-026 広沢古墳群 94UZ-SW004	右京区嵯峨広沢池下町	94.06.07 ～94.08.29	立会 265㎡	京都市下水道局	小檜山	
	21	H6-066 史跡名勝嵐山 94UZ-UW012	右京区嵯峨二尊院門前 長神町他地内	95.03.09 ～95.03.22	立会 140㎡	京都市水道局	小檜山	
	*	H6-061.H7-022 伏見城跡 94FD-UW013	伏見区京町通国道24号線 ～下板橋通他地内	95.03.23 ～95.10.25	立会 2,102㎡	京都市水道局	竜子 尾藤	平成7年度 で報告予定
22	H6-001 京都市内遺跡 94BB	京都市内一円	94.04.01 ～95.03.31	立会	京都市	竜子、尾藤 川村、吉本	国庫補助	

表5 その他契約一覧表

	契約No.	内 容	調査期間	面積	委託者	備 考
01	H6-011	測量	名神関係遺跡 南区（名神高速沿）	（財）京都府埋蔵文化財 調査研究センター	辻純	
02	H6-015	測量	平安京左京六条三坊下京区東鋸町他	京都府京都文化博物館	辻純	
03	H6-016	測量	平安京左京四条三坊中京区烏丸六角東入	（財）古代学協会、 古代学研究所	辻純	
04	H6-019	研修	文化財修復整備専門研修	国際協力事業団大阪国際 センター	資料課	
05	H6-034	測量	特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園 北区金閣寺町1	宗教法人鹿苑寺	辻純	
06	H6-036	測量	平安京右京八条二坊 下京区七条御所ノ内本町98-1	関西文化財調査会	辻純	
07	H6-038	測量	大歳神社境内 西京区大原野灰方町（大歳神社境内）	京都史跡調査会	辻純	
08	H6-051	測量	伏見城跡 伏見区桃山町大津2	関西文化財調査会	辻純	
09	H6-054	測量	名神関係遺跡 南区（名神高速沿）	（財）京都府埋蔵文化財 調査研究センター	辻純	
10	H6-057	整理	平安宮武徳殿跡隣接地 94HK-ZB001 (H6-008) 上京区下長者町通七本松西入鳳瑞町 252. 253. 253-1	京都市	平田	国庫補助
11	H6-058	整理	平安宮内裏内郭回廊跡 94HK-ZJ001 (H6-018) 上京区下立売通千本東入田中町434-5	京都市	山本	国庫補助
12	H6-059	整理	平安宮中務省西限跡 94HK-ZK001 (H6-021) 上京区下立売通千本東入中務町491-69	京都市	近藤知	国庫補助
13	H6-063	測量	平安京左京二条二坊 上京区竹屋町通猪熊西入藁屋町530	関西文化財調査会	辻純	
14	H6-064	測量	平安京左京五条三坊 下京区四条通烏丸東入鷄鉾町（池坊学園内）	（財）古代学協会、 古代学研究所	辻純	
15	H6-065	報告書	京都市内遺跡 京都市内一円	京都市	本	国庫補助